

IS?二人目は万能の天才
!??

緑竜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は神童と呼ばれていた。

それゆえか、少年は学園都市の闇でいた。

ある日、学園都市の指示で少年はとある超兵器にかかわることになる。

その超兵器名前はインフィニット・ストラトス——通称ISだった。

そして、たまたまそれに直接接触したとき、物語は動き出す・・・！

はい、初めまして緑竜と申します。

ふと思いついて立ててみた。後悔はしていない。

初めての方はネタバレ控えめな設定集を見るとオリ主がどんな設定なのかは書いてあります。

ネタバレが構わない方はもう一方の設定集へ。

更新ペースが遅かったり、誤字が多かったり、その他もろもろつたない部分はあるかと思いますがその辺は生暖かい目でお願ひします。

ログインしてなくても感想が書けますので是非お願ひします

5 / 15

設定集を上げたと同時にタイトルを微妙に変更しました。

理由は設定集を書きながら、「美術からきしなのにダヴィンチはねーだろ」と思ったので。

5 / 26

ネタバレ控えめの設定集を作りました。

初めての方はこちらからどうぞ。

また、いままでの設定集は設定のおさらい等に使うてもらえると幸いです。

6 / 23

第17話投稿に伴い、タグを編集しました

設定集は次かその次を投稿したくらいに編集します

また、話数のナンバリングを行いました。必要ならご活用ください

今後ともよろしくお願いします

2015/1/7

明けましておめでとうございます

一部改訂と誤字の訂正を行いました。まだあるようでしたら感想欄などでご指摘を
お願いします。

8/5, 8/6

設定集を更新しました。ちょっと多めの更新をしたのでご報告。

目次

設定など

設定など（ネタバレ控えめ） | 1

設定（ネタバレ注意） | 6

本編

0. プロローグ | 18

1. 始まり | 23

2. 入学と代表候補生 | 32

3. クラス代表決定戦 | 52

4. 戦いの後 | 62

5. クラス代表と新たな転校生 | 66

6. リーグマッチと乱入者 | 81

7. 転校生 | 94

8. 転校生と万 | 111

9. 死闘 | 126

10. 転校生の正体 | 140

11. トーナメントと和解 | 154

12. つかの間の休息 | 173

13. 臨海学校初日 | 185

14. 嵐を呼ぶウサギ | 198

15. 戦いの火蓋 | 209

16. ストライク・バック | 223

17. 暗闇の中 | 240

18. 新学期 | 255

19. 学園祭 波乱の幕開け | 271

20.	戦闘という名の殺し合い	285	31.	マドカの正体	426
21.	嵐の後	299	32.	天使の真実と万	440
22.	報せ	321	33.	少女の選択	454
23.	一難去つてまた一難?	330	34.	新たな力	465
24.	秋嵐	342	35.	一夜明けて	484
	幕間：万の料理教室?	356	36.	万と庵	502
25.	嵐の前触れ	363	37.	ドタバタな二人	522
26.	不穏なるもの	372	38.	庵の入学	548
27.	深まる謎	381	39.	新兵器開発	564
28.	神童の過去	390	40.	むべ山風を	574
29.	忍び寄る影	402	41.	日常、そして凶報	586
30.	白銀に煌めく黒	414	42.	最終局面―狼煙―	609
			43.	最終局面―小波―	627

4 4.	最終局面	変遷	639
4 5.	最終局面	中波	656
4 6.	最終局面	奥手	669
4 7.	最終局面	仕事	681
4 8.	最終局面	狂戦	693
4 9.	最終局面	大波	707
5 0.	最終局面	終幕	721
エピソード			741
あとがきのなか。			751

設定など

設定など（ネタバレ控えめ）

前に作ったものに比べ、ネタバレを押しえた設定集です。

どんなキャラが出てくるかわからない、原作と大きく違うところはどこだろう、という方はこちらからどうぞ。

黒川 万よろず

本作主人公。

学園都市の能力者で、学園都市暗部出身の元IS研究者。

専用機の正式名称は“JPマルチテストタイプ π 型”だが、やたらと長いため愛称は“セイリユウ”。愛称の由来は機体カラーが澄んだ藍色のため、“青龍”と“清流”ということでこうなっている。

織斑一夏

原作主人公。

原作よりハーレム要素少ない目（原因：万）
万とはよき友人関係。

篠ノ之箒

最初はほぼ空気のファースト幼馴染。

最初こそほとんど絡まなかったが、あることを機に万とよき友人でありライバルになっっている。

セシリア・オルコット

タレ目金髪のイギリス代表候補生。

最初こそ万を目の敵にしていたが、後にその実力や性格を認め丸くなる。

共闘をしたり、しばしば会話を重ねたりしているので、原作ヒロイン陣営の中ではおそらく一番万と精神的な距離が近く、彼とは戦友のような関係。

凰 鈴音

5話から登場したセカンド幼馴染。

代表候補生に一年でのし上がった努力家。

万とは友人関係だが、そこまで関わり合いはない様子。

シャルル・デュノア

7話にて、新たに転校してきた”男子の”転校生。

万は疑ってかかっているが、その正体とは・・・？

ラウラ・ボーデヴィツヒ

7話にて、デュノアと同じ日に編入した転校生。

万とは面識があるようだが・・・？

麦野沈利

17話にて登場。

皆さんおなじみ第四位さん。ひよんなことからIS適性があることが判明し、IS学園に入学することとなる。

セレネ、デメテル

二人とも本名不詳で、亡国企業の構成員。

M

例によって本名不詳の亡国企業構成員。

高い近接戦闘能力を有するが、その正体やいかに。

登場 I S

セイリユウ

万の専用機。カラーリングは澄んだ藍色で、待機状態は伊達眼鏡。研究所のほうに融通を効かせてもらう形で万の専用機となっていて、正式名称は先述の通り。

眼鏡の状態でも仮想ディスプレイを投影して操作したり、望遠を使って遠くを見たりすることができる。

シルバリオ・ゴスベル
銀の福音

原作でも登場した暴走 I S。情報では無人機とのこと。

閃光

麦野の専用機。万が設計。

彼女の能力を生かすことのできる設計となっている。

A e g i s

専用機持ちのトーナメントに突如として現れた謎の機体。詳細は不明。

アラクネ

アメリカの第二世代 I S。しかし、亡国企業が奪取して以降、構成員・オータムの専用機となっている。

ギリシヤ神話にのっとり、蜘蛛を模した I S。

黒騎士

Mの専用機。詳細は不明だが、彼女の高い近接戦闘能力に見合う、高度な改造が施されている模様。

プロローグで出てきた先輩と所長は話の都合上出したチョイ役ですので紹介しません。

こちらにも登場人物が増えるごとに更新していきます。

設定（ネタバレ注意）

人物設定

黒川 万よろず

本作主人公。年齢15歳。

ロシア系とアジア系のハーフで、基本的にアジア系の顔立ちなのだが、目だけ灰色。性格としてはいわゆる“変人型の天才”で、様々な才能にたけているが、美術だけはからきし。

学園都市（とあるシリーズ）の元暗部で、暗部の仕事をしているところに白騎士事件が起きる。その影響で暗部の仕事としてI S部隊の訓練やスパイを行っていた。ラウラとはその時の教え子の一人。

I Sの技術を盗むために学園都市から来たとしか明かさずに研究者として研究所にいたところに暗部解体が行われ、そのまま学園都市出身I S研究者として過ごす、ある日たまたまI Sを起動できてしまい、そのままI S学園に入学することとなる。

また、I Sの量子変換技術を応用した試作品である量子変換ボックスをいくつか入手しており、それにしばしば私物を収納している。

能力は万能念動^{マルチサイ}。ありとあらゆる物質を状態（固体、液体、気体）にかかわらず操ることがができる。磁場や電気も空気中の電子を操ることで操れる。

平たく言えばこの世の物質を操れる能力。
レベルは4扱い。

自身の武装は自分で作って構想を練っていることも多く、ある程度コンセプトから設計から作ったうえで一夏たちに意見を聞いたうえで出身の研究所に開発を頼んでいたりもする。

そして、イギリス代表候補生のセシリアの個人情報にさらりと入手する高いクラッキング技術の持ち主でもある。

Aegis（後述）のパイロットであり、Aegisに登場しているときはカモフラージュとして声の周波数を100Hzほど上げて発信していた。

IS技師としての腕前は健在で、かなりのハイペースで追加武装を作り上げ、一年生の専用機持ち（一夏と箒を除く）にそれを託した。

※量子変換ボックス

ISが量子変換を用いて武装を展開、収納することを研究して作られたもの。むしろ、ISコアは必要としない。

ISの量子変換と同じ要領で収納、展開することができる。ちなみに万自身は拳銃やノートなども収納している。

これは彼のISにもいくつかついており、ISの展開と同時に展開、それにより多種多様な装備を展開することができるようになっていく。

本人曰く、他に誰かが開発していなければこの世に20個とないものだが、一個作るのにコストがかかりすぎるため量産には至っていないとのこと。

万が変人なのはモデルが自他ともに認める変人の主だからです。

あと、本編で能力を自分にかけて持ち上げたって言ってますけど、あれは少なからず嘘が入ってます。

ちなみに名前由来は能力名から。万能念動だから“万”です。

織斑 一夏

原作主人公。ほとんど変わってないけど正直言ってフラグ体質は少なくなってます。

最近影が薄め。（原因：万）

セシリア・オルコット

タレ目金髪のイギリス代表候補生。

クラス代表決定戦で一夏と戦わなかった影響で、一夏とのフラグはものの見事にクラッシュされてます。ただし、万とはよき戦友的關係。少なくとも現時点での恋愛感情はなし。お互い背中を預けあえるくらいには認めている。

原作組の中では万と一番仲がいい。

篠ノ之 箒

原作で真つ先に出てきたはずなのに万が主人公になったおかげでほぼ名前付きモブ化のようになってしまったファースト幼馴染。

最初は空気だったが、万に力とはどういうものか、と相談したことがきっかけで友人関係を築くこととなる。今でもたまに剣の打ち合いをしているとか。だがまた空気になりつつある。

凰 鈴音

ようやく出せたセカンド幼馴染。

万とはゴーレムの時に共闘、それ以来友人として接している。

シャルル・デュノア

新たな”男子の”編入生。

その正体はデュノア社社長の愛人との間にできた子供で、本名、シャルロット・デュノア”。その名前が示す通り女性である。

方に正体を看破され、その後織斑姉弟に説得され、学園に残ることとなった。

ラウラ・ボーデヴィツヒ

同じく編入生。シャルルド同じ日に入学してきた。

IS適性を上げるために埋め込んだヴォーダン・オージェ不適合により悩んでいたころに万から指導を受けたことがあり、当初は口調がぬけていないところがあつたが、その問題は時間が解決した模様。

最初は原作同様一夏を目の敵にしていたが、後に彼を見直し和解する。だがこの時名前は出なかった。

ナターシャ・ファイルス

銀の福音のパイロット。福音撃墜の際に彼女も大けがを負ったが、万と教師陣の手当てで一命をとりとめた。

軍部からは退役扱いとなっている。

世にも珍しい”原石”（Ⅱ学園都市外で自然に超能力を発現させた人間）で、その能力は”物質から記憶を読み取る”というもの。物質にある種の意志があつた場合、それ

も同時に読み取ることができる。

万の手によって銀の福音が修理されたことにより、非公式ながらも銀の福音パイロットに返り咲いた。

麦野沈利

17話にて登場。皆さんおなじみ第四位さん。

学園都市に一時的に戻った方を監視、ISの情報を盗み出す目的で接近するが、その時にIS適性があることが判明。

学園都市上層部からの依頼もあり、IS学園へ入学することとなる。

セレーネ

オリキヤラ。亡国企業の構成員。

波長を操る能力者で、その能力の特性上、攻撃はレーザーをメインとしている。

過去に置き去りとして学園都市の研究機関に捨てられ、その後亡国企業に拾われた。
チャイルドエラー

今は万の手引きもあり月島深名つきしまみなとして学園都市のとある高校（上条や土御門と同じ学校）に通う。

その後はまた暗部の特攻部隊の一員となっているが、感付かれないように万と連絡を取り合っている。

万も言っている通り、コードネームの由来はギリシャ神話の月の女神“セレーネ”

また、偽名の由来はセレネが月の女神であることから月島、波を操るということでの“なみ”をひっくり返した“みな”に漢字をあてたもの。

デメテル

オリキヤラ。亡国企業の構成員。

魔術師で地面を操って攻撃をする。どういいういきさつで亡国企業の一員になったかは不明。

むぎのんも言っている通り、名前の由来はギリシャ神話の豊穡神“デーメーター”

M（織斑マドカ↓織斑庵）

亡国企業構成員。

幼いころにスコールに拾われ、精神操作により織斑の記憶を封じられた。以降、織斑マドカという偽名とMというコードネームで、亡国企業の一員として暗躍する。

本当の名前は“織斑^{おりむらい}庵^{いおり}”で、一夏の妹に当たる。一夏とは年子。

万により記憶の封印を解かれ、自身が何者かを探したいという理由から、IS学園側につく。

以降、万と同質となり彼に一般常識などの教育を受けている。

ゴールデンエイジの期間を有効活用した結果、ISの申し子のような存在になったの
だろう、と万は分析している。

登場 I S (ただし原作キャラの専用機は除く)

セイリユウ

万の専用機。研究所のほうに融通を効かせてもらう形で彼の専用機となった。

正式名称は“ J P マルチテストγ型 ”だが、長いので本人含め愛称の“ セイリユウ ”と呼んでいる。色は澄んだ藍色で、愛称の由来は“ 青龍 ”と“ 清流 ”のダブルミーミングでカタカナとなっている。待機状態は伊達眼鏡。

正式名称が長いのは研究機を万の出身の研究室のメンバーがカスタムしたため。

マルチテストタイプの名に変わらず、パッケージを換装することで戦闘以外にも使うことが可能。

また、待機状態である伊達眼鏡の状態でも望遠、仮想ディスプレイの投影なども行える。

シルバリオ・ゴスベル
銀の福音

原作通りハワイ沖で暴走した I S。情報によれば無人機とのことだったが、搭乗者であるナターシャが乗ったままだった。

大きなダメージを負ったことで待機状態、自己修復に入っていた。しかし、万の手によつて修復された。

閃光

麦野の専用機。今現在判明している武装はライフルとビット。

学園都市内で万が設計、開発を行った機体で、パイロットである麦野の能力を行使できるものとなっている。これは、彼女の脳内での演算をヘッドセットで読み取り、それをビットやライフルに伝達、マルチダウン発射というプロセスで行われる。

また、近接用として長刀“ナガミツ”も装備している。こちらはマルチダウンを部分的に展開することで展開される長いブレード。ライトセイバー的なものでだいたいあつてる。こちらの名前の由来は佐々木小次郎の愛刀より。

ちなみに、OビットのOは“オクタ”のO。

A e g i s

専用機持ちのトーナメントに突如として現れた謎の機体。

背中に6枚の巨大なシールドアーマー、そして全身装甲を持ち、その見た目はさながら気高い騎士のようでもある。カラーリングは鈍色。

セイリユウとほぼ同等の性能を持つ二機を同時に相手取り倒す高い戦闘力を持つ。多彩な武器を使用する、全距離全方位型。

登場直後、たいていの人間は機体名を“イージス”と呼んでおり、イージス護衛艦のイメージからそれがかなり定着した（背後から奇襲しても受け止められて反撃を食らう

ことが想像できるため)。

しかし、遠足において、そのパイロットが万であると判明し、同時に機体名は“アイギス”であるということが判明した。

シオルダーアーマーはスラスト兼砲門となっている。しかも、エネルギーの変換・吸収装置も付いており、これで相手の飛び道具はほとんど無効化される。破壊しようにもかなり頑丈なため、ちまちまダメージを与えて壊すような方法しか現状はない。

例えるならパズドラのネプチューンをスキルを一切使わずに倒すようなもの。それなんてムリゲー。

J Pマルチテストタイプα型

専用機持ちのトーナメントに現れた機体。黒基調のカラーリング。

近接に特化した機体で、通称は“ブラックバード”。別に二刀流ではない。

クラッキングを食らって暴走、I S学園に現れた模様。

その後、セキュリティホールを埋められたうえでI S学園に訓練機として寄贈された。

J Pマルチテストタイプβ型

専用機持ちのトーナメントに現れた機体。ガンメタ基調のカラーリング。

遠距離に特化した機体で、通称は“ガンチャリオット”。ガンランスではない。ブラックバードがクラッキングを受けたことにより、それにつられる形で暴走、IS学園に現れた模様。

その後、セキュリティホールを埋められたうえでIS学園に訓練機として寄贈された。

また、JPマルチテストタイプシリーズにはお互いの連携のためだけの回路が存在する。

黒騎士↓レイクナイト

Mの専用機。当初は黒基調のカラーリングで、黒騎士と名乗っていた。

詳細は不明だが、彼女の高い戦闘能力をいかんなく発揮できるような、高度なチューニングを施されている模様。

万の手によって調整、及び改良がなされた。その際に、“兵器としての完成形を目指した”第一世代を突き詰めた機体であることが判明した。また、人の認識とほとんど同時に動く、パイロット側のフィードバックが早い機体ではあるが、早すぎるがゆえに制御が難しい、とてつもなくピーキーな機体となっていた。本来、このような状態では機体の制御に集中しすぎてしまうため危険なのだが、本人の慣れ、及び技量の高さを見込

んであえてそのまま突き詰めた。

その調整の際、黒騎士のままでは学年の前に現れてしまったため感付かれる可能性があるかと判断した方がカラーリングを黒基調からシルバー基調にし、名前もレイクナイトに変更した。

また、レイクナイトには追加武装こがらし 凧が搭載されている。レーザー、実弾両方射出可能。実弾では100発を3秒足らずで撃ち切り、光学兵器では秒間100発を越し、さらにフレキシブル 偏向射撃にも対応する。この装備は開発者である万も「人を選ぶ」「極限過ぎる」というほど。だが、パイロットである庵はそれすらも使いこなす。

原作キャラの専用機とかは特に変化させてません。

それと、始まり で出てきた先輩と所長は完全にチョイ役です。ここには紹介しません。

本編

0. プロローグ

今にして思えば、きつかけは些細なものだった。

ドイツで生まれ、そのあと学園都市へ行った。

そんな飛び回る生活をしていたからか、自宅への執着はなかった。

学園都市では、その能力の高さから、学園都市の仕事もした。

反乱分子の鎮圧、依頼物の運搬、研究所の護衛などといえは聞こえはいいが、やることはほとんど同じだ。

依頼主が敵と認識した人間を肩ひとつ動かさず殺し、依頼を全うする。依頼物も、能力を使ってみると何やらデータであったり、精密機器だったり、はたまた大量の金だったりした。

個人的に依頼を受け、それをほぼ完璧にこなし、報酬をもらう。自分はそんなスタイルを貫いていたが、他はほとんどは組織立って依頼をこなしており、俺のようなものは珍しかった、というのは後から聞いた話だが、しばしば合同任務もあったからうすすと察していた。

いつも通り裏で仕事をこなす準備をしていた折、あれが起った。

適当につけてあったテレビが突然切り替わった。さして興味があつたわけでもないが、突然切り替わるだけの何かがあつたのだろうかと思ひ目を上げた。

「緊急事態です！世界各地のミサイルが無数に日本に向けて発射されました！総数は2000以上と思われます！」

そのアナウンサーのセリフや口調から緊急事態というより非常識事態であることは確かなのだろうが、俺は「へえ、そりやまたすごいことで」と漏らしただけだった。なにせ、この街の裏にいます、その程度でもそこまで驚かなくなつてきているのだ。

そうこうしているうちに映像が切り替わった。どうやら弾道予測に何かいるようだ。

「なんでしようか、あれは……人……？」

丁寧な口調が一瞬外れたのは仕方ないことかもしれない。なにせ、その映像はどう考えても空中なのだ。そこに人型としか思えない何かがいともまずそれを鵜呑みにはせず、合成かCGかと疑うだろう。だが、それらの疑いのすべては数分後にすべて裏切られることとなる。

「あーミサイルがカメラに見える距離まで迫つてきました！このままでは……！」

そこで言葉は途切れたが言わんとするところはわかった。

推定2000以上とされるすべてがあの人型の何かの上に降り注ぐ。しかも30秒

とないのちに。それがもたらす結果など考えるまでもない。

だが、回避に入ると思われたその人型の何かは予想に反して剣と思われる物を構えた。

それからままるでSF映画でも見ているかのようなだった。

2000以上の大陸間弾道ミサイルをそれは手に持った巨大な剣で残らず撃ち落としたのだ。それがミサイルを撃ち落とした後、正体不明のそれに対し諸国の艦隊、航空戦力は総攻撃を開始したがそれは残らず撃退していく。

戦闘機に対しては翼の一部を斬り、艦隊に対しては艦上砲をすべて破壊し、戦闘へりに対しては搭載された重機を破壊し、陸上からの戦力に対しては砲門という砲門をすべて斬りおとした。

殺さずして撃退する。それは明らかに圧倒的な力をもっているからこそできる技であった。その証拠に、現代最高の機動性を誇る戦闘機ですらその機動性には敵わなかった。

「へえ、世の中不思議なこと起こるもんだな」

俺は思わずそう漏らしていた。そしてまた仕事へと出ていった。

それから数日もたつと件の事件の真相はほとんど明らかになった。

あの人型のものは今まで旧時代の遺物扱いされていたインフィニット・ストラトス―

——通称 I S であり、それは女性にしか操れない。そして、その根幹であるコアは一人の天才・篠ノ之束にしか作れないブラックボックスであり、彼女自身は I S コアの量を拒否している。

白騎士事件と呼ばれ、I S の名を世界に轟かせたこの事件の直後、このようなことが明らかとなった。

そんなことがあつてもしばらくは彼の仕事はほとんど変化がなかった。が、少し経つた頃におかしな依頼が来た。

曰く、I S 部隊設立に伴い、軍事訓練の教官を務めるために期間限定でドイツへ飛べ。言語は学習装置デスタメントでどうにかする。

今まで特殊な依頼ばかりこなししてきた自分だが、これはひととき異様だった。

だがいくら特異な依頼とはいえこなさなければならぬ。即座にドイツ語と英語を完璧にマスターするとドイツに飛んだ。

そこで年頃の少女に対し生身での戦闘、銃器の扱いと射撃のコツ、身ごなしの音を消す技術その他もろもろの暗部で培った戦闘技術を伝えた。

俺の教えられることはもう教えつくしたころに期限が来て、俺は学園都市に帰還した。学園都市へ帰還した俺を待っていたのは新たな指令だった。

今度は I S 開発企業への出向だった。いわば I S の技術を盗んで来いといったところ

ろだろう。いまだにあのコアはブラックボックスだ。

そして、俺がその企業においてスパイ活動をしていたところに学園都市から通達があった。

かいつまんで言えば、暗部はもうない。返ってきたいなら場所は用意してやる。とのことだった。

そして、俺は自分の意志でISの解析、開発を行っていた。といっても、それはあの時までだった。

1. 始まり

とある I S 企業の研究所にある I S 研究機格納庫兼研究室に、どう鼻屑目に見ても高校生以上には見えない少年はいつもと同じように誰よりも早く来ていた。

少年の名前は黒川^{くろかわ}万^{よろず}。とある事情で学園都市からこの企業に就職している少年で、見た目通りまだ幼く、年齢はまだ 15 である。が、その卓越した頭の回転の早さから周りの大人から一目置かれている。

いつも通り誰よりも早く来て、I S の分析、装備の強化などに取り掛かった彼は、試験機のデータを確認もかねてもう一度取り直すために試験機の近くへ歩み寄った。

万が誰よりも早く来ている理由の一つがこれだ。女性がどうしても強くなりがちな職場である以上、このようにデータを確認し直す、ということをおいそれとできるわけではないのだ。

またいつものように手慣れた動作で仮想ディスプレイを出現させ、素早くキーボードを操作する。自分の望む項目を出すと、手元にあらかじめ用意してあった紙に求めている数値をメモしていく。同じように何機かある研究機すべての数値を取ると、席へ戻ろうとした。

それはたまたまだった。

いつもなら躓かない程度の低い段差に躓いて、バランスを崩した。その拍子に手が横に出て、その手が研究機の一機に触れた。

その瞬間、頭の中に大量の情報の流れが流れ込んできた。それはちよほど過去に体験した学習装置の、脳に直接情報をインプットされた経験に近かった。

思わず目を閉じ顔をしかめたのも一瞬、目を開けるとそこには起動した研究機の I S があつた。

「・・・あれ・・・？」

確かにデータ採取のためにアクセスはしたし、その時に一時的に起動もした。が、それをした後は絶対シャットダウンさせていて、今回もちゃんとしていたはず。なのに、なぜ・・・。

まさか、と思いながら仮想ディスプレイを表示させ、起動履歴を調べた後、腕時計で現在時刻を調べる。確かに2, 3分ほど前に起動し、一回シャットダウン。そして今しがた起動したような履歴がそこには表示された。

そして、先ほど流れてきた情報。

「・・・まさか、な」

自分が I S を起動させたともいうのか。男であるこの自分が？ありえない。そう

思いつつ、もう一度シャツトダウンし仮想ディスプレイを消去する。

また手を同じ研究機に当てると、やはり情報が流れ込んでくる感覚とともに目の前のISは起動態勢に入っていた。

「……ええー……」

ありえないと思っただけでも一応検証してみたくなる自分の癖をこれほど恨んだことはないだろう。なにせ、そのせいでその方に一つもないと自分で思っていた可能性が正解であると導き出せてしまったのだから。

あまりにも意外すぎたその可能性が正解だと知ってフリーズしていたその時、研究室のドアが開いた。

完全に思考停止してほかのこととも全く気付かなかった方はその音にすら気づかなかった。

「おはよー、毎朝偉いねーよろ坊」

入ってきたのは万と親しい先輩の研究者だった。本人は世間話でもするような雰囲気でも話しかけたのだが、当の本人から一切反応がないことから不審に思い近くに寄って行った。

顔を覗き込んでみると完全に放心状態といった風情で、何も考えられないといった様子だった。

「おーい、よろ坊？どーしたー？」

呼びかけながら顔の前で手をかざしてみるが全く効果はない。試しにコンと擬音がつくように肩をたたくとようやくこちらに気づいたようで体を震わせ年相応の悲鳴を上げながらこちらを向いた。

「うわあ！つて先輩か……。いつの間にそこに？」

「ちよつと前。てかマジでどうしたの？心ここにあらずつてレベルじゃなかったけど……」

そこまで言つてI Sが起動状態にもかかわらず、仮想ディスプレイが表示されていないことに気づく。

「あれ、もしかしてI S起動できちゃったとか？」

その先輩も軽口のもりで言つたのだろうが、目の前の少年の顔が一瞬で硬くなったのを見て、地雷を踏んだ可能性があることを悟つた。

「……え、まさか」

「実演したほうが早いですね」

そういつてさつさと仮想ディスプレイで目の前のI Sをシャットダウンすると、万はI Sに手を触れる。その瞬間、淡くI Sは光り、起動状態になった。それを見た先輩は絶句する。

「・・・マジかよ・・・」

「それは俺のセリフですよ・・・」

軽くため息をつきながら方は答えつつ、ISをもう一度シャットダウンする。

「いやー、まさかもうさっそく二人目の男性IS操縦者が出るとはなー、しかもこんな近くから」

「俺もびつくりですよ・・・ん? 『二人目』?」

方はその言葉をあつさり聞き流しかけ、先輩の言葉の一部に疑問を持ちおうむ返しに聞き返す。

「おろ、聞いてない? 少し前にISをたまたま起動できた男がでた、って話。だから二人目」

一応社会人なのでニュースにも目を通すが、さらりとしか目を通さないので対して興味がない項目はほとんど覚えていないのだが、それはしばらく話題になったのですんなりと思いつくことができた。

「ああ、そういうえばそんな話もありましたね。でもどうしましょう・・・」

「どーもこーもねーよ。どうやっても隠し通せねーんだからいつそのことばらすぞ。お前の身分は伏せることになっちまうが・・・」

「構いません。そちらのほうが都合がいいでしょう。で、処遇はどうなります?」

「それなんだがな、こっちにも考えがある。いったんあずからせてもらえねえか?」

「・・・お願いします。俺じゃ何もできないので」

「おう、頼まれた。先輩の力つてやつ見せてやるから覚悟しとけ。とりあえず、お前はいつも通り今日の仕事をしつかりこなせ、いいな?」

「はい」

「よし、それでいい。じゃな」

始業の時に万がI Sを起動できてしまったことは全員に伝わったが、メンバーは冷やかしかしたもののいつもと変わらず接してくれた。こういう時程このよく言えばフレンドリーな、悪く言えば無駄に馴れ馴れしい職場に感謝したことはないと思つた。

言われた通りその日の仕事をしつかりこなしていると、終業時に例の先輩から声をかけられた。

「ちよつといいか?」

「あ、はい。朝の件ですか?」

「ああ。つっても、こんなところで話す内容じゃねえし、ボスにも話を一応したい。悪いがアポはもうとつてある。いいか?」

ボスというのはこの研究所の所長のことだ。たまに抜き打ちで仕事を見にきたり、メンバーを巻き込んで突然パーティーをやるとか言い出したりするが、人当たりはよく信頼

も厚い。万もボスを信頼していた。

「いいかもなにも、アポとつてある以上どうしようもないでしょう？それに、これは先輩に任せたんですから、判断には従います」

「OK、サンキュ。んじゃ、今から所長室に行くぞ」

時間には余裕を持たせたたいからな、とかにもこの先輩らしい一言にちよつと待つてください、と言いながらデータの保存とパソコンのシャットダウンを素早く行い、さつさと席を立った。

「・・・はい?」

その数十分後、所長室で万は素つ頓狂な声を上げていた。

「え、と、つまり・・・?」

「つまりも何もない。お前さんはIS学園へ進学してもらおう。ISの操縦はここでも学べるだろう。出身学校は学園都市の学校の名義を借り受けることで合意した。先方も話はつけてある」

要領を得ない少年の回答に年長者は先ほど言った内容をより詳しく噛み砕いたうえで繰り返した。

「それにな、よろ坊。どんな事情があるかは俺らは知らねえけど、お前くらいの年でこん

などここに出向なんて珍しい。結果としてまともに学校通えてなかったら？」

「・・・まあそうですか」

「なら騙されたと思つて学生生活つてのを満喫してきな。絶対いい経験になる」

先輩が強く推す。プレゼンとかでなければそこまで自分の意見を押し付けない先輩がここまでヒートアップするのは珍しかった。ということはそこまで悪いことではないのだろう。

「・・・わかりました」

「ああ、それと専用機だが、君の研究室の人間に話を通してある。そつちで開発しなさい」

「ありがとうございます」

「この程度、礼を言われるようなことではない。ましてや、君はまだ子供だ。大人にもつと甘えてもいいのだよ？」

万としてはただ純粹に感謝を伝えただけだったのだが、所長は穏やかに笑みを浮かべて答えた。

「こちらからは以上だ。二人とも下がちなさい」

「はい。失礼します」

二人とも順次挨拶をして所長室を後にした。

それから数日で彼らの総力を結集し彼の旅立つまでの数日の間に彼の専用機の装備、装甲など各種パーツがかつてないほどの高速で一気に仕上がり、間に合わない分は学園で量子変換の作業を行う羽目になったのはまた別の話。

2. 入学と代表候補生

それから一週間ほどした、I S学園の1年1組教室。

しばらく生徒が着席したまま小柄で童顔な女性が入ってきた。

「みなさん、入学おめでとう。私は副担任の山田真耶です」

入学の緊張からか、教室は依然静まり返っている。

とにかく話題を、ということからとりあえず当たり障りなく学校の説明をさらっとする・・・が、依然として静かな教室を打破しようととりあえず自己紹介をさせる。

そんな状況を冷め切った目で見える人間が一人。黒川万だった。

彼にとつてこんな特異な環境など、裏の世界に比べれば屁でもない。緊張など一切せず、周りを見渡し冷静にそれぞれがどんな人間なのかを判断しようとしていた。

軽くあくびをしつつ自己紹介を聞き流しながら顔と名前を機械的に叩き込む。だが、途中でスムーズな流れは途切れる。

織斑がなにやら考え事をしていたようで、全く話の流れを聞いていなかったらしいのだ。

「『あ』から始まって今『お』なんだよね・・・自己紹介、してくれるかな・・・? だめ

かな・・・？」

その声で我に返ったようで、ややしどろもどろになりながら織斑一夏は立ちあがる。

「え、と。織斑一夏です。よろしくお願いします・・・」

そこで一回深呼吸すると。

「以上です！」

とたんにクラスのほぼ全員がずっこけた。ほぼ、というのは万のみが頼杖を変えずにそのままにやりと笑んだからだ。

(こいつはなかなか面白い。いや、ただ天然なだけか・・・?)

そしてそこからはまたスムーズに流れ、

「次は、黒川・・・くん、お願いします」

おい、今絶対漢字読めなかったろ。というツツコミは内心にひっこめつつ、立ち上がった。

「学園都市から来ました、黒川万です。名前は漢数字の万と書いて『よろず』と読みます。趣味は読書で、一応これでも能力者です。一時期企業にいたのでISについてわからなくなったりISのトラブルとかが起きたら、呼んでくれたら役に立てるかもです。短い間か長い間かわかりませんがよろしくお願いします」

それだけ言ったところで教室の扉があき、パンツスーツの凛々しい女性が入ってきて

た。その女性を確認すると、山田先生は心底安堵したような表情になった。

「織斑先生、会議は終わったんですか？」

「ああ。山田君、挨拶を押し付けてすまなかったな」

そういつてそのまま教壇に立つと表情を引き締めた。

「諸君、私が織斑千冬だ。貴様らを一年で使い物にするのが仕事だ」

そこまで瞬間、女子特有の黄色い声がまるで爆発するようにはじけた。

それに対し千冬はため息をついて

「まったく、よくもまあこれだけ馬鹿者が集まるものだ。それとも私のクラスだけに集中させているのか・・・？」

あきれれる千冬に何やら驚いている様子の一夏、そして浮足立つ少女たち。改めてこういったものを目の当たりにしたときの女性の底力には恐れ入りながら黒川は頬杖をついたまま苦笑して乾いた笑いをもらしていた。

千冬が一喝して黙らせたうえで二人はまた学校について話し出す。

それを見て方は千冬だけは怒らせないようにしようと強く思った。

さっそく授業が始まった。最初は基本的な座学だが、万にとつてはもはや常識であるようなことをやるため、完全に頬杖をつけて新しい武器の構想を練っていた。

ふと周囲に目を向けてみると、一夏は教科書にかぶりついてはいるが内容は全く頭に

入っていないようだ。

その後姿を見て方は疑問が思い浮かぶ。

(あのバカ、何をしてる？入学前に配られたあの分厚いのに基本的なことは書いてあつたはずだが……。ま、大方読んでなくてさっぱりわからんってオチかな)

そう、入学前に配られた資料の中には分厚い必読の参考書があつたのだ。もつとも、方は読み飛ばしていたが。

案の定、先生にわからないことはないかと聞かれたら全部わからないときた。山田先生はこの回答は予測していなかったらしく、盛大に動揺している。周りのクラスメイト達もいったいどこにわからない要素があつたのか、といった顔をしている、

だが、千冬だけは違った。姉弟ゆえか、このような事態もある程度予期していたのだろう、冷静に織斑に問いかける。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「え、と。古い電話帳と間違えて捨てました」

ひどく答えにくそうな返答に対し返ってきたのは出席簿のフルスイング。

毅然と再発行するから一週間で覚えろと宣言を食らい、一夏は撃沈していた。

(……。まあ、力くらいにはなつてやるかな。向こうしだいだが……。)

そう思ったときに自分が想像以上にお人よしであつたことに自分で驚きながら、それ

は自分のやってた仕事がそうだったからか、と顔に出さず考える方であった。

「ちよつといいか?」

件の授業の後の休み時間、万は声をかけられた。名前と顔は機械的に叩き込み一致させたが、さすがに声までは一致させていない。だが、声の高さから話しかけた相手に見当をつけると、内ポケットに忍ばせてあるものから布越しにいくつかノートを取り出して中身をチェックすると、それらを机の上に放った。

「ほい、これでいいか?」

意味が理解できず、とりあえずそのノートの一冊を手に取り中身を見る。その中にはISの用語が書かれていた。ところどころ簡略化されたISと思われる図も載っており、見やすくなっている。

「ああ、サンキュ。・・・てかどうしてわかったんだ?」

とつさに沸いたいくつかの疑問の一つを一夏は真つ先に問いかけた。

「なに、簡単な推測だ。お前、さっきの授業でわからなさ過ぎて頭抱えてたろ?とすれば誰かに教わりに行く可能性が高い。勉強は早くからやっておくに越したことはないからな。とすれば知り合いの可能性が高いが、どうせならISに関して詳しく知ってるほうがいい。となると自己紹介の時ISに詳しいってことを言った俺か、もう一人いるわ

けだが、なら男である俺に来る可能性が高い。ってわけだ」

「・・・すげえな。これ、いつ返せばいい？それと、もう一人って？」

「質問は一度にいくつももしないほうがいいぜ？まあひとつずつ答えると、簡単な推測だつて言つたろ？それと、それはやる。どうせいくつか作つてあるんだ、それはその中の一冊ずつにすぎない。それ読めばだいたい I S の用語は覚えれるはずだ。と言つても、参考書を併用して使つたほうがいいぜ、そういつたもんの種類は多いに越したことはない。最後にもう一人つてのは・・・」

「そこまで一気にに方が言つたところで声をかけてきた生徒がいた。

「ちよつとよろしくて？」

「・・・噂をすれば、だな」

「ん？」

その声に万はため息交じりにつぶやき、一夏は軽く目を上げた。

「まあ、それがこのわたくしに對する態度ですの？」

「要件があるなら手短にお願ひできるか？イギリス代表候補生、セシリア・オルコット」

高飛車な態度にいらだちを隠さずに万は相手に言う。

その話しかけてきた生徒——セシリアは万がいまだに顔も上げずに面倒くさそうに言つたことにひびく癩に障つたようで、こちらもややいらだち交じりに言つた。

「まあ、わたくしが何者か知つてのその物言い、最初ですのでまあ許して差し上げましょう。それはともかく、織斑一夏さん？」

「え、俺？」

まさか先が自分に向くと思っていなかったからかさつそく渡されたノートに目を通していた一夏は顔を上げた。

「ええ、わたくしはあなたに用があつてまいりましたの。どうやら、あなたはお姉さまと違い I S に関しては素人同然のようですから、泣いて頼むというのなら、私が教えて差し上げてよろしくてよ？」

「あいにくと、こいつのコーチには俺がつくことになったんだ。悪いな」

口をはさむべきでないかと思いつつ万はセシリアにいう。

だが、そこで一夏がおずおすと口を開く。

「え、と。二人ともちよつといいか？」

「どうしました？ さつそく師を変えようど？」

「いや、そうじゃなくて。・・・代表候補生ってなに？」

その言葉に、聞いたほとんどはずっこけ、セシリアは怒りか何か、とりあえずひどくいらだつたような表情になりその場に立ちつくした。唯一変化がほとんどなかった万でさえ頬杖をついたまま「さつからかよ・・・」とため息交じりにつぶやいた。

「・・・いいか織斑、代表候補生つてのはI Sの国家代表の候補生として、国家から相応の援助を受け、I Sの操縦訓練その他もろもろを積んでいるやつらのことで、平たく言つちまえばI Sのエリート。例えるなら、オリンピックの強化選手のようなもんだ。んで、一部例外を除き、代表候補生には専用機がある。こんなところでもいいか？」

万は頬杖をついたまま、通り一遍の説明を行う。説明を行いながら、横目でセシリアの様子をうかがう。予想に違わず、プライドの高い彼女は嫌悪をあらわにしていたが、万の説明が的確だったからか、何も言ってくることはなさそうだった。

が、さらに一夏は疑問が生まれたようで、また質問をする。

「え、専用機つてそんなにレアなのか？」

もはや周りで聞いているクラスメイトはあきれて物も言えない様子で何も反応を示さない。が、万はさすがにここまで無知とはしらず、遠慮なくため息をつくと言、「お前なあ・・・」といい説明をしようとしたが、セシリアが何か言おうとしていることに気づき黙る。

それに対し皮肉のこもった笑みを方に向かって浮かべた後、セシリアは口を開いた。

「世界に現存するI Sの数は467機。そして、I Sに必要なI SコアはI Sの生みの親たる篠ノ之東博士のみ製造可能で、当の本人は量産を拒否していますの。結果、世界各国は限られたI Sをうまくやりくりしていますの。これでお分かりかしら？」

「ついでに補足すると、ISのいくつかは研究に当てられるから、第一線で活躍するISはそれ以下しかない。まあ、どんなに多く見積もってもだいたい450つてどこか。つまるところ、そんだけしかない中で自分専用のISがあるってことはそれだけで十分ステータスになりえる、ってことだ」

さすがは代表候補生、すらすらと素人にもわかりやすく説明をしていく。セシリアの説明が終わったところで万は補足した。一夏は驚きとともに納得した様子でへえ、と声をもらす。

補足をした方に対し不満そうにセシリアは顔をゆがませ、そのままの表情で言い放った。

「・・・さっきからなんなのですかあなたは!?!このわたくしが懇切丁寧に説明して差し上げていのに、まるでわたくしが無知であるかのように頼まれていない口添えをなさって、何様のつもりですか!?!」

「気を悪くしたのならすまない。どうも穴のある説明ならその穴を埋めようとしてしまう性分だね」

いらだちからヒートアップするセシリアとは対照的に、万はいまだに頬杖を突きながら興味なさげにこたえる。その態度がさらにセシリアをいらだたせる。

「だいたい、なんなんですかその態度は!?!このわたくしが話しかけているというのに、

ずつとそのような体勢で……！」

「あんたと俺はクラスメイト、それ以上でも以下でもない。目上つてわけでもあるまいし、なんでわざわざ態度を改めなくちやいけねえんだよ、面倒くさい」

頭に血がのぼっていくセシリアとは対照的に、とことん無関心な態度の方。怒りに震えたセシリアがとうとう爆発しようとした矢先にチャイムの音が鳴った。

「……あなた、覚えてなさい……！」

半ば怨念がこもったような声でセシリアは方に言い放つと、自分の席に戻っていった。

午後の授業の千冬が担当の授業で、千冬は思い出したように言った。

「ああ、そういえばクラス代表を決めていなかったな。クラス代表とは、クラス代表戦への出場、生徒会の話し合いや委員会への出席など……まあ、クラス長のようなものと考えてもらえればいい。自薦、他薦は問わん。誰かおらんか？」

その声に即座に何人かが一夏を推薦する。大方、男であることをいいことにマスコツトにしようという魂胆だろう。ブリュンヒルデの弟ということでさらにその効果は倍増だ。

そこまでは方にとってはまあよかった。

「えー、私はよろずんでもいいと思うけどな」

穏やかでどこか間延びしたような声で口を挟んだのは布仏本音だ。それに続くように何人かさらに万を推薦する声上がる。

「今のところ、候補は織斑に黒川か。ほかにはおらんか？」

千冬がそこまで行つたところで、席を蹴倒さんばかりの勢いで立ち上がった生徒が一人。

「納得できませんわ！」

その立ち上がった勢いそのままセシリアは言う。

「このわたくしに、一年間しかも男を代表として従えと言いますの!?!代表にふさわしいのは、このセシリア・オルコットですわ!?!だいたい、文化としても後進的な国に暮らさなくてはいけないこと自体私にとっては……」

その言葉に対し、口を開いたのは一夏だった。

「イギリスだつて大したとりえないだろ。世界一まずい飯で何年連続覇者だよ」

「あなた、私の祖国を侮辱しますの!?!」

議論が白熱しようとしたところで、万が軽く手を上げた。

「あー、ちよつといいか？」

思わず噛みついた一夏は思わぬ横やりに安堵などが入り混じつた複雑な表情を浮か

べ、セシリアはこの上ない嫌悪をそれぞれ方に向けた。

その表情をこめかみに青筋を何本か立てた笑顔に変えたセシリアは静かに言葉を発した。

「・・・なんですの？」

「んー？ちと疑問に思ったことがあつてねえ。そこにいるブリュンヒルデや、ISの開発者の篠ノ之東も日本人なだけとお、その辺どう思つてんのかなあ、みたいなあ？」

軽口をたたくように言う方だが、言っていることは相手の痛いところをついている。セシリアもそれを自覚したのか、開けようとした口を閉ざした。

「あーあー、それにあなたの国も底が知れるねえ？」

「なんですつて!？」

あくまで軽口のような口調は崩さない方の挑発にセシリアは食いついた。かかった、と内心ほくそえみながら方は続ける。

「だって、あんた代表になる可能性は少なからずあるんでしょ？もしあんたが代表だったとしたら、あなたの発言は国家の発言だ。それで今みたいなセリフを言っちゃったら、日本ならともかく、特にイスラム圏なら間違いないドンパチになるだろうなあ。その辺、自覚したうえで発言した？」

「・・・それは」

「してねえだろうなあ、してたらそもそも言わねーし。で、そうだったらその騒ぎの元凶たるあんたは、引き金を引けるの？」

そういつて頬杖をついていない手を銃のようにして向ける。

「それはもちろんですわ！」

笑顔で軽口をたたくように言う彼に対しセシリアはいらだちを募らせていく。

「じゃあ試してみようか」

それはまるでちよつと遊ぼうか、というような風に言った。

「試す？ どうやって？」

それに対しセシリアは鼻で笑う。

「こーやって」

そういつた次の瞬間、彼女へ向けていた手の中にリボルバー式の拳銃がどこからともなく握られていた。むろん、銃口はまっすぐセシリアの頭に向けられている。

それに対し、クラスの何人かが短く悲鳴を上げ、セシリアは怒りに赤く染まった顔のまま目を大きく見開いた。

そしてその銃が実銃であるかを示すように安全装置を解除する。その瞬間、その赤く染まった顔はみるみる青ざめていった。

「——実際に銃を向けられる覚悟もねえのに、撃てる、だど？」

青ざめたセシリアを確認してから、今までの軽口はどこかへ失せ、軽い殺気すらも放ちつつ彼は言い放つ。

「恥を知れ」

その一言とともに彼は銃を机におろした。

「ふ、どうせ撃てなどしないでしょう？ 見え透いたこけおどし・・・」

その精一杯強がった言葉は轟音によつて強制的に黙らせられることとなった。放たれた弾丸は彼女の頭をかすめ、幾筋かの毛髪が地面に落ちた。

セシリアがゆっくり目を向けるとそこには硝煙を上げた銃を構える彼の姿があった。

「頭ぶち抜いてほしいのならそうして差し上げるけど？」

表情を完全に消去し、今度こそはつきりとわかる殺気を伴つて彼は言う。その光景にクラスの誰もが息をのみ、セシリアは静かに席に腰を下ろした。

「話は済んだか？ なら三人はこれを引け」

そういつて千冬がどこからともなく取り出したのはくじだった。

「なるほど、ちなみに当たりは何本です？」

「一本だ」

ちようどいい、軽い運試しだ、と言いながら気軽に引く万だが、結果はずれだった。

「まー、そうそううまい話はねえよな」

結果的にあたりを引いたのは一夏だった。必然的に、初戦はセシリアと万が相對することとなる。

「よし、では代表決定戦は一週間後、第三アリーナで行う。二人とも準備をしておくように」

その言葉で授業は終了した。

「てか、男二人しかいねえんだからてつきり一緒にすると思っただがなあ・・・」

学校に二人しかいない男の片割れである一夏は隣に歩く方に向かつてこぼす。

「まあそういうなつての。俺のほうは急だったし、コネもなかったしな。ある種仕方ねえだろ」

「そういうもんかな・・・」

「そういうもんだ」

あくまでも冷静に返す方にそういえば、と一夏は切り出した。

「あの時、お前どうやってノート取り出したんだ？」

「あー、そういえばまだいってなかったか」

そういういつつ制服の内ポケットに手を伸ばして出てきたのは小さな箱状のもの。

「こいつはISの量子変換を解析、応用して作ったもので、俺は量子変換ボックスって呼んでる。つつても、まだ試作品だからこの世にはこれも含めて20もない。もつとも、

ほかの人間が同じものを開発してれば話は別だけどな」

「何それ？」

「ISは量子変換って技術で武装を展開したり収納したりするわけなんだが、その技術を活用して、このちっさい箱の中にいろんなものを収納できるって優れものだ。まあ、今現在だと一個作るのにコストがかかりすぎるから量産化はまだ見込めないわけなんだがな」

「へえ、それは便利だな」

「ま、とりあえずまだ試作段階だし、何より故障すると中身もパーになる可能性があるのがなあ・・・」

「それはいやだな・・・」

「ま、もつと安定すれば、価格を犠牲にしてもつてとこなんだが」

「そーいや、お前って学園都市から来たってことは、超能力つてやつをえるのか？」

「ま、一応な。それと学園都市の6割は無能力者、つまり能力をつかえない。しかも残りの4割の中でもあつてないような程度の能力しか持たない奴なんかいくらでもいる。つまるところ、学園都市出身だから能力者とは限らないってこつた」

「へえ、で、お前はどんな能力をつかえるんだ？」

「ま、それはいつかいうさ」

そういつてふと一夏は気づく。

「あれ、もしかして黒川の目って・・・」

「万でいい。その代り俺も一夏つて呼ぶし。で、目については俺がハーフだからだ。母親がロシア系でね、顔だちや肌の色は父親に似て東洋系になったんだけど、瞳の色だけこの色になった」

そう、万の瞳の色は灰色だったのだ。彼の目をしつかりのぞかなかつたからわからなかつたが、改めてしつかり見ると綺麗だった。

「それより、ここじゃねえの？」

そんなこんなで、二人が無駄話をしてる間に一夏の部屋の前に来ていた。

「あ、ほんとだ」

「じゃ、俺向こうだから。何かあつたら呼べよー」

そういつて方はひらひらと手を振りながら自分の部屋に行った。

人数の関係上一人部屋となつた部屋で方が寛いでいると、何やら周りが騒がしい。ゆつくりさせろよという本音を胸にしまつて部屋の外に出ると、なぜか一夏が部屋の外で部屋に向かつて何やら言っている。

「つたく、どうしたんだ？」

とりあえず、万は一夏に問いかける。

「いや、これは……」

そういう前に扉から何やら出ていることに気づく。それは明らかに木刀だった。

大方一夏が何か同居人の逆鱗に触れたのだろう、と見当をつけると一夏に問いかける。

「とりあえず中入れ。うるせえ」

そういつて万はその場を離れた。そして、寮監室へ向かった。

その夜に一夏とそのルームメイトが千冬の大目玉を食らったというのは、風のうわさで万の耳にも入ってきた。

そして、その後日。

「織斑、お前の機体だが、準備までに時間がかかるぞ」

「へっ？」

「訓練機の予備がない。データ収集もかねて、学園で専用機を用意するそうだ」

その言葉にクラス全体がざわつく。万は相変わらずけだるそうにしているが、いつも通り頬杖をついたまま「マジかよ……」とつぶやいた。……頬杖がデフォルトというのは考え物だが。

「それって本当ですか？」

「こんなところでそをついてどうする。とにかく、それまでは基礎知識を覚えて待て。」

いいな?」

「……はい……」

ややしょげたような返答に、後ろのほうで方はたりと口をゆがませたとかさうでないとか。

なにせ、一夏にはやや無理やりともいえる方法で教えているのだから。まあ、あの教えている方は期限内に間に合わなかったら自分の部屋で学園都市に無理を言つて持ってきた学習装置を使う覚悟すらあるのだが、それはあくまで最後の手段として考えているのでまだ使っていない。

何とか学習装置を使うことなく、何とか一般学生レベルには基礎知識もついたら、ちやうど代表決定戦の日がやってきた。だが、一夏のISはまだ届いていなかった。そして、目の前のディスプレイには浮遊する青い機体。

「これがあいつの機体なのか……」

「ああ。起動時間は俺らとは比べ物にならないレベルで多いから、あの機体はもはやあいつの手足同然だろうな」

「なのにそんなに余裕なんだよ!」

のんきにいう方に一夏は驚きつつ問いかける。

「いくらISを手足同然に操れたところで、必要なのは搭乗者の技量と覚悟だ。兵器を

スポーツの道具としか考えてない甘ちゃんに俺は遅れをとらねえよ」

言いながら万はピットからグラウンドのほうへ歩いていく。

「ちよつと待てよ、生身でISに対峙する気か!？」

「まさか。そんなマネするわけねえだろ。んじゃ、ちよつくら行ってくらあ」

そういつて彼はピットの入り口から軽く跳躍してセシリアに相對した。

3. クラス代表決定戦

ピットを軽く跳躍し、そのままゆつくりと生身で相対した方にセシリアは驚いていた。

「あなた、生身で I S に相対しようとおっしゃいますの!？」

その言葉に方は笑う。

「ははは、んなわけないじゃん。俺だつて命は惜しいし? だから・・・」

そういつた瞬間、彼の体を光がつつむ。そして、その光が収束したとき、彼は澄んだ藍色の I S を身にまといつていた。

「こいつで行かせてもらう」

セシリアのほうに表示されたのは「敵機認識：J P マルチテストタイプ Y 型」の文字。

「いやに長い名前ですね」

「まあな、こいつはもともと研究機だったのをカスタムして譲り受けただけだしな。名前がやたら長いのはそのせいだ。ま、その名が示す通り多目的利用を目的とした試験機だ。装備を換装すれば精密作業も可能だぜ? まあ試したことなんざ数えるぐらいしかないけど」

「ずいぶんと口が回りますのね」

「今言ってるのは戦闘とは関係ないただの無駄話だ。いくらしゃべっても問題はねえだろ？」

「そうですね。では、最後のチャンスを与えましょうか」

「チャンス？」

「誰の目にもここであたくしが勝つのは火を見るよりも明らか。故に、この場で無礼を泣いて謝るというのなら、許さないこともなくつてよ？」

その言葉に方は鼻で笑う。

「言葉は正しく使いな。それはチャンスじゃねえ、ただの無条件降伏だ。それに、たとえばそれをしたところで、許してくれる保証なんざどこにもない」

「・・・そう、では」

その時、万のISが警告を告げる。

——敵IS、狙撃態勢へ移行——

「お別れですわね！」

その瞬間、手に持ったライフルからレーザーがほとぼしる。それはまっすぐ万のもとに飛んできたが、それを方はなんてことはないかのようにかわす。続く第二射以降も万はかわしていく。

「踊りなさい、わたくしとブルー・ティアーズが奏でるワルツで！」

高らかにそう宣言するセシリアに対し、冷静に弾道を見切って、万はかわし続けた。

どれだけ撃つてもそれはすべて直撃することはない。その事実を認識し、セシリアは一度間を取った。これ以上連射しても徒にエネルギーを消費するだけだからだ。

「初見でブルー・ティアーズ相手にここまで耐えたのはあなたが初めてですわ。ほめて差し上げましょう」

「ふーん、そりゃビーも。とりあえず、そろそろ下ごしらえでも始めますかね」

「お生憎様。そんな時間は与えませんわ！」

そういつて背面から4基のビットが飛び出す。データ通りと万はほくそえんだ。

「ボールリリース、スタンバイ」

ボイスコマンドで万は言う。そしてビットから出るレーザーをかわしながらその身には金属製の球体が無数に装備された。それをレーザーをかわしながら少しずつばらまいていく。

「そのようなものをばらまいたところで、問題にするわたくしじゃなくってよ？」

あくまで敵の狙いは万本人。そしてビットもライフルもその射撃精度は素晴らしいものだった。

そして、ある程度たつたころ、万は周りを見てあえて通信をつなげたうえでつぶやく。
「そろそろ、終わりにするか」

そして、今度はビットの光線をかわずにその場で回転して更なるボールをリリース、それに光線をはじかせることで対処する。

「なるほど、頭を使いましたわね。でも、それだけじゃ甘いですよー」

そういつてライフルを構えなおすセシリアにこともなげに万は言い切る。

「まあ、少なくともあんたよりは頭使ったしな」

その次の瞬間、レーザー弾が直撃した。

そして、黒煙の中から飛び出したのは、セシリアだった。

あろうことか、彼女は死角から飛んできた光線によつて貫かれたのだ。

「馬鹿な、いったいどこから．．!?」

そう、相手はまだ一切の武装を展開していない。展開したものとえばISと例のボールくらいなものだ。

「ま、種明かしは面白い。じゃあ．．．」

そういつて彼は口を横に裂くように笑った。

「イツツ・ア・ショウ・タイム」

そして彼の手にショットガンと思われるものが出現する。

「この距離でショットガン？笑止ですわ！」

そうセシリアは離脱しつつ自身のライフルを撃つが、ことごとく彼にそらされる。

「ああ、普通はな」

そういつて彼は引き金を引く。そこから出てきたのは無数のレーザー。なるほどこれならショットガンの欠点である射程距離の短さを程度は打ち消せるだろう。

だが彼が撃つたのはブルー・ティアーズがいる方向とは全くの別方向。

「どこに撃つてらっしやいますの？」

それに対しセシリアは余裕の表情を崩さない。

「いや、俺は撃ち間違っちゃいねえよ」

素晴らしいながら今度は照準を変えてもう数発。だが、それもセシリアに向けたものではない。

いったい何を考えている、と思った彼女は回避に徹せざるを得なくなった。

無数のレーザーが彼女めがけて飛んできたからだ。しかも、回避した先にもレーザーが来る。

いったい何事か、と思い回避した先には夕闇を思わせる青があった。

はめられた、と思ったときにはもう遅い。前には武装を棍に変えた万、その他全方位にはレーザーが迫る。とつさに近接武装を呼び出すが、

「遅いー」

彼の大喝とともにそのナイフは宙を舞い、その次の瞬間棍が胴に入る。絶対防御は衝撃までは緩和しない。一瞬意識が飛びかけたところに棍がさらに一閃し、セシリアは墜落した。だがそれでは終わらない。彼女のシールド残量はわずかながらまだ残っていた。

「ちっ、浅いか。まあいい。ファイナーレだ」

舌打ちとともに言った方は心底愉快そうに嗤うと手に持っていた棍を彼女に向かって投げつけ、その直後先ほど使ったレーザーショットガンの雨を降らせ、とどめに彼自身が槍で攻撃、それを彼女の肩に突き立てたところでブルー・ティアーズのシールド残量が0になった。

試合終了、勝者黒川万。とアナウンスが流れた直後、

「あっけねえな、もうちよつとは楽しめるかと思っただけだよ」

と勝者は漏らす。そこに先ほどまでのいたぶることによる愉悦の表情はなかった。

「参考までに伺っておきますが、あなた、エネルギーはどのくらい残っていますの？」
セシリアはあくまで余裕な方に対し問いかける。

「ん？んー．．．ま、70%は残ってる、とだけ言っておく」

それを聞いて愕然とする。確かにこちらの射撃はあたった数の方がどう考えても少

ない。だが、そこまでとは。数字だけ見れば圧勝ではないか。

「ま、俺は次を考えますか。そろそろ一夏のISのパーソナライズも終わりかけてるだろうし。連戦でもいいけど・・・さすがにそれはないか、一応ここ学校だしな」

のんきにそういう万。だが、セシリアは相手の言葉にさらに驚愕を露わにした。

「あなた、まさか時間稼ぎで戦っていましたの!？」

「ん、まあそれもある。あれだ、昔のアニメのセリフを借りると、『時間稼ぎでも構わんが、別にアレを倒してしまっても構わんのだろう?』ってやつだ。今回はフラグクラッシュ成功だったけどな」

あつさりと肯定する万にセシリアは落ち込んだ。と同時に目の前の男がわからなくなった。

代表候補生である自分に対し一方的な勝利、しかも時間稼ぎも目的とした状態で。

つまるところ、自分よりおそらくこの男は上を行くだけの技量を持つ。その疑問がさらりと口を走らせていた。

「・・・あなたは どうしてそんなに強いのですの?」

「んー・・・、しいていえば必要だったから強くなった、ってとこかな。それに、ISが最強なんじゃない。重要なのは搭乗者の技量と意志だ」

って似たようなことを一夏にも行つたんだがな、と万は付け加え、自身はISを解除

してじゃあなーと言ってピットに文字通り「飛んで」戻っていった。それをさらりと流し・・・かけ、セシリアは何度目かわからない驚愕とともに叫んだ。

「なぜ生身で空を飛べますのー!？」

むろん、それにこたえられる人物はそこにいなかった。

万がピットに戻ると、そこには白いISのパersonライズをしている一夏がいた。

山田先生はパersonライズで忙しそうにしているが、残りの二人は歩いてきた方に気づいて声をかけた。

「よくやった、黒川。上出来だ」

「さすが万だな。すげえよ」

と褒めるのは織斑姉弟。山田先生は集中しているのか声もない。

「いやいや、それほどでもないですよ。余裕って見せていましたけど、さすがは代表候補生、手ごわかったです」

そんなことを余裕のある表情でいう方に千冬は軽く笑っていった。

「よし、次は織斑と黒川だな。黒川、次の試合のタイミングはどうする？」

まさか自分に話題を振られるとは思っていなかった方は面食らうが、すぐに平静を取り戻して答える。

「そうですね、一夏のパーソナライズが終わり次第で」

「ならあと数分だぞ、準備しろ」

「りょーかいです」

そういつてひらひらと手を振りながら一度ISを展開して近くの簡易エネルギー補給装置でエネルギーを回復させる方には疲れすら読み取れなかった。

(こいつは、何者だ……?)

そんな様子を見て千冬は万を空恐ろしくさえ感じるのであった。

先に出て空にたたずんでいるところに、一夏のIS——白式が飛んできた。それを確認してから万は通信をつなぐ。

「遅かったな、一夏」

「お前が早いんだよ。そもそも、こっちはパーソナライズ? やつてたんだからお前よりは遅いだろ」

「ま、それもそうか。じゃあ……」

そういつて万はその手に棍を展開させる。

「構えろ。いざ尋常に、つてやつだ」

「ああ」

そういつて一夏も片手に剣を展開させた。

二人が武器を手に戦いを繰り広げている中、教師二人、そしてセシリアは管制にいた。「惜しかったな、オルコット」

「気遣いは無用ですわ。少なくとも今のわたくしでは歯が立ちませんでしたもの」

「そういうな。お前は善戦していたと思うぞ。それに、あいつはあまりにも戦いなれている。こういつてはなんだが、あまりにも相手が悪すぎた」

「そうですね……。そもそも、あのような装備があるということは……」

「ああ。おそらくはたいいていの装備に何かしらの対策がされていると考えたほうがいいな。そして、それを扱う技量もな。……おそらく、現時点で一年最強クラスだろう」

「そんな……!」

「おそらく、あいつ自身の頭の回転の良さも影響しているのだろうな。だからこそ、それだけ装備を展開できる。そら、もうそろそろ勝負がつくぞ」

目の前のモニターを見ると、二人のシールドエネルギーの残量がそれぞれ表示されていた。確かに一夏のシールドエネルギーは一気に減っていったいき、0になった。

——試合終了、勝者黒川万——

そのアナウンスを聞くと、二人は降下しピットへ戻っていった。

4. 戦いの後

「お疲れ」

「おう、お疲れ」

クラス代表戦の後、万と一夏はピットに戻ってきてくつろいでいた。

「にしてもお前つええな」

「お前もだよ、一夏。まだまだだけど、筋がいい。伸びしろがあるぜ、お前」

「はは、ありがとな」

そこまで行つたところで管制にいた三人がやってきた。

「よくやった、黒川。さて、これでクラス代表は黒川になるわけだが、問題はないな」

それに対し三人はうなづくことで肯定した。

「よし、ならいいな。黒川、一年間頼むぞ」

それだけ言い残すと教師二人は去って行つた。

そのあと機を見計らってセシリアが口を開いた。

「あの、ちよつとよろしくくて？」

「なんだ？」

それに対し二人は顔を向ける。

「あの、お二人に謝っておきたいのです。……このたびはわたくしの不注意な発言で不愉快な思いをさせ、申し訳ありませんでした」

言いながらセシリアは二人に対し頭を下げた。

それに対し万はため息を一つつく。

「……なんだよ、そのことか」

「……え？」

あまりにも予想外な答えに思わずセシリアは驚きの声を小さく上げる。

「別に気にしちやいなえよ。口を滑らせるのは誰でもあるだろ？ 今度から気を付けろっただけだ」

「俺もそこまで気にしてないし、そんなに気にやまなくていいって」

「……ありがとうございます、黒川さん、織斑さん」

「一夏でいいぜ、セシリア」

「……はい、一夏さん！」

二人はそのあとも何やら話していたらしいが、自分に話題が来ないことをいいことにさっさと万はそこから立ち去っていた。それに対し、一夏が何やらフオローをしていたようだが、気にせずそのままロッカーへ戻った。

ロッカーで着替えをして一服していると、一夏が追い付いてきた。

「おまえなあ、あのまま無言でどっかいつちやうつてよくないぞ?」

少し咎めるような声になっているのは気のせいではないだろう。それに対し方はどこかけだるそうな声で答える。

「仕方ねえだろ?俺、あーいうときの言葉のかけ方とか分かんねえんだからよ」

「だからつてもなあ・・・まあいいや」

そして自分も着替えに入る一夏を尻目に「んじやまおさきー」と一言残して方は部屋に戻った。

そして、その夜。方は部屋でとある情報を見ていた。

その情報とは、セシリアのものだった。イギリスの代表候補生のプロフィールなどそうおおいそれとのぞけるものではないが、彼のクラッキング技術にかかれればたやすいことだった。

(セシリア・オルコット、イギリス代表候補生。幼いころに両親と死別、親戚から両親の遺した遺産を狙われるが、その幼い身で守り抜く努力家。見た目に反して苦労人なのな。にしても、こいつの出生も少し気になるな。ちと家族のほうも調べてみるか・・・)

そういつてさらに別方面へのハッキングを別のコンピュータを使って進める。狙う先はセシリアの家族、親戚についてだ。ほどなくしてそのデータを入手することに成功した彼は一回二つの端末をオフライン作業に切り替え、入手したデータを精査する。そんなことをしながらここにいるのが一人でよかったと割と本気で思った。誰かに見られたら処罰どころの話ではない。なにせ、自分は犯罪行為を堂々としているのだから。

それを見つつ、思考を開始する。

（身分はイギリスの名門か、まああの口調からしてもそれは納得がいくな。分家か本家かはわからんが、どっちでも遺産も莫大な金額になつてははず。とにかく、気になるのは両親だな。これから察するに、父親が婿養子に入った形か。てことは、いわゆるかかあ天下で、父親が母親に頭が上がらなかつた可能性も大きいな。・・・それなら、）

「あの性格も納得、か・・・」

誰にともなくつぶやいた。これである程度丸くなつてくれれば楽なのだが、とこの場にはいない——といつてもいたらそれはそれで困るのだが——少女に向けてひそかな思いを抱く方だった。

5. クラス代表と新たな転校生

そして、その次の日の夜。

「黒川君、クラス代表就任おめでとー!」

万のクラス代表就任祝福パーティが催されていた。

だが、当の本人はというと。

「……こーいのは柄じゃねえんだがな……」

どこか浮かない顔をしていた。

「まあそういうなつて。みんな祝福してくれてんだからさ」

「俺は気持ちだけでいいって口なんだよ。特に、こういう大人数でつるむつていうのは、

なんていうか……気疲れする」

隣でフォローする一夏に万はあつさりと答える。

「まあまあ、そうおつしやらずに。こういったところに愛想よく振る舞うのも上に立つ

者の務めというものでありますのよ」

「それはわかってるんだがな……。俺は人の上に立つ人間じゃねえと思ってる」

「ならば努力をすればいいだけです。万さんも、あのIS技能は簡単に身につけたも

のではないのでしょうか？それと同じですわ」

セシリアも口添えをするが、万は「はたしてどうかねえ……」というだけだった。そして、ふと呼称が変わっているのに気付き、それについて聞こうとしたときにフラッシュが光り、思わず万は目を細めた。その眼で光の方向にらみを飛ばすと、その先にいた少女はその眼の鋭さに驚きながら言った。

「あ、突然ごめんなさいね。新聞部の二年、黛薫子です。一応、クラス代表決定したので取材に来ましたー。それで、一組はクラス代表決定戦をやったって聞いてるんだけど、どんな風に行ったの？」

それに対し細めた目を元に戻し、無表情で淡々と万は答える。

「まず自分とオルコットが戦い、その後くじ引きの結果不戦勝だった織斑と勝った自分が戦いました」

「へえ、三人だったのにトーナメントにしたのはなんで？」

「時間の都合上です。アリーナを長々と使うわけにはいきませんでしたから」

「なるほどなるほど。で、オルコットさん。黒川君のIS操縦技術は代表候補生の目から見てどう映ったの？」

突然話を振られて驚いた様子のセシリアだったが、そこは彼女なだけありすぐに冷静さを取り戻して答える。

「正直言つて、かなり高いレベルでしたわ。わたくしの放つ銃弾をことごとくかわし、必要な攻撃を叩き込んで終わらせる。わたくしの体験したことのないレベルでしたわ」

「それはすごいなあ。で、この評価に対して当の黒川君はどう思うの?」

「んー……。単に自分の育った環境下では銃と相對したことも多かったですからね、その経験が生かされただけだと思います」

銃と相對することの多い環境とはどういう環境だ、と三人は思ったが、セシリアはそういうえば、と話題を切り替えにかかった。

「銃といえ、あなた、あのレーザーはどういう仕組みでしたの?」

「レーザー?」

その言葉に黛も反応する。

「ああ、あれ。レーザーっていうのは彼女の武器で、自分の武器でもありません。両方とも光学兵器を持っていますから」

「それで、戦闘中に突然死角からレーザーが飛んできたり、無数のレーザーが四方八方から飛んできたりということがありました。結局、どうしてそんな現象が起こったのかをいまだに教えてもらっていませんでしたから」

「で、それに対しての質問でいいんだよね? オルコット」

「無論ですわ」

「ん。で、それについては実演したほうが早いですね」

そういうと彼は軽く腕を振る。すると、パチンコ玉くらいの大きさの金属玉がいくつか空中に散った。そして、彼の手にはレーザーポインターが握られていた。

「これをレーザー銃だと思ってください」

そういつて空中の玉の一つにレーザーを当てる。すると、肩の前に出した左手に赤いレーザーの点が浮かんだ。

それに周囲の顔が驚きに染まったのを確認すると、レーザーポインターとパチンコ玉を量子変換した。

「金属が光をよく反射するのはご存知ですよ？それはレーザーも同じで、その特性はレーザーポインターだろうが光学兵器だろうが変わりません。それを利用し、・・・」
「金属球でレーザーを反射させて違う角度から射出した・・・」

言葉の後を引き継いだ一夏に方はうなずいた。

「その通りだ、一夏。加えて、球体なら平面とは違って反射光の推測がしにくい。それを大量にばらまいたのならなおさらだ。それを利用して攪乱に利用したわけです」

「・・・ということとは、あなたはあの時・・・」

「ええ、自分の撃った光やそちのビットから出た光がどのような角度で当たって、それがどの球にどういう風に当たってどのようなように反射するのか。なら、次はどのようなに反射さ

せればどういふ方向に飛んでいくのか。それを一発一発に對し計算し、推測し、反射および射出をしていました。正直、ハイパーセンサーとISの思考補助がなければできない芸当でした」

その言葉に三人は絶句する。ならば、目の前の男は戦いながら尋常じゃないレベルで思考し、そのうえで勝利をおさめていたのだ。異常なほどのクレバーさである。

「じゃあ、織斑君の実力は？注目のもう一人の男子操縦者なわけだけど？」

とにかく話題を変えようと黛は話題をそらす。それに対し、万は変わらず答える。

「彼のほうに關してはまだまだ未熟という印象ですね。ただ・・・」

「ただ？」

「彼のIS、何か切り札があるように思えるんです。致命傷を受けたわけでもないのは二戦とも同じですけど、彼のほうが一撃のダメージが大きかった。その代り、倒すまでの時間を考えると、彼のシールド残量は早かった。大方、燃費が悪いか、防御が甘いかつてところなんでしょうけど。それと、彼の装備は近接しかない。ということは裏を返せば一つを極めることができるということ。そして、彼の太刀筋は悪くない。これは、自分が近接にも精通してるからいえることですけどね。彼は伸びますよ」

冷静に分析する万に黛は相槌を打つ。

「てことは、織斑君が今後実力者になる目は・・・」

「大いにありますね」

「では、最後にクラス代表として一言！」

「正直、自分はリーダーに向いていないと思います。自分勝手だし、気に入らなかつたら即刻切り捨てるし。ですけど、やるからには自分の最善を尽くしたいと思います」

そのコメントに黛は満足したような笑みを表情を浮かべた。

「はい、ありがとうございます。じゃあ、最後に写真でもとろうか。配置とかどうしよう……？」

「普通に自分が中心でその周りにみんなが入る形でいいのではないですか？」

「よし、その案いただきー！じゃあ、みんな入って入って」

黛の声で周りにいた生徒が集まってくる。そのあと、はいチーズというお決まりの掛け声とともにシャツターは切られた。

その次の日。

「……ここがIS学園ね……」

にやりと笑う小さな影があつた。

そのまた数日後、クラス代表戦が数日後に迫っていることもあり、自主的な朝練をこなして教室に戻り、例によって新たな武器の構想を練っていた時に、クラスの女子たち

が話しかけてきた。

「ねえねえ黒川君、そろそろだよねクラス代表戦」

「ああ、そうだな」

「勝算とかある？」

「向こうの情報がない以上何とも言えんな……。せめて機体スペックがわかればいいんだが……」

「ならなおさら。訓練機の装備なんて見当がつくし、専用機持ちは1組と4組だけだから楽勝じゃん」

「その情報古いよ!」

それに対し言い返そうと思ったところで違う声が割り込んだ。声の方向に目を向けると背が低いツインテールの一般的に見ればかわいらしい女生徒がいた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には勝たせないから!」

それに対し万が反応する前に一夏が反応した。

「鈴?もしかして鈴か!？」

「ええ、そうよ。中国の代表候補生フアンリン鳳鈴音。久しぶりね一夏。あんたと対戦できないのは悔しいけど、今度戦ったときはコテンパンにしてあげる!」

そういつてピシと音がする勢いで人差し指を一夏へ突きつける。それに対し一夏は

おかしくてたまらないといった風情で吹きだした。

「何かっこつけてんだ、鈴。全然似合っていないぞ」

「う、うっさいわね！」

（中国の代表候補生、嵐っていうと・・・ああ、あの無類の努力家で驚異的なスピードで代表候補生まで上り詰めたってやつか）

知り合いだからこそそのテンポでの一夏と嵐の応酬の合間に方は嵐についての情報を脳から引き出していた。

その時、嵐の脳天にげんこつが落ちた。

「何すんの!?! って、千冬さん・・・」

思わず非難の声を上げながら振り向いた嵐だったがそこにいたのは1組担任の千冬だった。嵐は千冬が苦手なのか、少し逃げ腰だ。

「もうSHRの時間だぞ、とつととクラスに戻れ。それと、学校では織斑先生だ」

「はい、織斑先生・・・。じゃあ、昼学食に来なさいよね! 話したいこともあるんだから」
そういつてつかつかと嵐は去って行った。

「やれやれ、全く困ったやつだ。・・・黒川、号令を」

その声で万が号令をかけ、また1日が始まった。

その次の放課、万は一夏に声をかけた。

「ん？どうした？」

「いや、あの中国代表候補生とどういう関係なんだろうか、って思ってたな。どうやら、勝手知りたる仲っていうか、とりあえず親しそうだったからな」

「ああ、鈴のことか。あいつとは親友であり幼馴染ってとこかな」

「・・・なるほど、それで」

「まあ、な。で、あいつどういう評判だったんだ？お前なら知ってるだろう？」

「そういう聞き方よくないぜ？・・・鳳に関しては、かなりの努力家で、なかなか類を見ない驚異的なスピードで代表候補生、専用機持ちとなった人物として有名だったぞ」

「そうか、鈴のやつ・・・。らしいな」

「で、お前の目から見た鳳鈴音はどういう人物なんだ？」

「まず、悪いやつじゃないな。で、言うことはよくも悪くもさばさばしててストレートで、裏表がない。ボーイッシュって言ってもいいかな。気性は結構荒いほうで、どう考えても気が長いほうではない。あと、努力家で負けず嫌い」

「なるほどな、面白そうだ。是非お手合わせ願いたいね」

「お前は遅かれ早かれ戦うだろ。クラス代表同士なんだから」

「・・・それもそうか」

そんなところで始業のチャイムが鳴り、万は席に戻った。

そして、昼休み。学食で一夏の近くに座り、いつもはいつの間にか習慣になつていようように武器の構想を一夏、セシリア、そして一夏のルームメイトであり幼馴染の篠ノ之箒と話しているのだが、今回は別客がいた。

まず、口火を切ったのは新たな一人だった。

「さて、改めて初めまして。2組で中国代表候補生の凰鈴音よ」

「イギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ」

「篠ノ之箒だ」

「1組クラス代表、黒川万だ。名前は漢数字の方で『よろず』って読む。よろしく」

「こちらこそよろしく！さて、何から話そうか・・・」

「一夏とはどういう関係なんだ!？」

「こら、気持ちはわかるが乗り出しすぎだ。凰が引いてるだろうが」

凰の言葉に即座に身を乗り出し問いかけた箒に万はいさめるように声をかけた。その疑問に答えたのは一夏だった。

「ただ幼馴染で親友なだけだぞ？」

「幼馴染は私だけじゃなかったのか？」

「お前とは入れ違いだったんだよ。いかなれば、箒がファースト幼馴染、鈴がセカンド幼馴染だな」

「そうでしたの・・・」

「じゃあ今度は私から。この中で専用機持ちってどのくらいいるの？」

「篠ノ之以外全員だ。つっても3人だが」

それにさすがの凰も驚く。

「・・・え、マジ？」

「こんなところで嘘つくと思うか？ちなみに名前はそれぞれ一夏が白色の『白式』、オルコットが明るい青色の『ブルー・ティアーズ』、あんたの暗い赤色の『甲龍』に俺の藍色の『セイリユウ』だ」

「あら、あなたの機体名称はもつとやたら長つたらしかつたのではなくて？」

それぞれの紹介に口を挟んだのはセシリアだ。

「確かに正式名称は『JPMアルチテストγ型』っていう無駄に長い名前だが、一般的にはγ型とか、あとコードネームのセイリユウとかって呼んでる。で、俺はセイリユウって呼び名を気に入っててな。だからセイリユウ」

「ちよつとまって、セイリユウって四神の？」

「四神・・・？」

風からでた聞きなれない単語に3人が首をかしげる。

「四神っていうのは神話における東西南北を守護するといわれる神様の名前だよ。確か、南方の朱雀、北方の玄武、西方の白虎に東方の青龍、だったよな？」

「ええ。さすがね」

「いやまあ、そういう意味もあるからな。もう一つは『清流』だ。何にも染まらない、つて意味でな」

「なるほど、そんな由来があるんだ・・・」

万の説明に全員が納得した。

「・・・つてか、なんであんたが私の専用機を知ってるのよ」

「あんたは有名だからな、調べたら出てきた。ただそれだけだ」

もうすでに自分の分を食べきった方は淡々と答えていく。ついで自分の分を食べ終わった一夏が思い出したように言った。

「そういえば、お前の超能力ってなんなのか聞いてなかったよな？」

「超能力？」

それに事情を知らない風が反応する。

「ああ、俺は学園都市の出身でな。それで、俺の能力は念動力テレキネシス系統だ。実演したほうが早いな」

そういつて方は食べ終わり空になった容器を手で触れずに持ち上げていく。容器がひとりでに浮かんでいく光景は一抹の恐怖すら覚えるが、それを目の前の青年が起こしていると思うと不思議と安心できた。

「ま、こういうことができるわけだ。で、これを自分にかけてそのまま空を飛ぶこともできる。飛ぶというより浮遊だけだな」

「なるほど、それで生身で飛べましたのね」

「ま、そういうことだ。ところでよ、今度はこんな武器を考えたんだが・・・」

そういつてまた方はいつものように自分の考えた武器を投影し、意見を聞いていった。

そして後日、クラス代表リーグマッチの日。初戦は風鈴音対黒川万とアナウンスされた。

「よりによつて、初戦から嵐とはな・・・」

「愚痴つても仕方ねえだろ、お前らしくない」

思わずこぼした方に一夏が言う。

「まあ、そうなんだけだよ・・・。できれば4組と2組以外のやつとあたりたかった・・・」

「え、なんで？」

「4組のクラス代表も代表候補生なんだと。てことは、おそらくその二人はかなり強敵のはず。だからできれば他と先にあたってもらつて実力を確かめたかった、つてわけだ。実際に飛び出す前から情報戦は始まつてんだよ」

「あー、そういう。だからセシリアに対して迷いなくボールを？」

「そういうこと。一応情報の入手くらいはできたし、そこから分析もできたからな。でも、今回はそういった準備は一切ない」

話しながらちらと時計を見ると、そろそろ出る時間だった。わずかに残っていたカタパルトの準備を終わらせ、いう。

「織斑先生に話は通してあるから、お前は管制で見てろ。もしかしたら参考になるかもしれない」

「わかった。勝つて来いよ」

「おう。・・・ゴー！」

不敵に笑つた後、藍色が勢いよく飛び出していった。

カウンタダウン前に規定の位置についた二人はそれぞれの獲物を持って相対する。

相手の得物を見て、万は分析を開始する。

（かなりでかいが、あれは柳葉刀ってところか。ありやあ食らうと痛いな……。という
ことは近接格闘型、でも所詮は一本、なら……。）

そう考え彼は右手に両手棍を展開する。相手が実力者で近接を得意とするなら一番
自信のあるこの武器が一番だ。

カウントダウンが始まり、あえて通信をつないで方は言う。

「いやはや、初戦から代表候補生とは、俺もついてねえなあ」

「仕方ないじゃないの。ところで、ちよつとは楽しませてもらえるんでしょうね?」

「ま、努力はするよ。俺もあっさり負けるつもりはない。せいぜい足掻かせてもらうさ」
そこまで言ったところでカウントはラスト十秒に突入する。

「じゃあ、いざ尋常に……」

「勝負!」

そして、カウントが尽きた。

6. リーグマツチと乱入者

先に動いたのは万だった。手にした棍を下段に構え猛然と突進し、振り上げる。それに対し嵐はその手の柳葉刀で受け止めようとすが、彼は寸止めをして反対側で殴りにかかる。それに対し素早く反応し受け止め首の付近に横に払うように柳葉刀をふるう。それに対し垂直に棍を縦に構え受け止めると、バックステップの要領でスラストーを吹かせ少し間合いを取る。その間に嵐はもう一本柳葉刀を展開させ、突っ込んできた。万は一本ではなく一対であったことに驚きつつ、自身の棍でうまくいなしながら攻撃を叩き込んでいく。だが、双方とも有効打を打つには至らない。

何度目かの打ち合いで、態勢を立て直すために相手の攻撃をあえてまともに受けて、その瞬間にスラストーをバックステップの要領で吹かしつつ武装をガトリングに変更した。適当でもとりあえず銃弾をばらまき相手を牽制することで仕切り直しを狙った。が、あろうことか銃弾を発する前に万が吹き飛ぶ。それに対し空中でうまく受け身を取ると、レーザーショットガンを数発かまし、今度こそ距離を取った。仕切り直しだ。

だが、そうそう簡単に逃がしてくれる相手でもない。自身の能力を空間に反映し、違和感を感じ取るとすぐさま横っ飛びにかわす。瞬間、今まで自分がいたところと嵐の延

長線上に何かが着弾した音がした。

その光景に対し管制は騒然とする。

「なんだよ今の!？」

一夏が思わず叫ぶとそれに冷静に山田先生が答える。

「衝撃砲ですね……。空間自体に圧力をかけて砲弾を撃ち出す兵器です」

「第三世代兵器ですわね……。わたくしのブルー・ティアーズと同じ」

「ええ。しかも、彼女の場合、見ての通り砲弾はおろか砲身すら見えず、理論上どこにいっても相手を狙い撃つことができます」

「そんな……。！」

それに二人は絶句し、固唾をのんでモニターを見つめた。

そして、その正体は戦っている方も知っていた。

依然として降る衝撃砲の嵐を、能力を応用したリーダーと甲龍の反応の位置から砲弾の着弾位置を推測することでなんとかかわし続けながら推測をする。

（聞いたことがあるな、第三世代兵器で衝撃砲つー砲弾はおろか砲身も目に見えない射撃兵器があるって。……。実際戦ってみると厄介極まりねえなあおい。だが、どこかで仕掛けねえと）

そこで、過去の一夏の言葉を思い出す。確か、嵐は気性が荒く、気が短いと彼はいつていたはずだ。ならばおそろく、

(さつさと勝負を決めにかかるはず。特に、今みたいに向こうのペースに飲まれてる状況ならなおさら。・・・一か八か、やってみるか)

そう思い、とにかく動き回って攪乱することに集中する。

「あー、もう！ちよこまかとー」

気性の荒さが射撃の荒さになり、焦りになった結果、一瞬だが嵐は万を見失ってしまふ。それを確認してからボソリと万はつぶやく。

「光学迷彩、起動」

その瞬間、藍色のISは姿を消した。

その直後、嵐は焦っていた。性急に事を運びすぎたのだ。どこを見ても目で見えることはない。ハイパーセンサーを駆使しても発見はかなわなかった。

(ああ、もう！どこにいるのよ！)

焦りが思考を停止させ、嵐は無意識のうちに自身のISを停止させてしまった。それが致命傷だった。

万は光学迷彩を使った後、上空に移動して下を見ていた。

甲龍が動きを止めたのを確認すると、瞬間イグニッションブースト加速をも使って急加速しながら落下し、その手に槍を持って一気に甲龍に向けて降下する。相手も気づいて対応しようとするが、どう考えても遅すぎる。

その槍が甲龍に突き刺さらんとした——が、その槍は寸でのところで甲龍には届かなかつた。なぜなら、万がギリギリで機体コースをそらしながら地上すれすれで停止したからだ。

その原因は、轟音を立ててアリーナのシールドバリアが破られ、何かが乱入してきたからだ。

嵐も何事かといった表情でいまだ煙が出ている発生源に——正確には発生源に
いる大きな二つの塊に目を向けている。

万が体勢を立て直した直後、無線越しに嵐の声が伝わる。

「何!？」

「わからん。が、嫌な予感しかしないな」

「ちよつと、シャレになってないこと言わないでよ!」

「冗談でも何でもねえよ。こちとらロックされてんだ」

「は!?!…つて、こつちも!?!」

そう、ふたりのISには所属不明のISにロックされているという警告が出ているのである。

血の上った嵐に対しとことん冷静な方。そんな対照的な二人のやり取りに割り込むように通信が入る。

「黒川、嵐！ 試合は中止、即座にピットに退避しろ！」

「俺らがピットに戻ったらもれなくこいつらもついてきて大暴れすることが予測されますがどうしますか？」

千冬に対し冷静に反論する方。だがそう簡単に下がる千冬ではない。

「とにかく、後の対応は教師に任せて退避しろ！」

「へえ、鋼鉄のシールドが降りている状態で、どうやって突入するんです？ それまで生徒の安全はどうやって確保すると？」

そこまで言ったところでようやく千冬も折れた。

「・・・わかった、死ぬなよ」

「了解です」

そして、そのまま無線で嵐に話しかける。

「てわけで、勝手ながらおつきあいいたただくぜ？ 嵐」

「気にしなくていいわよ。戦えるのはあたらだけだし」

「感謝する。・・・左を頼む。くれぐれも巻き込むなよ？」

「了解。そっちこそ、しつかりやりなさいよ？」

「わかってるっつーの」

軽口のたたき合いとも思えるやり取りとともに二人はそれぞれの目標に向かっていった。

大見得を切って猛然と突っ込んでいった方だったが、戦い始めて一つの問題に気づく。

相手が想像以上に強いのである。これは倒せなくもないかもしれないが、やたらエネルギーを持ってかれたうえで持久戦を余儀なくされるだろう。そして、こちらは先ほどのまでの戦闘でエネルギーを多くはないが少なからず消耗していて持久戦は微妙なところだ。

そこまで推測したところで、相手のISに近接と射撃を使い分けつつ戦いながら管制に秘匿回線をつないだ。

「コントロール、応答願います」

「どうした？」

打って響く間合いで千冬の声が聞こえた。

「織斑とオルコットをよこしてください。そこにいるんでしょう?」
「どうしてだ?」

「ちよいときついんですよね、今。全力を出しても拮抗するのが精いっぱいです。視界の端で見るに、嵐もそうみたいですしね」

「・・・わかった。二人とも、聞こえたな」

その直後、二人にも回線をつなぐ。

「よし、一夏は嵐の援護を、オルコットは俺の援護を頼む。話は俺から通しておく。」

「了解!」

「できるだけ早く頼む。ラジオオーバー、切ります」

そして今度は嵐のみに秘匿回線をつなぐ。

「嵐!今からそっちに織斑が援護に来る。あいつは近接しか使えない。その辺を考えて作戦を立ててくれ」

「了解。意外と気が回るのね」

「場合によっちゃ最悪の事態だろ。こっちにも援護はくるから安心しろ。ラジオオーバー、切るぞ」

相手の銃撃をかわしつつ無線で伝えると今度は接近戦を挑む。

何回か接近戦と銃撃戦を繰り返していると、横から青い閃光が飛んできて胴と頭に着

弾した。それにより生まれた隙を突き、万は後ろに回り攻撃を仕掛ける。が、相手は後ろに腕を回してそれを受けようとしたが、それをかいくぐる形でナツクルダスターを装備した彼の左ストレートが決まり、相手は吹っ飛ばされる。それを確認した万はオープンチャンネルを開き、短く発した。

「援護を頼む。背中預けた」

そして武器を両手に二本の剣を持った状態に切り替え、突撃する。敵のISはそれを確認し拳を突き出してくるが、万はそれを受け流すともう一方の剣を片腕に突き立てる。その瞬間にもう片方の腕が迫り、セシリアの援護とともに一回距離を取った万だったが、その感触に疑問を覚える。

「なあ、オルコット。あれ、本当に人が乗ってるのか・・・？」

「何をおっしゃっていますの？ ISは人が乗らなければ起動はしませんのよ。」

「つつてもだ、俺は間違いなく腕に剣を突き立てたぞ。お前も剣が腕を貫通したのを見ただろ？なのに、血の一滴すらないってのはどういうことだ？それに、肉を突き破る独特の感触もなかったし」

その言葉にセシリアは今対峙している相手を見る。

「・・・確かに、あの位置なら普通は腕があるはずですから、剣が刺さって血が出ないというの・・・。その剣が高温、もしくは極低温になっているという可能性は？」

「それはない。それなら俺が気づくし、なにより使つてない」

「ですが、あれが無人機のところでは何もならないのでは？」

セシリアの疑問に対し方は首を振る。

「いいや、違う。たぶん、無人機つてことで絶対防御を発動させてないんだろう。人間がない以上、必要ないからな。だから剣が腕を貫通した。そして、今までの戦い方から推測するにおそらく武装は拳と手の甲にある銃のみ。てことは、両腕をつぶせばいいわけだ。幸い、片腕は穴が開いてて、あの様子から察するにたぶんオシヤカになってる。もう片方の腕を鎮圧すればそれでOKだ。そのあとは一気に攻撃を叩き込んで終わらせればいい。」

「……さりと難しいことをおっしゃいますのね」

「あなたの狙撃技術と俺の腕があれば可能だ。俺が時間を稼ぐ。あんたはそのライフルで腕の破壊を頼む」

「……承りましたわ」

承諾を聞くと同時、方は拳の保護グローブを展開すると猛然と突進していった。その勢いを使って右手で掌底を放つが、かわされて反撃を放たれる。それを確認してから相手の腕を左手でつかむとさらに足と右手でつかみ固定する。完全にその腕が静止した直後に腕の銃に青い閃光が突き刺さる。それを確認してから両腕でややむちゃくちゃ

な動きで拳を高速かつ連続で叩き込んだ。セシリアもビットを駆使して相手のＩＳのシールドエネルギーを削っていく。やがてある表示が両方に出た。

——敵ＩＳ、行動を停止——

「攻撃中止！」

それを見た瞬間、セシリアに対しプライベートチャンネルで叫んだ。声に気づいたセシリアはビットの攻撃を停止させた。そのまま通信をつないだ状態で呼びかける。

「こいつの解析作業に入る。一応、周りを警戒しておいてくれ」

「了解ですわ」

返答を確認してから、方はボイスコマンドで告げる。

「モードチェンジ、マニピュレータ」

その言葉とともに彼のＩＳの形態が大きく変化する。今までの無骨な印象のもので戦うための必要最低限な質素なものとは打って変わり、すらりとした印象なもので目はゴーグルのようなものがあるものへと変化を遂げていた。

そして、方は解析を開始する。まず、胴を覆っている部分に手を当てて、自身の能力をフルに使い中の様子を“視る”。その結果得られた情報は。

「・・・やはり無人機か」

推測していた通り、相手が無人機だったということだ。そのまま回路を解析し、機体

構造を把握していく。

解析もほぼ終わりかけの時、轟音が鳴った。何かかと思いい目を向けると白式がたたきつけられていた。念のためつないだままにしていた無線に叫んだ。

「オルコット、一夏を援護しろ！」

「了解ですわ！」

直後、セシリアは一夏の援護に回る。万も行きたいが、形態変更には少なからず時間がかかり、それだけあればあのISは白式を戦闘不能にするだろう。戦況を知るためにも万はオープンチャンネルをつないだ。やがて一夏の声が聞こえた。

「・・・狙いは？」

「完璧ですわ！」

そして青い閃光が数筋。それを放ったのはセシリアだ。それを見て一夏が叫ぶ。

「セシリア、やれ！」

「了解ですわ！」

そしてとどめと言わんばかりに相手の胸に閃光が走り、敵ISは倒れた。ほつとしたのもつかの間、敵のISが再起動する。狙いは白式だ。

それに対し一夏は特攻するが、敵の銃弾に白式のシールドエネルギーが0になり、一夏も気を失った。

それを見た瞬間、残った三人が動く。柳葉刀と剣で両側から胴を斬られ、頭を撃ち抜かれたことで今度こそ敵は動きを止めた。

その日の夜、万は二人の先生とピットにいた。もつとも、万は機械作業形態にしたセ
イリユウを身にまとい、だが。

「・・・やはり二機とも無人機ですね。コアも未登録のものが使われていました」

「ということは、黒川の解析はあたっていたわけか」

「そういうことになりましたね。・・・正直、あたっていてほしくなかったんですけど」

「それはこちらもだ」

そんな応酬をする万と千冬。それまでのけだるそうな口調から一変させ、真面目な口調で万は千冬に切り出した。

「先生、頼みがあります」

「なんだ？」

「このISのコア、ただけでないでしょうか？ むろん、表向きには破壊した、ということにして、です」

「・・・何を言っているんだ、貴様は」

「無茶を言っているのは百も承知です。ですが、そこをどうか。お願いします」
そういつて方は頭を下げた。

「・・・全く、本当に大したやつだな、お前は。・・・山田先生」

「は、はい」

「これは部外秘だ。・・・このISからコアを抜き取るぞ。自爆機構は・・・」

「問題ありません。解除しておいたはずですよ。そうでしょうか？」

「あ、はい。そういつたものは見受けられません」

「よし。ならコアを抜き取れ」

その指示とともに二人の操作する機器が二つのISコアを抜き取る。抜き取っても

ISが自爆する様子はなかった。

抜き取った後、方は改めて頭を下げた。

「・・・ありがとうございます」

「なに、気にするな。無理無茶無謀は若いうちにやっておけ。それと、もう夜も遅い。さっさと部屋に戻って寝ろ。明日寝坊などしようものならグラウンド外周20周ランニングだ。いいな？」

そういつつつ千冬は微笑む。その言葉に方はISコアを量子変換ボックスに収納してISを解除すると、失礼しますと一声かけて部屋に戻った。

7. 転校生

クラスリーグマッチの次の日、いつものように早起きした方は外の空気を吸っていた。

研究所勤めの時の癖で方は早起きしてしまうのだ。もつとも、早起きして嫌なことといえど暇なことくらいなのだが。

一応、日課とはいかなくてもたまにする程度のランニングをしていた。とはいえど、一回のランニング量は特に決めず、少し体力的にきつくなるくらいまでそれなりのハイペースで走った後、少し休憩を挟んでそれまでに走った量から鑑みた量をさらに走る、いわばインターバル走だ。かつて、裏の——暗部の仕事をしていた時はほぼ日課のようにならなっていたので、少なくとも同年代の平均以上には体力があった。暗部で何から今まで能力頼りではあの殺し殺されが当たり前前の血なまぐさい世界で生き残ることなど不可能だったからだ。

暗部時代はほぼ日課のようにしていたとはいえど、研究所勤めの時はほとんど走っていないかったし、出勤までを自転車にして、距離から時速を計算、そしてタイムを決め、それをノルマとして走る、といったようなことをする程度になっていた。学園に来てから

は走ったことはない。

見たところ、この学園の外周なら数周でちょうどいいだろう、と見当をつけた方はいつか以来のランニングを開始した。

「隣、いいか？」

ランニングを終え、スポーツドリンク片手に座って休憩に入っていた方に後ろから声がかかった。それに方は振り返らずに答える。

「・・・どうぞ。そっちも朝早いんだな」

「私としては剣道の朝稽古をしていただけだからな」

「そうか。それはそれとして、何の用だ？篠ノ之」

長々と話が脱線するのを嫌う方が単刀直入に聞くと、箒は少し間をあげ、重そうに口を開いた。

「なあ、お前にとって力とはなんだ？」

「・・・参考までに、なんでその質問に至ったのかの経緯を聞こうか？」

「それは答えに関係するか？」

「返答による。けど、どういう返答でも影響することは確かだ」

「そうか・・・」

そういつてまた黙り込む。横目で何やら考えている様子の篠ノ之を見て、一口スポーツドリンクを飲んだ。

「・・・私は、一夏の隣にいたいんだ。だけど、今の私では一夏の足を引つ張るばかりだ。前のクラスリーグマッチであのISが乱入してきたとき、私はとても不安になったのだ。万が一、お前たちが止められず、あれが一夏のもとに向かつていったら。もし、あれが群をなしてきて、一夏が前線に立つことになったら、と。そういう時に、私は一夏の隣にいたい。ただ弱者として、守られるだけじゃいやなんだ・・・！だから力がほしい。一夏を守る力を・・・！だから、一夏を負かしたお前に聞きたい。お前にとって、力とはいったいどういうものなんだ・・・？」

自分の気持ちを吐露する筈を見て、嘘をついていないと思った。最悪、生体電流をよみ、嘘をついているか否かを読み取ってもいい。だが、筈の目に迷いはない。こいつは、本気で、

(一夏を守りたいと思っているのか・・・)

その思いが一つの言葉を紡がせた。

「一夏も果報者だな・・・」

「+bc+」

あまりにも自分が予想していたものとは違う答えに筈は妙な声を上げた。それに対

し、ただの独り言だから気にすんな、という、万は考える。

しばらくの間ののち、万は答える。

「まず先に言っておく。これはあくまで俺個人の意見だ。同じ質問を凰やオルコットにしても、それぞれ違う返答になると思う。少なくとも、俺とは違う返答になることは言っておく。それでもいいか？」

「当たり前だ。そんなのは承知の上で聞いている」

「ならしい。結論から先に言おうと、俺にとって力がどんなものなのかというのはわからない。俺にとって力とは、自身の身を守るためのものだ。だから、たぶん誰かを守るための力というのは、それとは少なからず異なるものなんだろう。クラス代表を決定するときのこと、覚えてるか？」

「ああ。おそらく、忘れることなどできん」

「だろうな。俺にとっては、銃火器を使った戦いなんか結構日常茶飯事って時期があったんだ。だからこそ自分も銃を携帯してる。今も癖で、な。だけど、さすがにそう簡単に死ぬわけにもいかなからな、そのために力をつけた。そのための力が・・・」

そこでいったん切ってスポーツドリンクのボトルを空中に浮かせる。それからさらにキャップを取り、ドリンクを操ってらせん状に出す。それを一滴も漏らさずに元のボトルに戻してから続けた。

「……この力であり、体術であり、敵が持つているかもしれない物の知識だ。つまるところ、護身の延長線上ってわけだ。だから、ベクトルの違う力っていうのはわからない」「そうか……」

理論立ててわからないといった万の言葉に失望した様子の篠ノ之。そんな様子の彼女に、だがな、と万はつなげる。

「お前にも強さがある。自分は弱いといえる強さだ。そして強くなりたいという向上心もだ。それを失わなければ、いつかあのバカ念仁の隣に立てるようになるだろうよ」

「そうか……。って、バカ念仁?」

一回穏やかに笑んだ篠だが、万の言葉に疑問を呈する。

「ああ、一夏のこと。バカで朴念仁だからバカ念仁。あんた、あいつに惚れてんだろ?」「なっ……。!」

その言葉に篠の顔が赤く染まる。その反応に万は人の悪い笑みを浮かべるのをこらえるのに苦労した。

「反応みてればわかるっての。まあ、気づかぬえあいつもあいつだけどき。もすこし素直に開き直ったほうがいいんじゃないやねえか?あのバカには」

「そ、それはそうなのだが……。どうも本人を目の前にすると……」

「ま、それはどうでもいいとして」

「どうでもよくない！」

その反応に方は面白いものを見つけたと思いつながら話題を切り替える。

「そつち、剣道の朝稽古をしてたつて言つてたよな？」

「あ、ああ」

「なら、俺と打ち合つてみてくれないか？ どうにも剣筋に癖があるみたいでな、ちよつと見てほしいんだよ。今度時間がある時でいい」

「いいぞ。さっきの礼もあるしな。だが、防具の予備はないぞ？」

「なくていい。その代り、得物は竹刀じゃなくて木刀で頼む」

「わかつた」

その返事を聞くと、方はそのまま自分の部屋へ戻つて行つた。

そしてその日のSHRで山田先生が切り出した。

「今日は、皆さんに転校生二人を紹介します」

その言葉に教室全体がざわめく。そんななか、声をかけられて入つてきたのは、男子の制服を着た金髪の少年と、片目に眼帯をした銀髪の少女だった。

「ではまずデユノアくんから、自己紹介を」

それに金髪のほうが反応する。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。よろしくお願ひします」

中性的な少年のその言葉に先ほどまでのぎわめきすら影をひそめ、教室は静かになった。

過去に似たような体験をしている身として一部はとつさに耳をふさいだ。直後、黄色い歓声が爆発した。

万が聞き取れた限りで、守ってあげたくなる系、かわいい、抱きしめたいなどなどその他もろもろの勝手な声があつた。この熱烈な反応にデュノアですら動揺している。

それには千冬の「静かにせんかバカ者ども！」という一喝で一気に教室は静かになった。

「お前も挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

千冬の言葉に今度は銀髪の少女が反応する。織斑先生だ、という千冬の言葉をどこか遠いところで聞きながら万は思考する。

(ラウラ・・・まさかな)

そしてその少女は口を開く。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

それだけ言つて後は何も言う気配がない。

「え、つと……以上ですか？」

「以上だ」

きつぱりといった口調で言い切った少女に周りはざわめく。その中で万はというと、(マジだったローラー!?)

動揺を隠すのに必死だった。

そんな万の様子などつゆ知らず、ラウラはつかつかと一夏のもとに歩いていくと、その頬をひっぱたいた。

「私は認めん。お前があの人弟であるなど……!」

その声はけして大きくなかったが全員に聞こえた。

何とも言えない雰囲気になってしまった空気を千冬の言葉が破った。

「今日は2組と合同でIS実習を行う。各人は速やかに着替えてグラウンドに集合しろ。それと、織斑に黒川、デュノアの面倒を見てやれ。以上、解散!」

その言葉とともに万は一夏の席に向かう。一夏は最前列だからデュノアもそう来ると推測した結果だった。結論から言うと、その通りだった。デュノアとほぼ同タイムミングで一夏のもとにつく。

「君が織斑君?初めまして、僕は……」

「ああ、挨拶とかはあと。とにかく今は移動するぞ」

「そうだな、面倒なことになる。こっちだ」

デュノアが何か言いかけたが一夏が遮り、万も口添えをする。そして三人は走る。

「女子は教室で着替えるけど、俺らはアリーナの更衣室で着替えるんだ。さつさとしない」と囿まれるから早く移動しないと面倒だぞ」

「囿まれるってどういう・・・？」

「そのまんまの意味だ。次の授業担当は厳しいから早くいかないとやばいぞ」

「さういいつつ三人は走る。が、その行く手をふさぐように女子が教室から出てくる。デュノアに気づきなにやらわーきゃーと騒ぐがどうか三人は切り抜ける。」

何とか包囲網を抜け更衣室についたときには二人とも息が軽く上がっていた。もつとも、道をふさがれそうになると万の「どかなかつたら吹っ飛ばす」という事実込の脅しが効いたこともあるのだが。

「・・・結構大変だね・・・」

「だろ？だからさつさと移動しないと面倒なんだよ」

息を整えながらしゃべるデュノアに万は着替えを出しながら答える。こちらは息が全く上がっていない。

「というか、お前はなんで息が上がってないんだよ・・・」

「俺にとつては軽いランニング代わりだからな、この程度じゃ問題ねえよ」

「マジかよ……。ま、それはともかく。俺は織斑一夏。一夏でいいぜ」

「黒川万だ。よろしく頼む」

「シャルル・デュノアです。よろしく、一夏、万。僕のことシャルルでいいよ」

お互いに自己紹介が済んだところで方は近くの時計に指を向けつついう、

「まあ、そんなとこにしとけ。時間やばいぞ」

「うわ、ほんとだやべえ。うちの担任、時間に厳しいから遅れると怖いぞ」

そういつつ二人は制服のボタンに手をかける。それを見てデュノアは顔をそむけた。それを疑問に思った方は声をかける。

「ん？どうしたデュノア」

「え？ああ、なんでもない。それより、僕が着替える間、あっち向いててくれない？」

「まあ、人の着換えをじろじろ見る趣味はないし……」

「そーだな。俺たちホモじゃねえし」

そういつて二人ともいわれた通りにする。

「なんでもいいけど、早く着替えろよ？」

「え？何か言った？それと、もういいよ」

その言葉に驚きつつふたりが振り返るとそこにはISスーツを着たデュノアがいた。

それに対し一夏が声を発する。

「・・・着替えるのめっちゃはええな。コツとかあるのか？」

「え？しいて言えば慣れかな・・・？」

「そういうものなのか・・・」

「そういうもんだ。それと、お前は口と手を同時に動かせるようにしたほうがいいぞ」

その言葉に驚き横を見ると、そこには同じくISスーツを着て片手を腰に手を当てた万がいた。それを見てやべ、と一言漏らし一夏は急いで着替え始める。それを横目に、万はデュノアのISスーツを見て、一言漏らした。

「そのスーツ、着やすそうだな」

「まあ、デュノア社製のオリジナルだからね」

「・・・ああ、なるほどそういうことか」

「えっと、どういうこと？」

会話の過程でどういうことなのか察した方に着替え終えた一夏が問いかける。

「デュノア社はフランス内ではそこそこ大きなIS企業だ。で、おそらくこいつはデュノア社の社長子息なんだろ。・・・違うか？」

「ううん、違うない」

それに一夏も納得のいった表情をする。

「ああ、なるほど。・・・道理でな」

「え、何が？」

「なんていうか、気品みたいなものが感じられたから、いいとこの育ちって感じがしてな。納得した」

そう言われた瞬間にどこかデュノアの表情が曇ったのを方は見逃さなかった。

そして、グラウンド。

「本日から実習を開始する。まず、戦闘を実演してもらおう。凰とオルコットは前に出る。専用機持ちならすぐに始められるだろう」

その言葉に気の進まない様子で二人は前にでる。そんな二人に千冬は耳打ちした。

「まあそういうな。あいつらにいいところを見せれるチャンスだぞ？」

その言葉に二人とも急にやる気を出した。

それを見てデュノアは一夏と方に小さく話しかける。

「先生、二人になんて言っただろう・・・？」

「・・・俺が知るかよ・・・」

「背中向けてたからわからんな」

「ん？それってどういうこと？」

「読唇術できるんだよ、俺」

「なるほど」

そんな会話をしていると、

「どいてくださーい！」

空から何か降ってきた。周りの生徒は即座に避難するが、一夏と万は回避しなかった。回避できない様子の一夏とは対照的に、万は片手を前に出した。その瞬間、まるで急ブレーキがかかったかのようにその何か——I Sが止まった。そのまま息をゆっくり吐き、手を下ろす。すると、ゆっくりとI Sが地に足をつけた。その様子を見て、ため息交じりに万はつぶやく。

「全く、教員がなんで飛行の態勢をあそこまで派手に崩すんですか・・・」

「ははは・・・言い返せません」

そう、そのI Sに乗っていたのは副担任の山田先生だった。

「お前たちには山田先生と相手してもらおう。山田先生は元代表候補だ、全力でかかれ」

その言葉に二人は乗り気ではないが、そんな様子を見て薄く笑いながら千冬は言い放った。

「安心しろ、今のお前たちならすぐ負ける。・・・それでは、はじめ！」

その言葉とともに三人は飛翔する。

「デュノア、山田先生が乗っている機体の解説をしろ」

その言葉に答え、デュノアが解説をしている間に二人がもつれ合う形で墜落していた。それを確認して千冬が言う。

「これが教員の実力だ。以降、教員には敬意をもって接するように。次にグループになつて実習を行う。では分かれろ」

そういつてそれぞれ分かれる。が、人数は一夏とデュノア、そして方に集中した。やはり男子ということで注目されるのだろう。

それぞれ、I Sの実習を行つていく。しばしばI Sをしゃがまず降りてそれをコックピットまで運ぶということがあったが、大きなハプニングもなく、I Sの実習は終わった。

そして、昼。万は食堂の前で壁に背中を預けて待つていた。

(さて、あいつのことだし、そろそろ来るかな・・・)

そう思つていた矢先、目的の人物が現れた。

「待たせてすみません、黒川殿」

「待つてねえから安心しろ。こつちが呼んだんだしな」

そういつて微笑むと、万はラウラとともに食堂へ入つて行つた。

「しかし、なぜ貴公がこのようなところに？」

自分の食事を食べながらラウラが切り出した。それに万も昼食を取りながら答える。「見ての通り、生徒だよ。表向きは一応ただの生徒。ま、かつて何をしていたのかを知っているのはあんたくらいだとおもうぜ？ 察してるやつはいるかもしれないが」

「そういうことを言いたいではなく！」

「なんでこんなところで腐っているのか、とでも言いたいのか？」

冷静に返されたその言葉にラウラは黙り込む。その様子を見て「凶星か」といった。「俺としては腐ってるつもりなどない。俺はな、ラウラ。学園都市で得た力を使わなくなつてよかつたと、割と本気で思つてるんだよ。俺の力は殺しの力だ。使わないに越したことはないんだよ」

「しかし、ある力を使うべきだ。使わないなら教えるべきです」

「誰に教えるつていうんだ？ 人を殺すための技術を、また誰かに教えると？」

さらに言いつのろうとしたラウラは、相手の腕がかすかに震えていることに気づき、発する言葉を変えた。

「……すみません、出過ぎた真似をしました。貴公の判断は貴公だけのものであるというのに……」

「気にすんな。お前はあの時からそうだからな。根つからの軍人だし、それしか知らない。むしろ変わってなくて安心した」

そういうと空になった容器の前で合掌する。

「あ、それと。その昔の言葉遣いはいい加減やめろ。ここでは俺もお前もただの生徒だ、最低限周りに人がいるときはわざわざ敬語を使ってくれな。周りからも不審がられるし、なにより俺がむず痒い」

「・・・わかり、じゃなくて、わかった。えつと・・・」

「万でいい」

「では・・・万、さん」

少し言いづらそうに言うラウラによし、と言つて微笑むと方は切り出す。

「そういえば、お前らの件の部隊はどうなったんだ？」

その言葉にラウラは軍人の顔になって言った。

「結論から言えば、件の部隊は実現しませんでした。絶対数が少ない以上、全員が専用機を持つというわけにはいかず、結果的に特殊部隊の中の数人に専用機を配備することで落ち着いています。今私が所属する部隊では、私を含め三人が専用機を所有しています」

「へえ、てことは部隊の中では結構階級は上なのか？」

「今の階級は少佐で、部隊の隊長を務めています」

その言葉にはさすがの万も驚いた。

「わーお、そいつはすげえ、大出世じゃん。お前の年で少佐なんて」

「恐縮です」

「そうか、あの時の小娘が・・・そうかそうか・・・」

そういつてまた微笑んだ。それは、まるでわが子の成長を喜ぶ親のようだった。

「ま、それはそれで苦労もあるだろうが・・・まだ人生は長い。せいぜい悩めよ。俺も悩みなんざ尽きねえんだからよ」

万はかつての教え子にそういうと空になった食器を返しに行った。

8. 転校生と万

その日の放課後、万は職員室に来ていた。話があると聞かされていたからだ。これについては二人転校生が来た時点で予想していた。そのため、職員室に入って千冬に最初に言った。

「俺がデュノアと同室で構いません」

それに対し、千冬が驚いた顔をする。

「・・・よく読むな」

「少なくとも、その話もあるのは事実でしょう?」

「ああ。参考までに聞いておこうか、ボーデヴィツヒのほうはどうすればいいと思う?」
「あいつは一人部屋のほうがいいでしょう。たぶん、あいつはこの学園の生徒に対してよく思っていない。下手に誰かと同室にさせて喧嘩でも起こったらことですし、あいつの喧嘩はそれこそ殺し合いに近いものだろう。なら、いつそ一人部屋にしてしまったほうがいい」

その分析に千冬は言う。

「・・・まるであいつを知っているような口ぶりだな」

「こんな能力の副作用、ってところと思ってももらえれば。その気になれば記憶を読み取ることもくらいはできるんです」

「・・・そうか。忌憚のない意見を尊重しよう」

「で、話は以上ですか？」

「ああ、わざわざ呼びつけてすまなかった」

失礼します、といって職員室を出ると、その足で剣道場へ向かった。あの朝に約束した打ち合いのためだ。

剣道場に入ると、箒は目をつむって正座をしていた。大方、瞑想でもしているのだろうか。大和撫子と言ってもいい彼女がこのようなことをしているととても様になる。

そう思いつつ歩み寄ると、目を開けた箒が驚いた顔をした。

「き、来ていたのか。いつから来ていた？」

「ん？さっきだが。それより、今誰もいないんだから、気づいてもいいんじゃないの？」
「いや、たいていのやつなら入ってきたときに気づくのだが・・・。ここまで気づかなかつたのはお前が初めてだ」

どうやらかなり驚いているらしい。それになぜだろうかと理由を考えた方はひとつの可能性に行き当たった。

「・・・もしかしたら身ごなしの音を消すように歩いていて、その時に同時に気配も消し

ていたのかもしれん。それで気づかなかったとか」

「そういうわれて箒も納得する。」

「・・・ああ、なるほど。それなら確かに気づくのは難しくなるな」

「というか、もともとはそのためだけに身に着けたものだしな」

「その万の言葉を受け流しつつ箒は木刀を放った。」

「さて、ここに来た目的をはたすとしよう」

「そうだな」

「そういつて放られた木刀の重さを確かめるように持つ。万がある程度重さを確かめられたところで箒は言った。」

「ところで、勝負はどうする?」

「そうだな・・・。どちらかが降参するまで、でどうだ?」

「いいだろう。では、さっそく」

「そういつて箒は正眼に構える。それに対し、万はというと。」

「・・・なんだ、その構えは」

「左手を前にだし、木刀を持つ右手は体の後ろのほうに、そして体は斜に構える。型破りもほどほどにしろと言いたくなる構えだった。」

「いいんだよ、気にするな。俺はこっちのほうが構えやすいってだけだ」

「・・・そうか」

そう一言つぶやくとスイッチを切り替えた。構えだけ見れば面ががら空きだ。だが、(様になっていて・・・。隙が無い)

彼の構えは型破りのようで様になっているのだ。それゆえに隙が無い。

はたしてどう攻めようかと考えあぐねているときに万が木刀を振り上げた。そのま
ま箒の木刀に当てると左手を添えて巻き上げにかかる。途中で狙いを読んだ箒は半ば
強引に両手を顔の上に持つていき罅迫り合いの形にした。少しの拮抗のち、どちらか
らともなく距離を取ると持久戦を予想した箒は八相に構える。対する万は正対し左手
を前に、刀を持つ右手はほぼ体側に構えた。

今度は箒から攻める。どちらかが降参するまでという以上、面を取ってしまうのが最
も手っ取り早い。それに対し万はそれを左手首で受け流し、すれ違いざまに箒の手元を
したたかに叩いた。

手に直接あたってこそいない上に片手で振られたとはいえど、木刀の重量をうまく生
かして手元をたたかれた強い衝撃にたまらず木刀を取り落す。地面に落ちた木刀を拾
おうとしたとき、その首に横から別の木刀が当てられた。

「・・・参った、降参だ」

両手を上げようと、万は木刀をひっこめた。それを見て木刀を拾った箒は問いかけ

る。

「全く、型破りもほどほどにしろ。日本刀を片手で扱ってあまつさえ左手で相手の太刀を受け止めるなど聞いたことがないぞ」

「まあ、ね。俺、剣道は自己流で二刀を使つてたのが発端で、メインで使うのが二刀だからな。最初の構えも、あれで左手のほうに小太刀をもつて、つて感じだったからだよ。どうしても今でも癖でそうしちゃうんだよな」

小太刀ではなく正確には脇差だ、と訂正しながら箒はそれぞれの構えを思い浮かべる。確かにあの状態で二刀ならさぞかし攻めにくいだろう。なにせ、左手で常に防御の体勢を取られているのだから。だが、それはつまり普段は使わない構えで戦つていたということ、それは常に勝負事では対等な条件下でありたいと願う箒の気持ちとしては複雑なものだった。それゆえに、少し待つていろ、と万に言つと、部室の中から二刀流の竹刀と自分の竹刀を持つてきた。

「今度はこれで勝負だ。勝負の付け方はきつきと同じでいい」

その言葉に万は目を丸くした。わざわざ自分の得意とする得物を用意してくれたというだけでなく、

「二刀流の装備があるとはな・・・」

「在学中、無国籍扱いになる以上、ここの生徒は大会には出ないそうだからな。趣味の一

環として手を出すやつもいるそうだ。といつても、扱いが難しいから長続きした試しはないそうだが」

「まあ、そういうもんだわな、疲れるし。俺が二刀を続けるか迷ったのもそれが原因だし。負けないけど勝てないだよな」

そういうと万は左手に脇差を持ち、構えた。それにつられ箒も上段に構える。

まず動いたのは万だった。左手の小太刀をそのままに右手を振り上げる。その向かう先は首。それを後ろに下がることで箒は回避し、がら空きになった面に振り下ろすが、それを左手の小太刀で受け流す。そのまま回転を利用して箒の右手に斬りぬけると、箒はそれを追う形で脇構えから手首に向けて薙ぐ。万はそれを小太刀で受け止めると、面を振り下ろす。それに対し相手の小太刀を中心に回転する形で回避し、そこから左から頭の上を通過させる形で大きく円を描いて首を狙う。それを右手で受け止めるとその当たった瞬間に後ろに飛びのき距離を取った。

そして今度は左手を前に、右手を上を構えた。二刀流の中段の構えだ。そのまま両者にらみ合いが続いた。

その沈黙を破ったのは箒だった。上段の構えからそのまま面に振り下ろす。それに対し、万は二本の刀を交差して受け止めた。それに対し箒は驚きつつ、そのまま鏢迫り合いに入ろうとしたが、すぐに万が二本の力で跳ね飛ばし、左手の小太刀で箒の竹刀を

払う。それに対し一気に踏み込むと右手の太刀を首に押し当てた。

「・・・敵わないな、お前には」

その言葉に万は得物を戻しつついう。

「あんたほどでもないよ。いやはや連続でこんな手を使う羽目になったのは久々だ」

その顔に先ほどまでの真剣さはなく、勝負を楽しんでいた少年の顔が残っていた。

「こんな手？」

「普通はうまく受け流して面か籠手で終わりなんだよ。だけど、それだと決定的な隙つてやつが必要になってくる。だけどあんたにはそれがなかった。だから、無理やり降参させるしか手がなかったわけだ」

「確かに、お前の剣は独特だから・・・。攻めあぐねるのも理解できる」

「それでも徐々に順応してただろ、あんた。たぶん、20回もやれば俺はあんたには勝てなくなるだろうさ」

「だいたい攻撃パターンを探っていただけだ」

「その攻撃パターンが限られてるってのが俺の弱いところなんだと思ってるんだがな・・・」

「限られていてもトリッキーすぎるのが問題なんだ。いくら攻め手が少なくてもそれがすべて相手の意表を突くものなら初見で見切られることはない」

「……まあそうだけども」

「……とりあえず、お前の剣についてだが。まず、左手を防御に回しすぎだ。そして防御した後の右手の攻撃がやや大振りになる。最初こそ意表を突かれたから武器を落とされこそしたが二回目は右が来るかもしれないと思っていたから即座に回避することができた。確かにそのコンビネーションは驚異だが、たまには脇差で攻撃をすればよりよくなると思うぞ」

「……やっぱりそうか……。俺もそれは課題だと思つてたんだよな。ほかには？」

「すまんがわからん。二刀流などほとんどない上に、お前の剣は邪流すぎる。一本を取るのではなく敵を降参させるための剣など、少なくとも私は聞いたことがない。正直言つて何か教えてくれと言われても無理な話だ」

「……そっか、ありがとな。じゃあ、もう少しお手合わせをお願いできるか？ 実戦で課題克服を目指したいし」

「私でよければいくらでも相手になるぞ」

「はは、それはありがたい。じゃ、さっそく始めるか」

そして、二人はまた構えた。

その後の打ち合いでは、最初こそ万がある程度勝利をおさめていたが、だんだん万のほうが強くなり、最終的には万は箒に勝てなくなっていた。

「よう、万。珍しいな、そつちからなんて」

打ち合いの後、寮に向かつて歩いていけると声をかけられた。

「まあ、な。ちよつと篠ノ之にお手合わせ兼指導を願つてね」

「箒にか？珍しいな」

「ま、俺も一応剣は扱えるし、ISの装備にも剣があるけどよ。けど、その辺の指導はその道を極めている人間にしてもらつたほうがいいじゃん？」

「まあ、確かにな」

そんな会話をしていると、声が聞こえた。

「答えてください、教官！なぜこんなところで」

それは今日転校してきたラウラの声だった。それに二人は近くの木の陰に身を隠し聞き耳を立てる。

「何度も言わせるな。私には役目がある。ただそれだけだ」

「こんな極東の地で何の役目があるというのですか。お願いです、わがドイツで再びご指導を……この学園の生徒など、ISをファクションか何かと勘違いしている。そんな者たちのために教官が時間を割かれるなど……」

「そこまでにしておけ、小娘」

一気にまくし立てるラウラの言葉を千冬が冷静な声で遮った。

「少し見ない間に偉くなったな？たかだか15歳で選ばれた人間取りとは恐れ入る」

その返しにラウラは言葉を失う。

「寮に戻れ。私は忙しい」

それに対し悔しさをにじませるとそのままラウラは無言で去って行った。それを確認すると千冬は後ろに呼びかける

「その男子、盗み聞きか？」

それに対し一夏は身をぎくりとすくませた。思わず後ろを振り返るが、そこには目当ての人物はいなかった。仕方なく木の陰から出た一夏に千冬はさらに続ける。

「こんなことをしている暇があったら自主練でもしている。このままでは、月末のトーナメントでは初戦敗退だぞ」

「・・・わかってる」

「ならいい」

そういつて立ち去ろうとする千冬を一夏は呼び止めた。

「なあ、さつきラウラってやつが言ってたこと、やっぱりあの時の・・・」

「お前が気に病む必要はない。もう終わったことなんだ」

そういつてそのまま立ち去っていく。その後姿はいつもと変わらぬ凛としたものだった。

一方、ラウラが立ち去った直後に気配と身ごなしの音を消してその場を離れた方は途中でラウラの後姿をとらえた。

「おい、ラウラ」

その小さい影に呼びかける。そのまま振り向いた表情はいつもと変わらぬ無表情だった。

「お前、いったいどういうつもりだ？ 学園に喧嘩ふっかけてなんになる？」

「・・・そのようなつもりはない。私は事実をありのまま述べただけだ」

「確かにI Sの認識がこの学園において甘いのはどうかと思うぞ。だがな、それは軍属の人間が少ないからだ。銃を持ったこともない人間が、その危険性に気づくことがどうしてできる？」

そういつつ前に出ていく。一歩、また一歩と距離が近づく。

「銃とI Sは違う」

「いいや、そうたいした違いはないな。どちらも人を殺せるだけの力を有するものだ。ただその力の大きさが違うだけだな」

「なら、あなたは何が言いたいのだ」

「お前は兵器の危険性を認識しているつもりだろう。俺もなまじ強すぎる力を持ってい

るからな、その辺の認識はすっかりしているつもりだ。けどな、それはお前が根っからの軍人でもあるからなんだよ。そうじゃない、たった数か月前まで一般人だった人間に、それを求めるのは、いささか酷じゃないのか？」

もう普通にしゃべれる距離に立って万は言い切る。それに対して相変わらずラウラは無表情を崩さない。

「・・・確かにそうかもしれない。だが、これが私の認識だ」

「そうかい。で、話を変える。織斑一夏をどうする気だ」

その問いかけに眉ひとつ動かさずにラウラは答えた。

「あのような教官の足枷にしかならないようなものは、私が排除する」

「それによつて尊敬する教官が失望することになつても、か？」

それに対する万も無表情で返していく。

「・・・そうだ」

少し間があつたとはいえど、それは揺るぎのないものだった。

「なら、ここの生徒の友人として言っておく」

そしてさらに一步詰め寄る。

「俺の友人に必要以上に手を出そうものなら、俺もお前に対する容赦は消えるぞ」

その言葉にラウラは鼻で笑った。

「甘くなったものだな、あなたとあろうものが。そういう言い方をせず消すといえはいものを」

「あいにくとそれはできそうにないんでね。甘くなってるのは重々承知だ」

「・・・そうか。なら、殺しあうことがあるかもしれないな」

「というか、そういう予感めいたものを俺は感じてるよ」

飄飄とした口調の万に口の端だけで嗤うと、ラウラは自分の部屋に戻って行った。

その日の夜、万が部屋の整理を終えたところにノックの音が転がった。

返事をしてドアを開けるとそこにはデュノアの姿があった。万のほうは事前に聞かされていたので驚きはないが、デュノアはかなり驚いた様子だ。

「へえ、同室って万だったんだ」

「そうみたいだな。ま、とりあえず入れよ」

そういつて扉を大きく開ける。

部屋に入ったデュノアがまず洩らしたのは部屋の雰囲気についてだった。

「・・・あれ、こんなに何も無いものなの？」

「あー、それは俺が特別なだけ。ちよつとしたカラクリがあつてね、それがなけりや速攻で散らかり放題だろうさ」

「なにそれ。まあ、僕の荷物もこれだけなんだけどね」

そういつて手に持っている旅行鞆を示す。

「とりあえず数日分つてただけだろ？ 後から大変だぞ」

「まあ、それはそうなんだろうけど・・・」

「それより、荷物の整理でもしたらどうだ？」

「うん、そうさせてもらうね。いろいろ私物とかも入ってるから、できればあんまり見てもほしくないんだけど、いいかな？」

「構わねえよ。他人の私物をじろじろ見るような趣味はねえ」

そういつて万はノートパソコンを開き、インターネットに接続する。それを確認するとデュノアは自分の荷物を開けだした。

そして、もろもろが終わり、デュノアが寝た後、その寝顔を見つつ考える。

（驚異的なスピードと言われた嵐でも代表候補生になるまでには1年かかった。フランスから男子の操縦者が出て、いくらそいつが企業の社長子息とはいえどそうおいそれと専用機を持たせるのは無理がある。しかも、いままで報道には何も情報はない。何か裏があるはず・・・）

そう、先ほどインターネットに接続し世界のニュースを見ていたのだが、その中にフ

ランスから “三人目” が出たとは聞いていないのだ。しかもそれは決して報道管制ではないことも先ほど確認を済ませてある。

(デュノア、てめえ何者だ……?)

そう思いつつ、時間を見る。その針はもうすでに午前2時過ぎを指していた。それを確認すると、万もベッドの中に潜って行った。

9. 死闘

その次の日の昼。万は屋上に来ていた。一夏に昼食に誘われていたからだ。実は昨日も誘われていたのだが、ラウラとの約束が入っていたので断っていた。

その場にいるのは、一夏、万、箒、鈴、そしてデュノアだった。箒と凰はどこか不機嫌だが、それは大方一夏関連だろう。

各々自分で作ってきた弁当を一品ずつ交換する流れになった。一応、万も一人暮らしをしていた身として自炊くらいはできるので弁当を持ってきていた。こつそり持ち込んだり学園都市に地図に載ってないルートを使って仕入れたりした銃の手入れくらいしかやることなく、興味本位で料理のレパートリーを増やしたのだが、それらはなかなか好評だった。ただ、ときどき能力を使いながらやる調理にデュノアは驚いていたが。

「ゴーレムの時の話を話しながら、一夏が万の弁当を見ていった。」

「というか万、お前ちよくちよくやたらと時間のかかりそうな料理がないか？」

「あー、確かにな。牛の赤ワイン煮込みとかは普通にやったら手間がかかるからな」

「普通にやったら、ってどういうことよ？」

「俺が能力者ってこと忘れたか？」

その言葉で全員が納得しつつ複雑な表情になった。

「・・・それはもはや料理というより作業なのでは・・・？」

「圧力鍋を使っても一時間近くかかるはずの料理が半分どころか4分の1以下の時間でできたからね・・・僕も隣でみながら何が起こったのかと思ったよ・・・」

そんな言葉をもらずデュノアとセシリア。それに、箸は尋ねる。

「ところで、お前の能力はどういうものなのだ？水も操れるのだろうか？」

「・・・そろそろ明かしてもいいか。俺の能力は万能念動^{マルチサイ}。気体、液体、固体問わず物質を操れる能力だ。電気も、空気中の電子を操ることで操れる。その副作用で磁場もある程度は操れる。まあ、早い話が“この世の物質ならたいい操れる能力”って考えれば間違いない。実を言うと、前言った自分の体に能力を発動させて浮かせたのは嘘だ。できなくはないが、演算がすごく面倒だから大気とか操って浮かせたほうがよっぽど楽」

その説明に複雑な表情が驚きに染まる。

「・・・チートですわね」

「ああ、チートだ。おかげさまでいろいろ苦勞もさせられたがな」

そこで無機質な電子音が響く。

「・・・悪い、俺だ」

軽く片手を上げつついうと、万は少し席をはずして電話に出る。その間に残された4人は話す。

「そういえば、もう一人の転校生、ラウラって言ったっけ？そいつと黒川がしゃべってたってことを小耳にはさんだんだけど、その辺どうなの？一夏、心当たりない？」

「んー・・・あ、もしかしてそれって昨日のことか？」

「ええ、そうよ」

「なら、心当たりがある」

「どういうことですか？」

「たまたまラウラと千冬姉が言い合ってるのが聞こえて、それを二人で聞いてたんだよ。で、言い合いが終わった後で千冬姉に感づかれて呼びかけられたんだけど、その時に万のやついなかったんだよな」

「ああ、あいつ、身ごなしの音を消してその時に同時に気配も消すことができるらしいからな。たぶんそれを使ったんだろう」

「まるで軍人ですわね・・・。もしかして、その過程で？」

「ありえる話ではあるかもしれないけど・・・。EU圏にそういう話は聞こえてこなかったよ。秘密裏に入国していれば話は別だけど」

そんなところで万が帰ってきた。

「悪いな、食事中に。マナーにし忘れてた」

「気にすんなよ。それより、どんな内容だったんだ?」

「ああ、新しいパッケージが転送可能になった、って話。また今度の機会に転送するつてよ」

「なるほど。そういえば、万のISの待機状態はなんなの?」

「これだが?」

「え、眼鏡?」

デュノアの質問に答えた方に意外な返答に風が一言漏らす。

「ああ。伊達だからなくても別段問題はないしな。それに、待機状態ゆえにこれに直接ディスプレイを投影して情報を処理することもできるしな。便利なもんだよ、まったく」

「・・・実用性重視なのですわね」

「まあな。俺、基本的に物を見た目より性能だからな。よっぽど派手じゃなければ性能がいいのを選ぶ口だから」

そういうところで予鈴が鳴った。もうすでに全員が昼食を取り終えていたので、急いで教室に戻った。

その日の放課後、方はダウンロードが終わるのを待っていた。それが終わると同時、セイリユウに飛び乗りボイスコマンドで指示を出す。

「システム起動。カタパルトを起動、射出を1.5秒後に設定。システムチェック、オールグリーン。稼働状態は良好。背部固定確認、完了。射出準備、完了。カウントダウン。5、——」

そしてカウントが尽き、射出をした方が目にしたのは、今にも一戦交えそうな嵐、オルコット、そしてラウラだった。それを見て、新たに転送されたステルスモードを使っていたうえでこれまた新装備である大型のレールガンの射出準備をする。瞬間、一つの表示が出る。

——最終安全装置解除——

その直後、ひっそりとないでいたオープンチャンネルにラウラの声が聞こえた。

「二人がかりで来たらどうだ？ 平和ボケした馬鹿どもの中にどつぷりと浸かって生きてきたようなやつに、この私が負けるものか」

その言葉に二人は顔を朱に染めた。それを見て、射出準備を終えたレールガンを三人のなす三角形の中心に射出した。いつだったか、嵐とセシリアがもつれて落ちた時とは比べ物にならない轟音が空気を震わせた。レールガンを格納すると、抑えた声でラウ

ラにいう。

「俺が昨日言ったこと、忘れたわけではないよな?」

「ええ、覚えています。だが、あなたに何の関係がある?」

「あるね、おおありだ。あの時、俺は確かに言ったはずだ。『俺の友人に必要な以上に手を出そうものなら俺もお前に対する容赦は消えるぞ』と。お前はここにいない俺たちの友人を侮辱し、こいつらから手を出させようとした。そうすれば、多少オーバーキルになっても過剰防衛で終わるからな。お前のことだ、こいつらを瀕死くらいにして一夏をおびき出し、消す腹だったろう。あいつは友人を傷つけられて黙っているやつじゃないからな。・・・違うか?」

「さすがですね、さすがは貴公だ」

「それだけでも俺にとつては戦う理由になる。言っておくが、こつちはもう準備できてるぜ?」

「そうですね・・・。なら、とつととかかかってきてくださいよ」。

「なら遠慮なく」

手を上に向ける形で挑発するラウラにあくまで冷静に万は武装を変えた。具体的に言えば背中側にセシリアのブルー・ティアーズのようについていた筒状のスラストアをすべて前に向けた。いきなりバックステップでもするつもりなのかと嵐とセシリアが

思った矢先、万が一と言いい放った。

「掃射！」

その瞬間、すべてのスラストターが火を噴く。そこから出たのは総数20発以上はある実体弾。それを見るとラウラは上空へ飛翔しそのすべてをかわしにかかる。が、その動きを追従するように一部の弾丸が曲がる。その光景に安全圏に退避したうえで見ていた凰とセシリアは驚く。

「ホーミング機能!？」

「ものすごい数、あれじゃ制御も一苦勞なはずなのに！」

「いえ、彼は自分とわたくしの放った、数にして数十発のレーザーをすべて球体に反射させ、そのすべてを自分の武器としたお人。このくらいなら」

そんなことを言っていると爆音が上から鳴り響いた。その音に反応して上を向くと、黒煙が上がっていた。

「やったの!？」

思わず声を上げる凰。だが、セシリアは難しい表情のままだった。それを感じているのか、万もまだ掃射を行った構えのままだった。

そして二人の予感を裏付けるように黒煙の中からも当然であるようにラウラが現れる。

「なっ、なんで!？」

「おそらく、A I Cを使ったのでしよう。爆発する直前、弾丸が停止しているように見え
ましたもの。A I Cで一瞬停止させ、それを撃ち抜いたとすれば」

「ああなる、つてわけね……」

そんな会話をしているとはつゆ知らず、ラウラは地上の万に向けていう。

「これで終わりですか？」

その言葉に万は不敵に笑う。

「んにゃ、なわけねえじゃん」

その直後、大量の、それこそ最初の数倍はあろうかという数の弾丸が全方位から降り
注いだ。それに驚いた顔を見ると、一点のみを迎撃し切り抜けようとする。が、

「そう来ると思ってたよ!」

万はそれすらも読んでいた。その証拠に、一点から切り抜けようとしたラウラの首を
ワイヤーがからめとった。そのまま引つ張られるようにして地面に落ちる。それを追
うように追いかけてきた一部の弾丸がさらに降り注いだ。

弾幕に気を付けながらラウラに歩み寄ると、万はその手をラウラに当てた。

「……油断大敵。A I Cに頼りすぎたな?」

そして、手首につけられた大きな装置から杭が時間差で連続射出される。万お手製の

連射式パイルバンカーだ。首を絞められたうえにさらに何度もパイルバンカーを撃ち込まれ、ラウラは戦意を消失していた。が、それでも方は撃つのをやめない。

このままでは命にかかわりはしないものの、全身打撲、ひどければ内臓損傷という大けがを負うことになる。

誰もがそう思った瞬間、白が藍色を突き飛ばした。受け身を取って立ち上がった藍色に、白は抑えた声で問いかけた。

「・・・何のつもりだ、万」

一夏が様子を知ったのはその数分前だった。

第三アリーナで専用機持ちが模擬線をやっている、と聞き、見学もかねて観戦しようと思いアリーナにむかった。観客席につくとそこで模擬線をしていたのは万と、あらたな転校生のラウラだった。

方はワイヤーでラウラを地面にたたきつけた。そこにさらに上から弾丸が降り注ぐ。その後、さらに彼女の体に手を当てて何かをしている。一定間隔でラウラの体が跳ね上がっているところを見ると、おそらく攻撃をしているのだろう。そんなときにワイヤーがまだ伸びていることに気づいた。その先をたどると、それはラウラの首に巻き付いて

いた。

そのあとは無我夢中だ。バリアシールドから少し離れた位置で白式を展開、雪片式型でバリアを切り裂くと、飛び出した勢いのままにセイリユウを突き飛ばした。そして立ち上がったことを確認すると一言問いかける。

「・・・何のつもりだ、万」

その声には抑えきれない感情がこもっていた。

「何のつもりって？ただ模擬戦やってただけだが？」

答えつつ目の前の白式について万は考える。

（このシールドバリアは簡単に破れる代物ではない。てことは・・・バリア無効化攻撃か。なるほど、道理である時エネルギー消費が早かったわけだ）

あっさりとした答えに一夏は目を細める。

「ただ模擬戦やってただけ？首を絞めたうえで至近距離から攻撃を叩き込むのが、ただの模擬戦だっていうのかよ!？」

「ああ、そうだ。模擬戦である以上、シールドエネルギーが切れるまでやる。それがルールだ」

「だからって言って、相手を殺していいはずがないだろ！」

「ISには絶対防御や生命維持機能がある。よっぽどのがない限り、相手が死ぬことはない」

「そういう問題じゃない！」

「ならどういいう問題だ？まさか、この期に及んでISは人殺しの道具じゃない、とでもいうつもりか？」

頭に血が上った状態の一夏に万が冷静に言ったその言葉に一夏は黙り込む。その様子を見て万は哄笑する。

「いやはや、面白いことを言うな、一夏。ISは兵器だ。殺し合いの道具なんだよ。いくら絶対防御があるっていつても、そんなの気休めにもならない。ISのシールドエネルギーが切れてしまえば、どんなに優秀なISパイロットだろうとただの人だ。銃弾一発で死ぬ、ただの人なんだよ。そんなやつをISで殺すのなんざ、それこそアリを踏みつぶすレベルで簡単なことだぜ？」

「・・・お前、本気で言っているのか？」

嘲りつついう万に一夏は静かな怒りをにじませつついう。だが、それを万は気にも留めなかった。

「ああ、本気だよ。てか、お前はなんでそんなことも思っていないんだ？お前も、兵器を

使ってるんだぞ？その状態で戦場に立てば、何十、何万の敵を殺せる。そんな状態なんだぞ？それ、自覚してなかったのか？」

「・・・戦場に立つとか、そんなことはない！そもそも、——」
「アラスカ条約で」

ひたすらヒートアップする一夏の言葉を方が遮った。

「ISの軍事転用は禁止された。ああ、表向きはそうだよ、表向きはな。だけどな、対IS兵器の開発は禁じられてないし、そもそも、先進諸国がISの軍事転用禁止、なんて馬鹿正直に守ると思うか？」

そこでいったん区切っていつの間にか失神して生身で横たわるラウラに人差し指を向ける。

「それに、それが守られてるのなら、こいつをどう説明する？専用機持ちでドイツ軍の軍人であるこいつを？」

その返答はせず、一夏は方に問う。

「・・・なら、人を殺していいっていうのかよ？」

「そうは言わない。だが、事故で人死に出るくらいは自覚しておけ、と言っている」

その言葉に一夏はなにやら叫びながら突撃してきた。それに方は回避行動をとらない。これはお互いの考えの相違だ、一発食らい殴られていたほうがいい。そう考えたか

らだ。

だが、一夏の剣が万に届く前に違う剣がそれを受け止めた。

「……まったく、何事かと来てみれば……」

どういふことだと目線を下げるとそこには打鉄の刀を持った千冬がいた。

「……千冬姉……」

「織斑先生だ、馬鹿者」

一夏も受け止めた相手を認識すると剣を下ろした。

「模擬戦をするのはいい。だが、アリーナのシールドバリアを破られると、教師として黙認しかねる。……二人とも、これの決着は月末のトーナメントでつけろ」

「了解」

「……わかった」

異論は許さん、といった口調で千冬は言う。それにふたりとも答えるが、二人そろって「教師の言葉には『はい』と答えろ」としかられ返答し直した。その返答を聞くと、千冬は周りにいる全員に向けて宣言する。

「これからトーナメントまで、一切の私闘を禁ずる。破った生徒は私が直々に処罰をしてやる」

それを聞くと、ISを展開していたメンバーは展開を解除する。そこに、セシリアが

方に歩み寄って耳打ちをした。

「ボーデヴィツヒさんならわたくしたちにお任せを。あなたや一夏さんでは、またいらぬもめ事を起こしかねませんもの」

「・・・ありがとう。悪い、頼んだ」

「頼まりましたわ」

そのままの体勢で、小声で答えた方に笑みを含んだ語調でセシリアは答えると、凰とともにボーデヴィツヒのもとに向かった。どうやら二人で保健室まで運ぶようだ。

その様子を見て、一夏はアリーナを去ろうとする方に言った。

「お前の考えることは正しいかもしれないけど、それでも俺は人を殺すのをよしとはしない」

その言葉に、方は歩調を変えずに歩いて行った。その時にぼそりつつぶやく。

「それでいい。人を殺し慣れるんじゃない」

そのままアリーナを去るまで、その後は一度も振り返らずに方はその場を去って行った。

10. 転校生の正体

そして、その日の夜。寝静まったころ、一人デユノアは起きだした。

時刻は午前2時。消灯時間も過ぎ、普通なら寝ていてもおかしくない時間だ。そんな時間にデユノアは起きだした。その手の伸びる先は寝ている万の枕元。そこにある眼鏡に手を伸ばした。

「僕も本来はこんなことしたくないんだけど……。ごめんね」

そしてとん、と眼鏡をたたく。だが、本人が予想していた事象は起きなかった。

「あれ……?なんで……?」

さらに何回もたたく。が、それでもおこしたくない事象は一向に起きなかった。

そんなことをしている腹に、下から掌底が叩き込まれた。不意打ちに息が詰まる。生まれた隙をつかれ、後ろから胴を抱え込まれる形で両腕を拘束され、首筋には冷たい感触があった。

「あと一週間くらいは隠れているかと思っただが……まあ、さつさと行動してくれば楽っちゃ楽なんだがな」

そういうのは拘束している方だった。

「・・・いつから僕を疑ってたの？」

「最初からだ。代表候補生になったにしては時間が少なすぎるからな。ついでに言うと、あれはただの伊達眼鏡だ。じゃ、本題に入るか」

そこでいったん言葉を切る。その瞬間、彼の纏う雰囲気が変わる。今までは冷静だっただけだが、それにかすかな別の感覚が加わる。それが殺気であることにデュノアは気づかず、ただピリピリするような感情に驚いていた。

「そこで俺のセイリユウに何をしようとしていた。さっさと吐いたほうがお互いのためだぜ？」

「そういわれて、はいわかりましたって言うと思う？それに、お互いじゃなくて僕のためじゃないの？」

「いいや、お互いであつてるぜ？・・・5カウント内に答えろ。答えなきゃ体に聞く」
「体に聞くってどういうこと？」

「そのままの意味だ」

そしてカウントを開始する。結局、デュノアは答えなかつた。

「警告完了。・・・演算を開始。生体電流を解析、接続——」

その先、万は何か言っていたようだが、デュノアには聞き取れなかつた。何やら脳に直接情報を入力されているような感覚に意識を持っていかれてしまったからだ。それ

と同時、走馬灯のようにいくつかの映像が目の前をよぎる。心なしか、音声も聞こえるように感じた。

それが終わった瞬間、何か一言自分が言ったような気がするが、それすらもわからずそのまま意識を失った。

デュノアが起きだしたころ、万は気配の変化を感じ取りひそかに周囲に能力のレーダーを発動させた。相手がセイリユウのダミーである伊達眼鏡に触れたことを確認すると、静かに体を動かしだした。

体勢を整えると腹部に掌底をかます。相手の体が硬直したのを確認すると、右腕を回し無理やり体を起こさせ、右腕と左ひざを使って相手の後ろに回る。そして相手の両腕を胸を抱えるように左腕で固定したうえで、右手にナイフを出して首筋に当てた。

デュノアに自白を促しつつ、万は考える。

(こんなことをやるのは暗部時代以来だな)

そのままカウンントが尽きた。警告が完了したのだ。そして演算をして相手の生体電流を読み取る。だが、それをした瞬間、万は己の演算がはじき出した結果に驚いた。

(いやはや、想像はしていてもこれは驚くな……。ま、真偽は読み取ればいいか)

そのまま予定していた演算を開始する。

その内容は生体信号を利用して脳細胞に保存された情報を読み取る、というものである。つまるどころ、記憶を読み取る、ということだ。

直後、学習装置によく似た感覚が襲う。そこに読み取られた情報はその前の生体電流の解析で得た情報を裏付けるものだった。

それが終わっても方は拘束を解かないようにするのに苦労した。何度か頭に直接情報を流し込む経験をしてはいるが、毎回脳にかかる負担の大きさから軽くめまいを起こしてしまうのだ。もつとも、慣れている方はいいのだが、

「何・・・今の・・・？」

デュノアに至ってはそう一言発するのが限界だったようで、そのまま気を失ってしまった。仕方がないのでそのままベッドに寝かせ布団をかけ、頭に手を当てる。生体電流から体に異常がないことを確認すると、脳波をノンレム睡眠の時と同じにし、そのまま寝かせた。しっかりと寝息を立てているのを確認すると、万も今度こそ寝た。

翌朝、例によって早起きした方は面白い場所を見つけた。

彼もこの時初めて知ったのだが、ここには射撃場があったのだ。しかも中に入ってみるとなかなか本格的で、射撃レーンがぎつと10〜15、そして小部屋がいくつか。小部屋はいったい何のためのものだろうかと気になり、のぞいてみると、近接戦闘訓練用

となっていた。中にも少し入ってみたが、どうやらある程度の状況を想定し訓練ができるものらしい。

（便利なもんだこと。ま、こういった訓練がされればISにもいかされるだろうしな、納得ではある）

そんなことを考え、来たついでに軽く射撃を、と思い銃を受け取って射撃レーンへ行くと、そこにはセシリアがいた。

さすがは遠距離型を駆る代表候補生、射撃の精度も素晴らしいものだ、と感心していると、相手もこちらに気づいて振り向いた。

「あら、万さん。早いですわね」

「癖だね。そつちも早いな」

「月末にトーナメントがありますもの、その訓練もかねて、ですわ。いまなら、静かに集中できますし」

そういわれて周りを見渡すと、セシリアと万以外は誰もいなかった。

「なるほどな・・・それもそうだ」

そういつてふつと笑う。そんな方につられる形で微笑んだセシリアは思い出したように言った。

「そういえば、万さんはペアはどうされますの？」

「ペア？何の話だ？」

セシリアの話にいまいち要領を得ない様子の方をみて、「どうやらご存じないようですわね……」といった。

「月末にトーナメントがありますでしょうか？それが、タッグマッチ、つまり二人一組のペアで行われることになったのです。そのペアのことですわ」

「……まあ、あんなことがあつたからな、教師陣としては打てる手は打っておきたいってところなんだろうな……」

「そうなのでしょうね、表向きはより実践的な戦闘経験を積ませる、ということですけど」

「ま、建前にすぎんわな、んなの」

その反応を見て、そこでセシリアは切り出した。

「ペアをわたくしと組んでくださりませんか？一度共闘した仲ですし」

「まあ、そうだな。考えておくよ、たぶんすぐ結論出るけど、今ちよつと立て込んでな」
「……武器の構想が煮えきらないといったところではありませんわよね？」

「そんなのじゃねえよ。ま、じきわかる。さてと、——」

そういつて方はセシリアの隣のレーンに立った。脇の端末を操作して的を表示させ、持ってきたスナイパーライフルを構える。そのまま弾丸を射出するが、弾丸は中心をわ

ずかにそれて命中した。少し間をあげてさらに数発。しかし、そのすべてが中心に当ることはなかった。

「・・・やっぱライフルは苦手だな。ガトリングとかでばらまくほうがよっぽどか性に合ってる」

「・・・よろしければ指導して差し上げましょうか?」

その様子に隣で見ていたセシリアが提案する。

「悪いな、オルコット。頼む」

その言葉に少し間をあげてセシリアは言った。

「万さん」

「ん?」

「どうか、わたくしのことはセシリアと呼んでくださいませんか?二人のときだけでもよろしいですから」

その言葉に万は目を瞬かせる。そのあと微笑んでいった。

「わかった。んじゃあ、改めて。・・・コツとか教えてくれるか?セシリア」

「喜んで!」

そういつて見せた笑顔は今ままで一番明るいものだった。

射撃練習を終え部屋に戻ると、デュノアが起きて着替えていた。

「・・・万・・・」

「おはよう、〃シャルロット〃。よく眠れた?」

万の口から出た名前にデュノアは驚いた。

「う、うん。まあ・・・って、そうじゃなくて!なんで・・・?」

「ん?んく・・・。昨夜どうやって寝たか、覚えてるか?」

「え、つと・・・。確か、気を失って、気づいたら朝だった、はずだけど・・・」

「・・・あー、そっか。そっちから見ればそうか。とりあえずだ、昨夜あの時、俺がやったことを言うぞ」

そこでいったん万は言葉を切って、自分の支度を始める。

「あの時俺はそっちの生体電流を読んで、それを介する形でそっちの記憶を読み取った。あの様子から察するに、そっちにも何かあったようだがな。それで、そのまま気を失ったから、寝かせたうえで脳波を睡眠時と同じような状態にした。で、その過程でそっちの本当の名前を知った。ついでに言えば、なんでこんな入学をしたのかという理由もな」

「そうなんだ・・・。じゃあ、もうごまかせないね。僕も、僕の見たことのない景色を見

「たから・・・」

「・・・つてことは、そつちは俺の記憶を見たんだろうな、たぶん。生体電流で記憶域のネットワークを作っている以上、ありえない話じゃない。なら、そつちが気を失った理由も頷けるな」

「・・・どういふこと？」

「考えてもみろ、普通なら情報つてのは感覚器を介して脳に伝えられる。それを直接脳にインストールした形になったんだ、気分が悪くなるに決まってるんだろ」

「・・・うわ・・・。つてちよつと待つて、万もそうのはずだよな？」

「俺は慣れてるからな。とりあえず、放課後職員室に行くぞ。一夏も一緒に」

「え、一夏も？」

「お前の本来の指示は俺らのISデータの入手だろうが。あいつも関係者だ。それに、お前が女だつてことも知らせないとな」

「・・・わかつた」

そのまま支度をしていると出発する時間になり、二人は部屋を出た。

そして、放課後。一夏は半ば引きずられるように職員室に連れてこられていた。連れてきた当人は織斑先生、つまり千冬に話があるといっていたが、詳しくは知らされてい

ない。

デュノア、一夏、万の3人が千冬にできるだけ早く伝えた話がある、できれば人に聞かれない場所がいい、と切り出すと、千冬は職員室の一角にある応接室に案内した。

「・・・それで、火急の用件とはなんだ、黒川」

「俺のことじゃないんですかね。こいつのことです」

そういつて隣のデュノアに目を向ける。

「・・・織斑先生、今から言うことはすべて事実です」

そういつてデュノアはしゃべりだした。

曰く、自分は本当は女であるということ。

デュノア社の社長の子であることは確かだが、正妻の子ではなく、愛人の子であること。

一夏、そして万の登場に伴い、性別を偽って入学したうえで二人に接近、二人の機体データを採取することをデュノア社から命じられたこと。

昨日、万の機体データの閲覧を試みたが失敗、それにより彼改め彼女が女であることが露見したこと。

今まで秘密にしてきたすべてのことを包み隠さず話した。

「・・・そんな・・・」

「夏はデユノアが話し終わると絶句した。

「事実だ。それは記憶を読み取った俺が保証する」

「で、お前はもうしたくないんだ、黒川」

「本人に任せますよ。本国へ帰ろうが、このまま首をつろうが、俺には関係ない」

「お前なあ！——」

「ただ」

激昂する一夏を遮り方はつづけた。

「本国へ帰ればどうなるかは、本人も見当がついているみたいですけど」

「・・・どうということだよ？」

「早い話が動かない歯車はいらない、ってことだよ」

「歯車って・・・！部品じゃないんだし」

「部品同然なんだよ、会社のトップにとつて従業員なんざ。そうじゃなきゃリストラなんてことは発生しない。・・・で、どうする、デユノア」

その問いかけにデユノアは黙り込む。

「・・・そうだね、今なら僕一人で済むから、本国へ帰ろうかな・・・って、思つてなくもない」

「シャルル・・・！」

「そうでもないぞ?」

その言葉にいきめようとした一夏だが、千冬が口を開いたことでその口を閉ざした。

「織斑、IS学園特記事項第21条を音読しろ」

「あ、はい」

そういつて一夏は生徒手帳を取り出す。

「えー、と。IS学園特記事項、第21条。この学園の生徒は、在学中において、本校を除くいかなる国家、企業、組織に帰属しない」

「・・・そういうことか」

その瞬間、ふたりが納得した。が、音読した本人は要領を得ない顔をする。

「つまりだ、在学中だけデュノアはデュノア社のスパイでも、フランス国籍でもない。故に、デュノア社だろうが、フランス政府だろうが、こいつには干渉できない。・・・違いますか、先生」

「その通りだ」

万の推測を千冬が肯定する。

「・・・でも、僕、ここにいていいのかな・・・?」

「いいんだよ、シャルル。むしろ、ここにいろ。3年もある、いい手の一つや二つくらい思いつくだろう」

「俺としては消えてもらっても構わんが……ま、居たいっていうのならそうすればいい」
「……ありがとう……!」

そういつてデュノアは笑った。

「とにかく、一回再編入の手続きをする。デュノアはここに残れ」

「え? どういうこと?」

「ばれちまった以上、男扱いにしておくより女扱いにしたほうがよっぽどか楽だろうが。ちつとは頭使え」

「そういうことだ。あと、一応言っておくが……」

「他言無用、でしょう?」

「ああ」

「以上ですか?」

「以上だ。二人は下がれ」

その言葉に二人は千冬のもとを去った。

職員室を出ると、一夏は万に聞いた。

「お前、なんでシャルルにあんなこと……」

「最終的に決めるのはあいつだ。なら、俺らが今後どうするかなんて強制できるわけね

えだろ」

「それはそうかもしれないけど！」

「確かに言い方はきつかったかもしれない。だがな、あれくらいでへこたれるのならそれまでだが、仮にも代表候補生までのし上がった身だ、ちようどいい発破になっただろう」

にべにもなくそんなことを言う方に一夏は驚愕を露わにする。

「・・・お前って恐ろしいな」

「何をいまさら。それと、月末のトーナメントでは負ける気はねえからな」

「望むところ！」

そういつて拳をぶつけ合うと方は自主練のためアリーナに向けて歩き出した。

11. トーナメントと和解

結論から言うと、万はアリーナにはいかなかった。いや、行くことができなかった。なにせ、行こうとするすべての通路を女生徒がふさぎ、ペアの要求をしてくるのだ。あまりにもしつこいので、思わず万は周囲に向かつていった。

「・・・なんでそんなに俺にこだわるんだ？一夏やデユノアもいるだろう？」

それに対する答えはこれまた周囲から帰ってきた。

「だって、織斑君とデユノアくんのペアがもう確定してるんだもん」

・・・あんにやろう、と割と本気で万は一夏を恨んだ。もつとも、本人も八つ当たりであることは百も承知だが。

「・・・まず言っておくと、俺はまだペアを決めてない」

その宣言に周りのざわつきが高まる。それにたいして「だけど！」と大声で言っただけで静かにさせる。

「もう俺の中で何人か候補は上げてある。その全部が該当しなかったら、まあ・・・そんなときやそんなとき、って感じ。とりあえず、頭の隅に置いておく、とだけ言っておく」

その言葉に周りは半ば狂喜乱舞する。

「とりあえず、そこ通してくれる？通れない」

だが、周りは喜びからか万の様子がわからないようで、一向にどうとしない。仕方なく万はもう一度声を張るが、それでも静かになっただけだった。その様子を見て、軽く口角と右手を上げ言った。

「10カウントの間はどう？そうしないと、吹っ飛ばすよ？」

そういつてから本当に10カウントを開始する。それに近くにいた生徒から道を開けようとするが、奥の生徒がなかなか動かないらしく、結果的にカウントが尽きても道は開かなかった。

「・・・警告完了。有言実行！」

上げていた手を広げる。その瞬間、目の前の一団が両脇に吹っ飛んだ。それによりできた道を万は歩きながら言う。

「・・・どういうことになるかはわかってただろうに」

そう、こういつたことをするのは初めてではない。入学の最初のころ、移動するとき——特にIS実習のために更衣室へ行くときに——こうして囲まれたことは多かった。そのたびに遅刻すれすれになつていたため、何回目からかあまりにしつこく囲ってくる女子たちは能力を使って吹っ飛ばしていたのだ。

周りの様子などどこ吹く風で万はそのままその場を離れた。

そして万が向かったのは射撃場だった。ここに来ればお目当ての人物がいるのではないか、と思つたからだ。そして、その人物は今度は寝た状態でライフルを構えて、今度はクレー射撃をしていた。なるほどこれならゲーム感覚で動く物体に当てる訓練ができる、と万は感心しつつ、隣のレーンに立った。こちらが手に持つのは大型の自動拳銃。そして、彼はいかに短時間で次々と出てくる的を命中できるか、ということをやつていた。

2, 3回目のトライが終わり一服したときに後ろから後ろから話しかけられた。

「あなた、拳銃の腕は確かですね」

「まあ、慣れてるからな。そっちこそ、ライフルの腕前はさすがだな。ブルー・ティアーズを駆るだけはある」

「当然ですわ。わたくしは代表候補生ですもの」

「だよな。ところでよ、そっちってペアって決めた？」

「いいえ、まだですわ」

「そりやよかつた。俺と組まねえか？」

「・・・え？」

思わぬ提案に、セシリアはきよとんとする。

「え？じゃねえよ。もとをただせば、そつちからの提案だろ？で、その過程でライフルの扱いについても教えてくれないか？」

「・・・ええ！喜んで教えて差し上げますわ！」

その笑顔は軽く後光が差したかのようなものだった。

セシリアの教え方はとてつもなく理論を細かく述べ立てるものだったが、それを教えられる側の方が理解、自分でわかるように変換したことで、短時間で万のライフルの射撃精度は見違えるほどによくなった。

そして、月末。

この日は学年別トーナメントの日だ。組み合わせもここで発表される。

「とりあえず、緊張しすぎだ、一夏」

「そうだよ、もつとりラックスしなきゃ」

「つつつてもよく・・・」

男子陣——と言つても一人女子がいるが——は緊張でたたけばカチンと硬質の音がするのではないか、という状態の一夏をほぐそうとしたが、それはどうやら無理らしい。

「てか、なんで二人はそんなに余裕なんだよ・・・」

「相手が誰であろうと、僕は全力を出すだけだからね」

「パートナーがパートナーだから不安はないし、目の前の虫はつぶすだけだからな」

「・・・すげえなお前ら・・・」

そんな規格外の二人に一夏ががつくりと肩を落とす。その直後、仮想ディスプレイが表示された。

「・・・おいおいおい、こいつあ何の冗談だあ？」

「こうなるとはね・・・」

その二人の声に反応して一夏も顔を上げる。一夏とシャルロットの名前は右端に、つまり第一試合のところにあった。それを確認すると一夏は絶句した。

「・・・マジかよ・・・」

そこにあつたのは、

第一試合 篠ノ之箒&ラウラ・ボーデヴィツヒ vs 織斑一夏&シャルル・デュノ

ア

第二試合 凰 鈴音&ティナ・ハミルトン vs 黒川万&セシリア・オルコット

この文字だった。

「・・・一夏、デュノア」

驚きでフリーズする二人に万は呼びかけた。その声に二人ともが反応する。

「勝てよ。特に一夏、あの時の決着はここでつけるんだろ?」

「・・・ああ!」

そういつてまた拳を合わせる。その眼に今までのようなものはなく、ただ覚悟だけが写っていた。

その少しあと、セシリアと方はピットにいた。一夏の戦闘が終わり次第、次の試合である二人の試合が始まるためだ。

「・・・どうなるんでしようか、この試合」

「さあな。ラウラのシユヴァルツェア・レーゲンと一夏の白式の相性は最高に悪いからな。でも、相方がいくら剣道全国クラスの人間が操るとはいえど所詮は訓練機だ。そして一夏の相棒は代表候補生と来た。・・・意外といい勝負になるんじゃないか?」

「そうですね・・・。AICがある以上、近接しかできない白式では・・・」

「だが、あくまでこれは一夏が銃を扱わない、と仮定した場合だ。デュノアの銃を使えば、たぶんワンチャンスあると思うぞ」

「・・・どういうことですか?」

「ISの武装つてのは、その武装を所持しているISで許可を出せば誰でも操れるんだよ。っと、始まるぞ」

そして試合が始まる。開始と同時に白式がレーゲンに特攻、それをAICで受け止める。

「わかっていたはずなのに・・・」

「いや、それは違う」

一夏が止められた直後、後ろからシャルロットが飛び出てマシンガンで強襲する。それにたまたまラウラは距離を取ったが、すぐさまシャルロットの追い討ちが入る。それを箒が受け止めた。そのまま刀をシャルロットに向かって薙ぎ、それをシャルロットは受け流してもう一度距離を取る。

そしてもう一度箒が仕掛け、今度は一夏が受け止めた。動きが止まったところを見て、シャルロットが一発かまそうとするが、その直後、あろうことかラウラにワイヤーを使って吹っ飛ばされる。そのままラウラは一夏と肉弾戦に突入した。

「箒さんを助けたわけではありませんのね・・・」

「そらそうだ。あいつは一夏との一対一を望んでる。だから、一夏以外は等しく邪魔なんだよ。それはペアである篠ノ之も例外じゃない」

「そんな・・・!」

その時、シャルロットは箒に向かって銃を撃っていた。

しばらくして至近距離から数発シャルロットが叩き込むと、打鉄は沈黙した。

「さすがはデュノア、この程度なら造作もねえってか」
「・・・あつぱれ、ですわね」

そして、横から数発レーゲンに当たるともう一度二人一組になる。シャルロットの接近しながらのサブマシンガンによる射撃をA I Cで止め、その隙に一夏が零落白夜で斬りかかる。それをレーゲンは慌てたような様子で飛んで回避する。また一夏が斬りかかり、それをA I Cで止めるが、その後ろからのシャルロットの射撃でレーゲンから黒煙が上がる。

「・・・気づいたな」

「何に、ですの?」

「A I Cの致命的な弱点についてだ。俺とラウラの戦闘を思い出してみる。なぜあいつは最後の弾幕を避けにかかったのか。答えは簡単だ、A I Cは意識を集中させ、しかもなおかつ一方向の物体しか停止できない。つまるところ、うまく連携がとれさえすれば・・・」

「十分勝機はある、と」

そんなことを言っていると、突然白式が動きを止めた。

「あんの馬鹿、ペース配分つてもんを知らんのか・・・!」

「でも、まだ終わってませんわ!」

「・・・そうだな」

その言葉を肯定するようにシャルロットが仕掛ける。それに対しラウラは一夏の白式にとどめを刺しにかかるが、それを瞬間加速しながらの近接射撃でシャルロットが援護する。

「わーお、さすがはフランス代表」

「あんなデータは存在しないはず・・・！」

「戦いながら覚えたんでしょ。すげえな、うん」

もう一度AICを張ろうとするが、それを後ろから射撃される。それは、

「なーる、さつすがー」

「あれはシャルルさんのアサルトライフル！」

「射撃訓練積ませてたんだろーな。マニュアルで撃つて当てるとはなかなかじゃん」

そう、シャルロットの持つアサルトライフルを持った一夏が射撃したものだ。それに對しもう一度一夏に攻撃を仕掛けようとするが、今度は至近距離からシャルロットに吹っ飛ばされる。

「あれは!?!」

「大方盾殺シールドピアースしを使ったんだろーよ。至近距離から大型パイルバンカーを食らってはただではすむまい」

そしてそのままもう一度シャルロットが特攻、さらに数発パイルバンカーを叩き込む。

それは突然だった。

いきなりラウラが悲鳴を上げた。何が起こったのか、と思う間もなく、彼女の体と機体が黒い泥のようなものに覆われていく。

「セシリアはここにいろー！」

それを見るや否や、セイリユウを高速で展開し方はピットから飛び出した。

そこで見たのは、かつて映像で見た織斑千冬の現役時代の姿をそのまま拡大したようなものだった。もつとも、色は黒く濁っていたが。それを見た瞬間、万は考える。

(ラウラがなぜブリュンヒルデの姿に……。いやまて、まさか・・VTシステムか!?)

それを見て最後の力で白式が攻めるが、簡単に一撃浴びてしまい、それでシールドエネルギーがなくなつたのだろう、白式の展開が解除される。

その光景を目にした瞬間、右手に剣を展開させて突っ込む。それを相手は受け止め、罅迫り合いになる。

(「いっつ……つええ!」)

だが、その拮抗は長くは続かない。セイリユウが飛ばされたからだ。空中で受け身を

取り、もう一度斬りかかる方を一夏が呼び止めた。

「待て、万。・・・こいつは俺が止める」

「つつてもなあ、お前白式はエネルギー切れで展開できないんだろ!」

「ないのなら、持ってくればいいんだよ」

反論した方をシャルロットが遮る。その手にはコアバイパスのケープブルが握られていた。それをみて口の端で笑う。

「時間稼ぎくらいはしてやる。・・・元とはいえ、教え子の暴走を止めんのも教師の仕事だ」

そういつてもう一度剣をもって特攻。だが今回は相手の剣を見切り受け流すことに専念した。そうしていると視界の端に右腕と雪片式型を展開した一夏が見えた。それを確認すると万はISの展開を解き、能力を使って離れる。

すると、相手は一夏に標的を変えた。一夏は相手の居合を受け流すと、上段から一太刀浴びせた。それだけで終わった。

泥が割れるように裂け、その中からラウラが出てくる。それを一夏が受け止めた。

時が移り、その日の夕方の保健室。

静かにラウラ・ボーデヴィツヒは目を覚ました。

「いったい、何が起きたのですか・・・？」

彼女は横にいる千冬に聞いた。

「一応重要案件である上に機密事項なのだが・・・VTシステムは知っているな？」

「ヴァルキリー・トレース・システム・・・」

「そうだ。それがお前の機体に積まれていた。機体の蓄積ダメージ、精神状態、そしてなにより、操縦者の意志・・・いや、願望か、それらがそろそろと発動するようになっていたらしい」

「・・・私が望んだからですね・・・」

そういつてラウラは拳を握る。そんな彼女を千冬は呼んだ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「は、はい！」

「お前は誰だ・・・？」

ラウラはその質問の答えに詰まる。それに対し千冬は言い放つ。

「誰でもないならちようどいい。これからお前は、ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

そういつて席を立つ。そして去り際に一言、

「ああ、そうだ・・・お前は私になれないぞ？」

そういつて去って行った。そしてその扉が閉められると、ラウラは声を出して笑っ

た。

ひとしきり笑った後、ひよこ、と擬音がつくように横のカーテンから出てきた影があった。

「珍しいな、お前がそんな風に笑うなんて」

その瞬間、ラウラの顔が夕日に当たっていてもはつきりと分かるほど赤く染まる。

「い、いつからいらっしやったのですか!？」

「うん? いったい何があったのですか、よりは前、かな?」

「すべてじゃないですか!」

「そうともいう」

動揺するラウラに悪びれずに言う方にラウラはその赤い顔を隠した。

「ところで、さっきのは決してからかったわけじゃないぜ? むしろうれしかったんだよ」

その様子を見つつ真剣な表情で方は言う。ラウラがこちらに顔を向けたところでさらに続ける。

「もうずいぶん前になるな、俺がドイツに飛んでお前らを指導したのは。お前は、ヴォーダン・オージェ不適合に悩んでた頃だったか。俺はお前に戦闘のいろはを改めて教え直した。あの時はびっくりしたよ、ここまで無感情になれるやつがいるのか、つて。笑い

もしなければ泣きもしない。自分の境遇に嘆きもしない。俺もあの時はまだ殺し合いの中にしたけど、それでも感情はあつた。だからこそ、お前にびつくりしたんだよ。しかも無類の努力家と来たら、目もかけてやりたくなる。だからこそ、その時と照らし合わせて、今みたいに笑つてたりすると嬉しいんだよ」

「・・・そういう、ものなのですか」

「そういうもんだ。ところでよ、お前を助けたのは誰か、知ってる？」

「織斑一夏、でしょう？」

その名前が彼女から出た瞬間に頬がかすかに赤く染まつたのを見逃さなかつた。

「そうだ。・・・で、ラウラは一夏に惚れちゃつたのかにやーん？」

「・・・わかりません」

からかうような口調で言う方にラウラは無表情で答える。つまらないと思つた万がだったが、そんな万の様子に気づかずにはラウラは続ける。

「・・・ですが、彼のことを思うと、こう・・・胸が締め付けられるような感覚を覚えるんです。前は憎んでいましたが、今は、彼の隣にいたい、と思つています」

その返答は万を驚かせるのに十分だつた。

「・・・それを世間一般では惚れている、というと思うんだが・・・まあ、友情の可能性もあるし、この際どうでもいい。一応、気持ちの転機とか聞いていい？」

「・・・彼は、こんな私を守ると言ってくれました。その時の姿が、なんというか、凜々しく、・・・って、なにを言わせてるんですか!？」

どんどん赤くなっていくラウラの様子をにやにやと笑いながら聞く方に思わずラウラは怒鳴った。

「はいはい、ごちそーさま。・・・まあ、とにかくだ。前も言ったが、せいぜい悩めよ、小娘」

「・・・私が小娘ならあなたは小僧でしょう」

「そうだな。それと、いい加減口調はフラットにしてくれな。ここでは、俺もお前も一生徒だ」

そういつて席を立つ。去り際に一言、

「じゃあな、ラウラ」

そういつた。その背中を、ラウラはそのまま目で追っていた。

その後、部屋の前まで来て、万は能力で中にもう一人いることに気づいた。念のためノックの上で入ると、そこにいたのは一夏だった。しかも、風呂の用意をもって、だ。

「一夏、どうした?」

「あ、ああ。さつき山田先生がきてな、今日、大浴場が使えるらしい。で、どうしようかつ

て……」

「……ああ、そういう」

なにせ、シャルロットは女だ。いくら知らないとはいえ、一緒に入るのははばかられた。

「……水着を着る、時間差で入る、……ほかに手が思い浮かばないな、俺には」

「なら、水着がいいかな……。話したいこともあるし」

「よし、なら決まりだ」

そういつて3人は風呂に繰り出した。

そして、浴槽につかりながら、3人は話す。

「にしても、今日は大変だったな……」

「ああ……。まさかあんなことになるとはな……」

「ところでさ、二人とも、ちよつと話したいこともあるんだけど……」

「前言った、学園に残るって話か？」

シャルロットの言葉に反応した方に、シャルロットはうなずいた。

「うん。僕は、ここにいたい。それは、万と、一夏がいるから、そう思うんだよ?……」

それと、僕のありかたも」

「ありかた？」

「うん。・・・これからは、シャルロット、って呼んでくれる？」

「・・・それが、本当の名前、なのか？」

「うん。・・・万は知ってると思うけど」

「まあ、記憶読み取っちまったしな」

「わかった・・・シャルロット」

「まあ、善処はするよ」

そんな様子の二人に、シャルロットは微笑んだ。

「・・・ありがとう」

一件落着かと思っただが、そんな様子を見てか一夏が口を開く。

「シャルロット、って言いにくいからさ、シャルでいいか？」

その言葉に当のシャルロットは目を瞬かせた。その直後、笑って言った。

「・・・うん、いいよ。むしろ、そう呼んで？」

「わかったよ、シャル」

そんな様子を隣で見て方は、

(もしかしてこいつ天然ジゴロか・・・?)

冷静にそんな思考をしていた。

そんなこんなで、この夜は更けていった。

翌朝、朝のSHRで山田先生が言いにくそうに切り出した。

「えっ……と、今日は皆さんに転校生を紹介します……？」

なぜ軽く疑問形？と思いつつも軽くクラスがざわめく。

そして入ってきたのはシャルロットだった。

「シャルロット・デュノアです。改めてよろしくお願ひします」

その言葉にクラスが二人を除いて一瞬凍りついた。

「えっと、つまり、デュノアくんは、デュノアさんだった、ということ……」

そこから先は言うことができなかつた。あちらこちらから沸き起こる声に遮られたからだ。

そんな時、突然壁が破られ、暗い赤色のISが入ってきた。

「一夏ああああ!!」

そしてそのパイロットの凰はそのまま怒りに任せて砲撃をしたが、それが一夏に届くことはなかつた。間に入る形でレーゲンがAICを発動させていたからだ。

「え、と。ありがとう」

「この程度、造作もない。．．．それと、だな」

「どうした？」

そして軽く頬を染めつつラウラは言う。

「．．．今までの無礼、すまなかつた」

それに対して、一夏は笑って言う。

「いいよ、そんなこと。気にしてない」

その返答にラウラはほっとしたように微笑んだ。

その後、凰は千冬の指示を受けた方が振った超巨大ハリセンを食らい、さらに千冬に連行され膝づめでお説教を食らった、というのはまた別の話。

12. つかの間の休息

そのまた数日後。万はしばらく後に迫った臨海学校のために水着を買いに来ていた。なにせ、今までそんなものと縁のない生活をしてきた彼にとつて水着など必要のないものだったため持っていなかったからだ。

外出許可を得て、出先のトイレで珍しく私服に着替えたうえで街を歩いていると、何やら物陰から誰かを見ている風とそれに半ば付き合わされている風情のセシリアがいた。

あきれ半分で何をしているのかと思っていると、突然何を血迷ったのか風が甲龍を右腕だけ部分展開した。さすがに止めようと声をかけようとしたとき、別のところから声をかけた人がいた。

「ほう、楽しそうだな？」

(どこ)がだ)

即座に気配を消し別の物陰に隠れた万はその言葉に声には出さず突っ込む。思わぬ人物の登場に二人は警戒を露わにする。

「安心しろ、今のところお前たちに危害を加えるつもりはない」

「・・・信用できると思ってた?」

ラウラの言葉に低く抑えた声でセシリアは言う。その言葉を聞いて「そうか」と一言いうとラウラは歩き出す。それを風が止めた。

「何するつもり?」

「決まっているだろう、あの二人に混ざる」

「未知数の敵と戦うにはまず情報収集が先決でしょ?」

「・・・なるほど、一理あるな」

そういつて三人は二人を尾行しだした。が、その後ろで気配を消し追跡する人間がやりと人の悪い笑みを浮かべているのには気づかなかつたが。

そしてしばらくののち、追跡組は目標の二人を見失っていた。それを見て方は考える。

(あの様子だと尾行に気づいたな。ま、あんだだけ気配殺してなければ当たり前か。気づいたのはおそらくデュノアだな、一夏が気づくとは思えないし。さて、・・・ん?)

そこまで考えて遠くに自分の担任と副担任がいるのに気付く。それを見てさらに思考したところで、ほぼ確実に追っ手を撒け、しかも周りからもさして不自然に思われな場所が一つあることに気づく。そこまで考えて、にたりと笑った口元をひっこめて偶

然を装いつつ万はいったん店をでた三人に声をかけた。

「あれ、何してんだお前ら」

その声にびくりと身を震わせて三人は振り向いた。そして、声の主を見てほつと一息つく。

「なんだ、あんたか」

「驚かさないでほしいですわ・・・」

「ん、今まづかったか？」

「いや、尾行していた以外にやましいことなどない」

「ちよつとお!？」

その返答に人の悪い笑みを浮かべた。そして、後ろを携帯で確認してから一言、
「どうでもいいけど、ほどほどにしとけよ?鬼がいるから」

そういつて後ろを親指で示す。そちらに視線を向け誰がいるかを知ると、三人とも表情を変えた。もつとも、ラウラはかすかにしか変わらなかつたが。

「・・・もしばれてたら・・・」

「もう一発巨大ハリセンの刑じゃね?」

その言葉にげ、と声をもらす。

「・・・あれもう一発は痛いわ・・・」

「ま、痛いように作っただしな」

そこまでしゃべったところでセシリアが話題を変えた。

「そういえば、万さんはどうしてこちらに？」

「俺？水着買いに来ただけ。で、その途中であんたらに気づいて声かけた、っただけ」

「ふーん、で、まだ買ってないの？」

「まあな。買う前に見かけたから」

「なら、こちらの買い物にも付き合ってもらえませんか？男性からの意見も聞きたいですし」

それに対し少し方は逡巡した。が、間もなく結論は出た。

「・・・まあ、時間はあるしな」

こうして三人と一人の奇妙な休日が始まった。

なんとか三人の水着を買い終え、一夏とシャルロットが入って行っただと思われる店まで行くと、二人は膝づめで説教を受けていた。

「・・・しばらく様子を見たほうがいいわね」

「そうですわね・・・」

「で、どうする？」

「待て待て、俺水着買つてないんだが」

「そんなの後でいいでしょ」

万の提案は嵐にさっさと却下される。だが特筆してやることもない。どうしようかと考えていると、万の頭に一つの案が浮かんだ。

「・・・そういえばラウラ、お前私服持つてる?」

「服なら軍の指定のものが・・・」

「いや、軍服じゃなくてだな。普通に出かけるための服だ。俺だとこれだし」

そういつて今着ている服の襟元をつまむ。

「・・・そういつた服なら、持つていない」

その返答に万は満足気に笑んだ。

「よし、じゃあ決まりだ。ラウラの服を買いに行くぞ」

「え、なにそれ決定事項?」

「まあ、な。それにだ」

そういつて嵐とセシリアの頭を自分の口元に寄せ耳打ちをする。

「ラウラは一般的に言えば美少女だ。そんなやつを着せ替え人形にできる機会なんてなかなかないと思わないか?」

その発言に二人はあきれが多少混じった人の悪い笑みを浮かべた。そんな様子を見

てラウラは軽く首をかしげる。

「なるほど、それはいいわ」

「だろ？じや、行くか」

そういつて四人は別の店へ繰り出した。

その店で軽くふざけつつラウラにさまざまな服を着せ、その中で似合っていた普通の服を数着買うと、三人は近くの喫茶店で一服していた。

「・・・本当に金を出さなくてよかつたのか？」

「いいんだよ、もとより俺が言い出したことだし。気にすんなって」

そう、服の代金は万が全額支払っていた。それなりに上等な服を買ったのでラウラとしては少し申し訳ない気持ちがある。

「それにしても、よくそんな金があったわね？」

「まあ、学園都市で仕事してたし、研究所で働いてた時の金もあるし。それに、俺無駄遣いはしない口だからな、金はそこそこあったんだよ」

「研究所？」

「あの後、ISの研究所に勤めてたんだよ」

ラウラの疑問に万はすんなりと答える。そのやり取りを見て、他の二人に一つの疑問が思い浮かぶ。

「そういえば、二人は知り合いなの？」

「まあ、知り合いというほどのものでもないがな。一時期師事していたんだ」

「おい、ちよつと語弊があるぞ。・・・俺の昔やってた仕事の技術を教えていた、つてとこかな」

「仕事の技術？」

「身ごなしの音を消すとか、気配を殺すとか」

「・・・いったいどんな仕事をしていましたの？」

「ま、それはおいおいうさ」

その言葉にちよつと煮えきらないところもあるが二人は納得した。

「ところで、その研究所ってどんなことなのよ？」

「俺のいたところは、ISの装備——具体的に言えば、ISの兵装とか、スラストーとか——そういったものの研究をすることであったぞ。ま、今でも武器の構想を練ったりするのはその時の習慣が抜けないからっていう理由だったりする」

「なるほど・・・。ということとは、万さん自身も何かしらで兵装を手掛けたりましたの？」

「まあな。たとえば、セシリア戦で使ったボール。あれ、表面のメッキ部分に金が少し混ぜてあってな、レーザーをよく反射するようになってる。あと、中に存在するナノマシ

ンを使って微妙な位置調整ができるんだ。結果、数えるのが面倒な数のレーザーをすべて任意の方向に反射させることができるってわけだ。もつとも、あの数を反射するのは俺でも骨だったけどな」

「へえ、あれ万さんが・・・」

「もつとも、俺が発案するのはたいていはじかれてたぜ？」

「どうしてだ？」

「理由は簡単、コストがかかりすぎる。これにしてもそうだがな」

そういつて量子変換ボックスを見せた。それに三人は疑問を呈する。

「・・・何それ」

「あれ、言ってなかった？」

「聞いてませんわ」

それを聞き三人に量子変換ボックスの説明をする。それに三人とも驚いていた。

「・・・ISコアは完全なブラックボックスではありませんでしたの？」

「そうだ。まだ根幹に関することは何一つわかつちやいない。だけど一部だけなら何とか俺の能力も併用してわかった。その一部をフル活用して作ったのがこれってわけだ」

「・・・すごいな」

「おう、あがめていいぞ」

「なわけないでしょ。ところで、研究所で働くって家族の反対とかはなかったの？」
それに対し、手元のコーヒーに軽く視線を落とした。

「……兄弟とかはいたとしても知らないし、両親は俺がチビの時にもう他界してるから
な……」

その眼には一瞬だが昏く深い炎がともった。

だが、それではなく帰ってきた返答に凰はぼつが悪いように黙った。

「……ごめん」

「いいよべつに。ずいぶん前のことだし、それがなけりやラウラとは会えてないし」

にこりと笑いながら言う万の目にその色は一切なく、三人がそれに気づくことはなかった。

「どういうことですか？」

「両親が亡くなったことをきっかけに俺は学園都市に送られたんだよ。学園都市に送られてなければ俺はラウラに会えてないだろうからな」

「そういうことですか……」

そういつて三人は飲み物に口をつけた。

「そういえば、お前の専用機はどうやって手に入れたのだ？」

一口飲み物を飲んだラウラの問いかけに万はこともなげに答えた。

「企業のほうが融通を聞かせてくれてな、データ収集もかねて研究機のうちの一機を俺の専用機にカスタムさせてくれたんだよ」

「へえ、そうなんだ」

「でも、あくまでデータ収集も目的の一つだから、あんまりこつぴどく扱ったりぶっ壊したりしたらそれはもう大目玉どころの話じゃねえだろうな。報告も必要だし。そのかわりっていつたらなんだけど、装備に関してはある程度こつちの要求も通してもらってみたいだけだな」

思わぬ舞台裏にほかの三人は驚きつつ納得した表情を見せた。

四人はそのまま店内でしばらく雑談をしてまた買い物に戻った。後は特に何事もなく、万の水着も無事買い終え、学園へのモノレールに乗りとうとしたところで、万が足を止めた。

「どうしましたの?」

その言葉にすぐに反応せず、しばらく万は考え込む。

「・・・悪い、買い忘れ思い出した」

そういつて量子変換ボックスから買ったラウラの服を出して渡した。

「ほい、買った服。お前のだから」

そういわれ渡された本人が動揺しているのも知らずに続ける。

「じゃあ、俺もう少しこっちいるから、先帰ってくれ」

その様子に少々不審がりながら三人はモノレールに乗って行った。

それを確認すると軽く振り向いて声をかける。

「……いつまでそこに隠れてる気だ?」

その声に含まれた殺気をもものともせず、物陰から水色の髪の少女が出てきた。

「いやいや、今の尾行に気づくとは、さすがだね」

「……てめえ、何者だ?」

相手の姿を確認すると殺気をさらに強める。それでも相手は猫を思わせる飄飄とした態度で言った。

「まあまあそんなに殺気立たないで、"タスカー"君?」

その言葉に一瞬で拳銃を取り出すとすると迷わず発砲した。消音ピストル独特の空気の抜けるような音とともに火を噴いて出た弾丸にすら彼女はおびえなかった。

「だからそんなに殺気立たない。血の気が多い子はお姉さん嫌いよ?」

「……何が狙いだ」

「何も狙いはないわよ。ただ君を知りたかっただけ」

その言葉を聞いてから相手の目を見ると、銃をしまって背を向ける。

「……とりあえずは信用してやる」

「そう、ありがとう」

その言葉を背に聞きながら方はモノレールに乗りにかかった。

その後、ホームで先行していた三人に見つかって面倒くさいことになる、ということはこの時点で方は知らなかった。

13. 臨海学校初日

その後日、臨海学校へと向かうバスの中に万はいた。周りは何やら雑談している様子だが、それをどこ吹く風という様子で本を読んでいた万だったが、ある程度のところまで読んだところで軽く首を回す。その様子を見てか、セシリアが声をかけた。

「万さん、あなたはお菓子類を持ってきてませんか？」

「いや、持ってきてはいるが・・・」

「へえ、どんなものなんだ？」

興味を向けたのか箒に万はこともなげに答える

「おもしろ大福」

「・・・何よそれ」

「ほら、バラエティー番組とかでよくあるじゃん、大福の中になんか変なものが入ってるってやつ。あれみたいに普通に餡子だけじゃなくてほかのものもちよつと混ぜてある、みたいな。もつとも、滅茶苦茶なものは混ぜてないけどな」

「ほう、それは面白そうだな」

「ま、味見はしてあるからまずくはないぞ？」

「いや、それは当り前だろう（でしよ）!?!」

万の保証にその周辺にいたセシリア以外の全員からステレオでツツコミが入った。それをさらりと受け流して万は保冷バックを取り出し、その蓋を開けた。その中には見た目は普通の大福があった。

「見た目は普通なんだな」

「見た目はな。さて、食べたいんならどうぞ」

そういつて軽く差し出す。それに対し恐る恐るではあるがシャルロットが手を伸ばして口に運んだ。

「……ん、なにこれ。しょっぱい、けど甘い」

「あー、たぶんそれは塩大福だな。お土産物であったから再現してみようと思ったらしい」

「うん、話に聞いてた大福っていうのとちよつと感じが違うけど、これはこれでおいしい」

そういつて顔をほころばせた。その様子を見て「だから味は保証するつていったら」と万はあきれた様子でつぶやいた。彼女に追従する形でほかのメンバーも手を伸ばす。

ほかのおもしろ大福も好評で、バスが目的地に着くころには大福はあらかたなくなつ

ていた。

そして、着替えて海での自由行動中、万は海に浮かんでいた。泳ぐでもなく、ただただ仰向けに浮いていた。

もともと集団で何かするというより、一人でいるほうを好む彼にとつて、こちらのほうがよっぽどか気楽なのだ。特に、万は一人でぼんやりしている時間が結構好きだった。りするので、何も考えずぼーっとしているというのがそこまで珍しくなかつたりする。そんなことをしているとセイリユウが通信を告げた。相手を確認すると、つないで一言発した。

「どうした、デュノア」

「ねえ万、ラウラになんか変なことした？」

つないでいきなり言われたセリフに万は苦笑する。

「開口一番なんかひどくねえか？」

「だってラウラつたら着替えるや否やタオルで体を覆ってるんだもん。僕だって見てないんだよ、ラウラの水着」

「で、俺にどうしろと？」

「こつちに来てラウラ説得してよ。一緒に買ったんでしょ、水着」

「セシリアとかに頼めばいいじゃねえか、面倒くせえ」

「頼んだよ、でも断られたもん。だからこうして頼んでるんだよ」

その言葉に軽くため息をついて立ち泳ぎの姿勢になってシャルロットの位置を確認すると、確かにその横にはタオルをさながらミイラ男のように巻いた小柄な人物がいた。おそらくあれがラウラなのだろう。体を覆っているとは確かに言っていたが、その滑稽な見た目に軽く噴出した。

「どうかしたの?」

通信で笑い声がかすかに聞こえたのだろう、シャルロットが聞いてくる。それに何事もなかったかのように万は返した。

「うんにゃ、なんでもない。それより、そっちの位置は確認できた。今からそっちに行くから待ってろ」

それだけ言う通信を切って泳ぎだした。

「・・・で、いつまでそうしている気だ?」

後ろから二人に近寄って声をかけた。それに対し二人は驚いた。もともと、ラウラは驚いたようだ、としか形容できなかつたが。

「うわあ! なんだ、びっくりさせないでよ・・・」

「そんなにびつくりすることもないだろ。とりあえず、あの唐変木のところに行くぞ」
「え、一夏の？」

「他に誰がいるんだよ。それに、もとより一夏に見せる目的で買ったものでもあるだろうがよ」

「・・・まあ、確かにそうだが・・・。その、心の準備というやつがな・・・」

「そんなことを言いつつ両手の指を絡ませたりする様子は普段の軍人の彼女とはかけ離れたものだった。それゆえか、ぼそりとつぶやいた。いや、つぶやいてしまった。」

「かわいい・・・」

「え、今なんか言った？」

耳ざとく聞いてくるシャルロットに軽く赤くなった顔で「なんでもねえ」と方は返すと、ラウラに歩み寄る。

「そんなの向こうですりやいいだろ。とにかく行くぞ」

そして彼女の手を取り引きずるように連れていく。この強硬策にシャルロットは慌ててそのあとをつけていった。

「・・・で、そのバスタオルおぼけはラウラなのか？」

「まあな。本人は照れてるらしいが」

無理やり引きずられてきたラウラを見た一夏は説明を受けてまず漏らした。

「とりあえず、そのバスタオルとつたらどうだ？」

「そうだぞ、何より暑いだろ」

一夏の言葉に乗っかるように言う。

「とはいっても、まだ心の準備が・・・」

まだそのようにためらうラウラにこっそりと万は耳打ちする。

「さつさととらねえと俺がとるぞ？」

その言葉にびくりとした後、小刻みに体を震わせる。そして、半ばやけになったような声で一氣にそのタオルを取った。その中からは黒い水着を着たラウラの姿が出てきた。それを見て一夏は感心したように声を上げた。

「全然おかしくない。むしろかわいいぞ」

「だろ？俺もそういったんだがな・・・」

そのコメントに万も同意する。だが、当の本人は赤面してもじもじしていた。どうやら「かわいい」と言われたのがよほど効いたらしい。

(まあ、こいつにとつてそういう言葉は言われ慣れてないだろうからな・・・)

そう思いつつにやりとっていると、隣の一夏がさらに言った。

「・・・万、なに企んでるんだ？」

「なにも企んでねえけど、なんでそんなことを？」

思わぬ言葉をかけられ、冷静に返した方に一夏は口元を指さしつついう。

「お前がトム笑いするときって悪巧みしてることが多いからな」

「ちよつとまで、トム笑いつて何だ？」

「トムとジェリーのトムみたいなにやにやした笑い方。たまにお前そういう笑い方する

んだよ。気づいてたか？」

確かに考えてみれば悪巧みしたときに出る独特の笑い方は存在するが、

「俺をあのカ猫と同列にしてくれるなよ・・・」

ため息交じりのコメントに一夏はあははと笑いながら謝った。

その後は特に何事もなく夜を迎えた。

「うん、うまい。さすが本わさ」

夕食の懐石料理の刺身を一口食べて一夏が漏らす。その言葉に反応して隣のシャルロットが刺身の横に添えられたわさびを口に運ぼうとする。それを見て万が一夏は止めにかかると時すでに遅し。案の定、わさびのつんとした強い風味にシャルロットが鼻をつまむ。

「おい、大丈夫かシャル？」

「うん、大丈夫。風味があつておいしいよ……」

一夏の言葉にも鼻をつまみつつ答え、彼が持つてきたお茶を一気に飲む。その直後に急須が彼女の近くに置かれた。

「足りねえんならつかえ」

ぶつきらぼうにさういうと万も席に戻る。その言葉に甘えてシャルロットは急須から追加のお茶を注いでさらにお茶を飲んだ。

そして食事を再開する前に隣の席で慣れない正座に苦勞している様子のセシリアに声をかけた。

「正座苦手ならテーブル席に移つたらどうだ？」

「いいえ、構いませんわ……」

「なら足伸ばしたらどうだ？少々行儀は悪いが、対岸の席のやつはいないんだし」

「ならば失礼して……」

その言葉に反応して足を伸ばして座るセシリアを横目に見つつ万も食事を再開する。セシリアが食事を始めたのを見て軽く彼女に耳打ちした。

「後で先生も交えて話したいことがある。とりあえず俺の部屋の前まで頼めるか？」

それに対し彼女は食事をしつつ軽く頷くことで同意を示した。その謝意を耳打ちすると、今度こそ万は食事を再開した。

その後、織斑姉弟の部屋までたどり着いた二人が見たのは部屋の前で聞き耳を立てる
凰、箒、シャルロット、ラウラだった。

「・・・何してんだお前ら」

あきれ半分で万が声をかけると凰は唇に人差し指を当てて親指で中を示した。どう
やら中の様子を知りたいから静かにしてろ、ということらしい。その聞き耳部隊にセシ
リアも参加したのを見てため息をつきつつ万も襖の横に立った。

その中から聞こえたのは会話だけ聞き出せばR—18物の行為をしている、かもしれ
ない声だった。聞き耳を立てているのは仮にも年頃の少女たちで、気になるのだろう、
さらに耳を襖に近づけたとき、マンガのように襖が中に倒れた。それを見て足音を消し
て万は一度距離を取り、何食わぬ顔でもう一度部屋に来た。もつとも、部屋の中に声を
かけた瞬間に5人から恨みがましい目を向けられたが。

ことの顛末としては、中で二人がやっていたのは単なるマッサージで、千冬曰く「な
かなかうまい」らしい。その言葉に甘えて順番にマッサージを受けたところで千冬が一
夏に言った。

「一夏、いっつらに飲み物を買ってこい」

そういつて自分の財布を投げる。それをキャッチすると一夏は部屋を出ていった。

その後生徒たちと千冬の間には微妙な空気が流れた。それすらも気にせず飲み物——ビールを取ってくるあたり、さすがは世界最強と謳われた人間だと方は改めて感心した。借りてきた猫のような彼女らに不信を覚えたのか千冬が言った。

「おい、いつものバカ騒ぎはどうした？」

「こうして織斑先生と話すのは初めてですから」

返答したのはシャルロットだったが、他のメンバーから反論はなかった。

「・・・そうか。まあいい」

そういつてプルタブを起こすと一口あおった。そして爆弾を言い放つ。

「ところでお前ら、あいつのどこがいいんだ？」

その言葉に万を除く全員が反応する。

「まあ確かにあいつは役に立つ。家事もなかなかだし料理もうまい。そしてマツサージもうまいと来た。付き合える女は得だな」

そして酔った勢いなのかさらに爆弾を投下する。

「・・・どうだ、ほしいか？」

「「「くれるんですか!?!」」」

（お前らはパブプロフの犬か）

冷静に突っ込む万をよそに少女たちは身を乗り出した。その反応を見て鼻で笑うよ

うに千冬は言った。

「やるかバカ。．．女ならな、奪うくらいの気概がなくてどうする。せいぜい自分を磨けよ、ガキども」

最初の一言で撃沈していた少女たちに後ろの二言が届いたかは微妙なところである。さらに一口ビールを飲んだところで千冬はもう一人に声をかける。

「そういえば、黒川はどういう用件だ？」

その言葉に万はすぐに答えなかった。が、やがて顔を相手に向けた。

「．．本来ならセシリアと3人で話したほうが良かったかもしれないですが、まあいいです。——俺の用件はISの兵装に関してです」

「兵装、ですの？」

「ああ。——知つての通り、あくまで現行で開発されている第三世代型ISはプロトタイプ試験機、せいぜい試験機にすぎません。実弾装備を要求しながらそれが本国に通つていないセシリアなど、その典型でしょう」

「お待ちください！その情報はどこから．．．」

割り込んで質問をしたセシリアに少々申し訳なきような顔を万は向けた。

「悪い、セシリア。質問は後でまとめて頼む。——そこで、です。ある程度、こいつらの兵装を開発してみたいのです。これは、ある意味では俺のわがままです。．．．どう

でしようか?」

その言葉に千冬は少しうなった。

「・・・なるほどな、だがオルコットを先に回したのはどういう理由だ?」

その質問に対し、万はまずセイリユウを右腕だけ展開した。

「こういう事情です」

そしてその右手に大型の銃が展開される。見た印象はラウラの肩のレールカノンの砲身を細く小型にしたようなものだった。

「これは磁力狙撃砲です。射程距離は普通のライフルより少し長い程度ですが、特徴なのはその静音性と威力です。電気を利用してその時に発生する磁力を使って砲撃を行いますので、実弾のライフルに比べかなり射出音は静かで、しかもなおかつ電気系統の改良で弾速が向上したことにより威力も同じ大きさのライフル弾より1.5〜2.5倍となっています。もともと、弾速が早い関係から射程は変わらないのですが」

その説明の完璧さなどにも驚いたが、そのほかにも驚いたことがあった。それは、
「わたくしのブルー・ティアーズと同じカラーリング・・・」

その砲身がセシリアの専用機であるブルー・ティアーズと同じようなカラーリングだったことだ。

「そうだ、セシリア。ちょうどお前が得意とするライフル型でもある。ちょうどいいし

お前に装備してほしいと思つたんだが、俺の一存ではいこれお前にやる、とはいかないからな。——で、どうですか？」

それに対して困つたような笑いを千冬は浮かべた。

「・・・全く、お前というやつは。・・・いいだろう。ただし対象人物に装備させる前に必ず私に見せること、それが条件だ。わかつたな？」

「はい。・・・ではちよつと失礼」

そういつてセシリアのイヤークラフスをちよんとつつく。予想通り仮想ディスプレイが展開されたところでそのキーボードをたたいていく。少しするとそこにあつた細身の銃は消えていた。

「よし、これでいいはず。・・・では、失礼します」

そういつて方は二人の部屋を出ていった。

14. 嵐を呼ぶウサギ

そしてその翌朝。例によつて早起きして縁側を歩いていた方は何かを見ている様子の一夏を見かけた。彼の視線の先を見るとそこにはウサギの耳のような形のものといつ張つてください」という張り紙。

「……なんだこれ」

「……だいたい誰かはわかつてるがな……」

思わず漏らした方に一夏はため息を一つついて答える。

「で、引っこ抜いたほうがいいのか、これ」

「引っこ抜くつて……野菜じゃあるまいし。でもそうしたほうがいいんだろうな……」
そういういつついったん庭に下りてそれを引つ張る。が、出てきたのはウサギの耳の力チューシヤであった。何事も起こらないと思つた二人だったが、上空から何かが落ちてくるのを見てそれを改めた。前と同じように能力でその動きを停止させようとするが、相手がなかなか早く、停止させるには至らなかつた。だがそれでも落下音が穏やかなものであつたのは彼の能力のたまものだろう。

降つてきたのは人参型のものだった。

「いやーいっくん引つかかったねブイブイ！」

それの中から出てきた女性は素晴らしいながら両手でピースをする。いつの間にか拳銃を取り出し構える方など見えないかのように一夏にそのまましゃべりかけた。

「ところでいっくん、箒ちゃんは？ まあ、この箒ちゃん探知機ですぐ見つけるけどねー。じゃあ、またあとでねー」

そういつてどこかへと走って去っていく。その光景を見送って方は隣の一夏に言った。

「なあ、あの嵐のようなお人はどちら様？」

それに対してもや大きいため息をつくど返答した。

「篠ノ之束さん。箒の姉さんだ」

それに対し方が数秒固まったのは言うまでもない。

そしてその日の昼。専用機持ちと箒が集まったところを見て千冬が言った。

「よし、専用機持ちは集まったな」

「・・・あの先生、篠ノ之は専用機を持っていませんが」

「ああ、それについては——」

「・・・ちいーちゃん!!」

万の質問に対して説明しようとした千冬を別方向からの声が遮った。声のした方向を向くとそこにはドドドと擬音がつくような勢いで砂埃を上げながらこちらへ来る人影があつた。その人影はそのまま千冬に飛びかかろうと——否、飛びつこうとしたがそれを流れるような動きで千冬が止めてアイアンクローをかます。

「やあやあ会いたかつたよちーちゃん！ さあハグハグしよう、愛を確かめ合おう！」
「うるさいぞ束」

「相変わらず容赦のないアイアンクローだねー」

そういつて彼女の包囲網を抜けると今度は岩陰に隠れている箒に声をかける。もつとも、声をかけられた本人は心底煙たそうだったが。そんな様子を見て千冬が声をかける。

「束、自己紹介くらいしろ」

その言葉に従つて束は万たちに向き合つた。

「私が天才の束さんだよー。ハロー。終わり」

その言葉に万以外の専用機持ちがそれぞれ声を上げた。

「束つて・・・」

「まさか、I Sの開発者の・・・」

「篠ノ之束・・・!?!」

そんな様子などいざ知らず、といったハイテンションでさらに束は宣言する。

「まあ自己紹介はこんなところで。みなさん空にご注目！」

その言葉に従って上を見ると空から何か落ちてきた。今度は能力を発動させずそのままだ。何を送ってきたのかは知らないが、よもや地面に墜落させて木端微塵にはすまいと考えたからだ。

降ってきた物の中から出てきたのは紅いISだった。

「これが箒ちゃん専用機こと『紅椿』。現行最高スペックの束さんお手製、第四世代型I Sだよー」

その言葉にその場にいる全員が絶句した。

「第四世代型……だと……」

「まだ各国で第三世代型の試験機ができたって段階なのに……」

そんな様子などいざ知らずというような風情で篠ノ之姉妹はパーソナライズを始めた。その作業速度の速さに驚いていると、パーソナライズは完了していた。その速度は万ですら驚くレベルだった。

「じゃあ、試運転もかねて飛んでみようかー！」

相変わらずのハイテンションで束は箒に言った。その言葉に反応して紅椿が飛翔する。その速度にその場にいた全員が驚愕した。そのうちに武器特性のデータが送られ、

武器である刀の試し振りをする。箒が右手の雨月を天に向かって突くとそこから数条のレーザーが奔った。

それを確認してか束はどこからかミサイル砲台を出して箒に向かって射出して言った。

「次はこれ撃ち落としてみてねー」

箒はミサイルを自慢の高機動でひきつけると今度は左手の空裂を薙ぐ。すると、そこからエネルギーの刃が射出され、迫りくるミサイルを一掃した。その様子を見て専用機持ちはさらに驚いた。その様子を見て、束はからからと笑った。

「織斑先生ー!」

そんな時、副担任の山田先生が端末をもつてこちらに走ってきた。息を整えることもせず、持ってきた端末をそのまま千冬に渡す。それを見た瞬間、千冬の顔が一気に陰しくなった。一通り読み終えたところで周りの生徒に声をかける。

「テスト稼働は中止だ。お前たちにやってもらいたいことがある。ついて来い」

そういつて自分はすたすたと歩き出した。

千冬が生徒を連れてきた場所はすでに多数のコンピューター、大型の仮想、実体ディスプレイ、通信装置などが存在し、さながら管制室と化していた。実際そういう場所な

のだろう。それを見て方は本格的にただならぬ状況が発生したことを知った。

全員が聞く態勢に入ったところで千冬が話し出した。

「今から二時間ほど前、ハワイ沖にて実験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三代型 I S、銀シルバリオ・ゴスベルの福音、通称福音ふくいんが制御下を離れ暴走、監視空域より離脱したとの連絡があつた」

その言葉を聞いても全員が異常事態を察知していたからか驚きはない。それを確認してか千冬は続けた。

「情報によれば無人の I S とのことだ。衛星による監視の結果、福音はここから 2 km 先の空域を通過するということが分かつた」

それを聞いて方は問いかける。

「時間換算で何分後くらいですか？」

「40分前後、といったところだ。学園上層部の判断により、我々がこの状況に対処することとなった。教員は学園の訓練機を使い海域、空域の封鎖を行う。よつて本作戦の要となる福音の対処は専用機持ちに担当してもらおう」

「マジかよ!?!」

「そんなに驚かないの」

ややオーバーリアクションをした一夏を風がたしなめる。場が静かになったことを

確認して千冬が言った。

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」

その言葉に反応しきつそくセシリアが挙手した。

「目標IISの詳細なスペックデータを要求します」

「・・・絶対に口外するな。情報漏えいがあった場合、諸君には査問委員会による裁判と、最低でも2年の監視がつけられる」

「了解しました」

その反応を見て千冬は生徒が囲む形で見ている仮想ディスプレイに情報を投影した。

それを見てそれぞれは思考を始める。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型、ねえ・・・」

「わたくしの機体と同じように、オールレンジ攻撃が行えるようですね・・・」

「攻撃と機動の両方に特化した機体ね・・・厄介だわ」

「この特殊武装が曲者だね・・・。連続しての防御は難しい気がするよ・・・」

「・・・このデータでは格闘性能が未知数・・・。偵察は行えないのですか？」

ラウラの問いかけに千冬も軽く首を横に振る。

「それは無理だ。この機体は現在も超音速飛行を続けている。アプローチは一回しかできないうらう」

「・・・てことは、一発で仕留めるしかない、ということですか」

万のつぶやきに近い確認に千冬はうなずいた。その言葉に今まで相槌を打っていただけの一夏に視線が集まる。当の本人は心当たりが全く内容でただ驚いていた。

「あなたの零落白夜で落とすつてことよ」

「それしかないですわね。ただ、問題は・・・」

「ああ。バリア無効化攻撃は恐ろしく燃費が悪い。誰がこのアホを戦闘空域まで連れていくか、だな」

「そうだね・・・。エネルギーはすべて攻撃に回したいから、移動をどうするか」

「目的に追いつける速度を出せる機体でなくてはいけない・・・。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

そんな話の流れに挟まる形で一夏が口をはさんだ。

「ちよ、ちよつと待ってくれ。俺が行くのか？」

「「「当然(だ)(ですわ)「「「」」」」」

その言葉に全員が異口同音で何をいまさらといった体で言った。その言葉に一夏はずっこける。

「・・・織斑、これは訓練ではない。実戦だ。覚悟がないなら無理強いはしない」

千冬の言葉に一夏は姿勢を正していった。

「・・・やります。俺がやって見せます」

その言葉に千冬はうなずいた。

「よし。それでは現在、専用機持ちの中で最高速度が出せる機体は——」

「待ったまーった！ その作戦はちよつと待ったなんだよー！」

千冬の言葉の途中で天井裏から束が出てくる。その瞬間千冬は片手で顔を押しさえた。束はすたりと一回転して着地を決めるとそのまま千冬に近寄つて言う。

「ちーちゃんちーちゃん、もつといい作戦が私の頭の中にナウプリンティングー！」

「さつさと出ていけ」

「聞いて聞いて、ここは断然紅椿の出番なんだよー！」

「・・・何?」

そういつて指を一本立てる束を千冬は手を放して見た。

その後、千冬と専用機持ちは溪流にいた。

箒が紅椿を展開したのを見て束がさらにいう。

「それじゃ、展開装甲オーブン」

そういうと紅椿の装甲の一部が開き、その間からエネルギーの装甲が飛び出した。

「展開装甲は第四世代型の特殊武装で、一言で言っちゃえば雪片式型が進化したものな

んだよねー。なんと、全身のアーマーを展開装甲にしちゃいましたーブイブイ！」

素晴らしいながら両手でダブルピースを作る束にほかの面々はただ驚いていた。

「それにしてもあれだねー、海で暴走っていうと白騎士事件を思い出すねー」

その言葉に反応したのは千冬だった。それを見てか束はしつこく白騎士の話題を千冬に言うが、少しすると千冬に出席簿でたたかかれていた。その直後の反応で抱き付いてきた束をはがすと千冬は言った。

「で、紅椿の調整にはどれくらいかかる？」

「織斑先生」

束が答える前に万が口を挟んだ。

「なんだ？」

「俺のセイリユウのスピードパッケージなら、数値上最速でマツハ2の速度を出せます」

「それは実戦で投入したことはあるのか？ 換装時間は？」

「ありません。が、二人のサポートくらいはできるかと。換装時間は10分あれば細かいシステムチェックも含め完了できます」

「ちなみに紅椿の調整は7分あれば余裕だねー」

万と束の言葉を受けて千冬は周りに宣言する。

「本作戦は織斑、篠ノ之、黒川の三名による目標の追跡、および撃墜を目的とする。作戦

開始は30分後、各員作業にかかれ！」

そういつて自身は作戦に直接参加しないメンバーを集めて何やら話をしていた。そして、万も自身のIS、セイリユウを展開、スピードパッケージに換装してシステムチェックを行っていた。それを行いつつ、横目で箒を見て、万は一抹の不安を感じるのだった。

15. 戦いの火蓋

そして、作戦決行時刻。所定の位置で3人は自身のISを展開させていた。事前に話し合いをして、一夏は箒が運ぶこととなっていた。出発前に一夏が箒に声をかける。

「いいか、箒。これは実戦だ。十分に注意しろよ」

「わかってるさ」

「・・・なんだか楽しそうだな、篠ノ之」

「確かにそうだな。やつと専用機が手に入ったからか？」

「私はいつも通りだ。二人こそ、作戦には冷静に当ることだ」

「わかってるよ」

「言われるまでもねえよ」

そんなことを言っていると無線が入った。

「3人とも、聞こえるか」

「はい」

「よく聞こえます」

「ノイズゼロ。通信状態は良好です。コントロール、用件をどうぞ」

「よし。今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心掛ける。討つべきは銀シルバリオ・ゴスペルの福音、以降福音と呼称する。現地での指示は黒川が出せ。いいな？」

「了解」

「織斑先生、私は状況に応じ、サポートをしてよろしいですか？」

「・・・そうだな、だが無理はするな。お前は紅椿での実戦経験は皆無だ。何かしら問題が出ないとも限らん」

「わかりました。ですが、できる範囲で支援をします」

そんな千冬と箒の通信を聞いた管制室の専用機持ちは互いに話しました。

「・・・あの子、声が少しはずんでない？」

「わからなくもないけど・・・」

そんなことを言っていると千冬がプライベートチャンネルをまず万に向けて開いた。

「黒川、聞こえるか？」

「はい」

「そう固くなるな、これはプライベートチャンネルだ。・・・一夏と篠ノ之をよろしく頼む」

その言葉に万は軽く笑って答えた。

「ええ、もちろんです」

「感謝する」

そして今度は一夏に向けて通信をつないだようだ。一夏が箒の後姿を心配そうに見つめたところを見ると、万の予感は的中した、ということだろう。つまりはおそらく、(篠ノ之自身は気づいていないが、かなり気分が高揚している。・・・何かあるかもな) そんなことを考えていると白式が紅椿につかまった。それを見てセイリユウも飛行準備に入る。合図とともに二機は同時に飛翔した。紅椿の速度を確認しつつ全開飛行を続ける。が、それでも並走が限界だ。

「これ、俺自慢の高速。パッケージなんだがなあ・・・」

そんなことをつぶやきつつI Sの処理を開始する。

「衛星にリンク、完了。目標、およびこちらの現在地を補足。現在速度で、会敵まで推測で約30秒。これよりセイリユウはステルスモードに入る。・・・ちゃんと隣にいるから安心しろ」

そういつてステルスを起動し、加速する紅椿をハイパーセンサーと望遠で捕捉する。さすがにこれ以上セイリユウは加速ができないため、こうして見つけるしかないのだ。

「福音を視認。会敵まで、およそ10秒」

「了解。会敵し次第戦闘を開始してくれ」

「了解。戦闘を開始する」

その頃、万も望遠で同じ視界に三機を補足した。紅椿に乗った状態から白式が斬りかかるが、福音はそれをひらりとかわす。それを2, 3回繰り返すと今度は福音が射撃攻撃を仕掛けてきた。

「作戦を指示する。篠ノ之、何とか福音の動きを止めろ。その隙に一夏が落とせ。俺も援護する」

「了解！」

その返答を聞きつつ自分も援護のために両手にバルカンを展開して福音に向けてばらまく。一瞬福音が万に気を取られた内に篠ノ之が懐に潜り込んだ。そのまま二刀で相手を抑え込む。

そのまま白式は降下して攻撃にかかると思った。だが、一夏は福音を通り過ぎていった。一瞬篠ノ之が硬直した瞬間に福音が紅椿の拘束をほどき白式に向かって砲撃する。それを一夏は手にした得物で斬った。

「折角のチャンスに何をしている！」

「船がいるんだ。海上は先生たちが封鎖したはずなのに……」

その返答を受けて万は望遠を海面に向けて使う。すると、そこには確かに船の姿があつた。が、そこに出たのは「国籍不明」の文字。

「……密漁船か」

「この非常事態に！」

あくまで冷静を装う万に対しいらだちをあらわにする筈に対し福音がさらに追撃をする。

「やつらは犯罪者だ。かまうな！」

「犯罪者でも人だ。見殺しにはできない！」

そんな言い合いをする二人をよそに万は結論を出した。

「……俺が退去を指示する。さつきと同じ要領で落とせ、いいな！」

ほんの少し震えた声で言いつつ自分は一気に降下、密漁船のもとに向かった。万が密漁船まで到達する前に大きな音を立てて白い何か海面に衝突した。その瞬間、無線で万は叫ぶ。

「篠ノ之！ 何があった！」

だがそれに対し篠ノ之の返答はなかった。ただ茫然自失とした様子でうわごとのように一夏の名前を呼ぶだけだ。それに対し軽く舌打ちをすると今度は管制へつないだ。「管制へ、作戦失敗。白式は撃墜されました。これより白式を回収、帰投します。念のため担架も含めた救急の用意をお願いします」

「了解。……小言は後にしてやるから無事帰ってこい」

その返答を聞くと万はIS用拳銃を密漁船の横に向けて放つ。八つ当たりであると

いうことはわかっけていてもしなければおさまらなかつた。

そして、自身はISを解除したうえで海に向かつて飛び込んだ。水中行動用パッケージに切り替えてもよかつたがそれをしていては時間がかかりすぎるし、そのまま飛び込んでISの故障の原因になりかねないからだ。自身の能力をリーダーで使いつつ一夏を引き上げ空中に出ると再びセイリユウを展開した。そこにはすでに篠ノ之もいた。

「……一夏は……」

「……気絶してるだけ、と言いたいところだが……すぐに手当が必要だろう。急いで帰投するぞ」

そしてそのまま全力飛行で旅館まで飛んでいった。

その後、夕方。箒と一夏以外の専用機持ちは作戦室の前にいた。先ほどシャルロットが管制室への入室許可を得ようとしたが、得られた返答は拒否だつた。

「……教官の言うとおりにすべきだ」

「でも、先生だつて一夏のことのが心配なはずだよ。お姉さんなんだよ?」

「ずっと目を覚ましていませんのに……」

「手当の指示を出してから一度も様子を見に行つてないなんて……」

そう、万たちが旅館に着くと、千冬はすぐさま手当の指示をすると、周りの専用機持ちに宣言した。

「作戦は中止、以降別命あるまで待機。以上!」

そういつてつかつかと歩いて行ってしまったのだ。

以降、彼女は作戦室にこもりつきりで出てきていない。

「だから? いったいどうしろっていうんだよ?」

「箒さんにも声をかけませんでしたわ……。いくら作戦失敗とはいえど、冷たすぎるのではなくて?」

「今は福音の捕捉に集中する。教官はやるべきことをやっているに過ぎない」

「ラウラの意見に賛成だ。……実の姉だぞ? その心労は俺らの比にならねえだろうさ。だからこそ作戦室に籠って福音の捕捉に専念してんだ。一夏を見舞ってそれで福音が見つからんならそうしてるだろうさ。だが、問題は……」

そういつて隣の部屋を見る。そこには一夏と、ただその横にいる箒がいた。こちらも、こもつたまま出てきていない。

「あの馬鹿どもだな」

その様子を見て鳳は方に問いかける。

「・・・ねえ、箒の様子はどうだったの?」

「一言でいえば茫然自失、だな。俺はそのシーンを直接見てないし、篠ノ之箒という人間を深く知らないからどうしてあいつまでああなってるのかはわからん。だが、おそらく一夏をこんな状態にしたのは自分のせいだと、そう思ってるんじゃないか?」

「・・・罪悪感に押しつぶされそうになっている、ということですか?」

「たぶん、それもある。・・・そういえば、作戦失敗直前の話はお前らにはしてなかったな。実は——」

そして、万は密漁船を一夏が見つけたあたりから帰投までの流れを大雑把に話した。話し終え、さらに万は続ける。

「・・・ここからはオフレコで頼む。・・・俺は以前、篠ノ之に力とはどういったものか、といった質問をされたことがある。あいつとたまに剣で打ち合いをしているのはそれがきつかけなんだ。さつきも話した通り、篠ノ之は見捨てるといった。やつらは犯罪者だと。そして、あいつの求めてた力は「守る力」だ。そこから推測されるのは・・・」

「・・・自分の守るべきものを見失って、その結果が今の状態、ってこと?」

「おそらくはな」

そんなことを言っていると先ほど部屋に入って行った山田先生と入れ違う形で箒が出てきた。大方山田先生が何か言ったのだろう。箒はこちらを見向きもせずどこかへ

行ってしまった。

「・・・ねえ、そういえばなんで福音は捕捉できないんだろう？」

「そういえばそうですね・・・」

「お前ら、あのデータの内容覚えてないのか？ 福音はステルスを積んでる。光学迷彩は積んでないみたいだったから、そうなら目視でとらえる・・・ほか・・・」

言っていた方の口調が尻すぼみになっていく。そのままはなにやら考え事を始めた。その様子を見て嵐は問いかける。

「・・・どうしたの？」

それから少しして方は顔を上げた。

「なあラウラ。お前、ドイツ軍のほうに連絡取れるか？」

「とれるが・・・どうしてだ？」

「今すぐこの辺の空域の衛星写真がほしい。できるだけ解像度を上げてだ。合法的に入手するなら、軍事衛星を利用するのが一番手っ取り早い」

「わかった。すぐ手配しよう」

「頼んだ」

その返答を聞くとラウラは席をはずした。一応軍部と連絡を取るため傍聴防止だろう。それを確認してからシャルロットが口を開く。

「でも、捕捉したとしてどうするの？」

「決まってるでしょ。リターンマッチよ」

「・・・悪いが、リターンマッチ、俺はパスするぜ」

「なぜですの!？」

思いがけぬ万の返答にセシリアが驚きの声を上げる。

「俺も含めて全員が行ったら、誰が一夏を守るっていうんだ？ お前らが迎撃してる間にここに何かがあったらそれこそ大ごとだ。・・・だから、任せた」

最後の一言は絞り出すような口調だった。その言葉に全員が万の思いを知った。だからこそ、首を縦に振るしかなかった。

「それとだ。万が一、一夏がいけると言い出したら俺が責任をもつて運ぶ。無線はいつでもつなげられるようにしておけ」

「・・・あなたの思い、承りましたわ」

「ああ、頼んだ」

そんな会話をしているとラウラが戻ってきた。

「福音を捕捉した。ここから約30km離れた沖合にいる。どうやら静止しているようだ」

その返答に満足気に万は微笑んだ。

「よし。んじやあ嵐、篠ノ之に発破かけろ」

「それはいいけど・・・なんで私？」

「ある程度あいつからの信頼を得ていて、しかもなおかつ裏表のなさそうな性格のやつって考えたらお前になった。頼めるか？」

「あつたりまえよ！・・・それより、一夏のこと、頼んだわよ」

「おう、任せとけ。そつちも、頼んだ」

「うん、任せてよ」

そういつて四人は走って行った。その様子を見て方は一夏が寝ている部屋に入った。

(バイタルは正常、傷こそあるものの、それ以外は寝ているに近い、か・・・とつと目え覚ませよこの馬鹿が)

心の中で軽く毒づきながら方は隣に座った。そして、彼のバイタルを計測しながら方は思考する。

(紅椿、現状文字通り最強のＩＳ・・・。そのテストフライトが一通りあつたところでこれ、か・・・)

あまりに間が良すぎる。ちょうどそれがお披露目になった瞬間に福音の暴走など。これによく似た現象をどこかで見たような気がする。だが、どこでだ。そう考えているときに一つの事件を思い出した。

(・・・そうだ、白騎士！あれだ！)

白騎士もISが発表された直後に大量のミサイルがクラッキングされ発射されたのだ。ご丁寧に問題がクラッキングされて発生している、というところまで一致している。もし仮にこの二つの事件が同一犯であるとしたら、その人間は天才であることも確かなのだが、目的も一致しているのならその目的も読めてくる。それと同時に、主犯もだいたいの見当がつく。ついてしまう。それがわかった瞬間に方は思わず奥歯をかみしめていた。

(たかだかそんな目的のためだけに、どれだけの人間を巻き込む気だ・・・！)

そこにはかすかだか確かな怒りがあった。

そんな時に部屋の扉がノックされる。返事をしつつ目を向けると入ってきたのはだぼだぼの制服を着た女生徒だった。

「・・・布のほとけ仏さん、だっけ？何の用？」

「ちよつとね、織斑先生に頼まれてよろずんのこと呼びに來ただけー」

その言葉に方は内心で少々不安を覚えた。なにせ相手はあの福音だ。あいつらでも苦戦は必至だろう。

「・・・わかった。一夏を頼む」

「おまかせー。おりむーが目覚めたらどうするー？」

「とりあえず織斑先生に伝えてくれ。じゃあ頼んだ」

そういつて軽く肩を叩くと、自分は部屋の外に歩いて行った。

部屋に入り、大型ディスプレイを見つめる千冬に方は声をかけた。

「お呼びでしょうか、織斑先生」

「ああ、呼んだ。これを見ろ」

そういわれて大型ディスプレイを見る。すると、そこには6つの輝点。それを見て表には出さず自分の直感が当たったことを悟った。

「これを見てどう思う？」

「大方、俺以外の専用機持ちがどうにかして敵の位置を捕捉、追撃した、ってところじゃないですか？」

「・・・やはりお前もそう思うか」

そういつてため息を一つ。そして方を正面から見ていった。

「お前は何か言われてないのか？」

「・・・セシリアは他人の頼みを無碍にするようなやつじゃないし、他のやつらにしたら思い人があんな風になって黙ってるようなやつじゃないでしょう」

「・・・もう一度聞く。お前は何か言われてないのか？」

「誘われはしました。追撃をしないか、と。しかし、敵が単独であるとは限りません。故

に自分は残りました」

「・・・そうか。ならばなぜ止めなかった」

「止めて聞くようなやつじゃないでしょう、あの姦し娘どもは」

その言葉にふつと笑い、直後に表情を引き締めていった。

「わかった。聞きたいことはそれだけだ。下がれ」

それに対しひとつ礼をして方は部屋を去ろうとした。それを千冬が呼び止めていった。

「ああ、そうだ。・・・お前はこの事件、どう見る？」

その言葉だけで方は質問の意図を理解した。

「さしずめ、マッチポンプ、といったところじゃないですか？」

「・・・そうか。呼び止めてすまなかった、下がっていいぞ」

その短いやり取りを終えると、方は今度こそ部屋を去った。

16. ストライク・バツク

方が部屋に戻ると、布仏だけでなく後二人いた。確か、名前はそれぞれ鷹月と相川と
いったか。

三人のうち相川が気づいてこちらを振り向いた。

「あ、黒川君。織斑先生の話って何だったの？」

「長くなるから後で話すよ。．．．一夏は？」

「．．．まだ目を覚ましてない。このまま死んじゃうとか．．．ないよね？」

不安気な言葉を半ば無視して方は一夏の体に触れた。バイタルを読み取って一つ頷く。

「傷の回復に専念してるだけで、それ以外はいたって健康体だ。しかも、傷もかなり塞がっていると来ている。遠くないうちに目が覚めるだろう」

その答えに三人がほっと一息をついた。

ちようどその時、後ろからかすかな声が聞こえた。

「．．．え、と、ここ、は？」

その言葉にはっと方は振り返った。

「ようやくお目覚めか、この寝坊助。・・・ちよつと失礼」

そういつて一夏の体に触れてバイタルをもう一度測る。そこに現れたデータは、

「・・・わーお、マジか。お前人間か？」

「開口一番、ひでえ言い草だな」

「だってよ、意識不明の重体で運ばれてくるほどの傷を負って高々数時間で傷が完治して目覚める人間とか、俺聞いたことねえぞ。それこそ、物語に出てくる吸血鬼くらいか。もつとも、I Sに操縦者の生体再生機能でもついてるってんなら話は別だけど、今のところそんな聞いたことないし」

そこで一回区切ると方は三人に向けていった。

「ごめん、何か飲み物を買ってきてくれる？」

「わかった、何がいい？」

「そうだな、ミネラルウォーターとスポーツドリンクで頼むわ」

「わかった、ちよつと待ってて」

そういつて三人は部屋を出ていった。それを確認すると、方は一夏に顔を向けた。そこに先ほどもまでの微笑みはなかった。

すると突然、手際よく点滴を抜き、酸素マスクを取った。あまりにも突発的な奇行に一夏が目丸くしていると方が言った。

「単刀直入に言う。俺以外の専用機持ちは、福音の追撃に向かった」

その言葉に一夏は純粹に驚いた。

「行くか？ 行くんなら、俺が運んでやる」

その返答に対する答えは即答だった。

「当たり前だ。あいつらだけに任せていられるか！」

「OK、いい返事だ」

そしてにやりと微笑み今にも駆け出しそうな万を一夏が呼び止めた。

「ただ、ちよつととつてきたいものがあるんだ。いいか？」

「それくらいの間はある。が、手短に頼むぞ」

それに対し一言謝辞を述べて自分の部屋に走った一夏を万が追う形で二人は走る。幸い、他の生徒は緊急事態につき自室待機を指示されていたようで、誰ともすれ違わなかった。

一夏が部屋に入って取り出したのはリボンだった。いったい何に使うのかはわからないが、こんな緊急事態に不要なものを持っていくほどのほんとはしていいないだろう。そう思った方はアイコンタクトをとって部屋から飛び出した。それに一夏も続く。

砂浜につくと、万はセイリユウを展開した。

「今、セイリユウはステルスを起動させてる。こいつのそばならレーダーに感知されな

い。とつとと白式を展開しろ」

そういわれると一夏は白式を展開して万の肩につかまった。だが、その一瞬でも白式の姿を見て万は驚いた。

「二次移行セカンドシフト……いつの間に済ませてたんだ？」

「……俺にもわからない。けど、今は早くみんなのところに行かないといけないだろう」「それもそうだな……。さて、しつかりつかまつてろよ！」

そういうとセイリユウと白式は飛翔した。

二人が現場に到着したとき、そこには形態が変化した福音と、倒れる専用機持ちの面々がいた。

「ちつ、こつちも二次移行セカンドシフトを済ませてたつていうのかよ!？」

「箒！」

そんな様子などいざ知らず、一夏は箒のもとへ飛んでいった。

その様子を目で確認すると、万は福音に肉薄した。それに対し福音は一点での強力な砲撃を放った。瞬時にかわしたものの、かすったことでエネルギーを持っていかれた。かまわず突撃し逆手で持ったナイフで斬りつける。が、それを福音は難なくかわす。それを見ると、さらに足の隠しブレードを使って回し蹴りの要領で斬りつけるが、今度は

その足をつかまれて投げ飛ばされた。

空中で受け身を取って停止すると、そこには復活した専用機持ちと一夏がいた。

「・・・お前らしぶといな」

「あつたりまえよ」

「この程度で戦闘不能になっていては、代表候補生の名折れですわ」

「そうだね。じゃあ、そろそろ反撃といこうよ」

「同感だ。エネルギーは十分だから、心配する必要はない」

「みんな・・・！」

その様子を見て一夏は軽く驚き、万は口の端で笑った。

「よし、じゃあ大雑把な方針だけ言うぞ。最終的には白式の零落白夜による撃墜を目標とする。そのために、なんとしてでも相手の動きを止める。別命があつたらまた言う。

ラウラ、セシリアは遠距離から、デユノアと凰は遊撃、篠ノ之は近接で援護。俺も基本遊撃で動く。行くぞ！」

その言葉に反応して全員が行動を開始した。

何とか全員が福音の動きを止めようと動く。だが、なかなか動きを止めることはできなかつた。そうしているうちに白式のエネルギーがほぼ空になってしまう。

（ちつ、なんとか回復させたいけど、そんな暇はない・・・！どうする、あれを使うか・・・）

?でも、あれは零落を使う以上に決定的な隙が必要になる。くそ、万事休す!」

そう思った瞬間、紅椿が少し遅れて戦闘空域まで上がってきた。

「一夏、これを受け取れ!」

そういわれ一夏が手を取ると、白式のエネルギーが回復した。

「……いったい何が!?!」

思わず方は叫んだ。それに対し、箒は冷静に答える。

「……紅椿の単一能力だ。どうやら、エネルギーを回復するものらしいのでな」

それに方はしばし驚きを隠せずにいたが、やがてまた口の端で笑っていった。

「……結構。さて、じゃあ反撃開始と行くぞ者ども!」

そういつて自身が真つ先に突撃していった。それに追従する形で残り全員が攻撃に移った。

まず、箒が福音の動きを止め、そこに一夏が攻撃を加えようとするが、同じ手を二度は食わないといわんばかりにきつきと箒の拘束を解き一夏に対峙する。なかなか隙のできない福音に攻めあぐねているときに、ラウラの砲撃が福音に決まり、標的がラウラに移る。その瞬間に一夏がもう一度狙うが、それをかわして福音はラウラに砲撃をした。が、その広範囲攻撃を方が横から掃射でほぼすべて撃ち落とす。その瞬間、後ろ

に回り込んだセシリアが一発見舞いさらに風が衝撃砲で追撃する。二人を認識した福音は上に飛び上り、広範囲の砲撃で反撃をかました。それを各々が防ぐ。

その次の瞬間、万とセイリユウはある驚くべき発見をする。それと同時に上から福音に襲い掛かる白い閃光を見た。

制止は間に合わない。そう判断した万はその上から降ってくる軌道から白式の進路を予測し万はスラストを全開で吹かして先回りをした。予想通り零落白夜を発動し雪片が装甲を貫いた瞬間万が白式の襟首をつかんで後ろに放り投げた。代わりに馬乗りになったセイリユウはその手に持ったものを福音に取り付ける。直後、電流が周囲に迸り、福音が強制解除させられた。

そこにあつた、いやいたものに全員が驚愕の色を示した。

なぜなら、そこにはわき腹から血を流す女性がいたからだ。

「そんな!？」

「なんでだよ!？」

「情報では無人機となつていたはずなのに……!」

わき腹から血を流す女性を見て驚きと疑心暗鬼がないまぜになつた表情を浮かべる面々を無視して、万は女性の体に触れて血液の循環をコントロールする。

かつて、学園都市第一位が顔見知りの研究者に対して行つたように、血が体外に出な

いよう、うまく破れた血管から血管へ血液を送っていく。

「状況終了。要救助者1、すぐに救急の用意を。具体的には、担架と止血の用具の準備を帰投するまでに済ませてください」

「了解、とつと戻ってこい馬鹿ども。だが、担架と止血の用意が必要とはどういうことだ？」

「・・・今、細かい報告ができる自信がありません。詳細な報告は帰投後にします。とにかく、今言った用意をすぐお願いします！」

オーブンチャンネル越しに聞こえるラウラと管制の無線が聞こえるのもほとんど聞き流した。演算式が安定したところで万は周りに向けていった。

「悪いけど俺は演算しながら飛行することになる。飛行だけならいけるだろうけど、それ以上はたぶん無理だ。だから、悪いが俺を護送するように帰投してくれ」

「・・・了解。そんな真似はお前しかできないしな」
「恩に着る。じゃあ、行くぞ」

そういつて専用機持ちは帰投に入った。

帰投した直後、千冬は小言の一つでも言おうと思っていたのだろうが、万の両手の中にあるものを見た瞬間に周りに指示を出した。

「黒川、その女性を担架に。先生方は速やかに救急室へ運んで手当を。そこに止血の用意がワンセットあるはずですよ。足りないのなら申し付けください」

万は言われた通り女性を担架に乗せた瞬間にセイリユウを解除してまた触れた。その様子を見て千冬は目を三角にしたが、その直後万の反論が飛んだ。

「俺が女性の裸を見る可能性があるのは否定しません。が、それは彼女の命とどちらが大切ですか？」

その言葉に千冬は黙り込んだ。それを確認して万は動く担架に合わせて一緒に歩いて行った。

結論から言ってしまうえば、女性は命をつないだ。腹部をうがたれたにもかかわらず彼女が一命をとりとめたのは、彼が血流の操作をして出血が最小限に抑えられたというものもあるが、教師陣の止血の手腕あつてのものだろう。その手腕は、暗部、タスカーとして止血をたびたびしていた万の目から見ても見事の一言に尽きるものだった。

止血作業を終えて保健室へ女性を運んだ後で千冬のもとに出頭すると、そこにはもうすでに全員がいた。万が来たことを確認すると、千冬は口を開いた。

「作戦完了！．．．とりたいところだが、お前たちは重大な命令違反を犯した。帰ったら反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングだ、覚悟しておけ」

「あの、織斑先生。そのくらいにしておいてあげたらどうですか？みんな疲れているでしょうし」

隣にいた山田先生がそういうと、さらにいくつか小言を言いたかったであろう千冬は紡ぐ言葉を変えた。

「・・・しかし、まあ、よくやった。全員無事で何よりだ。ゆつくり休め」

そういつてつかつかと宿舎のほうに戻って行った。振り返る寸前、その頬は少し赤く染まっていたように見えた。

千冬と山田先生の姿が見えなくなったことを確認してから、万は一夏に声をかける。

「一夏、俺の言いたいことがわかるか」

一夏の返答はない。が、そのまま続けた。

「あの傷は、女性の腹をうがった傷は、まぎれもなくお前が、雪片式型でつけた傷だ。俺と先生方の手当てがなければ、あの女性は命を落としていた可能性すらある。これでもなお、ISは兵器じゃないと言い切れるか」

それに対し一夏は一言もしゃべらない。ただただうつむき、拳を握りしめるだけだ。

「いい加減現実を見る。ISは、誰が何と言おうと兵器だ。たやすく人を殺められるものなんだよ。今回は俺がいたからよかった。だがな、覚悟を決めないと後々取り返しので

かないことになるぞ」

その言葉にすら一夏は何も答えなかった。が、その地面が濡れていないところを見ると泣いてはいないのだろう。その様子を少しの間見つめると、万は体の向きを変えた。

「俺はしばらく保健室にいる。一応手当をした身だからな。何かあったら呼んでくれ」
そういうとすたすたと万は歩いて行つた。

保健室につくと、例の女性はやはりまだ目を覚ましてはいなかった。それもそうだが、万が手当をしていなければいったいどれほどの血が流れていたのかすらわからないほどの大けがだったのだから。むしろ、こんな短時間で目が覚めていたら万が驚いていた。

そんな本音を胸にしまい込んで女性の首筋に手を軽くあてる。そのまま生体電流などを測るとすぐ手を離れた。

(やつぱり、一般的な範囲内で傷の治癒が始まっている。ということは、やはり一夏が特例なのか、それとも白式が異常なのか・・・)

だが、他のバイタルは特に異常も見当たらない。この分ではあと数時間もすれば目を覚ますだろう。だが、いつ目を覚ますまでかはわからない。さすがに目を覚ました時誰もいないのでは不安だろう。幸いなことに英語は完璧だ。長らく使っていないが、日常

会話くらいは大丈夫だろう。

だが、目を覚ますまではどうしようか。そんなことを考えていると一つの案が思い浮かんだ。すぐさま実行に移すため、万はボックスからあるものを取り出した。

夕食を終えて戻りさらに作業を続けていると、隣からかすかな声が聞こえた。そちらに目をやると、かすかだが例の女性が目を開けていた。それを見てすぐさま目の前のものをしまうと、女性に英語で話しかける。

「Did you wake up? (目が覚めましたか?)」

その言葉でこちらに気づいたのだろう、起き上がろうとしたが、それを万は制した。

「You mustn't get up yet. (まだ起き上がってはいけません) Wond may open. (傷が開きます)」

そして万は女性の背中に手を入れてやさしく寝かせた。また寝そべると顔を万に向けて問いかけた。

「Thanks you for helping me. (助けてくださってありがとうございます) I'm Natasha Fair's. (私はナターシャ・ファイルスと言います) Who are you? (あなたは誰ですか?)」

「My name is Yorozu Kurokawa. (黒川万と言います) I, m first grade of the I S School. (I S 学園の1年です)」

「I see. (そうですね) By the way, are you a Japanese? (ところで、あなたは日本人ですか?)」

「Yes, I am. (そうですね) What about it? (それが何か?)」

その返答を聞くと相手は一呼吸おいてから口を開いた。

「なら、こちらのほうがいいかしら?」

それに対して万は驚きに目を見開いた。相手がアメリカ人かイスラエル人であろうと思っていたからこそ英語でしゃべっていたからだ。それは、相手が日本語をしゃべれないかもしれない、という前提の上だった。

「え、ええ、確かにそちらのほうがこちらとしてはやりやすいですが……。あ、少し待つてください、教員に伝えてまいります」

そういうと部屋を出た。そこにはちょうど千冬がいた。特に取り込んでいる様子もなかったのでは呼び止めた。

「織斑先生」

「黒川か、どうした?」

「例の女性が目を覚まされましたので、報告をと思ひまして」

「そうか、ご苦労。会おう」

「わかりました。それと、相手は日本語をしゃべれるようです」

「・・・そうか、わかった」

「では、自分はそろそろ部屋に戻ります」

「いや、お前も立ち会え。仮にも治療した側だ、その手の質問にも回答できるだろう」

「そういうわけては仕方がない。万は千冬と部屋に入った。」

「部屋に入った時、その女性の顔を見てかすかに千冬は驚いたようだった。」

「・・・久しぶりだな、ファイルス」

「ええ、久しぶりね、ブリュンヒルデ。・・・まさか、あなたが教師をやっているなんてね」

「まあ、私にも思うところがあったのだ。・・・体は大丈夫か?」

「まあ、ね。傷は痛むけど。これでも、あの子と飛ぶためにある程度は鍛えてあるから、これくらいでへこたれるようなことはないわ」

「そこまで言ったところで彼女の顔が曇る。」

「ねえ、あの子はどうなったの?」

「待機状態となっています。今はISの自己修復機能が働いているようですが、機体ダ

メージが大きいので回復までには時間がかかるかと」

ナターシャの問いかけに答えたのは意外にも万だった。それに対し千冬が問いかける。

「・・・なぜそこまでわかる」

「二応、身体検査みたいなのはしましたから。その過程で、ISが待機状態を知っていた、というだけですよ」

淡々と答えた方に嘘をついている様子はないと判断したのか、ナターシャがさらに問いかけた。

「そもそも、なんで待機状態なのかしら。普通、撃墜されたらどこかで整備される物じゃない?」

「ええ、確かに。ですが、零落白夜・・・バリア無効化攻撃を放つ直前、自分が生体反応を感知、止めることはできませんでしたがその直後にそれを放った剣を持っていた人間をはがして剥離剤リムーバによるIS強制解除をしたためです」

「・・・剥離剤・・・だど?」

聞きなれない単語に千冬が妙な表情をする。

「ええ。自分が開発した兵器です。もつとも、他の人も考えそうなものですが」

「それはいったいどんなものなのかしら?」

「ISを、一回だけ強制解除できる、というものです。一回使うと耐性ができるため、一つのISにつき、使えるのは一回のみです」

それに二人は驚いた表情をした。

「・・・すごいものを開発したな？」

「ええ、たまたまでしたけどね。と言っても、コストがかかりすぎるので量産は見込めませんけど」

「そうか・・・」

そんな会話をしていると、千冬は教師の顔になって言った。

「さて、ここからはお前でも聞かせることはできん。下がれ」

「はい、失礼します」

そういつて方は部屋を退出した。

その日の深夜、部屋の中で方は例によって自身の端末でクラッキングを行っていた。今度見ていたのはアメリカの情報だ。かつて学習装置で完璧にさせられた英語のスキルのおかげで入手した情報を読み解く必要がないのは幸か不幸かといったところだろう。そしてダウンロードしつつ今ダウンロードしているものの情報を見る。

(なるほど、ここをこうすることでこういう……。これは盲点だったな、確かにこうすればより多目的化できる……。)

そうこう考えているうちにダウンロードが終わり、さっさと痕跡を消しつつネットワークから切断すると思考を開始する。

(福音は機体凍結、その操縦者、ナターシャ・ファイルスは退役扱い、か。まあ順当だろうな。それぞれの行われた時刻から察するに、おそらく機体凍結は暴走直後。それを行おうとして機体側にブロックされた、ってとこだろうな。ナターシャ氏の処遇は……。まあ、無人機っていう情報を流した以上、パイロットもいないことにしたほうが楽ってとこかな。とりあえず、今はそれだけ知れたから細かく考えるのは後にするか)

そして、ダウンロードを終えた情報をじっくり見直すと、またさらに後ろに大きなものを出す。

(いろいろ細かいことをごちゃごちゃ考えるのはこれを終わらせてからだ)

そう思ってその上の書いている途中の紙にさらに何かを書いていった。

17. 暗闇の中

それから時は経ち、夏休みに入ってから少ししたとき、万はとある場所を尋ねてきていた。

近未来的なビルが立ち並ぶ中の一つに入り、見た目は何の変哲もない扉の前に立つと、隠してあったコンソールを使って指紋と静脈、そしてナンバーロックといった電子ロックを解除して中に入った。

ここは学園都市のとある部屋で、彼自身がカスタムをしてセキュリティを高めてある。そして、この部屋はかつて万が生活していた部屋だった。

前に生活していたままほとんど変わらない部屋の中の電気をつけて棚の引き出しを一つ開く。そこには大量の銃器が入っていた。特に欠損がないことを確認すると、前々から書いてあった紙を取り出してスキヤナにかける。すると大型ディスプレイに三面図が映し出されると同時に、奥の部屋から音が聞こえた。奥の部屋に向かうと、機械とそれに見合う材料、工具が出てきた。その操作自体は自分でしろということなのだろう。

作業に取り掛かろうとしたとき、部屋の中に備え付けられた電話が鳴った。マイルー

ルに従い3コール目でつなぐ。

「はいもしもし」

「WC6F」

その言葉でわかった。かつて自分が使っていた暗号。その中の一つに過ぎないが、それだけで十分だった。

「・・・用件をどうぞ」

ため息をつきたくなるのをこらえて相手の返答を待った。もとより、ここに来ると決めた時点でこのようなことになるのではないかというのは予想がついていた。

依頼内容は問題分子の鎮圧。鎮圧といえば聞こえはいいが、早い話が『殲滅』だ。金には困っていないが、仕方がない。学園都市のほうの口座は空にしてあるが、まだ残ってはいるのだ。

相手の説明を聞き終わり、ある程度の創造命令を機械に下すと、万はまたロツクをかけ直しながら部屋を出た。

言われた場所に行くと、そこには大量の人間がいた。おそらく、彼らが依頼にあつた問題分子だろう。となればやることはひとつだ。幸いなことに、ここでは自分の能力を制限するものも必要もない。

堂々と正面の扉を破り入ると中の人間が一斉にこちらに向いた。が、武装を向けないところを見るとどうやらこいつらの大半は能力者らしい。

「俺としてはあんたらに恨みはないけどお、依頼だからごめんねえ」

軽口のような宣言とともに彼の一方的な「狩り」が始まった。

特に苦戦することもなく、10分ほどで殲滅を完了し建物を出ると直後に携帯が鳴った。

「はいもっもっ」

「WC6F」

その声は先の依頼人の声だった。大方どこからか見ていたのだろう、そんなことは今まで何度かあったから慣れっこだった。

「依頼は完了しました。後始末と報酬をお願いしますよ？」

「わかっています。もうすでに報酬は振り込み済みです」

「・・・手際のいいことで。では」

そういつて電話を切ると、万は部屋へ戻って行った。

部屋に戻ると、そこにはもうすでに入力された作業をほとんど終えた装置がまだ稼働

していた。その仕上げを見届けると方はほぼ完成形ともいえる機体に手を触れ——
 —ようとしてやめた。そして手袋をはめると自ら工具を手にして仕上げの作業にか
 かった。

作業の手を止めずに方は考える。

(・・・いくら暗部が解体されたからっていつても、どうあがいてもああいったやつはい
 るもんだな。まあ、仕方のないことではあるが。収入が消えないのは、まあ・・・悪く
 はないが・・・)

正直に言う、人を殺すことに躊躇はないが、良くは思っていないことも確かだ。殺
 しという行為に一種の快感を覚えそれに溺れることとならないよう彼が調整している
 のもあるのだが。それに、仕事人^{タスクカー}として生きていくと決めたときより、そんな覚悟はで
 きていた。

だが、今はそれより。

(これを邪魔されなければいいんだけどな・・・)

そう思いつつため息をついた。幸いなことに、ラボとは連絡がついている。これから
 やるべきことの舞台はもうすでに整っていた。

仕上げが終わると、彼はそれに乗り込んだ。乗り込んだ状態で仮想ディスプレイをい
 くつか表示させそれら进行操作していく。ほどなくして初期設定を終えると、方は服を着

替えた。

「無理を言つて済みませんでした」

それからさらに10日ほど経つた日、方は画面の前で頭を下げていた。その画面には、年老いた男性と壮年の女性が写っていた。

「この程度のことと気にする必要などないさ。前も言つただろう？ 君はまだ子供だ、もつと大人に頼つていいのだよ」

「そうよ。登録改変なんてたやすいのだから。私たちはそんなの何回もやっているのだし」

「・・・ありがとうございます」

それに対し所長は鷹揚に手を振り、懇意にしている先輩は笑つて頷いた。そんな様子に、方は一度上げた頭をまた下げた。

「・・・しかし、あれはすごい能力を持っているな。君の技術力には感心したよ」

万の様子を知つてか知らずしてかはわからないが、所長が心から感心したように言つた。それに先輩も同調する。

「本当よ。あれ、半ば反則じゃない？」

「いえ、たまたま思いついた考えを、構想を練っていたものに付け足したものです。とはいっても、自分でもすごいものを作ってしまったという自覚は多少なりともありますが」

「まあ、ね。・・・で、どうするつもり？」

「表向きは隠し通します。まあ、看破されたりしたらそれまでですけど。それより、セイリュウは本当によろしいのですか？」

「ああ、構わないよ。あと二機あるしね」

「・・・ありがとうございます」

そういつてさらに頭を下げた。その時、部屋に備え付けられた電話が鳴った。

「・・・すみません、これくらいで失礼します」

「ああ、がんばりたまえ」

その言葉をありがたく頂戴して方はテレビ電話を切つて電話にでた。

その数時間後、方は指示された場所に向かった。

先ほどの電話も仕事の電話で、今回の依頼は超大規模スキルアウトの掃討だった。なんでも、複数のスキルアウトが手を組んで生まれた大規模な集団のため、複数の組織に依頼していると言っていた。そのうちの一角を彼が担当することとなった。

指定された場所まで来ると、さつそく轟音と閃光が彼を襲った。大出力のスタングレネード、不意打ちで使われたそれにより彼の聴覚と視覚はしばらくにわたって奪われた隙について、スキルアウトが物影から対物ライフルで万を狙撃した。

対物ライフルは、かつては戦車などにも使われた大口径かつ大威力の銃だ。その威力の大きさは着弾時の煙の大きさが物語る。これでは撃たれた人間は肉片も残らず文字通り「吹き飛び」だろう。

だからこそ、撃った本人も後ろに迫る影に気づかなかつたのだろう。

「人間に対してはいささかオーバーキルすぎない？」

その声が聞こえたときはすでに遅く、その眉間には貫通銃創が刻まれた。

「さて、お片付けと参りますか」

そういつて彼は暗闇に駆け出した。

それから10分ほどで指定されたエリアの掃討を終えた万が少し索敵範囲を広げる形で歩いていると、銃声がほど近い位置から聞こえた。気配をひそめつつ歩み寄ると、そこにはサブマシンガンと思われる銃を乱射するスキルアウトと思われる人影と、正面に何か液体を展開して涼しい顔をしている少女がいた。

もしものことがあれば敵対するかもしれない相手だ、と思つて諜報もかねて影から見ていると、万はあることに気づいた。

少女は万の知る人物の一人だったのだ。名前はまだわからないが、水着を買いに行つたときに万たちを尾行していた少女だったのだ。

なぜこんなところにいるのか、と万は考える。彼女はあの時、万の記憶が正しければ I S 学園の制服を着ていたはずだ。そんな少女がなぜこんなところに。

その思考は轟音によって強制的に中断させられた。周囲の湿度が異様に高いことを見ると、水蒸気爆発でとどめを刺したのだろう。

「待てよ。あんた、何者だ？」

死体を確認して去ろうとする少女を万は呼び止めた。それに対して相手の少女は飄とした笑みを浮かべた。

「あら、黒川くん。久しぶり、あの時以来かしら？」

「そんなことはどうでもいい。俺の質問に答えろ。お前は何者だ？」

そういつつ万は大口径の拳銃を向ける。これの直撃を食らえばひとたまりもないだろう。だがそれでも相手の少女は冷静だった。

「答えるからその銃をおさめてくれない？ おねえさん、血の気の多い子は嫌いよ？」

そういつつ手の中の扇子を広げた。そこには「暴力反対」の文字が達筆で書かれていた。とりあえず万は拳銃を持った手を下げた。

「いい子ね。．．．さて、私は更識さらしき楯たてなし無。 I S 学園では生徒会長も務めているわ」

「……とりあえずは信用してやる」

そういつて方は背を向けた。

「えー、それだけー？つれないなー」

「あんたが面白かろうがつまらなからうが俺には関係ない」

「それはどうかにやーん？」

女生徒、もとい楯無に背を向けて去ろうとしたとき、目の前に茶髪の女が現れた。その女を万はデータ上で見て知っていた。故に、無意識のうちに身構えていた。

「……何の用だ、麦野沈利」

「あら、私を知ってるんだ？」

「まあ、な。あんたは有名人だからな」

「それは否定できないわね。私個人としてはあなたに用はないわよ。だけど、上があんたに接触しろってうるさくってね」

そんな麦野の発言に方は心底怪しいという表情を表に出した。

「上だあ？ 一体どういうことだよそりやあ」

「なんでも、一応学園都市出身でIS操縦者のあんたが戻ってきたから、この機に何かしら情報を引き出せ、だど。まったく、戦争でも起こす気なのかねえ」

「そりやあ難儀なことだ。でもな、俺から情報を渡す気はねえ。ま、そっちが勝手に入手

する分には構わんがな」

その言葉を隣で聞いて、真意をつかんだ楯無がぎよつとしたような顔つきになった。「ちよつと、そんなことしたら問題になるわよ?」

「知られた側が知られたと知らなければ特に問題はないでしょう。つまるところ、俺とあなたが黙つていれば特に問題もないつてわけです」

そんな横暴極まりない発言に楯無は軽く頭を押さえた。その様子を横目で見つつとにかく、と彼は切り出した。

「あなたはここで誰も会わなかったし、聞かなかつた。それでいいでしょう。では、自分もこれで」

そういつてつかつかと万は歩き出した。その後ろから麦野がついてきているのは能力でわかっていたから、後ろを振り返る必要はなかつた。

こうして麦野を部屋に入れた万は、照明をつけて真つ先に部屋の奥へ向かつた。この部屋を使いだしてからほとんど使わなかつた茶葉を取り出してガラスのコップに注ぐと、無言でここまでついでついできた客人の前に出した。

「粗茶ですが」

「ありがとう。でも、私がこんなものほしいと思つてないことはわかつてるわよね?」

そういつて麦野は下から万をにらみ上げる。普通ならすくみ上つてしまうその眼を

ものともせず方は返す。

「もちろん。こっちだ」

そういつて彼女に背を向けて歩き出した。奥の部屋に入ると、その部屋はすでに空だった。それもそうだ、ほかならぬ方がそうしたのだから。

麦野が何か言う前に、方はその部屋の中心でセイリユウを展開、しゃがみこんでから飛び降りた。

「へえ、これがIS、か」

「ああ、そうだ。既存兵器の中では学園都市製のものを除いて最強クラスに鎮座するパワードスーツ。その俺専用機だ」

「専用機、っていうからにはそれなりにレアなのか？」

「ああ。ISは世界に500とないからな。自分専用のISを持つてるってだけで希少だ。笑えるだろう？」

「確かにな」

万の言葉に口の端で笑うと、麦野はセイリユウに近づいて一言発した。

「なあ、これ触っていいか？」

それに対し特に疑問を持たずに方は了承した。否定する理由がないからだ。その返答を聞いて麦野がセイリユウに触った瞬間、彼女は軽く頭を押さえてしゃがみこんだ。

「おい、大丈夫か!？」

思わず駆け寄って顔色をうかがう。その顔には疲労の色が濃く出ていた。

「・・・なんとかな。なんか、頭の中に一気に情報を流されたような感覚がして、めまいがしたただけだ」

その言葉にはつとして方はセイリユウを見上げた。そこにあるセイリユウは――
起動していた。

確かに降りるときにセイリユウの電源は落とした。だが、今は起動している。そして、今の麦野の言葉。それらから導き出せる結論はひとつだった。

「あんた、どうやらIS適正があるみたいだな」

「・・・は?」

何を言っているのかわからないという様子の麦野に方は続けた。

「つまりだ、あんたはISを動かせる。こいつを動かせたことが、その証拠だ」

それに対して麦野は黙っている。表情が消えたその顔からは、いったい彼女がどう思っているのかを推し量ることはできなかつた。

「で、どうする?」

その言葉に麦野は顔を上げた。

「どうする、ってどういう意味だ?」

「こうなった以上、選択肢は二つだ。一つ目は、この街を出て、ISについて学ぶためにIS学園へ行く。もう一つは、知らぬ存ぜぬでことを押し通す」

そこまで言ったところで方は相手の様子をうかがった。相手は押し黙ったままだったが、しばらくののちに口を開いた。

「……このことを知っているのは？」

「今現時点では俺とあんた、そしてアレイスターだな」

「アレイスター……？ 統括理事長の？」

「ああ、そうだ。あいつは、この街をリアルタイムで監視してる。有名な話だろう？」

「そういえば聞いたことあるわね、そんな話。私としては知らぬ存ぜぬで居たいけど、これは依頼じゃなくて一種の命令だから、それでは通らないのよね」

「……そういうことかよ」

通りで長いこと黙ってたわけだ、と方は一人納得した。話に聞いていた麦野沈利とは、よく言えば判断力のいい、悪く言えば短気な性格だったと聞いていたからだ。そんな彼女が悩むことに対して少し納得がいつていかなかったが、それは今納得がいつた。

そんなことを考えながら、方は遠くにある無線機を取り、そこに向かっていった。

「おい、アレイスター。今までの一連の話、お前も聞いてるんだろう？」

それに対してしばらくザーという音が聞こえ、やがてそれが途切れて声が聞こえてき

た。

「それで、どうするつもりだい？タスカ―君」

「こいつの枷をはずしてもらいたい。あんたならたやすいだろう？」

それに対する返答はしばらく間があった。

「今、他の組織に指示を出しておいた。これで大丈夫なはずだ」

「そうか、礼を言う」

それに対して少し間をおいて無線の相手は言った。

「それにしても、変わったな。君は、自分以外のことはどうでもいいクチの人種だと思っ
ていたのだが」

「まあ、否定はしないよ。表向きはそう振る舞ってきたからな。でもな、外に出てから気
づいたんだよ。俺は、やっぱり仕事人タスカ―なんだって。俺のこなす仕事は、クライアントに
とって利となるものしかないから、本質的にはお人よしなんだってな」

「・・・ふつ、君は面白い。彼女に伝言だ、こういう選択をしようとも、私は特に気に留
めない。悔いのない選択を、と。そう伝えてくれ」

それが聞こえてから横の麦野を見ると、手を伸ばしていた。その意図を察して万は
無線機を渡す。

「言われるまでもねえよ、この狸が」

だが、麦野がそういったところには無線は切られており、相手の返答を聞くことはかなわなかった。

麦野から無線機を受け取りながら、万は問いかけた。

「で、どうするんだ？」

その表情に迷いはなかった。

「毒を食らわば皿まで、ってやつだ。行ってやるよ、IS学園ってやつに」

18. 新学期

不思議なことに、なすべきことをなしていると時がたつのは早いものだ。

麦野のIS学園への編入に際して必要なデータ——IS適性、身長など体格データ諸々——の採取、出生に関するものなどの改竄、ISの基礎知識の教育などをこなしていると8月も最終週に突入していた。

そうして迎えた新学期初日、教室に生徒が集まっているのを確認すると千冬が切り出した。

「さて、今日からこのクラスに編入する生徒を紹介する」

千冬が入り口に向けて声をかけた瞬間、万はにやりと笑った。セイリユウの光学迷彩とステルスを駆使して一組の転校生がだれか知っていたからだ。

そして、その編入生は入ってきて一言、

「麦野沈利です。よろしく」

と、軽く緊張しながら言った。

彼女はもともとスタイルがとてもよく、それは制服越しでも明らかだった。シャルロットがシャルルとして編入してきたときはまた違った黄色い歓声があちこちから

飛んだ。軽く鼻の下を伸ばす一夏とは違い、万はくつくつとこらえきれない笑いをもらっていた。もつとも、その様子を見て向こうは今にも原子崩しマルチダウナーを撃つて殺さんとばかりに睨んできたが。

「静かにせんか馬鹿ども！」

その黄色い歓声を千冬が一喝のもとに断ち切り静かになったクラスに諸連絡を伝えている間も万の笑いは収まらなかつた。

その後の休み時間で麦野は質問攻めに遭っていた。曰く、どこから来たのか、その体系のコツは何か、スリーサイズは、などなど。見たところではまだ我慢が聞いているようだが、あの様子ではしばらくは持つまい。そんなことを思いつつ、万は武装のコンセプトをまとめだしていた。

彼女は休み時間ごとに質問攻めを受けていた。その様子を見ていい加減彼女が爆発してもおかしくないと判断した万は昼休みに女子が集まる前に麦野に声をかけた。

「ちよつといいか？」

その声になりに不機嫌な声で麦野は顔もむけずに答えた。

「なんだ、お前か。何の用だ？」

「この食堂、なかなかうまいんだよ。食べに行かねえか？それに、ずっとここにいちや

またきついだろう?」

「・・・そうさせていたたくよ。で、どこなんだ?」

「案内くらいするっての」

そういうと麦野は席を立った。その時一瞬見えた顔には疲労が色濃く出ていた。

「で、どうだよ。生まれて初めての学園生活は?」

自分の頼んだラーメンをすすりつつ万が問いかけた。それに対する麦野も鮭の焼き魚をつつきながら答える。

「・・・悪くはねえ、かな。多少の違和感はあるが」

そんな暗部時代とは対照的などこか照れているような様子の彼女に万はくつつと笑った。

「まあ、誰でもそんなもんだろ。俺だってそうだったしな」

「そういうもんなのか?」

「そういうもんだよ。案外普通だろ?」

「違ういな」

そんなことを言って軽く笑いあう。その直後に万の顔が引き締まる。両利きである

ことをフルに利用して、右手で箸を使つて食べ物を中心に運びながら左手でメモ用紙にペンを走らせた。

『そつちの専用機についてだが、まだ登録が終わつてない。あと一週間もすれば終わらせるから、そこまで隠し通してくれ』

そんな風に殴り書き、相手の様子を横目で見る。それに気づいた麦野がかすかにうなずいたのを確認して万はそのメモ用紙をしまった。

それから一週間後のホームルームで、万は教室の前方に立っていた。来月開催される学園祭のクラス企画について決めるためだ。

「とりあえず、今出ている案についてだが・・・」

そこでいったん言葉を切ると、軽く息を吸い込んで大きめの声で宣言した。

「すべて却下だ!!」

それに対し教室からはブーイングが起こる。もつとも、最前列に座っている一夏のみ例外だったが。それを受けてあきれ半分いらだち半分といった表情で隣にいる山田先生に目を向けるが、こちらはこちらで軽い恍惚状態にあるのが表情から読み取れたので、速攻で頼る線を切った。

「お前らもつとマシな案はねえのかコラ!!」

そこにあつた案とは、男子二人とポツキーゲーム、男子二人とツイスターなどなど、要するに男子二人が何かしらするといふものだ。ここまで同じベクトルの案しかないといふのもなかなかだと万はあきれていた。

万のその言葉に一人女子が反応した。

「はいはい、なら男子二人のホスト——」

その言葉を最後まで言うことはかなわなかつた。その女子が顔を後ろに向けて気絶したからだ。そして、万の手には小さな拳銃のようなものがあつた。

「安心しろ、ゴム弾だ」

そこでいったん言葉を切つてもう一度息を吸い込む。

「お前らなあ、もつとまじめな案を出せよ! 屋台ものとかプラネタリウムとかお化け屋敷とか、いろいろあんだらうが! それに、こんな案仮に出したところで通ると思うか!」

その瞬間に全員が黙り込んだ。その一瞬の沈黙の間に声を発したものがいた。

「メイド喫茶はどうだ」

その言葉が出た方向に目を向け、驚いた方はもう一度目を向けた。なぜなら、

(ら、ラウラからそんな案が・・・!?)

その案を出したのがこの中ではおそらく1, 2を争うレベルでこんな案を出さないで

あろう人間だからだ。

「飲食店なら経費の回収も行えるし、客受けもいいだろう。まさに一石二鳥だ」

「・・・うん、いいんじゃない？」

「でも、そうなったら織斑君と黒川君はどうしよう？」

「厨房を担当してもらえばいいんじゃない？ そうすれば人前には出ないわけだし」

「でも、せっかくだし接客もやってもらえば・・・」

「じゃあ、服はどうする？」

「スーツとか？」

「燕尾服っていうのもよくない？」

置いてけぼりを蹴飛ばして進むような議論に万は机を両手でたたいた。ばん！ と
置いて大きな音に議論がいったん中断したところで全体を見渡して言う。

「と、に、か、く！ クラス企画は喫茶店！ 異議のあるやつ挙手！」

その言葉にいったん議論は中断してまた教室が静まり返る。挙手する生徒がいない
ことを確認すると、万は腕時計を確認して続けた。

「おし、じゃあクラス企画は喫茶店で決まりな。あと数分でホームルームが終了するか
ら詳しい内容は次回。以上、ホームルーム終了！」

その言葉を皮切りに女子たちはまた議論を開始した。それをよそに、万はクラス企画

の書類を書き出した。

その次の日行われた朝のSHRの短い時間で正式にメイド喫茶をやることになり、万と一夏は燕尾服を着ることとなった。

その日の放課後、万と麦野は二人でアリーナのピットに向かっていた。まだISに触れて日の経っていない麦野にISに関してそろそろを教えるためだ。

「それにしても、あんたがあんな案をのむとはねえ・・・」

「あの状況であれよりマシな案が出ると思うか？」

「思わないわね」

「つまりはそういうことだ」

そんなことを会話しているとピットについた。もうすでに二人ともISスーツに着替えているので、あとはISを展開するだけだ。

万のレクチャーで麦野がどうかISの展開に成功し、見慣れた量子変換の光が彼女を包む。その中から現れたのは専用機“閃光”をまとった彼女の姿だった。

「これでいいの？」

「ああ、OKだ。まあ、欲を言えばもっと早く展開できればいいんだが・・・ま、その辺は仕方ないか」

そういうと自分もセイリユウを展開した。そのスピードに麦野が驚く。

「・・・早いな」

「まあ、慣れたからな。早いやつだとこれより少し早いらしい。つと、こんなことはどうでもいいや。飛行訓練を開始するぞ」

そういつて自分も軽く浮いた。

「あんたは能力で浮くことってできないんだっけ？」

「お前やどこぞのもやしほど万能じゃないからな」

その言葉に万はふつと笑った。

「俺はともかく、あれはさすがに万能すぎ、てかもはやチート。・・・まあ、そんなのどうでもいいや。こう、ふわつと体が持ち上がるのを想像してみ？」

そういうと閃光が軽く浮き、セイリユウに乗った万と目線がほとんど同じになった。

「さすがはレベル5、呑み込みが早い」

「こんなの説明書に書いてあるレベルだろ？」

「まあ確かにそうだけだよ。あの量を短期間でさっさと読み終えて内容を丸暗記するやつなんてそんなにいないと思うぞ？」

「そうか？」

「そうだよ。・・・じゃあ、次は上昇だ。つっても、ここまですれば楽だろうけどな」

「そういつて方は真上に上昇した。ワンテンポ遅れて麦野もついてくる。それをバツクモニターで確認して無線をつないだ。」

「よし、OKだ。じゃあ、次は本格的に行くぞ。俺に後ろで動きをコピーしろ。後ろは見えてるから安心しな」

そういつて方はさまざまな軌道で飛び回る。蛇行、急上昇と急下降、挙句にはコークスクリューや宙返りといった曲芸飛行に発展した。が、その動きすべてに彼女はついてきた。

やがて下降して地上スレスレで停止すると無線を通さずに話した。

「いやー、すげえな。ここまでできるとは……」

「なんだその言い方。なんか引つかかるな」

「ただ単に感心してるだけだよ。一夏なんてこの地上停止を始めてやった時はどでかいクレーター作ってたぞ?」

「それはただ単なるドジだろう」

「ま、そうだな。んじゃあ、次は戦闘訓練と行こうか」

そういうと方はセイリユウの前に仮想ディスプレイをいくつか表示させる。それを操作すると目の前がが出てきた。

これは戦闘訓練のための的を出すためのシステムである。念のためこちらのシステ

ムの借用許可も取ってきてきていて正解だったと方は割と本気で思った。

「手始めにあれライフルで撃ってみ」

「ライフルつつつてもなー……。どうやって出すんだ？」

「念じろ。だめなら声出せ」

純粋な疑問に対して方がノータイムで放ったコメントに麦野はため息をついて少し目を閉じた。直後、その右手には狙撃銃が展開されていた。それを構えて目の前の的に向けて撃つ。その瞬間、光がライフルの銃口から飛び出し、的の中心からほんの少し外れた位置をうがった。それに対し方はヒュウと口笛を吹いた。

「はじめてにしてはやるう」

「感覚としては能力を撃つ感覚とほとんど変わらないからな」

「あー、そういうこと。欲を言えばもっと射撃精度が高いといいんだけど……。ま、その辺は慣れだな、うん」

「そういうもんなのか？」

「そういうもんだ。最悪、腕のいい狙撃型のパイロットを知ってるから、そつちからどうにかすればOKだし」

「名選手は必ずしも名監督とはならないぞ？」

「あの教え方を理解する頭があれば大丈夫だ。んで、レベル5が理解力に劣るっていう

のは考えにくいからな。．．．第七位以外」

「どんな教え方をするんだ？そいつ」

「ガチガチの理論武装、って言えばわかるか？」

「あー、そういうこと。でもま、自分で習得しちまえば問題ねえよ．．．な！」

そういつてもう一回構えていた狙撃銃で的を狙撃した。今度は的の中心を射抜いた。

それから戦闘訓練を行ったが、的の中心をうがった攻撃が全体の実に80%を占めていた。この結果に方は「本当に初めての本格的なIS搭乗かよ」と驚いていたという。また、その日彼を見かけた人間は口をそろえて「あの日の方はどこか暗くて話しかけづらかった」という。

「円軌道のコツ？」

その次の日、教室で目の前の人間から出た言葉に方は思わずおうむ返しに言った。

「ああ。教えてくれないか？」

その言葉に言葉を発した張本人である一夏がうなずいた。

「教えてもいいが．．．なんでだ？」

「白式が二次移行して荷電粒子砲がついたから、そのために必要だっついまコーチさ

れてる人に言われてな」

「誰のコーチ受けてるんだ？」

万の記憶が正しければ一夏は射撃、特に狙撃は苦手だったはずだ。そんな彼にわざわざ射撃の訓練をさせる度胸と技量が彼女らにあるとは思えなかった。

だが、彼の口から出てきたのは予想外の人物の名前だった。

「更識楯無つて人。先輩で生徒会長の」

その言葉に万は納得した。なるほど彼の戦闘能力をある程度知っていて、しかも個人としての戦闘力も高い彼女なら教える技量さえあれば問題ないだろう。それに、この学校において生徒会長とは「学園最強」の肩書を意味する。そんな人物なら教える機会も多いだろうし、その経験を活かしてうまく教えられるだろう。

「あー……。でも、それならあっちのほうが教えるのうまいと思うぞ？」

「それもそうんだけどよ……。つかみどころないっていうか、接しづらいんだよ……。慣れる。仮にもコーチしてくれてる身だろうが」

「いや、そういうわれてもよ……。」

そういつつ軽くうなだれる一夏を尻目に万はため息を一つついていった。

「で、円軌道のコツだったか？」

「あ、ああ」

「一言で言っちゃえば感覚だ。Gを感じてブラスターの向きを調整することで安定した円軌道を実現する。ま、こればかりは慣れだな、うん」

その言葉に今度は一夏がため息をつく。

「・・・お前って実は感覚派？」

「いまさら何言ってるのお前？ まあ、だからこそあんまり人教えたりしないんだけど。でも、これはそこまで難しくはないと思うぞ？」

さらに何か一夏は言いつのろうとしたが、ちょうどその時にチャイムが鳴った。

「・・・うん、なんつか、参考になったわ。サンキュ」

そういつて一夏は自分の席に戻って行った。

その日の放課後、万はまた麦野とアリーナに来ていた。麦野がISを展開していつでも始められる状態になったことを確認すると万は言った。

「よし、今までは一対一の戦闘訓練を積んできたわけだが、今回は毛並みを変えるぞ」

「どういこうと？」

「今回やるのは一体多の戦闘訓練だ。今まで、ブラスターとして使用していたものの一部をビットとして使用、そこからの多角攻撃の訓練だ」

「ブラスター？ ああ、この腰のやつか」

「そう、それだ。それを——Oビットを使った攻撃だ」
「Oビット、ねえ」

「とりあえず、まず動かすところからだ。それが飛んでいくように念じてみ」

「そういうと麦野は軽く目を閉じた。少ししてからOビットがすべてページされ、麦野の周りに浮いた。」

「そう、そんな感じだ。あとはそれを操作するんだが・・・」

「解説はいいわ。だいたいわかったから」

「そういうと今度はOビットが自由に動き出した。それはまるで見えない糸で操られているかのようだった。」

「・・・わーお」

「ページしたときにわかったんだよ、感覚が・・・で？　今度はこれで撃つようにとでも念じればいいのか？」

「まあ、な」

「OK、やったらもうじゃん」

「そういうと麦野は万があらかじめ用意してあった三つの的をビットのみでさつさと

撃ち抜いた。

「……よし、じゃあ今度はもつと出すから片っ端から撃ち抜いてみよー！」

どこか道化のような万の声とともにアリーナに大量の的が出現した。

「……上等だあー！」

そういうと麦野は飛翔して片っ端からの的を撃ち抜いていった。

その五分後、万は驚愕していた。

「アリーナに次々に設置された的の総数278、そのすべてを3分ですべて撃破してそのほとんどが真ん中って……」

「レベル5をなめるなっただよ」

「ああ、そうだな。改めて、敵に回さなくてよかったよ」

「で、どうするんだ？」

それに対して万は少しうなっただ後で言った。

「特にやることもないし、今日はここまででいいか？」

「私はそれでいいけど？」

「よし、じゃあ今日はこれまででっことで」

そういうと万はシステムのチェックを始めつつ、麦野に先に帰るように促した。

麦野の姿が完全に消えると、万は左手を胸に持ってきた。そして、そのまま周りに能力を展開する。少し考えたのち、万はISを展開して自分の訓練に入って行った。

19. 学園祭 波乱の幕開け

万たちが着々と学園祭の準備をしているころ、とあるホテルの一室では複数人の女性たちが集まっていた。

その中の一人である、長い髪をカールさせた女性が手に持った写真を周りに見えるように机に置きながら、あくまで事務的に言った。

「今回の目標は白式の強奪、および特定生徒とその専用機の情報取得。特定生徒っていうのはこの二人」

その言葉に髪をウエーブさせた女性がその中の写真の一つを指さしながら言う。

「男二人はわかるが、後の一人は何もんだ?」

「麦野沈利っていうらしいわ。詳細はわからないけど、彼女は学園都市の人間。これは二人目もね。加えて、面白い情報も入っているの」

「面白い情報?」

その言葉に一つ頷くと、更なる爆弾発言が飛び出した。

「彼女の専用機、名前は閃光っていうんだけどね。これ、外の研究所では作られた記録がないのよ。つまり……」

「学園都市製のI.S.、ということか?」

その中の明らかに幼い少女が静かに口を開いた。その言葉にやさしく微笑んで続ける。

「おそらくね。それに、彼女はどうかやら学園都市の後ろ盾もあるみたいでね。最悪、彼女を第一目標にして頂戴」

「そんなに重要なのかよ?」

「ええ。このために、デメテルやセレネたちを呼ぶほどには、ね」

突然出てきた名前にウエーブヘアの女は露骨に嫌な顔をした。

「おいおい、あいつらまでか? 冗談だろ?」

「冗談でも何でもないわ。それに、今回彼女たちはあなたたちとは違うルートで追ってもらうことになってるわ。それと、彼女たちも私たちと同じ人間なんだから、そんな顔をしてはいけない」

「・・・そうか。わかったよ」

ウエーブヘアの女はその言葉に落ち着いたように見えた。

その様子を見計らって少女が問いかけた。

「それで、今回の作戦は?」

その言葉にカールさせた女性は顔を引き締める。

「今回はまずオータムが織斑一夏に接近して、その間にデメテルたちが一波乱起こす。そうしたらオータムが織斑一夏に、セレネが黒川万に、デメテルが麦野沈利にそれぞれ会敵して目標を達成。目標を達成次第帰還。エムは三人の脱出の援護と、作戦続行不可と判断場合の強制介入のため待機。OK?」

その言葉に二人はうなずいた。

「ならいいわ。作戦決行日まで時間があまりないから、それまでゆっくり休んで頂戴」
そういうとそれぞれ各々の部屋に戻って行った。

そして迎えた学園祭の日。

一組の前には長蛇の列ができていた。方はつきりあの天然ジゴロ目当ての客がほとんどだろうと思っていたが、

「へえ、黒川君の燕尾服っていうのもなかなか乙なものね」

「眼福眼福」

「遠目で写真とっておこーつと」

「それ、後で私にもちようだい」

こんな会話がしばしば聞こえるところを見るとそうでもないらしい。いくら急いでいたからとはいえ、邪魔だからという理由から人間を能力でぶっ飛ばした彼の心象はか

なり悪いと思っていたから、これには純粹に驚いていた。

クラスの子に言わせると、「織斑君がやさしくて頼りになる系の男子なら、黒川君はインテリ系」とのこと。もつとも、それを聞いた麦野は軽くふきだしていたが。

万が接客に出ていると、一夏に何やら熱心に語りかけている女性がいた。声は聞こえないが、大方、白式の追加パーツの売込みだろう。

白式が二次移行したことが公開されてからというもの、この手の話が絶えない。二次移行した機体は極めてまれで、是が非でもデータを取りたいのだろう。

とはいっても、当の一夏はそのすべてを断っている。なぜなら、白式は雪片式型と単一能力で拡張領域を使っているからだ。早い話が、白式は雪片式型と雪羅以外の武装を受け付けない状態なのだ。それを知ってか知らずしてか売り込む女性を一夏はかたくなに断ろうとしているようだが、断りきれず押し切られそうになったところで助け舟が入り、何とか一夏はその場を脱することができたようだ。

ひと段落ついたことを見計らって方は近づいて行った。

「また追加武装の売込みか？」

「ああ……。断つてもしつこくてな」

「……」愁傷様。一応聞いとくと、さっきのどちら様？」

「えっと、みつるぎの巻紙札子、つておっしゃったけど」

「OK、次来たら門前払いしとくから安心しろ」

「おう、サンキュ」

そういつて歩き出したところを今度は別の人間につかまった。

「・・・で、何の用だよ麦野さん」

「さん付けじゃなくていいわよ。・・・部活のやつ、一緒に回らないかと思つてさ」

「ははーん、こういうことしたことないから勝手がわからないわけか、そうかそうか」

「・・・撃ち抜くぞ?」

軽口で返した方に麦野は掌の中に光の玉を出した。その危険性を理解している方は慌てて止めに入った。

「待った待った、こんなところでそんな物騒なもん出すなつて!・・・とりあえず、付き合うぞ」

「一応礼は言っておくわ」

そういつて二人は歩き出した。

ある程度歩いて周りに聞き耳を立てている人間がないことを確認して方は切り出した。

「で、どこに行く?」

「そうね、運動部でもいいけど・・・」

「暗部で鍛えてた俺らが行けばどうなるかは簡単に見当がつくな、うん」

軽く試合をしようにもこの二人なら「試合」ではなく「殺し合い死合」になるだろう。実際、体育の授業で軽く球技をしたところ、この二人のペアだけ試合の次元が違うという事態も発生していた。

「で、結局どこ行くよ?」

「音楽系の部活ってある?」

「・・・確か、吹部が部活展示をしてたはずだな。行ってみるか?」

「吹部?」

「吹奏楽部。略して吹部。で、どうする?」

「・・・行ってみるか。なんか面白そうだし」

「OK。ところで、学園都市側の様子はどうなんだ?」

「いまいち興味をなくしてるみたいね。もつとすごいものかと思つてたら案外そこまででもなくて拍子抜けって感じ」

麦野の専用機である「閃光」の設計、組み立てを方が行う代わりとして、学園都市の統括理事会の一部からそのデータと危険性をレポートしろ、と言われていたのである。もつとも、設計者は外部の人間としたため、その任は麦野のみにかかっている。厳密には方は完全に外部の人間ではないのだが、暗部解体に伴い（あくまで表向きはだが）外

部の人間となつたのでそこまでの外的れでもなく、不審に思われることもなかった。
閑話休題。

その言葉を聞いても方はそこまで驚いていなかった。ISに携わる者として、そしてこの学校で数少ない設計者側に立った身としてはあれは学園都市内の兵器に比べればそこまで脅威でないと思つたからだ。もつとも、学園都市の兵器は「資源と時間と意志があればいくらでも作れる」という最大のメリツトが存在するが。

「まあ、俺の組み上げた機体だからな、あれは。トップガンたちの乗るものに比べれば普通の状態のあれは多少なりとも見劣りはしてもおかしくないしな」

「なんだよ、それ。劣化品作つて与えたつていうのか？」

「そうじゃなくて。・・・普通の状態つて言つたら？」

「・・・ああ、そういう」

「閃光」は、彼女の代名詞たる原子崩しメルトダウンが使えるものとなつている。彼女が訓練で用いたライフルの正式名称はMDライフルというのだが、このMDは「Melt Down ner」の頭文字である。また、Oビットも原子崩しメルトダウンを発射することができる。

スタディーコーポレーションの「革命」と称した行為の中の産物をもとに万が発想したものである。彼女の脳内での演算をヘッドセットで読み取り、それをライフルやビットに伝達することで能力の行使を可能としたのである。

知つての通り、彼女のそれは強力無比な威力を誇る。そのため、彼が機体本体にリミッターをかけている。

「何度も言うが、いくら言われてもリミッターは」

「外すな、だろ？何回言うんだよその台詞」

この言葉からもわかるように、リミッターは外すこともできるが万は被害がどれほどになるのかわかったものではないから外すなど何回も言っている。

「わかつてんならいいけどよ。・・・と、着いたぞ」

そういつて万が先に扉を開けて中に入ると、ちょうど待ちはそれほどいかなかった。それを見て麦野が万に問いかける。

「で、どんな楽器がいいんだ？」

「そうだな、最初はボーンなんかいいんじゃないかね？」

その返答を受けて麦野は近くにいた吹奏楽部員に話しかけた。

「あつそ、ならその、ボーン？っていうの吹きたいんだけど？」

「わかりました。少し待っていてください」

そういうとその生徒は少し奥に入った。そして、戻ってきたとき、その手には誰もが知るスライド式の金管楽器が握られていた。

「へえ、ボーンってトロンボーンのことなのか。てつきりなんか骨みたいなのかな」

と思った」

「まあな。いちいちトロンボーンって言ってるって面倒だからボーンって省略するんだよ。それとboneじゃねえからな」

そんな会話をしながら麦野はレクチャー通りにトロンボーンをもって吹き始めた。うまく楽器をならせているところを見ると、トロンボーンが比較的ならしややすい楽器であるとはいえず、すんなりできるあたりは本人の才能も影響しているのだろう。

隣で立って見ていると先ほどとは違う吹奏楽部員が近くに来て声をかけてきた。

「黒川君も何か試奏してみますか？」

「ああ、そうですね。なら、フルートをお願いできますか？」

そういうとその吹奏楽部員は一旦奥に引っ込んで、戻ってくるとその手には細長いケースがあった。相手の吹奏楽部員はその中に入っている銀の横笛を手際よく組み立てると万に手渡した。万はそれの頭部管をはずすと軽く音を鳴らした。それを見て隣の吹奏楽部員が驚いたような顔を見せた。

「過去に吹いたことがあります」

そういつてさらに少し頭部管を吹くと、頭部管をつなげて軽く吹き出した。ロングトーン、半音階といった基礎練習から始まり、簡単な曲なども吹き出した。

「アルルの女、か」

一曲吹き終わると、自身の体験を済ませたであろう麦野が隣に来て言った。

「まあな。これくらいだったらいけるからな」

「で、どうだったんだよ、感触のほうは？」

「やっぱブランクのせいかいまいちつてところかな」

「あれでいまいちなのかよ」

「ああ。吹けてた時はもつと楽器が鳴ってたからな。まあ、基礎をあんまりやんなかったつてもあると思うけどさ。ところで、そろそろ時間じゃねえか？」

万のその言葉に麦野は壁にかかっている時計を見た。万の記憶が間違っていないければ、そろそろ教室に戻らないと休憩終了時間に間に合わないはずだ。

麦野もそれに気づいたのか、時間を確認すると聞き取れないほどかすかに声をもらした。

「ちよつとギリギリね」

「よし、そうとなつたら走るぞ」

その言葉をスターターがわりにして二人は走り出した。

二人が教室につくと、教室は静かになっていた。

あまりにも度を過ぎた静けさに不審に思った方は近くにいた女生徒に声をかけた。

「・・・なんかあったのか？」

「体育館で織斑君が劇に出るらしくて、みんなそっちに行ってるみたい」

その言葉に万は心の中で合掌した。そういった話は本人から聞いていないし、噂でも耳にしていない。ということは、急きよブッキングされて本人が断れなかった、といったところだろう。

「んじゃ、俺はしばらく表に出るわ。あいつほどじゃないが、客を集められるかもしれない」

「ありがとう、お願い。じゃあ、麦野さんは厨房つてことになるけど・・・」

「構わないわ。一応、料理はできるほうだしね」

「ありがとう、二人とも。それじゃ、お願いしまーす」

そういつてばたばたと女生徒が走って行ったのを尻目に二人はそれぞれの行動に移った。

万が表に出た影響か、閑古鳥が鳴きそうになっていたクラス展示は、しばらくすると忙しすぎず暇すぎずといった状態になっていた。

そんな折、万に指名が入った。クラスメイトに言われて入り口のほうを見ると、高校生か大学生か、といった年頃の女性がいた。

「お待たせしました、お嬢さま。どうぞこちらへ」

「いえ、ここでもいいわ。どうぞお気遣いなく」

慣れないながらも覚えたサービストークに帰ってきたのは冷たい返答だった。そして、万はその返答の裏に感じ取ったものに対して脳内に演算を走らせた。

「では、ご用件をお伺いしてよろしいでしょうか？」

「いいわよ。——私の目的は、あなたの専用機よ」

その言葉とともに彼の足もとにレーザーが万の足もとに放たれた。放たれる一瞬前の変位を感じ取りバックステップで回避する。土煙が晴れる前に、万はあらかじめ走らせていた演算を実行、その瞬間に後ろの扉とその周囲の壁が吹きとんだ。

「逃げろ!!」

教室を背にした状態で一声大きく叫ぶと、教室は一瞬の静寂の後に喧騒に包まれた。半ばパニックとなった群衆は訳も分からず新しく開かれた大きな出口に向けて迸った。

「あら、あなたは逃げなくてもいいの？」

「俺が逃げたら、他を逃がした意味がねえだろ。それに、あんたもこっちのほうをご所望じゃねえのか？」

周りに人がいなくなったことで万は自らの纏った殺気を隠すことなく発する。それに呼応するかのように相手の纏う雰囲気も今までのような包み隠したものから冷えた

鉄のようなもの変わった。そんな雰囲気似合わないように高く相手は嗤う。

「確かに、私としても思いつきりやれるのは好都合。その点については感謝ね」

「……一応聞いておこう。名前は何という？」

それに対し女は妖艶に笑った。

「セレネ、と。そう呼んでもらえれば十分よ」

「月の女神を冠するとは、ずいぶんなことだな！」

そうひとつ吠えたと方はあらかじめ作つてあつたもう一つの演算を用いて電撃を放つ。それに対し相手はその笑みを獰猛なそれへと変えた。

それとほぼ同時刻。麦野も来客をもてなしていた。

「全く、懲りねえな上も」

「……あなたの言う上が、誰のことを指すかはわからないけど、おそらくあなたの思っている人物の差し金ではない、とは言っておく」

「へえ、じゃあそつちは誰の指示で動いていて、目的は何だ？」

「指示した人間をペラペラしゃべるほど私は馬鹿じゃない。それと、私の目的はあなたの情報」

機械的に淡々と受け答える相手に対して麦野は目を細めた。ちようど今は少し席を

はずしていて、周りには誰もいない。

「へえ、なら、力づくで奪ってみな！」

そういつて原子崩しメルトダウナーを放——とうとするが、それはかなわなかった。

なぜなら、足場が崩れて狙いをかき乱されたからだ。

「言われなくてもそのつもり。麦野沈利」

「・・・私を誰か知っていて勝てるつもり？」

「あなたの能力は照準と出力の調整に時間がかかる。その間をつけば撃破は可能。ギリシャ神話における大地の女神の名前を冠する私なら」

「・・・なるほど。なら、やってみろよ、デメテルさんよ！」

そして、こちらにも戦闘を開始した。

20. 戦闘という名の殺し合い

万とセレネの戦闘は膠着状態にあった。

具体的にいうなれば、セレネの攻撃を万が避け、反撃をするも相手もそれを撃ち抜きつつ攻撃、という状態が続いているのである。当初は反撃すら読んでそのまま肉薄する万だったが、至近距離からレーザーを当てられて以来そこから一気に接近できないのだ。その攻撃は何とかかわして掠るだけで済んだが、あとコンマ数秒回避が遅れていたら間違いなく目玉をつぶされていただろう。

回避しつつ距離を取った方は空気の玉で応戦する。が、それすらも読んでいたのか、相手はそれも回避し無数のレーザーを放つ。直後、爆風が視界を覆った。

なぜこうもこの戦いで万が劣勢であるのか、というのには二つの要因が存在する。

一つは、ここが屋内であるということだ。こんなところでISを展開しようものなら、ISの大きさが災いして身動きが取れず、文字通り穴ぼこにされるだろう。

だが、万が苦戦している理由はもう一つの要因によるところが大きい。

そのもう一つの要因を説明するには、そもそも「光とはどういうものなのか」という

ことを説明しなくてはならない。

光とは、一言で言ってしまうえば量子である。

では、量子とは何なのか。これまた端的にまとめてしまうと、*“粒子と波の両方の性質を持つもの”*である。つまりは、ただの物質ではなく波の一種なのだ。それゆえに、あくまで*“物質を”*操るに過ぎない万には操ることができない。

結果、相手の攻撃をも無力化し、こちらの攻撃を確実に当て目標を仕留める、といういつもの戦い方を封じられたことにより、万は劣勢を強いられることとなっているのである。

閑話休題。

「目くらましのつもり？ 悪いけど、私にそんなもの意味はないわよ？」

殺し合いの場には似つかわしくない、優雅とも思えるような足取りでセレネは歩く。そして、能力によって判明した場所に向かって数本のレーザーを撃とうとしたとき、暴風が吹き荒れた。

それに対してセレネは疑問を覚える。間違はなく、この粉塵は相手が——万が起こしたものだ。目的は、おそらくは視界を奪うこと。ならば、なぜすぐその状態を解除する

ような真似をしたのか。もつとも、視界をつぶしても双方ともに意味はないが。

だが、その疑問はすぐに晴れた。視界がクリアになった時、そこにいるべき人物はいなかった。その瞬間、セレネはとたんに落胆したような表情を浮かべた。

「なーんだ、結局尻尾巻いて逃げるんじゃない。つまんないのー。まあ、速攻で見つけ——」

その言葉が最後まで紡がれる前に周辺に爆発が起こる。どう考えても、相手の位置を正確に把握していないとできない真似だった。それはつまり、この部屋にまだいるという事。その事実、セレネは驚愕を露わにした。

（馬鹿な、黒川万に身を隠すものなどなかったはず……）

なぜなら、万に身を隠す方法がないという情報を知っていて、しかもなおかつ自分の能力に絶対の自信を持っていた彼女にとって、これは大きなショックだったからだ。今まで、彼女の能力は正確に対象の位置を教えていた。それが、ここにきて外れたとでもいうのか。

砕かれた絶対の自信、何がわかつているかわからない動揺や疑問、未知のものに遭遇したかのような恐怖、その他もろもろの感情が相まって思考と行動を停止させた彼女はまるで竜巻でも起きたような暴風になすすべもなく倒された。その上から体重がかけられ、ほぼ同時に首筋に冷たい感触が突きつけられた。

「いや、さしもの俺も焦った焦った。まさか、光を操る相手とはねえ・・・」

そして、聞こえてくるのは軽口のような口調の死神の声。

いつもの彼女なら、この程度の拘束は能力を使って解くことができるだろう。だが、先ほど能力に対する自信を喪失した彼女にとってそれは不可能だった。さらに、相手は次の瞬間に追い打ちをかけた。

「いや、より正確には、『波を操る能力者』、ってどこかな?」

その言葉にセレネはそこまで驚かなかった。相手は万物を掌握する『マルチサイ万能念動』。こちらの切り札を読まれるのは予想済みだった。

「・・・貴様、どうして・・・」

「索敵を逃れたか、ってか?」

読まれたことに驚きを感じつつ、もう一度ダメもとで相手に向かってレーザーを放つ。

だが、その光線はまるで何かに誘導されるかのように曲がった。

「今のがヒントだ」

こちらを見据えつつ仕事人^{タスカ}は言った。おそらく、こちらの驚きが顔に現れていたのだろう。

そして、こちらの頭に手を添える。

「情報がほしいならくれてやる。が……」

これに耐えられるものならな。

そういうと、二人の意識は現実から離れていった。

麦野とデメテルの戦いもまた、拮抗していた。

それは、麦野が照準と出力の調整に時間を要する間にデメテルが地面をかき乱し直撃を防ぎつつ攻撃、ということを繰り返していたからだ。もつとも、デメテルの攻撃もだんだんと読めてきた麦野にとって攻撃をいなすのも容易になってきているので、お互いに決定打を入れるには至ってはいないのだが。

「まだ……!」

「ちいっ……!」

淡々と攻撃と防御、そして回避を続ける二人の攻防は、不可視のものを操る後二人のそれより派手なものとなっていた。

麦野が苦戦しているのは全力を出せない理由があるから、というのもある。

それはなぜか。

なにせ、彼女の能力は貫通力が高すぎるのである。何枚の壁であろうと関係なく撃ち

抜くメルトダウン原子崩しの破壊力は、周りの人間をも巻き込みかねない。それゆえに、余計照準を正確に合わせなくてはならず、結果、出力を抑える結果となっているのである。

閑話休題。

そして、何回目かの回避の際、麦野はバックステップをしつつ後ろの壁をごくごく短い射程の能力で撃ち抜き、屋外へ出た。

「屋外に出ても、状況の変化はない。情報を渡して」

「いやだね。それに、これは私が作ったんじゃないから、作ったほうに聞いたほうがよっぽど有効だと思う……ぜ！」

返答とともに数筋の光条を走らせる。だが、それをデメテルはうまく回避して地面から巨大な棘を出現させて攻撃を仕掛ける。

その攻撃を突破する形で麦野は一気に肉薄した。まず放たれた少し大振りなフックをデメテルは受け止め、勢いを殺さずにそのまま投げる。

「あなたの攻撃は私には効かない。そんなのわかってはいるはず。さっさと情報を渡して」

「何度も言ってるが、それにこたえるつもりはねえよ」

あくまでも機械的な勧告に帰ってくるのは荒れた口調の拒否。それに対し、デメテル

は決めた。

「なら仕方ない。消えて」

あくまでこちらの目的は情報取得。対象の生命の有無は関係ない。四方から棘と礫を無数に飛ばした。

だが、麦野はそれを見て余裕とも取れる笑みを浮かべるだけだった。

「——ひとつ、いいところを教えてやる」

そして、一つ宣告する。

「外へ出たつてことは、あんたにとつても好機だ。だけどな……」

そういうと、彼女は数枚、板を周囲に向けて放った。

「こつちにとつても好機なんだよ!!」

板にあたった瞬間、光線は無数に広がり、飛んできた礫や棘はすべて塵と消えた。

拡散支援半導体。今まではその性質から二次被害を恐れて使えなかった、麦野の装備の一つ。学園都市から万が持つてきて、麦野に渡したものだつた。

「……ちつとばかしやりすぎたか？」

すつかり穴ぼこになった周りを見つゝ麦野がつぶやき、無線を取り出そうとする。これは万が一の時のためにと万が持たせていたものだ。

「……まだ、勝負はついてない」

その時に麦野を呼ぶ声があった。その声の方向を見、麦野はひとつため息をつく。そこには満身創痍となったデメテルがいた。先ほどの能力を被弾したのだろう。

「・・・その傷じゃもう満身に能力も使えねえだろ。諦めな」

「そんなことはない。それに・・・」

そういうと、デメテルは何やら細かいケースから白い結晶を取り出す。それを見た瞬間に麦野は正体と思われる物に思い至った。そして、彼女のやろうとしていることも。だが、いかに第四位といえど、こうなってしまうてはなせることなどなかった。

「もう私に、戻るところなんてない」

その言葉とともに、デメテルはそれを少量口の中に放り込んだ。

その瞬間、デメテルの雰囲気さがらりと変わる。

今までのコントロールされた、洗練されたような雰囲気から一気に荒れ狂う大波のようなそれへと変貌を遂げた。

（あれはおそらく体晶・・・あいつも滝壺と同じ口だったってことか。それか、あいつは満身創痍。だから、通常状態においては能力を行使することもままならないが、無理やり能力を引き出してしまえば話は別ってか）

その様子を見て、麦野は冷静に分析を始める。

この麦野の仮説は、例えるなら固く締めすぎた蛇口から水を出すために栓を壊すよう

なものだ。水の指向性を持たせることができれば、これでも能力を使うことができる。むろん、これは大きな負担を生むが、それによる反動などは目の前の敵を倒してから考えればいいだけのこと。

そして、先ほどまでとは比喩物にならない牙が、礫が、地震が、土砂流が麦野を襲った。なんとか第一波をかわすことができたが、続いてさらに勢いを増して襲い来る第二波には対処が不可能だった。

さすがにやられる。そう思った瞬間、付近を暴風が礫を食らいつくし、土は濁流と牙を防いだ。

「いやー、なんとというか、今日はびっくり続きだねえ」

奥から、今までこの場で戦闘をしていたものではない声が聞こえた。口調こそ軽口そのものだが、

「まあ、こつちのほうが悪くなくていいっていうのはあるんだけど」

デメテルにとってその声はまさに絶望をもたらすしかない声で、

「さて、どうしようかねえ・・・」

首に手を当ててこちらに歩いてくる男は絶望そのものだった。

時は少しさかのぼり。

万はセレネの記憶を読み取ると、違和感を覚えた。

その正体はすぐに突き止めることができた。

めまいが生じないのだ。今まで学習装置を使ったりしたときに必ず襲ったためまいが発生しない。そのことに違和感を覚えた。

だが、それより問題なのは。

「……端からかなう相手じゃなかったってことか」

目の前の相手も倒れてないということだ。

「……やっぱり、そつちにも情報が流れるわけか。こりや精神障壁作る必要があるかもな」

「情報なんて御大層なものじゃないわ。直前の思考が切れ切れに見えただけ」

「十分じゃねえか」

「そうね、さっきの種明かしには十分だったわ」

「で、どうすんだ？ 俺としてはどうすることもできるわけだが」

「そういつつ万はナイフを再び首筋につけ、脅しでないと知らせる。」

「そうね、まさか空気を操って屈折率を変えてレーザーを曲げる、なんて真似ができる相手が隠し玉持つてないとも限らない。それに、太刀打ちできるとも思えないし」

「ならさつきと降参してくれないか？ 俺としては、このままつてのは勘弁こうむりた
いんだが」

「そもいかないのよ。私の体には監視用のナノマシンが埋め込まれてる。逃げるこ
も、降参することもできないのよ」

それに対し万が返答しようとしたとき、大きな音と振動が襲った。

「……どうやらどつかの壁に大穴があいたみたいね」

自身の能力で発生源をスキャンニングしたのだろう、セレネがぼそりという。その直
後、万はナイフをひっこめた。

「……時間ねえみてえから手短に言うぞ」

ナイフをしまいつつ、万はセレネに、今後自分が彼女に対して行うことを説明した。
それを実行すると、彼はさつきと外に向かった。彼も一応、かなりの広範囲を探るこ
とのできる能力を持つ。それゆえに、だいたい場所を探ることができた。

現場に到着すると、そこには今にも土砂流に飲まれそうになっている麦野がいた。

第一波は回避ができる量だが、念のため第一波ごとすべてを止めようとする。が、彼
の能力はそれに効かなかった。暖簾に腕押し文字通り、まるで何も変化の感触がな
かったのだ。

なぜそんな現象が起こったかなど後で考えればいい。一瞬で思考を片隅に追いやつ

た方は、第一波に次いで襲い来る第二波に暴風と地面の隆起を起こし、それ以降の攻撃を防いだ。

そして、ことは今に至る。

「・・・セレネは？」

「あの小娘なら倒したが？」

その言葉にデメテルは軽く目を閉じた。

「・・・そう、ならここは引かせてもらうわ。むろん、セレネは回収させてもらうけど」

「あれ、俺言つてなかったか？ セレネって名乗った小娘は」

「倒した、でしょう？ 聞いたわ」

「なら話は早い。俺にとって、倒したと殺したはイコール。ドゥーユーアンダースターン？」

おどけたようにしゃべる万の言葉に今度は大きく目を開いた。

「つーわけで、ここでこれ以上何もせず引いてくれるってんなら、俺らは何もしない。少なくとも、ここに居る俺とこいつは何もしない。約束する」

隣に立つ麦野を軽く示しながら言う万の言葉に、デメテルはうなずいた。

「とりあえずは信じる。ただし、追撃してくる奴はすべて落とす」

「オーケー、伝えておく」

そういった瞬間に、そこに金色のISが降り立った。

「……どうやら私の部下が世話になったみたいね」

顔は機体の装甲に覆われ見えないが、言葉からしてこいつがボス格だろう。

「ああ、つつてもそつちを相手にしたのは俺じゃねえがな」

「よくもまあぬけぬけと。セレネを殺したのはあなたでしょう？」

「まあ、な」

相手から感じる存在感。それは「今の自分たちでは敵わない」ということを明確に伝えていた。

「とりあえず、けりをつけるのは後回しにしてくれないか？ 俺としては、追撃するつもりはない」

「あら、見逃してくれるの？」

「ああ。連戦はきついし、何より今の俺たちではあんたには敵わない」

麦野もそれを感じているのか、それに対する反論はなかった。

「そう。それなら、決着は預けておくわ」

そういつて金色のISは飛び去った。

その後、ほどなくして敵の撤退の連絡が入り、この一件は一応の落ち着きを得た。

21. 嵐の後

騒動がひと段落して、二人は保健室にいた。もつとも、正確には「二人と一人」だが。「んで、こいつに何やったのか、いい加減説明してくんねえか？」

人払いが済んだところで、麦野がやや喧嘩腰に方に言った。

「どうやらこいつの体には監視用のナノマシンが埋め込まれてるらしくてな、降参させるのが難しかったわけだ。でだ、ならそいつを取っちまえばいい。だけど、そのままおとなしくとれる代物とも思えねえ。だから、一回コールドスリープ——簡単に言っちゃえば冬眠状態にしてからナノマシンを抽出、そっちの援護に向かって今に至る、つてわけだ」

「止血はどうしたんだよ？」

「そもそも、コールドスリープにした時点で血の流れとかも止まるからな。あふれた分は俺の能力で回収済み。それに、傷口は何とか縫えたみたいだしな。あとはほかつとぎゃ体の自己治癒力で治るだろ」

「……つくづく、お前の謎さに拍車がかかってきてるな」

「そうか?……さて、と。頃合いだし、そろそろ目を覚ましてもらうか」

そういつて方は寝ている少女に手をかざした。その瞬間、寝ていた少女——セレネは目を覚ました。

「やあ、ご機嫌いかがかな、レディ？」

そんな気取った彼の声には反応せず、ただただぼんやりしたような声で相手の少女はつぶやいた。

「……ハハ、は？」

「IS学園の保健室。つっていても、周りに人はいないから安心して」

珍しく丁寧な口調で説明した麦野の顔を見てセレネはまた軽く目を閉じた。

「……あの子……デメテルは、何か言ってた？」

「なんも言ってなかったぜ。ただ、向こうはあんたが殺されたと思ってるみたいだ」

「……そう……」

ぼつりとそういうと、そのまま上を向いて口を閉ざした。その眼は、まるで迷子になつて途方に暮れた幼子のようにだった。

「……ねえ、あんたは私の過去……見たんでしょ？」

「……断片的に、だがな。口外するつもりはねえよ」

「なら、わかるでしょ？ 私にもう、帰る場所なんてないってことくらい」

「……だいたい、な」

「ちよつと待った、全く話が読めないんだが」

当人たちだけに成り立つ会話をする二人に麦野は何とか待ったをかけた。その言葉に、セレネが雨だれのように語りだす。

「・・・私ね、チャイルドエラー置き去りなの」
チャイルドエラー置き去り。

文字から連想できるかもしれないが、これは家族や保護者と連絡の取れない学園都市の子供のことを指す。早い話が、『学園都市の中の捨て子』である。

そして、その特性故に、拾われるところによつては非人道的な実験を行われたりする。無論、いわゆる『児童養護施設』のようなところもあるわけなのだが。

「それで、私は研究所に拾われて、そこから命からがら外に逃げてきて・・・そんな時に、スクールに拾われたの」

彼女の場合は前者のような施設に拾われることとなったのだろう。

二人とも、ここまでは想像通りだったので特に驚くこともなかった。

「その研究所つてのはどうなったんだ？」

「実験で暴走した私によつて壊滅的な被害を受けたそうよ。私が覚えているのは、血が飛び散った赤い光景を細切れに覚えてるだけ。それから本当に無我夢中だったわ」

彼女の見た光景は万も垣間見ていた。そして、その光景と彼女の言葉から、二人は研

研究所の受けた「被害」をおおよそ察した。

おそらく、研究所の中にいる研究員はほとんどないしすべてがその命を落としたのだ。目の前にいる少女の暴走によって。そして、そんなリミッターが取れた彼女のその能力をもつてすれば、学園都市外に出ることは容易だったのだろう。

スコールという人間がどういう手段をもつてそんな彼女をなだめたのかは今はとりあえずおいておくとして、そのスコールというのはいったい何者なのかを突き止めることにした。

「スコールつてのは、亡国企業のボスか？」

「そうね、そう考えてもらっても構わないわ。……だから、亡国企業に死亡認定されている私に、もう行く当てなんてないってわけ」

どこか自嘲気味に言うセレネに、二人はかける言葉を失った。

「……なら、ここに残ればいいんじゃないかねえか？」

ぼそりと、万はつぶやいた。その言葉が聞こえたのだろう、セレネが上体を浮かせようとする。が、すぐ軽く呻いて体勢を元に戻した。

「おいおい、まだ傷は完全にふさがってねえんだから、無理すんなよ？」

「……あんたが変なこと言うからじゃない……」

どうやらかなり痛かったようだ。

「あんたにI S適性があるかどうか、つてのがネットクになつてくるけど、ここ一応在学中無国籍扱いだし、ねじ込めばどうにかなんだろ」

「・・・お前、かなりむちやくちや言つてること気づいてるか?」

「無茶と思つてないから大丈夫。それに、一時期とはいえ女なのに男ですつて言つて入学できたザル度合だぞ? ちよつと身元引受人とか決めればたやすいつての」

「その身元引受人つていうのは?」

「大丈夫だ、当てはある。つつつても、俺のほうもたまたま知つたつてだけなんだがな」
麦野の疑念をあつさりと退けた方に、セレネは不安そうな表情を浮かべて尋ねた。

「で、どうすればいいの? 私は」

「なあに、簡単だ。俺について、その身元引受人のとこまで行つてくれればいい。つつても、今すぐにつてのは無理な話だがな」

「なんでだよ。そんなの教師陣に話通せば許可なんざ簡単に降りるだろうに」

「教師の許可が下りても尋ねる場所のほうの許可が下りねえんだよ。なにせ、学園都市だからな」

学園都市。その名前が出た瞬間にセレネがびくりと身を震わせた。

「大丈夫だ、相手の身柄とか性格は俺が保証する。つてか、まあ、あれの前で妙なマネを見せたら即刻ホールドアップされるな、うん」

「なんだそれ。教師か何かってことか？」

「何か、じゃなくて警備員だ。アシスキル前、仕事終わりにちよつと行き会って、特定の住むところなんてないって言ったら半ば無理やり泊められたことがあってね。んで、その相手の知り合いがそういうやつを居候させるって人らしいからな。その知り合いも教師らしいし、大丈夫だろ」

「IDはどうするんだよ。それがなけりや、身元引受人になつてもらふこともできねえだろうが」

「偽装する。最悪、能力使えばどうにでもごまかしは効く」

一応説明すると、IDとはいわゆる身分証のことである。学園都市のほとんどのシステムで必要不可欠なものとなつているため、ないと何かと面倒なことになりかねない。

それから、あらかた思いつく疑問をぶつけ、その意思に迷いが無いことを確認した二人は軽いため息をついた。

「・・・全く、いきなりすぎるわよ」

「それには同意だな」

「そりやま、今思いついたことだからな。それとは別口であんたには相談があるんだが・・・ま、その辺はまた今度ってことで」

麦野のため息による返答を受け、万はセレネに向き合つていった。

「つーわけでだ、近いうちに学園都市に行くぞ。もしIS適性がなかったとしても、あつちで居場所を見つければいい」

「・・・そう簡単に行くものなのかしら？」

「意外と簡単にいくかもしれねえぞ」

どこかあきらめを感じているかのようなセレネの口調に、万は樂觀的とも思える口調で返した。

「俺だって、こうして表で暮らすのはたまたまだったけどさ。たまたまでも、こうして表の世界で暮らせるようになったんだ。自分からこうして行動しようとしているやつに、そういう機会が訪れないとは考えにくいがなあ」

「・・・まあいいわ。そういうことにおいてあげる」

「そうしてくれ」

そういつた直後、彼は顔を変えた。といっても、変装したわけではない。ただ、その表情と雰囲気の変化から、まるで別人のようになった、というだけだ。

「ところで、あのデメテルってやつのことを聞いてもいいか？」

「構わないわ。もう私は亡国企業に肩入れする必要もなくなってるわけだし」

「じゃあ、遠慮なく。・・・あいつ、本当に能力者か？」

その言葉に、麦野は訳が分からないといった顔をし、セレネは驚いた顔をした。

「どうしてそう思ったのか、参考までに教えてくれる？」

「あの時、俺はかき消すのではなく、最初は止めようと思ったんだ。あの土でできた牙や礫を、な。だけど、それはできなかつた。この時点で考えられる原因は二つだ。まず一つ目は、俺の能力による、現実の事象を改変する力——便宜上、事象干渉力と称するが——、こいつが相手に比べ足りなかつた場合だ。つまりと、能力の出力の大きさで力負けを食らつた、つてとこだな。だけど、これは俺の能力を発動したときの感触から違ふと思つた。あまりにも手ごたえがなさ過ぎたからな。だとすると、答えはもう一つのほうしかない。——言つちまつていいか？」

一度説明をやめ、確認を取つた方にセレネはどこかあきらめの混じつたような声で答える。

「なんだ、もうほとんど答え分かつてるんじゃない。——別にいいわよ、間違つてなさそうだし」

「んじやま、遠慮なく。——で、その「もう一つ」つてのが重要でな。麦野、グループの情報つて覚えてるか？」

「グループ……。確か、土御門つていうリーダー格と、一方通行を要する、アクセラレータ暗部有数の組織、だっけか」

「そのほかの幹部メンバーについては？」

「確か、座標移動と、あとは胡散臭いイケメンとしか知らねえな」

「その胡散臭いイケメンのほうの能力、知ってるか？」

「・・・詳しくは知らねえな。ただ、なんかものがきれいに解体されてた、とかいう情報なら入ってる。そんならいなら、そっちの耳にも入ってるだろ？」

「ああ。ただ、それははたして、科学側の技術によって起きる事象なのか、つてところが問題だ。結論から言っちゃえば、俺はそうじゃねえと思ってる。とある情報筋から入った情報によると、別の人間も似たようなことをしていたらしくてな、しかもこれが発動モーションからそれによって発生する事象までほとんど同一でな、ちよつと調べてみたら、どうやら金星の位置に関係しているらしくてな。で、面白いことにその反射角等が同一と来た。科学側の能力では、そんな特殊な能力が全く同じモーションで発動するなど、まずありえない。ここまではOKだな？」

万の確認に二人がうなづく。

この説明の最後の部分を少し捕捉すると、能力において、発動で重要なのはパーソナルリアリティ。要は、イメージできれば別段モーションにこだわる必要はない。それゆえに、もし同じように右手を上げて能力を発動させる能力者がいたとしても、その人の微妙な癖や個性が出て、厳密に全く同一にはならないはずなのだ。

だが、万に入ってきた報告は、そのモーションの動機が全く同一だった、という話だっ

た。学園都市の計測機器を使った上での分析結果だ、まず間違いはないだろう。

「だとしたら、考えられるのはひとつだけ。ありえないとは自分でも思うが、おそらくオカルトだろう。ファンタジーにおいて、一つの呪文では一つの改変しかできないように、そのモーションではおそらくそれしか——物質をきれいに解体するしかできないんだろう。そして、似たようなことをあの時デメテルはやってた。だからこそ、能力である俺の干渉は、彼女のほうの改変に対して意味をなさなかった。力のベクトルの種類が違う以上、事象干渉力云々以前に相互干渉が不可能だからな。——違うか？」

その仮説を最後まで聞くと、セレネははあとため息をついた。

「なんとというか、情報がそろっていったっていつても、ここまで当てる？」

「その様子を見るに、あらかたあたり、ってどこか？」

「あらかたどころじゃない、ほぼ全部あたりよ。なんであんたの能力がデメテルの魔術に通じなかったかは私にすらわからないけど、それ以外は全部あたり」

「そうか、ならよかった」

そういつてほっとしたような表情を見せる方に麦野が横から突っ込んだ。

「ちよつと待てよ、事象干渉でどうにもならないっていうんならどうするつもりだ？」

「簡単だ、事象に干渉できないんなら、事象を事象で打ち消しちまえばいい。つまるところ、地面を操るっていうところまではわかつてる。そのうえでそれよりかたい壁で防ぐ

とか、礫とかなら空気の弾丸で粉碎するとか、いくらでも手はある。さて、俺はそろそろ行くわ。準備とかもあるしな」

それお前にしかできないだろ、という麦野のツツコミを華麗にスルーして、万はすたすたと病室からいなくなった。

そして、病室から自分の部屋に戻る道中で万は思考する。

（魔術、か。これまた面倒なこったな。あいつの話じゃ、魔術と超能力は互いに不干渉を貫いているらしいし・・・）

そういつて思い浮かべるのは一度だけ仕事を共にした胡散臭いアロハシャツの男の顔。

（ま、なるようになる、か）

その時点では深く考えず、万は部屋に戻った。

それから少し時間が過ぎ、万とセレネは学園都市外周周辺に来ていた。

「・・・で、なんでこんなところなのかしら？ IDを持ってきているなら、ゲートからというのがしかるべき筋なんじゃない？」

「まあ、そうなんだが・・・。手続きとかが面倒くさいからな、こつから入らせてもら

うことにしたんだよ」

そういうと、彼は壁に手をかざした。その瞬間、突然入り口が現れ、その中にはリフトがあつた。

「・・・こんなところあつたのね」

「かなり高性能なホログラムだつて聞いてたけど、ここまでとは思つてなかつた。おかげで見破るのに手間取つた。いやー驚いた」

「・・・なんであんたは見破れたわけ？」

軽口としか思えないような声音でいう方に入つてからセレネが疑問をぶつけた。

「あー、あんたもあれか、普段は演算切つてるクチか？」

「まあ、ね。いつもあんな演算してたらさすがに疲れるし」

「それならしゃーねえか。でだ、見分けた理由なんだが、まずここらへんに隠し通路があるつてことを知つてたのが一つ。それと、このホログラム、色彩パターンのずれが妙に論理的すぎるような気がしてな。ここまで密度の濃いホログラムだつたら並大抵の通信は通んねえだろ。種がわかればあとは電気信号をちよろつといじつてケリだ」

まるで当たり前のように

「・・・相変わらず規格外ね、あんた」

「それは俺にとつてはほめ言葉だな。・・・んじゃ、行くぞ」

そういつて彼はリフトの操作スイッチに意識を傾けた。

「ところで、なんでこんなところがあるわけ？」

リフトに揺られながら、横に立つセレネが聞く。

「なんでも、風俗とか行くのに大人どもが使うんだと。どうしても未成年が多い土地柄、そんなものの中にはないからな。頻繁に学園都市外に出る許可もらつてると怪しまれるからつて理由でこの隠し通路ができたらしい。研究所のほうや首脳陣は大人が多いから黙認されて、結果、公然の秘密みたくなつてゐるつてわけだ」

万の口から出たいわゆる「大人の事情」に軽くセレネは笑つた。

「なるほどねえ……。納得できる理由だわ」

「軽くアホらしく思えるのも事実だがな。……と、そろそろみたいだ」

やがて止まつたリフトから降りると、万はそのまま先導して歩き出した。しばらく歩いてからセレネが万に聞いた。

「そういえば、今どこに向かつてるの？」

「俺が学園都市滞在中に使つてる部屋だ。あそこなら、俺が出てきてもそこまで不審に思われん」

そういつてそのままつかつかと歩くと、やがて立ち止まって横にある一つのコンソールに手と目をかざす。すると、音もなくするりと壁に偽装された扉が開いた。というのも、二人ともそれぞれ能力のリーダー（セレネの場合はどちらかというところ）だが）があつたからこそ気づいたわけだが。

「……これ、一部の人間じゃないと気づかないわよね？」

「まあ、な。電気系の能力者には悪いが、不正なハッキングで解除しようとしたらトラップでお陀仏つてからくりになつてゐるから、不法侵入とかの心配はないしな」

「……結構慎重なのね」

「寝てる間くらいはゆっくりしたいからな」

「まあ、それには納得だけどき」

扉の中の簡易エレベータを登りきると、そこにはちよつとしたビジネスホテルのような部屋があつた。意外と整つた部屋に軽く驚いてゐるセレネをよそに、方は部屋の点検を始めた。

「へえ、結構設備整つてるのね」

「そりやま、ここがメイン拠点だからな。前帰つてきたときなんかはISの整備もここで行つたし」

その言葉を聞いてセレネは納得をした。いくら拠点の一つとはいえど、ここまで警備

を頑丈にする必要があるのか、とずっと疑問に思っていたものだ。だが、メイン拠点から多少警備が頑丈すぎるほうが確実だ。

「で、この後どうするの？」

「例の警備員アンチスキルのやつに会いに行く」

「今から？」

「さすがに今すぐにはいかねえぞ。一服したらちようどいい時間になるはずだしな」

そういつて万はコップを差し出した。中には透明に近い液体が入っている。

「・・・ハーブティーとは、いい趣味してるわね」

「一時期はまってね、葉がまだ使えたから作ってみた」

「へえ・・・」

その後、万に言われて二人は腰を掛け、セレネは一口口をつけた。ゆつくりと飲み下すと、心なしかほつと落ち着いたような感覚を覚えた。

「・・・ところで、あんたはここをどう思うの？」

「正直なところ、何とも言えないな。多面的すぎてコメントのしようがねえよ」

「そうね。私はネガティブなイメージしか持つてないから、コメントはなんともできないんだけど。そういう一面も見てみたいものね」

そこで一回言葉を切ると、コップをおいてセレネは切り出した。

「ねえ。もし、もしもよ？ 私が残りたいって思うようなことがあつたら、そっちのほうの手ほどきもお願いできる？」

その言葉に、万は意外そうな顔をした。

「・・・俺にできることはする。それでいいか？」

「十分よ。・・・ただ、衣類とかは新たに買うことになっちゃうけど」

「大丈夫だ。ここはその手のバイトには事欠かない。時給もそれなりだしな」

「ならいいけど・・・」

そこからさらに一口自分の飲み物に口をつけると、

「さて、そろそろ行くぞ」

「まだ時間には余裕があるんじゃないの？」

「ちよつと寄って行くところがあるんでな。ああ、支度に時間がかかるから、もう少しゆつくりするくらいの余裕はあるぞ」

そういつて出かける支度をする——といつても例のボックスに銃器をしまうだけだが——万を横目に、セレネはゆつくりとコップを空にした。

彼の支度が完了し、万はある部屋に入ると突然振り返り、セレネに向かつて何かを投げた。驚きつつも反射で受け取ると、それはフルフェイスのヘルメットだった。

「面倒かもしれないけど、使ってもらわないと俺が面倒なことになるんでな」
「どういうことよ？」

「タンDEMで移動するんだよ。歩くよりよっぽど早いし楽だろ」

その言葉に一応の納得をし——かけて、ふと疑問が思い浮かんだ。

「ちよつと待って、免許は？」

「もうとつてある。いくらほぼ独立国家とはいつても、あくまでここは日本の一部だからな。免許も外のものが使えることはもうすでにリサーチ済み。それに、学園都市内の免許証ならもうすでに偽装してあるから問題なし」

そんなことを当たり前のように言う万にあきれつつ、セレネはヘルメットをかぶった。

『ねえ、もつとおとなしく運転できないわけ？』

『そりや無理な相談だ。だったら恥ずかしながらもつとしつかり捕まっとけ』

走り出してからしばらくして、ヘルメットの中に備えられた無線でセレネが万に向かつて言う。

一応補足しておく、セレネはいくら血みどろの中を歩いてきたとはいえど、精神的にはまだまだ初心な“女の子”である。世の中の暗い部分しか見てなく——この場

合だと「見えてなく」というべきかもしれないが——世間に対してはどこかあきらめにも似た達観の情があつたが、それはそれ、これはこれである。

つまり何が言いたいかといえ、タンデムという否応にして密着する体勢は彼女にとつてこの上なく恥ずかしいのである。

実際、胴に腕を回すというだけでもフルフェイスの中の顔を真っ赤にしていた。もつとも、このフルフェイスは目線で照準が読まれることを防ぐためにバイザー部分にスモーク加工してあるので、その表情が読まれることはなかつたわけなのだが。

と、思っていたのはセレネだけで——ちなみにセレネはその能力の特性上、スモーク加工してあることは見破っている——万はその口調などでどんな表情なのかを讀むことができた。

閑話休題。

そんなこんなで、彼らの「寄るところ」とは。

「さて、目的地到着だ」

「ここがその目的地なの？見たところただのマンションじゃん」

「その住んでる人物が問題なんだよ」

そんな会話をしつつ、そのマンションの一室の前でいったん止まってドアホンを鳴ら

した。

『はい、超どちらさまでしょうか?』

「あー、えっと、黒川だが。麦野さんから連絡受けてないか?」

『あ、超ちよつと待っててくださいいね。今開けます』

そういつて出てきたのは小柄な少女だった。

「お待たせしました、どうぞ」

その言葉を受けて二人は中に入った。案内されるまま部屋にいくと、そこには高校生くらいの男女が一人ずつ、そして小学校くらいの少女が一人いた。

案内してきた小柄な少女に促され座ると、少女も同じように座った。その横に、他の三人も並んで座った。

「さて、自己紹介は必要ですか?」

「俺には要らねえけど、こいつには必要なんぞな。一応頼むわ」

万が横に座ったセレネに親指を立てつついうと、その少女はゆっくり口を開いた。
「さすがは仕事人^{タスカ}。そのくらいの情報収集なんてお手の物つてわけですか」

「ま、俺の場合特に情報を持っている必要があつたからな。つつても、その嬢ちゃんは知らないが」

「知らなくて当然でしょう、フレメアがここに来たのは最近ですから。——さて」

そこでいったん言葉を区切ると、少女はセレネに向き合った。

「初めまして、ですね。私は絹旗最愛きぬはたさいあいです。よろしくお願ひします。えっと・・・」

「こちらこそよろしく。呼び方は・・・そうね、セレネでいいわ。本当の名前は覚えてないしね」

「じゃあ改めてよろしく、セレネ。で、用件ですけど・・・」

「無茶を言つてすまなかつた。で、どうなんだ、進捗状況は？」

「あれくらい、浜面の手にかかれば無茶でも何でもないですよ」

「そーいうことだ。ほれ」

そういつて男のほうが一枚のカードを差し出す。そこには、セレネの顔写真と何やら日付が書かれたものがあつた。

前、麦野に連絡を取つてほしいと頼んだのは、ほかならぬアイテム相手だつた。

仕事の都合上、いろんな組織の情報を知つておく必要があつた方は、アイテムの一員の手先が器用で、ピッキングはおろか、IDなどの偽装もできると聞いて、本人の計測した種々のデータとともにアイテム側に送り、IDの偽装を頼んだのだ。

閑話休題。

それをセレネがとったことを確認すると、男はまた口を開いた。

「それがIDだ。名前はその名前を使ってくれ」

机の上に置かれたカードを手にとると、セレネは目をキラキラという擬音がつくレベルで輝かせそれを見つめた。が、少しするとはつとそれをおさめてそれを差し出した本人に顔を向けた。

「・・・失礼しました。ありがとうございます、えつと・・・」

「はまづらしあげ浜面仕上だ。それと、礼はいらないぜ。俺は依頼をこなしただけだからな」

「それでもこちらから礼を言う必要があるのには変わりない。それで、報酬なんだが」
そういうと彼は量子変換ボックスを三つ出し、机に置いた。

「すまない、三つしか用意できなかった」

「十分十分。五つってのは理想だと言ってあつたらあ？」

「いや、これくらいのことだ、できれば目標をマストにしたかったんだが・・・」

「問題ねえって。それに、これでもここにいる人数分は確保されてるし、問題ねえ」

人数分すら確保できてない、というツツコミが入りそうになったが、相手側も納得しているようだ、ということ察して何とかその口を閉じた。

「・・・ならいいが」

「うん、そういうことにしてくれ。——ところでだ。麦野は元気にしてるのか？」

そこから、仕事の——あくまでビジネス的な意味で、だが——顔から、仲間を慮る顔になって言った

「ああ、特に気落ちしてるとかいう様子はなさそうだけ。ほかの生徒からの人気もあるみたいだしな」

その言葉に浜面はほっとしたような顔つきになった。

「それとは別に、話がある」

そこからさらに顔を引き締め、浜面はしっかりと万の顔を見据えて切りこんだ。

22. 報せ

相手の顔が変わったのを見て、二人も表情を引き締めた。

「・・・話、というと？」

「学園都市の中にI Sを獲得、解析ののちにその仕組みをこっちの兵器に転写できないか、つて意見があつてな。しかも厄介なことに、平和的獲得ができなければ奪取、最悪流血もやむなし、つていう過激な意見まで出てる始末だ」

「・・・なるほど。な。それで俺に、つてことか」

I S並の戦闘力を持つ機械の製造など、学園都市の技術力をもつてすれば可能だろう。だが、“操縦者の絶対の安全”というのは保証ができない。その点だけでも、ということなのだろう。ならば、I Sを入手して、というのが手っ取り早い。——あくまで手段を択ばないのなら、ではあるが。

各国の機体を奪うという手もあるし、購入するというのも一つの手としてあるが、国家がほぼ独占しているI Sをいまさら入手するのは難しい。ならば奪うしかない。

なら、どこから奪うか。簡単な話だ、奪いやすいところを狙えばいい。とすれば、それはどこか。国家と違い、あくまで傭兵に過ぎない警備員しかおらず、訓練機としてI

Sを多く——他に比べて、という意味だが——保管しているIS学園などカモだろ
う。

「で、結論として何が言いたいんだ？」

「気を付けてほしいんだよ」

万の問いかけに答えた浜面の後を継ぐ形で少女が静かに口を開いた。

「私たちはここから出ることはできない。もうすでに、何か学園のほうで不穏なことがあつたみたい、っていうのはわかるんだけど」

「・・・さすがは能力追跡、^{AIMストーカー}そのくらいはお見通しつてか」

「体晶を使わなくても、ぼんやりとならわかるし、その状態でもはつきり分かるくらい変化があつたから。・・・それで、麦野は私たちの仲間だから。できることなら、もう危ない目には遭つてほしくない」

それは麦野沈利という人の性格や立場から言つてかなり難しいことと分かつたうえで言つているのだろう、というのには容易に察することができた。

「・・・わかつた。できるだけ、目を光らせる。約束する」

しつかりと相手の目を見据えながら、万は静かに宣言する。

「ありがとう」

「礼を言われるようなことじゃねえから安心しろ。それに、俺にとつても、降りかかる火

の粉は払うだけだ」

最後に付け足すように言われた一言の口調の冷たさに、その部屋にいた皆が口をつぐんだ。まるでその冷たさは、自分以外の人間がどうなるかと知ったことではない、と言外に言うような口調だったからだ。

実際、彼はそうなのだろう。いくらお人よしでも、仕事でも、無理な仕事は引き受けない。それは、彼が仕事人として過ダスカーごしていた時代からのルールだった。

「重ね重ね、IDの件は感謝する。それと、これを」

そういつて方は机の上にUSBメモリを置いた。この手のものはいくら科学技術が進んだと言えどまだ現役で残っているものも多い。もつとも、そのUSBにさまざまなセキュリティを設定できるようになっているなどの工夫はされているが。

「俺の連絡先と、後俺の拠点に入るためのパスワード。それと、それ以外にも役に立つであろうファイルだ。詳しくは一緒に入っているテキストファイルを見ればやり方は書いてある」

その言葉を聞いた瞬間に、浜面の目が何とも言えない光を帯びたことに方は気づかぬふりをした。

「じゃあ、俺はそろそろ行かせてもらおう。またなんかあればその連絡先に頼む」

「・・・ああ」

一拍おいてからの返答にペこりとお辞儀をしたセレネを見て方はふと微笑んだ。

「またもタンデムで移動してたどり着いたのは何の変哲もない普通の高校であつた。もつとも、〃学園都市の中で言う〃普通の高校だが。

正面玄関から入つて事務室で面会に来た旨を伝え、応接室で待つこと数分。ジャージ姿の女性教師と女の子が入つてきた。

「いやー、待たせたじゃん」

「いえ、あなたには一宿一飯の恩義がありますし、大して待つてもいないので気にしないでください」

「そういわれると助かるじゃん。ところで、その子が・・・」

「はい。月島深名つきしまみなです」

静かな声でセレネが自己紹介をする。もともとの振る舞いがどこかお嬢様のような上品なものだからか、それを見て二人は好感を持ったようだった。

「私は黄泉川よみかわ愛穂あいほ。で、こつちが月詠つきよみ小萌こもえ。二人ともこの学校の教師じゃん」

黄泉川のほうからもたらされた紹介に二人は半ば反射的にいぶかしげな顔をした。そんな二人の様子を見てか、小萌が——この場合では小萌先生といふべきかもしれないが——軽く苦笑しながら二人に向けていった。

「人は見かけによらないのですよ、二人とも」

その言葉に方は半ば感心しながら「やってしまった」というような顔をした。彼は簡単に表情を表に出すことを良しとしていないからだ。

「すみません。ところで、そろそろ本題に入りたいのですが」

「おつとつと、そうじやん。で、わざわざ会いに来たってことはそれほどの用件、つてことなのか？」

「ええ。．．．ところで深名」

「もう確かめてある。少なくとも、盗聴器は仕掛けられてないわ。カメラのほうは私がごまかせる」

「OK、サンキュ」

思い出したように呼ばれたセレネがすばやくリサーチ結果を伝えた。その短い会話を聞いた黄泉川の表情にすと陰りがさしたのを方は見逃さなかった。

「．．．どうかされました？」

「いや、なんでもないじやん」

何気ない体で問いかけた方の質問に黄泉川も何事もないように答えた。

「それで、ですね。彼女はちよいと訳ありでして。で、数日前に行き会って、行く当てがないそうなので、そういうえば、と思い出してここを訪ねた次第なのですが」

「なるほどねえ。要するに、月詠センセにその子を預かってほしいと」

「はい。彼女のほうも、この件は承諾しています。身勝手なお願いであることは重々承知の上ですが……。お願いできますか？」

「構わないのですよ。よろしくお願いしますね、月島ちゃん」

あまりの即答に軽くない驚きを感じながら万とセレネは頭を下げた。

「ありがとうございます」

「別にお礼を言われるようなことではないのですよ」

そんなテンプレなやり取りが終わったところで、黄泉川がいったんつむっていた目をゆつくりと開き、万をしつかり見据えて問いかけた。

「なあ、一つ聞いていいか？」

「ええ。なんでしよう？」

そして、その口から出てきた言葉には万も驚くしかなかった。

「その子、もしかして『裏』に関係してるじゃん？」

隠せない驚きを出しながら、ゆつくりと万はうなずいた。その反応を見て黄泉川は「やっぱりか……。」と独りごちた。

そんな反応を見て、万は黄泉川に問いかけた。

「なぜそう思ったのか、参考までにお聞かせ願えますか？」

「・・・直感、かな。知り合いに何人かいるじゃん、そういうやつが。そいつらと、なんというか・・・。雰囲気っていうのか、オーラっていうのか・・・。そういうのが似てるような気がしたじゃん。それに、彼女の能力、もしかして“波長を操る能力”なんじゃないか？」

前半には慧眼に驚くばかりだったが、最後に付け足されたように言われた言葉に、二人とも驚きと疑問が入り混じったような表情を浮かべた。

「なら、たぶん間違いないな。君、もしかしなくても研究所暮らしたんじゃないか？」

あえて、黄泉川は月島とも深名ともいわず、君という呼称を使ってそういった。

ここまで当てられてはもう疑うべくもない。万はそう判断し、口を開いた。

「あなたは、彼女の幼少期を知っているのですね？ それも、個人としてではなく、アシチスキル警備員として」

今度は黄泉川が驚く番だった。その反応を見て、どこか悲しげにふと笑った。

「やはり、ですか・・・。結論から言います。彼女はその頃を覚えていません。あなたが過去のことをどうしようと、俺は干渉しない。故に、俺はこの件についてこれ以上触れないことを約束します」

それは、宣言と同時に、一つの封印を解く言葉でもあった。

今まで彼女の過去に触れることはほかならぬ彼が禁止していたのだ。彼女の記憶を断片的に見たからこそ、彼はそれを禁止したのだ。

それを知っているからこそ、セレネは横でぎよつとしたような表情を浮かべこつちを見た。それに対し、軽く笑って方は言った。

「大丈夫だ。その辺はちゃんとわきまえてる人だからな。・・・何はともあれ、お願いします」

そういつてもう一度頭を下げた。そのまま、隣のセレネを促して帰ろうとしたときに、ぽつりと彼女が言った。

「ねえ。やっぱり私、ここに残りたくない」

その言葉に、教師二人は訳が分からないといった表情をしていたが、万だけが軽く笑った。それはまるで、いたずらばかりする子供に対して仕方ないと笑うような、やさしい笑顔だった。

「・・・俺は言ったはずだ。あんたの意志を尊重すると」

そして、笑みを消して、しつかり目を見ていった。

「お前は、何がしたいんだ？ そのために、何をしなくてはならないんだ？」

その言葉を受けたセレネの目に、力強い光がともった。そこに今まであつた躊躇や遠慮はなかった。

「・・・私を、この学校においてもらえないでしょうか？」

その言葉に、教師二人は先ほどの万のような笑みを浮かべた。

「・・・構わないじゃん」

「そうですよ。遠慮することはないのです！」

「・・・ありがとうございます！」

その言葉に、心底嬉しそうな笑みを浮かべ、セレネは深く頭を下げた。その笑みは、万が今まで見た中で最高の輝きを伴っていた。

23. 一難去ってまた一難?

万は学園に戻ると違和感を覚えた。

具体的には、少々学園全体の空気が浮ついていっているような気がしたのだ。それはまるで、お祭りが近くなって浮かれているような・・・

と、そこまで考えて万はふと疑問を覚えた。

(ん・・・?さてよ、祭り・・・?)

その単語に嫌な予感を覚えつつ自分の席に座ると、たちまちクラスメイトから声をかけられた。

「黒川君はやっぱり麦野さんと組むの?」

「組むってなんだよ。全く持って状況が読めねえんだけど?」

「えー、知らないの?」

「知るも何も、数日とはいえ学校来てなかったんだからわかるわけないだろ。もつと詳しく説明してくれ、頼むから」

「あ、そういえばそうだったっけ」

「ところでどこに行ってたの? 旅行?」

「ちとこつちにも用事があつてな」

「どんな用事？」

故意なのでは、と思うレベルで話を脱線させたがるクラスメイトに辟易しつつ、万は誰にともなく言った。

「んなことはどうでもいいだろ。なんかあつたのか、俺がいない間に」

「あれ、本当に知らない？」

どこからか聞こえてきたその声に軽くため息をつき、いらだちまぎれに少し大きな声を出そうとしたとき、高く澄んだ声でそれをいさめる声が聞こえた。

「あなたたち、数日ぶりに学校に来た生徒に事情説明くらいなさいな。自分の身に置き換えて今の万さんの状態を考えてみなさいな」

「あ、オルコットさん……」

「それに、そろそろ時間ですわよ？」

そこには、セシリアが軽く腰に手を当てて立っていた。

あくまで風のうわさに過ぎないが、彼女は学年でも10本に入る実力と美貌、そして他を慮る性格により、かなり周囲からの人望も厚いと聞いていた。

それはそれとして。

彼女の言葉と、間もなく朝のSHRが始まるということもあり、クラスメイトが席に

着くのを見つつ、セシリアは方に向かつて口を動かした。その口の動きから、万は何を言っているのかを予測した。

(「次の休み時間に説明いたします」、か)

それに対してこちらも口の動きのみで「わかった、頼む」と伝えると、彼女はにこりと微笑んで自分の席に戻って行った。

その行動の端々にも育ちの良さが現れていて、やはり本物のお嬢様は違うな、と全く関係のないことを思い浮かべたのは、おそらく今頃学園都市の学校で過ごしている少女と一緒に行動した時間があつたせいだろう、と推測したところで前の扉が開き、担任が入ってきたのを見て、万は思考を途切れさせた。

そしてその直後の休み時間、約束通りセシリアが万の机のところに来た。

「とりあえず、簡単に事情を説明いたしますわね」

「おう、頼む」

彼の性格を知つてか否か、セシリアは直球で切り出した。

曰く、なんでも専用機持ちのトーナメントが行われるらしい。そのトーナメントはペアで行われることから、一夏が一体誰と組むのか、というのが注目されていたが、どうやら一夏は4組の更識簪に猛アタックを敢行しては無視されたり断られたりするというのを繰り返しているらしい。

今のところ、ペアを組んでいないのは、シャルロット、ラウラ、鈴音、セシリア、麦野、そして一夏と簪らしい。

「・・・なる。でも、一夏は内部事情を知っているのかねえ・・・」

「内部事情、と申しますと？」

そのセシリアの言葉に、一瞬で周囲に目を配り、こちらを注視している目がないことを確認すると、万は意図的に声量を落としていった。

「最初に言っておく。この件は他言無用だぞ」

「・・・わかりましたわ」

「んじゃあつづけるけど、更識簪ってのは今の日本の代表候補生なんだが、これの専用機の開発をしていたのが倉持技研ってとこ。白式と同じとこだな。で、春先に白式を急ピッチで作ることになって、その結果、更識簪のほうの専用機が開発半ばでほぼ打ち切りになったんだと」

「・・・無責任と言いますか、なんといえますか・・・」

「全くだ、元技術屋としてはアホかとしか言えねえ。でだ、その結果、その開発半ばの機体を、彼女が一人で完成させようとしてる。俺が知ってるのはここまでだ」

「・・・なるほど、それで強固なまでに拒否している、と」

「おそらくな。といっても、それが八つ当たりなだけっていうのもわかってるから、余計

フラストレーションがたまるんだろうな・・・」

そんな風に独り言ちつつ腕時計に目を落とすと、また目線を戻した。その時に、セシリアが問いかけた。

「そういえば、その腕時計はどうしたのですか？ 確か、一学期にはつけていませんでしたわよね？」

「ああ、夏休みに買ったんだよ。ちよつとしたアクセントっていうか、なんていうか：。まあ、俺も多少は身なりに気を遣うんだよ」

その質問に用意してあつた答えを言うと、セシリアもそれ以上は深く追求はしなかった。

それ以外にもいなかった時の学校の様子を聞きおえたときには授業開始数分前で、万は軽い謝礼の言葉とともに席に戻った。

そんなことがあつた朝からは特に何事もなく、万は昼休みに食事をとろうと食堂に行き、席に座って食事を食べようとした。ちよつどその時に、すと影が差した。

「隣、空いてるかしら？」

「・・・どうぞぞ」

顔を上げずにした返答の後に、その人物が座つたことを確認すると、万はいまだに視線を変えずにそのまま言った。

「……で、何の用件ですか、更識楯無生徒会長？」

「いやだなあ、そんなに警戒しないでよ。おねえさんこわいわあ」

「そのわざとらしいしゃべり方やめてもらえませんか。あそこでああいう表情ができる人間にとってみればこの程度今更でしょう」

あくまで警戒を解かない万に対して楯無は一枚の紙を静かにおいた。その置き方などは、それなりに注視していないと気づかないほどだった当たり、やはり目の前のこの人物は食えないと万は思った。

そして、その紙には「放課後、生徒会室」とのみ書かれていた。それを見て、万は胸ポケットにしまつてあつたペンを左手で持つと、さらにその紙に「なぜ？」と書き足し、ペンを紙に置いた。それを見てか、楯無も右手でペンを持ち、「それも含めてその時話す」と書き足した。それを見て軽いため息をつく、短く「了」の一字を書いた。

その後は特に会話もなく昼食は終了し、放課後、万は約束通り生徒会室へ向かつた。ノックをして中から了承の返事をもらうと、中に入る。

中には楯無しかいなかった。おそらく、彼女が人払いをしているのだろう。

「さて、応じてくれてありがとうね、黒川君」

「いえ、こつちとしても断る理由がありませんでしたから。・・・で、一体どういう用件ですか？」

「一夏君が簪ちゃんに対して猛アタックをしてる、って話は聞いてる？」

「ええ。なぜそんなことをしているのかは知りませんけど」

「実はそれ、私の手引きなの。簪ちゃんが一夏君に対して敵しいのは・・・」

「機体のせい、でしょう？元技術屋としては二つの機体を仕上げる苦労もわからずに無茶なオーダー出した上層部の気がしれませんが」

実際に過去にプロジェクトチームの一員として作った試作機の一つは、今彼が専用機として使っているわけなのだが、これはコンセプト決定から安定稼働ができるようになるまで半年弱の時間を要したと聞いている。白式の場合、大方完成しかかったか、欠陥機として放置されていた機体をブラッシュアップしたのだろうか、それでも一月かそこらで開発まで終了させろというのは無理な話である。

「まあ、そんなのはこの際おいておくとして。それを知っていてなぜわざわざ？」

「むしろ、だからこそ、かなあ。それに、簪ちゃんの機体——打鉄式式ついでいうんだけど、これは高速軌道からの遠距離狙撃がコンセプトだから、接近戦特化の白式とは相性がいいと思うし」

「……ま、それは一理ありますね。で、俺に何をしろと？」

「うん……。一夏君が式式の開発を手伝おうって言うてるそうなんだけど、こつちもやっぱりダメっぽいんだよね。そこで……」

「俺に協力をしろ、と。まあ確かにこの学校の中では俺ほどの適任はなかないでしょうけど……」

「そういうこと。協力、してくれる？できれば、私の名前を出さずに」

そういう楯無の目を、万はじつと見つめた。その中に宿る光には、昼に見せたおどけたような、ふざけたようなものは一切なく、ひたすら衷心から頼みをする目が合った。

「……わかりました。できるだけ自然に接触してみます」

静かに返答すると、楯無はほっとしたように肩の力を抜いた。

「ありがとう。それじゃ、よろしくお願いします」

いつもの人を食ったような態度とは打って変わった神妙な態度で、彼女はゆつくりと頭を下げた。

その足でいつも使われている整備室に足を運び、その中にひっそりとしてみた。

その中には水色の髪をした少女がある機体の前でディスプレイとにらめっこをしつつあれこれ調整していた。おそらく、あの機体が更識簪の専用機である『打鉄式』な

のだろう。しかし、どうやら出力の調整がうまくいっていないようだ、というのは遠目から見ていてもわかった。

そこで、彼はセイリユウのステルス機能と自身の身ごなしを併用して近くまでより、彼女が一体どのようなことをしているのかを見た。あくまで横から見ただけに過ぎないが、そのプログラムは本格的だ。メカの方面に通じていた身としては、代表候補生よりプロのエンジニアのほうが向いているのではないか、と思つたほどだ。

だがしかし、直後にエラーメッセージが発生する。その原因はわからないが、おそらくは。

「脚部スラスタの排熱プログラムがちよいと甘い、とかか・・・？」

あえてセイリユウの光学迷彩を解いたうえでわざとぼそりといったセリフは、思いのほか整備室に響いた。ぎよつとしたように少女が振り返る。その反応に驚きと謝辞の入り混じったような表情を浮かべ、万は言った。

「ああ、邪魔しちゃつたらごめんなさい。少し興味があつたもので」

「・・・興味って、この子に？」

「両方に」

短く要点のみで問いかける少女にこちらも同じく要点のみで答える。

「日本の代表候補生とその専用機、そして専用機のほうは搭乗者本人が調整する・・・こ

んなレアケースそうそうないし。あと、思いのほかプログラムとかがハイレベルみたいだしね」

「・・・へえ。でも、あなたには関係ないじゃない」

「うんにや、関係ある。俺も専用機持ちだからな。あんたがいないと、おそらく俺があぶれる。聞いた話では、一夏が猛アタックかけてるみたいだし、もしあんたと一夏が：」

「ありえない」

「うん、だからあくまで仮定の話」

説明する万の声をぶった切つてかたくなな声で否定した彼女を軽くなだめて万は続ける。

「もしあんたと一夏がペアを組んでくれるのなら、俺だつてあぶれなくて済む。ほかの女子は適当に組むだろうしな。それに、元技術屋として、未完成のままっていうのは気になることなんだよな。つつーわけで」

手伝わせてくんない？

そういつて軽く笑いながら言う方に簪はひとつ言った。

「いやだ。この子は、私が一人で仕上げる」

「現実問題、無理だ」

あくまで頑なな態度をとる簪に対し、万はあまり切りたくないと思つていたカードを

切ることにした。

「あなたのお姉さんだつてある程度の手助けは借りたと思うぞ。すべての助力を断つて、そのうえで一人で仕上げるなんて無茶だと思えない。あなたには技術があるかもしれない。つていうより、あるつて言ったほうがいいかな。それでも、一人でやることには限度つていうものがある。それに、もしパーツ交換等が必要つてことになつたら、その時の費用はどうする? 専用機持ちのトーナメントまで、あとひと月もない。その間に、この機体を完成させるなんて無理だ。少なくとも、俺には無理だ」

彼の切つたカード。それは、現実を突きつけるということだ。できれば、こんなに序盤に切るようなことは避けたかつたのだが、こうなつてしまつては仕方がない。

「そんなの、やつてみなくちゃわからない。それに、間に合わなくても……」

「一人で仕上げることに意味がある、つてか? 折角、姉貴を打倒できるチャンスがあるかもしれないのに、それを潰す意味があるのか?」

その言葉に、簪は黙り込んだ。どうやら彼女は自分の姉が有能であることにコンプレックスを抱いているようだ。なら、それをどうにかして解消するような道筋にすればどうにかなるかもしれない。そう思つた万の作戦はどうやら功を奏したようだ。

「……わかつた。じゃあ、手伝いをお願いできる?」

「もとよりそのつもりだ。んじゃま、プログラムとか見させてもらえる? 話はそれから

だ」

その言葉に、簪はおとなしく画面の前を方に空け、方は軽く礼を言いつつプログラムの精査にかかった。

24. 秋嵐

しばらくして格納庫から出て部屋まで戻る途中、万は麦野に行き会った。

「よお。珍しいな」

「私だつてずっと部屋にいちや窮屈なんだよ。……ところで、そっちは誰と組むんだ？」

「そうだな、候補としてはセシリア、あんた、嵐……かな」

「含まれてない奴の理由は？」

「ラウラはまだチームプレーがぎこちない。シャルロットは腕はいいが、機体のせい火力不足感が否めない。篠ノ之と一夏は単純に実力不足。背中を預けるに足りない。会長殿はそもそもが食えないから、信用ができない。で、更識簪は……言うまでもないな」

「なるほど、な。お前の機体はオールレンジ型だっけか」

「まあ、な。より正確にいうなればマルチタイプだが」

「そういえば、セシリアは嵐と組んだ、つて噂がちらほらと……」

「まじかあ……。じゃあ、必然的にあんただな。よろしく頼めるか？」

「それはこっちのセリフだ」

そういういつつ握手を交わす二人の目にかすかに挑発するような不思議な光が宿っていたのは、決して気のせいではないだろう。

それからの時間は飛ぶように去った。

簪の専用機は万がサポートに入った影響で一気に開発が進み、順風満帆と言ってもいい状態となっていたのだ。今となつては、開発当初と比べて全体のバランスといったことのみならず、エネルギー消費の軽減、レスポンスの向上、その他もろもろの面でかなりの変化を遂げていた。また、マルチロックオンシステム「山嵐」は誘爆を防ぐため連射式となっている。一度に何発撃つかは調整可能となっている。

といっても、これらすべてにおいて方はソフト面のみにはサポートに入っており、簪はソフト面の重要性を強く考えさせられ。

そして、打鉄式式のテストフライトの日。方はピットで待機して打鉄式式の状態をモニタリングしていた。彼女の機体に少なからず携わった身としてこの時に何もせずにいるほど無責任ではなかった。

そのままふわりと舞い上がる打鉄式式をみて、かなり順調そうだ、という感想を抱いた。だが、どこか一抹の不穏さのようなものも感じていた。その直感に従い、速攻で別ウインドウを表示させ打鉄式式のプログラムに一瞬で目を通す。ほかならぬ自分が組

んだプログラムに間違いがないことを確認していた時、轟音がとどろいた。

ウィンドウを消すこともなく一瞬でピットから外を見る。そこには右足から黒煙を上げながら錐もみ落下する打鉄式式があった。それを見て一瞬でウィンドウを操作し非常用コマンドを発動させようとする。それでも気休め程度にしかならないとは思いますが、何もしないよりはましというものだ。

どうにかP I Cで墜落のショックを和らげることに成功し、ほっと一息ついてから外の様子を見ると、そこには打鉄式式が白式に受け止められる形でその腕の中に納まっていた。

「・・・いったい何人にフラグ立てれば気が済むのかねえ、あいつは」

誰にともなくぼそりつぶやいた声に返答する相手はいなかった。

そんな一件があつてから少しして、正式に織斑一夏・更識簪ペアが編成された、という話を聞いた。周りからしたらいったいどういう心境の変化だろうといったところだろうが、あの舞台裏を知っている身としては義理堅いのかちよろいのかどつちなのだろう、と割と本気で思うのであった。

だが、そんなことを細かく考えている暇はなくなっていた。もうトーナメントまで日がない。幸いなことに、一夏がある程度人を連れてきてくれたおかげで作業効率は格段

に向上した。どうあがいても一人でできることには限度というものがあつたからだ。その過程で、先のテストフライトで発生したスラスタの事故——原因はプログラム出力設定値が高過ぎたことだつたのだが——も解決した。

何とかトーナメントに間に合う形で行われた第二回テストフライトは目立ったトラブルもなく無事のうちに終えることができ、ほっと胸をなでおろした。

そして、いよいよトーナメントが始まるといった段階でそれは起こつた。

どおん！という大きな音と振動。そして連続で表示される“非常事態警報”の文字。

たまたま早い段階での試合だったため、ピットにて待機していた方は、すぐさま飛び出した。

そこには、敵の機体があった。目視できる限りで5機。ということとは、少なくともそれだけはあるということだ。

今から準備していた専用機持ちが一組一機で当たつたところで、足りなくなる可能性があるのは目に見える。

「くっそ、麦野！」

「わかつてるってのー！」

装甲で覆われた顔の中からパートナーの名を叫ぶ。もつとも、彼女のほうも状況を察

して出てきていたようだが。

そして、その手には長刀「ナガミツ」が握られていた。

「悪い、一機頼めるか？」

「了解！」

最低限の会話で二人は飛び出す。万が予想した通り、戦闘はあちこちで始まっている。た。

一機と剣を交えた直後、万は自身の判断ミスを悟った。

目の前のこいつは、前襲ってきた無人機より数段強い。それを悟ったころには、万は何とか拮抗しつつ時間を稼ぎにかかった。いくら万でも、この相手に勝つのは難しいと判断できてしまったからだ。それゆえに、万はうまく攪乱しつつ戦う。幸いなことに、麦野の機体が比較的遠距離射撃型だったため、万も近距離で戦いやすいパッケージに変更していた。それゆえ、ある程度の攻撃は捌くことができた。

戦いながら周囲を見るようにしていた麦野もまた苦戦していた。ナガミツは彼女の原子崩しを部分的に展開することによる超高出力かつロングリーチの武器。だが、そのロングリーチが災いして相手の動きを読んで動く必要があった。

また、ナガミツがなくとも彼女は原子崩しを放つことができる。だからこそ、周りを

見つつ能力で追い込み、必殺を叩き込む必要があった。

だからこそなのだろう、彼女は藍色の閃光が空に飛んでいくのを見た。おそらくは万だろう。彼と交戦していた無人機も彼を追って飛んでいく。

その奇怪な行動に、他の無人機も一瞬だがそちらに意識を向けた・・・ように思えた。その隙を見逃さず、麦野は手元のナガミツを一閃する。が、敵はそれを軽やかにかわした。その行動はまるで人が乗っていないとできないような行動で、それを見て麦野は目の前の敵を無人機と断じた。

軽やかに攻撃をかわした無人機だったが、その直後の反撃に移る前に麦野が一瞬で展開した原子崩しによってスラストと砲門を焼かれ地に落ちた。

その直後、アリーナに轟音が轟いた。敵味方関係なくそちらに注意をやると、そこへできたクレーターには無人機が文字通り真つ二つとなつて地に落ちていた。再起不能なのは誰の目にも明らかだった。

そして、その直後にバリアの穴から降りてきた機体に、無人機も含めるすべての機体が釘付けとなった。

日の光を浴びて鈍色に輝く全身を覆う装甲と、手に持った長い細身の西洋剣はまるで中世の騎士を思わせる。そして、その背中にある、同じく鈍色の羽根のような六枚の細長く大型の金属板。これはおそらくシオルダーアーマーだろう。

天使降臨。そう形容してもおかしくないような、どこか神々しさすら感じさせる、高い機体だった。

だが、その硬直も一瞬。空から降ってきた一筋の光条がその機体を襲った。その機体はわずかな動作でそれを回避し、その光は地面に落ちてクレーターをうがった。

そのクレーターを作った発射点に目を凝らすと、そこには無人機とはまた違った二つの機体があった。片方は鈍色に近い銃を彷彿とさせるガンメタ、そしてもう片方はカラスを思わせる漆黒だった。

正体はわからないが、無線をつなぐと一瞬意識をそらした瞬間に、どこからか湧いたのか、無人機がその思考を中断させた。やむなく意識をそちらに向けつつ、仮想ディスプレイに表示された三つの機体の名前を見る。そこには、“JPマルチテストα型”、“JPマルチテストβ型”、そして“^{アイジス}Aegis”と表示されていた。フォルムからして、おそらくあの騎士のようなやつがアイジス、黒いほうがα型、ガンメタがβ型だろう。

そんなことを考えていると、β型のほうが撃ってきた。しかも一発二発ではなく、一瞬で弾幕を張ったのだ。管制からもこの攻撃に耐えるのは至難の業だと思われた。だが、アイジスが背の装甲で受け止めると、その弾幕はことごとく消えた。

そしてちょうど体勢を立て直した瞬間に黒い機体が手刀で襲い掛かる。それをイー

ジスは剣で受け止める。ぎやりぎやりと不快な音を立てて両者の力が一瞬膠着した直後、位置を変えていたβ型が再度弾幕を張る。それを今度は槍を器用につかい、回避し同士討ちを狙うが、α型は腕の装甲に鏡面を展開、レーザーをすべて跳ね返す。それに對しイージスはシールドアーマーのうち一枚を前に持つてきて必要最低限のレーザーを受け止める。

何度か同じように、α型とβ型による絶妙な連携をイージスがしのぐ、ということを繰り返していた時にそれは起こった。

なんと、おもむろにイージスが剣の鏢に近い部分を握ったのだ。体勢からどう考えても防御のそれではないし、目の前にはもうすでにα型が迫っており回避は不可能だ。そして、その手がすばやく刀身を滑った瞬間、眩い光がアリーナを包んだ。あまりに劇的な光量の変化にその場にいた機体がすべて停止する。

ようやく全員の視界が戻った瞬間に雷のような轟音が響いた。その大きさはISの聴覚保護の機能を作動させたほどだ。何事かとそちらを見ると、α型とβ型がもつれ合う形でアリーナのシールドバリアに大穴を開けて墜落していた。どこからどう見てもボロボロとしか形容のできない状態で、もう再起不能なのは火を見るよりも明らかだった。

それを見届けてからか、イージスはいまだに残る小さな穴に向けてその翼を開いた。

瞬間、無数の弾丸がバリアを叩き、さらに穴を開いた。その大きく開いた穴から離脱する謎の機体を、無人機を撃破した面々は、ただただ見送るしかできなかった。

かくして、騒乱は過ぎ去り、また穴ぼこもといボロボロになったアリーナの修理のため専用機持ちのトーナメントは中止となった。

出現した無人機は9機、内二機はクラッキングにより暴走した機体。戦闘中に現れた謎の機体についても、情報不十分とのことで一旦保留とする。なお、本件は部外秘とする。

そのような内容が書かれた報告書に軽く目を通し、万は何度目かわからないため息をついた。

「そんなにため息をつけて……。本当にどうなさいましたの?」

見舞いに来ていたセシリアも万のいつもと違う——というより違いすぎる様子に、セイリユウは麦野や件の鈍色の機体とは違いアリーナ外で戦っていた影響もあり、二連戦を繰り広げることとなった。一戦目は辛くも撃墜することに成功したが、二機目はほぼ相打ちとなつてしまい、機体の損傷レベルも相当なものになっていた。そんな状態

になって操縦者たる彼が無事というわけもなく、万自身も念のため一日は安静、というわけである。

だが、彼の思考を占めているのは、暴走した機体についてだ。

「いや、な．．．。あいつらまで暴走させられて．．．。止めてくれた誰かさんには感謝だけど、三つ子全部がボロボロとはな．．．。」

そういつてもう一度ため息をつく方に同席していた一夏が問いかけた。

「．．．三つ子．．．ってどういうことだよ」

「今回襲ってきた機体のうちの二機——“JPマルチテストα型”、“JPマルチテストβ型”の名称が、セイリウウの正式名称——“JPマルチプロトγ型”とよく似ているのは偶然じゃない。全部、うちのラボで作られた兄弟機なんだ。AIを搭載したうえで、無人での制御、および連携を理想形としたコンセプトで開発が進められたはずだ。もつとも、過去形になってる可能性も、否めないがな」

「．．．それであんなに連携精度が高かったのですかね．．．」

「そりやそうだ。俺たちが手塩にかけて育て上げた中でも最高の連携率を誇るAIを搭載しているあいつらなんだ」

「そういえば、名前は何とこののです？」

「αがブラックバード、βがガンチャリオットだ。ブラックバードが近接に、ガンチャリ

オットが遠距離に有利な装備をしている。ちなみにセイリユウは両方ある程度こなせるような遊撃タイプだ。つっても、セイリユウはだいたい俺の手で改造を施されてるから、どっちかっていうと近接に偏った機体になってるがな」

「てことは、ちょうどお互いの欠点を補えるような組み合わせになってる、つてことか？」

「ああ。セイリユウは、ブラックバードと組む時は遠距離に、ガンチャリオットと組むときは近距離に重きを置いて戦う。一番マルチタイプに近いのはセイリユウだと俺は思ってる。が、みんなはセイリユウのことをどっちつかずの中途半端な機体って思ってたみたいだけだな」

その声ににじむ惜しき、そして隠し切れない静かな怒りに二人は黙らざるを得なかった。

重たくなった空気を何とか打開しようとしてか、一夏が口を開いた。

「そういえば、あの機体はなんだったんだ？」

一夏は具体的にどの機体かは言わなかったが、一体どの機体を指しているのかは二人とも理解できた。

「そういえば、何だったのでしょうか。特に、あの強い光は……」

「あれはおそらく、剣がトリガーだな」

半ば以上に疑問に思ったセシリアの言葉に万が反応した。二人の視線が集まったところで万は言った。

「映像を見た限り、鏢にほど近い部分に手を当てて、その手を刀身に滑らせた瞬間に強く発光してる。ということは、それをトリガーとして剣に内蔵された発光機関が作動したんだろう」

「そんなこと可能なのか？」

「かなり高感度の光センサーを剣に内蔵させて、光量の変化を感じ取らせて、つていうからくりが実現できればな。あくまで仮説でしかないが。ところでセシリア」

ふと突然名前を呼ばれてリングを剥こうとしていたセシリアがとっさに反応する。

「なんですの、万さん？」

「お宅の機体、そろそろ細かいバランス調整が必要なんじゃねえか？微妙だけど音が変わったぞ」

「・・・確かに、少し違和感は覚えていたましたが・・・それほどとは思えせんわ」「だまされたと思つてやつてみ。音に変化が現れるつてことは多少なりとも歪みが発生してるつてことなんだからな」

「・・・てか、音の違いなんて分かるのかよ」

そんな会話をする二人に対し、軽く半目になりながら一夏はつぶやいた

「まあな。俺、絶対音感持つてんだ。そのおかげで結構いろいろ助けられた」

「絶対音感、つてあれか？聞くだけで音程がわかるつてやつ」

「こそ。楽器吹いたりするときにすごく便利つてのもあるけど、こうやつて不具合をチエックするときなんかにも便利でな。おかげでいろいろ助かったもんだ」

「へえ、万つて楽器吹けたんだな」

「まあ、ちよつとだけだけどな。ま、そんなのはどうでもいいとしてだ。セシリア、お前つて料理できないだろ」

あくまで万にとつては何の気なしに放つた一言だったが、言われた当人はそうでもなかつたようで、ぎくりと身をすくませた。その拍子に軽く指を切つたようで、軽く顔をしかめる。

「あー、悪い」

そういうと方は彼女の手からナイフとリングを受け取つて一夏に渡すと、そのまま切つた指を口に含んだ。とたんにセシリアがリングに負けず劣らず真つ赤になる。

かなりの時間に思える一瞬の後に方は傷口を見て血が止まっていることを確認すると、絆創膏を取り出した。ほつそりとした白い指にそれを巻きつつ方は言う。

「普通、料理ができるやつつていうのはあんなにリング驚掴みにしねえ。具体的に言えばいらぬ力をかけすぎてるように見えたもんでな。今度教えてやるよ、料理を、よ」

「あ、ありがとうございます．．．」

万の側としてはとっさの判断だったため特に何も思うところはなかったのだが、セシリアのほうはまだ恥ずかしかったらしく、お礼の言葉も尻すぼみになってしまった。

幕間：万の料理教室？

それから少しして、万はセシリアを部屋に招いていた。別に淫行をしようとか言った意思はなく、ただただ純粋に料理を教えるためだ。

「それで、今日は何を作るのですか？」

「そうだな……。から揚げなんかいいかもな、そこまで難易度高くないし」

「から揚げ、ですの？」

「そ、から揚げ。鶏肉はちょうど余ってるしな。多少の失敗ならどうにでもなるだろう。とりあえず、俺は後ろから見てるから、そこにあるおおまかなレシピ見ながらやってみ」

「わかりましたわ」

そしてセシリアは料理に取り掛かった。

万の見込みみでは、純理論思考のセシリアならレシピを忠実に再現することができればある程度以上の味は安定して作れると思っていた。が、それを間違いだったと悟ったのはから揚げ（仮称）が揚がった後だった。

「できませんでしたわ」

その声に気づく形で万は揚がったから揚げを見た。そして、一言、

「見た目は完璧だな」

そう言った。その言葉にセシリアが歓喜の表情になる。が、直後「だが」と一言いつてから、万はげんこつを振り下ろした。

「殴るぞ」

「そういうセリフは殴る前に言ってほしいものですわ……」

軽く殴られた個所を押さえながらセシリアは小さく抗議をするが、それは柳に風と受け流す。

「お前なあ、いくら見た目整えるためとはいえっても料理に香水やらなんやら使う馬鹿がいるか」

「……え、だめでしたの?」

「当たり前だろうが。お前、香水なんて飲んだら体壊すのくらい目に見えるだろうが。そんなもん料理に使うなつての。これじゃ、もはや生物兵器だ。もはや違う意味で飯テ口だ」

「そこまでおっしゃいますの……。え、ではこれは……」

「揚がったらそのままでもいい。香りづけには……そうだな、レモンか、カボスを少しでもいいかもな」

「カボス、ですの?」

「そ。本来、サンマとかに使うことも多いんだけど・・・ま、全く合わないってわけでもないし。ただし、かけすぎ注意だぞ。特にカボス。レモンはすっぱすぎるってだけだ。カボスの場合香りが強いから。ま、どちらにせよ、食べる前にお好みで、つてやつなんだから」

「・・・わかりましたわ」

「と、まあ、そんなことは一旦置いて。・・・揚げなおすか」

「・・・そうですね」

その返答を聞いて、万は躊躇なく先ほど先ほど揚げがったから揚げを容赦なくゴミ箱に放り込んだ。

そして、から揚げも満足いく出来に仕上がったところに時計を見た万は意外と時間があることに気づいた。セシリアの物覚えの良さが発揮された形だろう。さてどうしたのか、と周りを見回したところで、万はひとつ代替え案を思いついた。

「なあ、ついでにあと一つ覚えはないか？」

「え？ よろしいのですの？」

「よくなかったらこんなこと言っていない。で、どうする？」

「ならば、お願いいたしますわ」

「よし、なら早速やるか」

そういつて方はボウルに水を張って台所に置き、もう一つボウルを取り出してその中に先ほど炊き上がったご飯を入れた。

「さて、もうだいたい予想はついてるだろうけど、今から作るのはおにぎりだ。これなら手軽にできるしな。手始めに、その水に手をつけて」

その言葉を聞いて手を水につけたセシリアを横目で見つつ方はご飯を少し手に持った。そのまま少しづつ解説を入れながら方はひとつ小さめのおにぎりを作ってパットに置いた。

「とまあ、こんな感じだ。簡単だろ？」

「そうですわね……。見ている分には簡単そうでしたが……」

「よし、なら早速やってみようか」

そういつてご飯を手取るセシリアを横目で見つつ、方はどこから持ってきたのか、梅干しをそのご飯の中心に乗せた。

「で、そのまま握っていく。ちよいときつめくらいでもちようど良かったりするから、やってみ？」

その言葉で握っていくセシリアだったが、初心者によくあるように、うまくおにぎりの形が整わない。どうにか形を直そうと躍起になっているところを見かねた方は後ろ

に回った。

「うまくコツがつかめないなら丸くするのも一つの手だけど・・・どうする?」

「いえ、できれば三角に・・・」

「よし、なら少しは手伝おう」

そういうと、万は両手でセシリアの両手を包んだ。そのままうまく先導しておにぎりの形を整えると、万は手をゆっくりと放した。

「とまあ、こんな感じだな。やってみ?」

「あ、あの・・・できれば、もう一度か二度、同じように教えてもらえませんか?」

「ああ、別に構わんぞ」

そうして、二人はそのまましばらく一緒におにぎりを作っていた。

そして、その翌日。

「・・・セシリア、なんか今日のアんたの弁当、趣が違うわね」

「確かにそうですわね。だって、万さんに教えてもらいましたもの」

その言葉と目線に女子以外の全員が反応した。

「え、それってどういうこと!?!」

「文字どおりの意味だ。料理教えがてら、一緒に作ったってだけだ」

「真つ先に食いつく嵐に対する方はいつも通りの手間のかかりそうな——普通にやれば、だが——料理が並ぶ弁当をつつきながらつまらなそうに答えた。

「だけって……。本当にそれだけなの？」

「それだけだ。それ以上でも以下でもねえよ。とりあえず、まあ、食べるレベルにはしたがな、それ以降は本人次第ってどこか」

あまりの淡白さからか、不審に思ったのだろうシャルロットに対してもこの対応である。どうやら方は本気でそれ以上の興味がわかないらしい。

「そのような投げやりでいいのですか？ 貴公ならもつと教えることもできるでしょうに」

「大丈夫だろ。禁止事項は全部言ったしな」

「しかし、あのセシリアの料理が食べられるようになるとはな……」

どこか心配そうな二人に方は軽いため息交じりに答えた。

「それ、本人に言つてやるなよ？ ま、とりあえず食つてみ」

その言葉に、その場にいた全員の橋が彼女の弁当に伸びた。セシリアのほうも端から周りに食べさせるつもりで作ったのだろう、少し多めになっていたので快く差し出した。

その時の弁当は周囲から絶賛され、かつてのメシマズはどこへやら、セシリアも料理

に凝るほかの女子の仲間入りを果たしたのだった。

25・嵐の前触れ

無人機の襲撃から少し経った頃の夜、万のメッセーヂチェッカーが着信を告げた。何だろうと思いつつ件名をちらと見ると、一見無秩序な文字列が並んでいた。その文字列から送り主をだいたい見当をつけた方は、頭の中で文面を書き換える。

というのも、これは彼の編み出した暗号化プログラムで、こちらのパターンは浜面に送ったほうのものである。浜面に渡したUSBメモリの中身のひとつがこの暗号化プログラムだった。自分で開発した以上、自分の頭の中でプログラムが書き換える前の文章を逆算することも可能だ。

そして、その結果生まれた文面は次のようなものだった。

『こちらのほうで動きがあった。』

ニトロが聞いた情報によれば、かなり大規模な外への輸送班が組まれているらしい。一回一回はかなり少ない上に、それぞれかなり巧妙な偽装をされているため、校閲に引つかかることは考えにくい。

そうなたらトライトではやることはできない。俺たちはあんたの使った隠し通路はわからないし、ライトも覚えてないそうだからな

もしかしたらどこかで派手に花火でも上げるつもりなのかもしれない。万が一の時は麦野を頼む。

また詳細をつかんだら連絡する

「ビーチ」

ちなみにいうと、ニトロ口というのが絹旗最愛、トライというのはアイテム、ビーチとこののは浜面のことを指す。

いくら暗号化のパターンがいくつもあるにせよ、これでは文面から簡単に察せてしまう。だが、それだけ考える暇もなかったのだろう。ということは、つまりそれだけ猶予がないということを示す。

「なんとか、つてとこか」

そういつてゆつくりと椅子に体を沈めて軽く伸びをしていたところに、今度は通信機のほうが音を立てた。ディスプレイの「ライト」の文字を見て能力で通信状態にする、万は声を出した。

「全く、夜更かしは美容に良くないぞ?」

「ずいぶんとらしくないセリフを言うのね」

「うるせえ、ほっとけ。・・・で、何の用だ、セレネ?」

「その名前は捨てたわ。今は深名よ」

少女のように軽く頬をふくらますセレネ改め深名は、初めて会ったときに比べ表情も柔らかくなり、心なしかリラックスしているように感じた。

「ああ、悪い。で、どういう用件だ？」

「は……じゃないや、ビーチから連絡つて行った？」

「今さつきメッセ読み終えたところだ。で、どうした？」

「……どうやら、一部の元暗部や施設の子供たちが近々外に出されるらしいの。私も含めて」

「……お前もか？」

「どうやら気づいた人は黄泉川先生だけじゃなかったみたいね」

「……そういうことかよ、くそツたれが。ほかにそっちくらいの年ごろのやつはどんなもん居るんだ？」

「同年代は私も含めて5人くらい。能力者はほかも合わせれば軽く1000人は下らないんじゃないかな。全員レベル4よ」

「さて、能力者はつてどういうことだ？」

「ほかの人たちもいるの。そっちの人たちはもっぱら銃機とかを持つてるわ。」

「総数は？」

「ごめん、そこまでは……。でも、10、20で効く数じゃないのは確かよ」

「穏やかならざる話だな、そりや。で、お前は どうするつもりだ？」

「もう私はセレネじゃない」

万の返答に対する答えは一見答えになっていないようなものだった。だが、万にはそれで十分だった。

「それと、ありがとうね」

「何のことだよ」

「私の名前、あなたが考えてくれたんでしょ？ いい名前をありがとう」

「・・・気にすんなよ、そんならい」

「気にするわよ、どうしても」

深名のその言葉に万はふと笑った。それにつられてか、無線の向こうのセレネも笑った。

「じゃあ、また」

「ああ、またな」

その言葉でその通信は切れた。

通信が完全に切れていることを確認すると、万は煙草を口にくわえた。バイトをしている同級生からちよつとした取引で入手してから、徹夜をするときと考えをまとめるときに万はこのまずい煙を吸うことにしていた。それからというもの、だいたい2月に一

箱くらいのペースでタバコを吸っている。

今回考えていることは敵の襲撃目的だ。おそらくはISの強奪だろうが、ISに匹敵するレベルの戦力を数で補える学園都市がどうしてそこまで躍起になっているのか方には理解ができなかった。ISに使われているのは、コアのブラックボックスを除いてほとんどが外部の技術である。もつとも、ブラックボックスになっただけでコアの技術も外部のものであるのだが。

ならばどうしてか。考えられるケースは複数ある。

まず一つ目。外部の技術が内部の技術より上回るといのが面白くない、という考えがあるから。今現在をもつてしても、ISのコア技術にどんなものが使われているかはわかっていない。その点では外部の技術に劣っていると考えられなくもない。が、この可能性は捨てていいと考えた。さすがに、だからと言ってISを強奪するほどのものでもないだろう。

次の二つ目。ISではなく、生徒が狙いである場合。ここは元女子高だ。今でも、男は万と一夏しかいない。ならば、考えられるのは売春婦の真似事を指せるか、人体実験の実験台にするか、といったところだろう。だが、この可能性も低い。実験台ならチャイルドユエー置き去りがある。ここまでの学園都市の発展を陰で支えた——といつても本人たちはそんなことミジンコ一匹分も思っていないだろうが——のは彼ら、彼女らである。

その存在がずっと消えていない以上、ここから突然数が減りだすとも考えにくい。ということは、実験台には困っていないわけだ。無論、置き去りチャイルドエラーが男ばかりとも考えにくい以上、前者にしてもそうである。もつとも、そういつたいわば純粹無垢な女子を調教することに快感を覚える異常性癖の持ち主がわんさかいるというのなら話は別だが。なにより、この可能性はあまりにも胸糞が悪いので考えたくはない。いざとなつたら腹をくくる必要はあるかもしれないが。

そして残つた三つ目。外部からの依頼。いったいどんな依頼なのかはこの際においておくとして、この線が一番濃いと方は見ている。絶対数が少ないISは、量産が可能な品となればとてつもない戦力と化す。そうなつてしまえばアラスカ条約など形骸化するだろう。

だが、そんなことはどうでもいい。今重要なのは、攻められる可能性がすくなくならず、しかも遠からぬうちにあるということだ。ならば、こちらもある程度の体勢は整えておかねばならない。そう思つた方は、灰が長くなつた煙草を灰皿の上においてパソコンを起動させた。

その数日後、方は買い出しの帰りに嫌な目線を感じた。だが、この目線はどこかで覚えのある気がした。が、少なくともIS学園の生徒ではない。そうであつたらまずだけか特定ができるはずだからだ。

だとすれば、いったい誰なのか。それを特定するために、あえて万はいつものルートではない道を使って人気がない裏路地に誘い込もうとした。念のため能力を使っていたが、罠というわけでもなさそうだと判断したところで、万は振り返って声を出した。「ここなら人気はないぜ。出てこい」

目線からだいたいどこに相手がいるのかを特定していた万は相手がここまでついてきていることも知っていた。それゆえの行動だった。

建物の陰から出てきたのは金髪を縦にまいた明らかに外国人と思しき女だった。その顔に覚えはなかったが、

「参考までにどのタイミングで看破していたのか、教えてもらえるかしら?」

声に覚えはあった。ほぼ間違いないく、デメテルを迎えに来たあの金色のISのパイロットだ。

「俺が買い物を終えて店を出たタイミングだ。それまではなんかいやな目線がするな、つてだけだったが、それが店を出たところまで続くとなると、俺に用があった、としか考えられなかったからな」

「あら、そんなに早く看破されていたとは驚きね。さすがは『ドイツの神童』といったところかしら?」

相手から出た言葉に万は反射的に身構えた。

「・・・なぜその呼称を、あろうことか亡国企業フアントムタスクが知っている・・・!?!」

「覚えてくれていたとは嬉しいわ。質問に答えさせていただけると、ある程度長く生きているとあちこちにコネができるものなの。その中の一つから得られた情報よ」

「なるほどな。で、俺にはどういう用件だ?」

「直接いうのは憚られるから・・・そうね、襲撃、とでもいえば見当はつくかしら?」

その言葉でわかった。どういう形ではわからないが、この一件に亡国企業は何かしらの情報をつかんでいる。

「・・・なるほどな。で、俺に何が言いたい」

「こちらに來ない? 黒川万」

その言葉にさらに万は身構える。

「あなたほどの戦力なんて、世界中探してもなかなかいないわ。わざわざあんな学園で腐っている必要なんてない。いろいろ優遇はするわよ?」

「・・・畏つて可能性も否定できないがな」

「そうね、でもあの子をある意味で殺したのはあなただと知っているのは私とデメテルくらいのもだから心配する必要はないわ」

付け足された言葉の意味を正確に理解した万は、そのうえで相手を睨んだまま言った。

「そのお誘いは断らせてもらう。だが、一つだけ教える」
「・・・なにかしら」

今出せる限りで周りに悟られないレベルの殺気を放出しているというのに、相手の女はいまだに飄飄として、軽く内心で驚きつつ、万は言葉を紡いだ。

「お前は今回の襲撃に関して何を知ってる・・・？」

「私が知っているのは襲撃の依頼と動機だけ。それだけよ？」

「その依頼内容は？」

「それ以上は企業秘密つてもものよ、坊や」

唇に人差し指を当て、首を傾げながら言う彼女は言いようのない色気も感じたが、そんなものに興味のない万の前には意味がなかった。

「そうか。なら、おれはここらで失礼したいんだが。一戦交えるというのなら、受けて立つが？」

「まさか。こんな昼間から市街地戦を仕掛けるほどバトルホリックでもないわよ、私は。なら、また今度ね、坊や」

「ああ。その時にどういう立場に置かれてるかはさておいて、な」
そういつて万はゆっくりと歩き出した。

26. 不穩なるもの

そんなことがあつてから数日後、万たちはシヨッピングに出かけていた。より正確にいうなれば、一夏たちとの買い物に万が巻き込まれた形なのだが。

ある程度買い物が終わつたところで、万たちは昼食をとるために近くのファミレスにはいった。女子たちは例によつて弁当を作ろうとしたようなのだが、結果的に一夏のは「たまには外食でもよくないか?」という言葉で決まつた。

全員分の料理が来て料理にそれぞれ箸をつけたところで一夏が誰にもなく言つた。

「そういうえばさ、最近導入されたつていう訓練機、あれつて前来たやつによく似てたよな?」

「似てるも何も、一緒のものだからな」

それに対する万の返答にセシリア以外の全員が目を剥いた。

一応説明しておく、件の無人機襲撃の後に危機管理

「ちよつと、それどういふことよ!」

「そのままの意味だ。前の無人機襲撃のうちの二機が新たに訓練機としてIS学園に寄贈された。それだけだ」

「それだけで済むことじゃないよね!」

「済むだろ。セキュリティホールとかは全部埋めたし。また暴走するようなことがあればことだが、それはほとんどないということとは俺が保証する」

「あくまで絶対ではなくほとんどなのでしよう?危険なのは?」

「俺は絶対って言葉が嫌いなんだよ。この世界に絶対なんてものは存在しないんだからな。最悪、危険ならあいつらの特性を俺が利用する」

「特性?なんだそれは?」

「あいつらと俺のセイリユウは三つ子だ。もともと無人AIによる連携を視野とした開発が行われていた。無論、最初のスターターにのみ人力が必要だがな。で、その特性上、三つ子にはそれぞれ、互いの連携のためだけの回路が存在する。有時には、それを利用して連携を行う。この機能は、本来ISが災害現場とかで利用できないか、って試みの先駆けだったんだが……。起動履歴から見ると、おそらくブラックバードがクラッキングを食らってそれにつられる形でガンチャリオットもスクランブルしちまったんだろうな」

「二応聞くが、ブラックバードとガンチャリオットというのは……」

「例の二機のことだ。念のため言っておくと、黒いほうがブラックバードな」

矢継ぎ早に飛んでくる質問に答えながら平然と答える方に、セシリアはふと思ったこ

とを聞いた。

「そういえば、他にそういった研究をなさっているところはありませんでしたの?」

「俺の知る限りではそういう話は聞こえてこなかったな。パスワードスーツっていつも、あくまでISは兵器つてとらえてるやつがほとんどで、俺らみたいなのは異端だったみたいだな。もったいねえよな、せつかくのものなんだから、兵器だけじゃなくってほかにも有効活用すればいいのによ」

「そうですね……。わたくしとしてはそんな発想は思いもしませんでした、それが実現できればこの世界は大きく変わってくるでしょうね……」

「ああ。それが実現できれば、瓦礫の撤去やらといったこともかなり容易になる。それができれば、一人でも多くの命を救えるかもしれない。そもそもISはもともと宇宙進出を目指したパスワードスーツだ。もし兵器以外の使い道があるのなら、……」

だが、その先の言葉は轟音が断ち切った。思わず全員が外を見ると、上空には数機のISによく似たパスワードスーツがあった。

「なんだ、あれは?」

思わず声を上げる篠ノ之をよそに、セイリユウをそのまま望遠のみを有効化し見た。そこには、2機のISと数機のよく似たパスワードスーツ。ISのほうはセイリユウで視界に収めた瞬間に通知が表示された。

「テンペスタIIカスタム」・・・。イタリア第三世代のカスタムモデルってところか」
「テンペスタのカスタム!?まさか、そんな・・・」

「俺だつてにわかには信じがたいが・・・。とにかく、今は危険を遠ざけることを最優先としよう。俺はあのパワードスーツを相手する。そつちはテンペスタカスタム二機を頼む。嵐に飲まれるなよ?」

その言葉に全員がうなずき、飛び出した。それに一步遅れる形で万はテーブルの上伝票と万札二枚をつかんでレジの横におきつつ一言「おつりいらない!」と店員に告げるとそのまま店を出てセイリユウを展開し、飛翔した。

6人は飛翔すると、その勢いのまままず箒が突っ込んだ。それを二機は散開回避し一機が量子展開したグレネードで紅椿を狙い撃つ。もう一機は後ろに控えるセシリアにブレードを展開して突っ込んでいった。

突っ込んできた敵に対し、セシリアは慌てず回避したのちにライフルを格納、そして空色のサーベルと短剣を取り出し、両手に構えた。そして、二の太刀を短剣で受けるとサーベルで相手の胸の中央をつく。相手が距離を取ったことを確認すると、今度はサーベルをライフルに変えて狙い撃つ。相手も驚いたようで回避をするが、回避した先には大振りな両剣が飛んできた。剣を回収する嵐をテンペスタが追撃にかかるが、それは

シャルロットのアサルトライフルがさせなかった。

一方箒のほうはロックオンされた瞬間に来るべき衝撃に備えて思わず身を固くしたが、どこからか飛んできた弾丸によってそのグレネードは撃ち落とされ、追撃も飛んできたことによってその衝撃が来ることはなかった。

「すまない、感謝する」

「全く、せつかくのファーストアタックなのだから突っ込むな。せめて死角から突っ込め」

そんなやりとりののち、今度は一夏が突っ込んだ。それに対し、サブマシンガンを展開すると、それを一夏に向けて乱射する。その中の一部は撃ち落とすことに成功したものの、かなりの量の弾丸を浴びてしまう。かまわず突っ込む一夏だが、難なく回避されまたさらに弾丸をばらまかれようとした瞬間にラウラが援護した。体勢を崩したテンペスタに一夏が斬りかかるが、一瞬で装備を変えたテンペスタは軽々と一夏を突き飛ばした。そちらに目を向けた二人に、両手に握った銃が火を噴いた。

その少し前、テンペスタと勝負をしていたセシリアたちだが、こちらも攻めあぐねていた。

というのも、セシリアのビットで追い込もうとしても、相手もそれを読んでいるのだろう、その先で待ち構える嵐やシャルロットを撃退するということを繰り返されてい

た。嵐もシャルロットもあれこれ攻め手を変えつつ攻めているのだが、一向にブレイクされない状況に、三人はいらだっていた。

そんな時に、また転機が訪れた。

何かが一夏たちのほうに割って入り、そのシールドアーマーをすべて体の前に持つてきて楯のように展開した。弾丸の数が多かつたこともあり、その周辺が煙に包まれる。その中から飛び出した無数の弾丸とも取れるものは、テンペスタを突き飛ばすには十分すぎるものだった。

その何かは二度目の無人機襲撃の際に降臨したイージスだった。とてつもないパワーに驚いていると、無線が繋がった。

「I.S.学園の子だね？ 悪いけど、もう一機のほうをお願いします」

その声は明らかに女のそれであった。

「ですが、これ以外にまだパスワードスーツがいるはずなのですが・・・」

ラウラが一応の抗議のように声を上げる。

「パスワードスーツってあれのこと？ あの青い機体の子は状況を確認するとおとなしく地上に対する攻撃被害の減少のために動いているみたいだし」

そういつて片手でイージスのパイロットは地面の一部を指さした。そこには、空き地に先ほどのパスワードスーツが重なって落ちていた。どう考えても、戦闘不能であった。

そして、そこから少し離れた地点に見慣れた藍色の機体が半透明のかなり大きい楕（とつてもちよつとした壁レベルだったが）を掲げてるのが見えた。

「・・・わかりました、お願いします」

「お願いされました。ラジオオーバー、切ります」

そういつて機械の天使は嵐に向かって飛んでいった。

それでも専用機持ちの戦闘はブレイクを見なかつた。

セシリアがビットで攻撃すればその隙を突き、衝撃砲はその機動力を生かして狙いをつけさせず、シャルロットの多種多様な銃器に対しては強固な対実弾シールドで防ぎ、一夏、箒、そして鈴の近接はうまく受け流していた。その一挙手一投足が明らかに訓練された動きであり、それに対し攻めあぐねていた。攻めあぐねているのは相手もなのだが、専用機持ちは少しずつ焦っていた。

はたしてどうしたらこの状況に変化をもたらせるか。そのように考えている最中に、ほど近いところから轟音がした。思わずそちらを見ると、テンペスタが煙を上げながら落ちて行っていた。

だが、その眼を奪われた一瞬を逃すことなく、再び一夏にテンペスタが肉薄した。それに気づいて回避しようとするも時すでに遅し。一夏は至近距離からパイルバンカー

を浴びた一夏はそのまま落ちていった。

「一夏あー！」

叫びながら箒が一夏を追う。そんな隙を逃がすはずもなく、テンペスタはグレネードを構えた。その瞬間に、テンペスタは吹っ飛ばされた。そこにいたのは、得物を振り切った体勢のイージスだった。

「さて、遅くなつたね。加勢するよ」

「ありがとうございます。恩に來ます」

「気にしなくていいよ。さて、行こうか！」

そういつてイージスは正面から突っ込んでいった。その加速は紅椿のそれに匹敵するものがあつた。が、正面から突っ込んでいったイージスを簡単に避け、もう一度グレネードを放とうとするが、そのグレネードをセリアのビットが撃ち落とした。それから次の武装を展開させる暇も与えずイージスが槍を横になぎ、突く。が、それを簡単にかわす。それを確認してか、イージスから通信が入る。

「スリーカウントで目を閉じて。目を閉じればISの視界保護機能は働かないはずだから」

そういうと一氣に突っ込んでいく。が、その加速は先ほどほど苛烈なものではない。

「3, 2, 1, ゼロ！」

カウントが尽きると同時に周囲に光が迸った。というのは、臉を焼く光で感じた。

その少しあとにキン！という金属質の音がした。それを機に目を開くと、そこにはリーチのある細身の西洋剣ではなくほっそりとした質素な槍を持ち、その穂先を相手のブレードで防がてれるイージスがいた。だが、どこか雰囲気が違う。そんな時に、テンペスタを眩いフラッシュがつつんだ。

「ジ・エンドだよ、お嬢さん」

その一言とともに、横に一閃。それだけで決着には十分だった。

「さて、君たちは早く学校にこのことを報告しなさんな。今後、こういったことがないとも限らないからね。それじゃ、また会うときはよろしく」

それだけ言い残し、イージスはどこかへと飛び去った。

それから全員はIS学園へ帰還しようとしたが、ラウラとセシリアはイージスが飛び去った方向をしばらく見つめていた。

「・・・ラウラ？どうしたの？」

「セシリアー！置いてくわよー！」

そんなシャルロットと鈴の呼びかけに答える形で二人もほかに続いた。だが、その表情はどこかすぐれなかった。

27. 深まる謎

その後、学園へ戻った簪以外の専用機持ちは織斑、真耶の二人の先生の前に出頭していた。簪は今回のことには関係していないので不問とされた。

もともと、無許可でのISの起動は処罰に値する。それに、その直後に複数の輝点はその付近で確認されている。ならば、速やかな報告は必要だろう。

「そうか。・・・で、言い訳はあるか、馬鹿ども?」

全員の報告を聞き、千冬が静かに睨みを利かせつつ言った。その言葉に、面々は沈黙した。

「お前らは周りを見るということを覚えろ。市街上空での戦闘は、そのまま直接市街に被害が及びやすいということだ。うまく敵を誘導し、海上での戦闘に持ち込むことをなせしなかつた」

投げかけられる厳しい言葉の数々に、生徒は反論する言葉を持っていなかった。

「それにだ、例の謎のISがいなければ、事態の收拾も不可能だったように私には聞こえたか? だったら、そう判断した時点で学園も含めた関係各所に連絡があつてしかるべきだろう」

「お、織斑先生、一回その辺に・・・」

「すみませんが、口を挟まないでもらえますか、山田先生」

あまりに厳しい言葉の数々に真耶がなんとかなだめようとするが、それを一蹴して千冬は続けた。

「とにかくだ、今後勝手な行動は慎むこと。もし今後やむを得ず教師の目の届かないところで戦闘行為をせざるを得ない状況下に入ったら、一言でもいい、学園に報告しろ。いいな？」

その言葉に七人はうなずいた。それを確認してから、思い出したように千冬が言った。

「ああ、それと。さっきのことは更識妹にも伝えておけ」

その言葉に一夏が頷いた。この中で一番簪と意志疎通が取りやすいのは一夏であると全員の無言の了解を得た形だ。

「黒川殿、少々話があるのだが・・・」

そして、部屋を出た後に万は呼び止められた。振り向かなくとも、その口調で万は相手がだれかわかった。振り返った先にいたのは、予想に違わぬ小柄な銀髪。

「つたく、いい加減その口調やめろっての。むず痒い」

「努力はします。ですが、今はそんなことより大切なことがある」

「なんだよ」

「あの謎 I S についてです」

いまだ四角い口調を変えずに、しつかりとその灰色の目を見てラウラは言った。はつきりと何のことは言わなかったが、それでもどのことなのか、二人にはわかっていていた。

「・・・なんでそんなの俺に聞く?」

「あなたがおそらく唯一の手がかりだからだ、黒川万。あの機体、本当の読み名は『イージス』ではなく、『アイギス』なのではありませんか?」

「・・・それこそ関係者に聞け。俺に聞くな。だが、まあ、あの綴りだ。どちらでも読めるわな」

一呼吸、それこそ本当にたった一呼吸だったが、言葉を開けて万は言った。そしてそのまま歩き出すが、その背中からさらにラウラは声をかけた。

「ならば約束してください。しかるべき時が来たら、その時には必ず話すと」

その声には答えず、万はそのままラウラの前から去った。

その後、万がたどり着いたのは整備室だった。万の記憶違いでなければ、あの二機はいまここにいないはずである。

扉を開くと、そこには先客がいた。

「……こんなところで何をしているんですか、ナターシャさま……先生」

そこには、二機を見上げる形で見つめながら、静かにたたずむ元銀シルバリオ・ゴスベルの福音のパイロット、ナターシャ・ファイルスがいた。

もともと彼女は軍属だったが、死亡扱いにされたことで国籍もなくなった。だがそれはあくまで表向きの扱いで、裏で彼女の国籍も生きていた。結果、新たな教員の補強ということで彼女はこのIS学園に教員という形で採用、もとい匿われることとなったのだ。

どういいういきさつなのかはわからないが、ナターシャ自身、日本語と英語の両方を話すことができたため、コミュニケーションに問題はなかった。

かくして、ナターシャはIS学園教員としてここにいる次第である。

「この子たちを見ていたの。この子たちを作ったのは、あなた？」

「まあ、そうですね。俺だけではないですけど」

「でも、主にこの子たちの面倒を見たのはあなたでしょう？その年でそういったことをするあたり、さすがは『神童』といったところかしら」

「やめてくれ、その名前は好きじゃない」

「そう。……それはともかく、この子たち、ずいぶんとあなたに感謝してるわよ？」

その言葉に万はしばし押し黙った。確かに、このAIを基幹としたコンセプトを発案したのは万で、その開発にかなり深くかかわっていたといえる。だが、それをいつたいどうやって読み取ったというのか。

「ふふ、とても不思議そうな顔をしてるわね。私、世間一般で言うところの超能力者つてやつでね。物の記憶とか、それにある種の思いがこもっていれば読み取れるの。まあ、普段は使わないのだけだよ」

その言葉に万は少なくとも驚きを覚えた。確かにごくごく少数、学園都市で能力開発を受けなくても能力を持つ、という人間は存在する。よくテレビなどでやっているエスパ―はその典型だろう。そういった人間を、内部の人間は「原石」と呼称する。

「・・・確かにこいつらに俺はかなり深くかかわっています。・・・で、俺に何か用があったのではありませんか?」

「うん、すこし、ね。ちよつと前にイーリから連絡があつたの。そろそろ、爆ぜる頃合だと思う、つてね」

その言葉に万は軽く眉根にしわを寄せた。この際、イーリというのが誰なのか、というのはどうでもいい。だが、

「・・・爆ぜる、とは・・・?」

「君ならわかるんじゃない?三つ子の親たる君なら」

その言葉に方は軽くため息をついた。単語の意味するところに心当たりはあった。

「……わかりました。一応頭には入れておきます。……で、本当にそれだけなのですか?」

「ええ、それだけよ。できればあの青い子も見ておきたかったけど……」

「……あるんじゃないですか、用件……」

軽いため息をつきつつ方はあと一か所開いているハンガーの上に立ちセイリユウを展開した。そのまま飛び降り、仮想ディスプレイを表示して整備を開始する。

「ねえ、少しこの子を『視て』もいいかしら?」

その言葉に含められた意味を理解した方はただ一言「どうぞ」といった。別に機体に誰かが触っているからといえど、最初のほうはただのチェックのため大した支障はない。

「へえ、この子……」

セイリユウに軽く触りながら、ナターシャは感心したように目を細めた。装甲などには細かい傷が目立ち、明らかにほかの二機より多くの実践を経験したのだろうということのほうがい知れた。が。

「先生、そろそろ離れてもらえますか? 装甲の修復を始めますので、下手すると巻き込まれますよ」

「いいわよ。それに、もう十分わかった」

その言葉に万はややオーバーに怪訝な表情をした。

「この子、かなりあなたを慕っているわよ。ここまではつきり声が聞こえたのは初めて」
声、というのとは先ほどの彼女の言葉を借りるなら、「ものに込められた思い」というやつなのだろう、と万は理解した。そのうえで、万は尋ねた。

「そういうもんなのですか？ひたすら俺の勝手にいじくりまわして、痛めつけて・・・恨みこそすれ、慕うなんて・・・」

「でも、あなたの在り方に共感している。必要ないなら殺さずに無力化するための鍛錬を怠らない。そんなあなたに、ね」

「・・・不思議なものですね、俺だつて殺す時は殺すのに・・・」

「ええ、そうね。だつて、機械が嫉妬しているのだから」

「はあ!」

思わず大きな声が出た。

「いやいや、嫉妬つて、いったい何に?」

「さあ?そこまではわからなかったわ。だけど、あれより私のほうが主にはふさわしい」
「って思っているらしいわね」

それにいくつか心当たりのある方は、自動制御に任せてため息をついた。

「・・・わかりました。とりあえず、情報ありがとうございます」

「いいわよ、これくらい。それじゃあね」

そういつてナターシャは整備室から去って行った。

いまだ続ける自動制御の処理を見ながら、万はぼんやりと昔のことに思いをはせていた。

それとほぼ同じ時刻、専用機持ちたちは学食にて夕飯を取っていた。

いつものようにおしゃべりをしているときに、思い出したように箒が言った。

「そういえば、万はもともと技術者だったと言っていたが、あの年でそんなことなどあり得るのか？」

「あの人なら、十分ありえるだろう」

それに答えたのはラウラだった。全員の視線が集中していることなど意に介さず、彼女は続けた。

「彼は、ドイツで生まれたのだ。おそらく、あの目はその影響だ」

「なるほど、日系人と向こうの人とのハーフ、ってわけだ」

「それについては万がちよつと前に言っていたぜ。なんでも、日本人とナントカ系のハーフで、結果的に目だけあの色になっただけらしい」

「たぶん、スラブ系ね。ロシアとか、チェコとかに多いって聞くわ。確かドイツにもいなかったっけ？」

「私に聞かれてもよくわからない。物心ついてからずっと軍属だったからな。ただ、それはおそらく、黒川殿の方便だろう」

「それは……ごめん」

少し無神経なことを言ったと思ったのだろう、凰が一言謝るが、ラウラは「気にするな」といった。が、一切表情を変えずに言われても説得力があまりないのも確かな話だった。

「そんなのはどうでもいい。万ならありえる、とはどういう意味だ？」

「そのままの意味だ。ここから先は表面上にも出ていないがな——」

そういつてラウラは話しだした

28. 神童の過去

ここからさきは、あくまで私が知っている話だ。

私を知っているのは、同世代の人工授精で生まれた子供が男だった、ということだ。後から聞いた話では、最初、女が生まれてくれればうまく育てて体を利用するのもありだったのに、という声が聞こえたらしい。なにせ男性の権力が今より強い時代だ、そんな下衆な考えをする人間の一人や二人いてもおかしくない。

だが、その噂はどんどん聞こえてきた。曰く、言語習得が人より早い、およそ年齢にすぐわない計算でもやり方を一度教えただけで簡単に解いてしまう……。早い話が、絵にかいたような天才児の話ばかりだった。

だが、そんな話はある時を境にぷつぷつと途切れてしまった。今思い返してみると、たぶんこの時期に学園都市に行っていたのだろうな。

そこで何があつたのかは私にはわからない。だが、その後、件の「神童」のうわさは半ば伝説としてたまに語られる程度のものになつていった。

そんなときだったな、私があの人と会つたのは。

その頃、私はこの目の関連でいろいろと焦つていた時期だった。が、あの日はしっか

りと覚えている。その日は、新たな教官が来るとこちらでもかなり話題になったものからな。

あの人の最初の一言は、今でもはつきりと思い出せるぞ。

「……なにか印象深いことを言ったの？」

「私としては、な」

シャルロットの疑問に一言答えると、ラウラは続けた。

黒川殿は、最初に私たちを見渡すと、こういったのだ。

「今日から諸君らの教官となる、黒川万という。年も近ければ、尊敬などできるわけがないだろう。だから、教官などという堅苦しい呼称も、敬語も使わなくていい。ただし、これは俺限定だ」

これには皆驚いていたよ。軍隊の自己紹介など、教官のようなものばかりなのだからな。あんな自己紹介など聞いたことがなかった。

だからか、私たちは黒川殿のことを、部隊の一員に近いような、そんな感覚で接していたのだ。

彼の訓練は、野戦などの技術ではなく、ゲリラ戦や暗殺に近いものだった。身ごなしの音を殺す術、相手にわかりにくい罠の仕掛け方、格闘術といった、な。おかげさまでそういった手のことはかなり上達できたと思っている。

彼の指導が始まってから少しして、黒川殿から訓練後に呼び出しがかかった。私の身名指しで、だ。いったいどんな言葉をかけられるのだろう、と考えていると、黒川殿はおもむろに切り出したのだ。

「なあ、ラウラ。お前、なぜそんなに焦っているんだ？」

その言葉に、私は驚いたよ。訓練では、焦りもしていたが、その焦りをできるだけ隠そうとしていたからな。

「・・・別に焦ってなどいない。私は当たり前を当たり前でできないことにいらだっているだけだ」

「そうか、なら聞き方を変えよう。なんでそんなにイライラしているんだ？」

うまくごまかそうと思っても、どうやらこの男はきつちりと読んでいたらしい。観念した私は、正直に話すことにしたのだ。

「今までできていたことができない、となれば、いらだつのも当然だろう？それに、周りからできて当然と思われることくらいできなければいけない物でもある。違うか？」

その言葉に、当時の彼はしばらく黙り込んでしまった。もつとも、当の私としてはしてやったりといったところだったが。なにせ、そんなことを根掘り葉掘り聞こうとする男など、邪魔以外の何物でもなかったからな。だが、彼は違った。

「ラウラがどういいう生い立ちで、今どういいう状況なのかは聞かない。聞いても意味はないからな。だから、ここからは俺の価値観をもとに話させてもらう」

だが、少し長めの沈黙の後に彼はそう切り出した。

「確かに周りは期待するだろうよ。今までできていたことなんだつたら、今回もきつと、つてな。で、こんどそれが完璧にできるようなつたら、そいつらつてのは絶対今度はそれ以上のことを要求する。それに答え続けるのは、この上なくきついことだぞ」

かなり実感のこもった、重みのある言葉に、私は言葉を失ったよ。

「なぜ、そのようなことが言えるのですか・・・？」

「俺がかつてそうだったからだ。それに、お前はこんな環境しか知らない。俺としては、かわいそうに思えるときもあつた。この年頃なら、もつとたくさん、いろんなことを楽しめる年頃のはずなのに、つてな」

そんなことを言つてから、彼は「何言つてんだ俺・・・」なんて言いながら少し照れつつ頬を掻いていたな。その表情が年相応というか、とても幼く思えて、よく覚えてい

「とにかく、だ。この世界にはお前の知らないことがたくさんある。それを知つて行くのは、これからでもいいんじゃないか？それが、たとえ周りを裏切ることで、本当に自分がそうしたいのなら、そうすればいい。俺は、そう思つてる」

そう締めくくると、彼は時計を見てから言った。

「さて、そろそろ休憩終了だ。行くぞ」

そういういつつ軽く伸びをしてからこちらを向いた。その口元はかすかにだが、確かに、笑っていた。それにつられる形で、私も笑ったのだろう。その顔を見てから彼は言ったのだ。

「やつぱり、お前さん、笑うとかわいいな。しかめっ面だけじゃなくて、できるだけ笑うようにしろよ」

そんなことを言ってから走って行った。

それから少しして、彼と入れ替わる形で私は織斑教官と出会った。そこで、私はかつての実力を取り戻すことができた。まだ私はその時の黒川殿の言葉について悩んでいた。・・いや、今もだから悩んでいる、か。とにかく、私はこの人のもとについて行くと思ったのだ。ただ、それだけだ。

教官を追うようにしてここに来た時にはとにかく驚いたよ。まさか、彼もいようとは思ってもみなかったからな。しかも、彼は休み時間は本を読んでいるか、何やら忙しそうに図面を書いていたり仮想ディスプレイに数値を打ち込んでいるか、だったからな。

そんな折、彼を一度尾行してみたことがあった。その時、彼は整備室に入ろうとし、入る前にこちらに向かって手招きをしたのだ。あの時にはすでに気づいていたのだろう

な。

一緒に部屋に入ると、彼は専用機を展開して何やら作業を始めた。その間は特にしゃべることもなく、何のためにここに入れたのか、意図が読めなかったよ。

「・・・意外だったか？」

「あなたがこういうことをしていることが、ですか」

「そうだ。それと、ここにいることも、な」

「・・・正直に言って、意外でした。それに、なぜ本来の能力を生かしていないのか、とも」

「能力っていうと？」

「私たちに教えた技術を使う機会はなくとも、その経験をもとに動くことならできはるはず」

そんな風に言うと、あの人は「ああ、そういうことか」といった。それからしばらく考えたのちに彼はゆっくりと言った。

「なんて言ったらいいかな・・・。俺は、あの経験を生かすことは難しいし、何より俺があんまりしたくない。でもま、俺の思ってるものが武器になったものって結構あるしなあ・・・。ま、ジレンマってやつだ」

「・・・そういうものなのですか？」

「そういうもんだ。それにな、もういい加減、周りに『お前ならこれくらいできて当然』って言われて振り回されたくないんだよ。ま、そういうことを当然としてやるから向こうも期待するんだろうけど」

「・・・あなたは、一体どういう身の上だったのです?」

純粹に疑問に思った私はストレートに聞いてみた。学園都市にいて、それからドイツの軍に技術を教え、そしてI Sの技術者。全く接点が見えなかったからな。

「ドイツの神童、って言葉に聞き覚えは?」

その言葉で私は大筋を理解したよ。おそらくは、周りに振り回されるように色々なところを転々としていたのだろう、とな。

「・・・なるほど、あなたがそうでしたか」

「ああ。下らん話ではあると思うけどな。・・・ところで、だ。そっちはもう見つかったのか?」

突然話題を変えられ驚いたが、私は一応の返答をした。

「まだ、わかりません」

「そっか・・・。ま、気長に考えな。そんな簡単に見つかるもんでもないし」

「そういうあなたはどのようなのですか?」

「俺もわからねえよ。ぼんやりしたものは、あるけどな」

そういつてふと笑った。その時の微笑みは、あの去り際の微笑みとよく似ていて、変わった面影の中にあの人はまだいるのだな、と思つたものだ。

「へえ、そんなこと思つてたんだな」

そんな折に後ろから声が聞こえて、全員がぎよつとしたようにそちらを向いた。

そこには、万が手近な席に座つておそらく夕食であろうパンをかじっていた。

「よ、よう。いたんなら声くらいかけてもよかつたのに」

「なに、お取込み中っぽかつたからな。それに、面白そうな話をしてみたいだし」

「……いつたい、どこから？」

簪の省略された問に対し、万は一瞬茶化してやろうか、とも考えたが、その眼を見た瞬間にやめた。

「教官の時の会話あたりからだ。だから、結構聞いてたと思うぞ」

その言葉に全員が声をなくした。この時間帯、夕食時ということもあり食堂は混雑している。だが、短くない間話を聞かれて気づかないほど全員が鈍であるわけでもない。前から気配を消す技術を習得しているとは聞いていたが、予想以上だったものがほとんどだった。もつとも、その技術を目の当たりにしたことのある簪と一夏は例外的に感心から言葉をなくしていただけだが。

「・・・じゃあ、ハーフってのは・・・」

「ああ、嘘だ。・・・と言いたいところだが・・・わからん、というのが正直なところだ。遺伝子がそういう形なら、一応ハーフってことになるだろう？」

「そんなの・・・」

「ないと言いつけるか？ま、こういう風に生まれてきたのは幸運だったとも、不運だったとも言えるけどな」

「じゃあ、なんでお前は学園都市くんんだりなんかに来たんだよ。しかも、あろうことか暗部なんか」

心底不思議そうに麦野が言った。長いこと学園都市の暗部にいた人間として、まず考えにくいことだったからだ。

だが、それに対する万の答えは、つくづく淡泊だった。

「学園都市には最初、研究者として招かれた。今にして思えば、人件費の安い、それでいて使える人材ってことだったんだらうな。で、研究を進めているときに、俺は能力開発を受けた、いや、した、というべきか」

「どういうことだよ」

「俺は、ある一つの仮想理論を打ち出した」

そういつて万は小さなケースを取り出した。中には、小さな物体が入っている。

「こいつはその時、もうすでに発見されていた能力体結晶、通称を体晶って言って、能力を暴走させる働きを持ったものだ。で、こいつを調整すれば、被検体によつては元から持っている能力以上の力を発揮できるのではないのか、って理論だ。で、それを証明しろ、と言われたが、なにせその時は下っ端だったからな。だからこそ、俺は古人に習うことにした」

「古人とは誰のことですか?」

「ペッテンコーファーって知ってるか?」

「えっと、確か、コレラの発症方法を証明した人だよな?」

「そうだ。じゃあ、その証明方法は何だったか、知ってるか?」

「そんなの有名よ。話には・・・コレラ菌の・・・」

そのまま勢いよく言おうとした風だったが、どんとその声は尻すぼみになり消えた。そして、まさかといった目で万を見た。

「もう読めたようだな?」

「・・・どういふことだよ」

いまいち状況を把握できていない一夏が万に聞いた。

「・・・つまりは、俺は俺自身を実験台にした、ってことだ」

その言葉に、今度こそ全員が息を呑んだ。

「初めて体晶を使った時の感覚は、いまだに鮮明に思い出せる。まるで周りがとてつもなくきれいに見えているような、周りの状況を異常なほど把握できているような感覚だ。精度はそのままに、出力だけが段違いに跳ね上がっていた。実験は成功だった。

・・・今にして思えば、そこから選択を間違っていたんだろうな。能力開発を受けたことで、幼かったこともあつて俺は暗部の実働部隊に落とされた。そのあとは、何とかしてISの情報を得ようとする上の連中にいいようにつかわれて今に至る・・・。

ま、かいつまんで言えばこんなところだ」

淡々とした独白に、他の面々は言葉を失った。

「・・・その理論、つていうのは、どうなったの?」

恐る恐るといった様子でシャルロットが聞いた。それに答えたのは麦野だった。

「ほかのやつがほぼ完成させて、それをさらに発展させようとしたやつがいたけど、それをレールガン・・・つていつてわからねえな。要するにそつちはつぶされたいらしい」

「潰されたつて、どういう・・・?」

「そのままの意味だ。拠点に乗り込んで、首謀者が確保されたらしい」

「で、俺は大本の理論の成功例第一号、つてわけだ」

あくまでこともなげに言う方に麦野とラウラ以外の面々は絶句していた。

「・・・つてことは、お前は、望んでその力を得たわけではないのか?」

「いや、ある種望んだ、と言えると思うぞ。必要に迫られて、つていうのでも、十分望んではいるからな。つていつても、そつちにとつてみれば強制と大差ないんだらうけど」
「お前はそれでよかつたのかよ？」

「少なくとも、後悔はしてないぜ？いろいろと便利だし、この能力に救われたことも多い。俺としては、疎ましく思ったこともあるけど、それでもなくなればいいと思つたことは一度としてない」

すつぱりと言ひ切つた方にその場にいた全員が複雑な表情をした。

「さて、そろそろ部屋に戻んねえと。お前も早めに戻んねえと、織斑先生にどやされるぞ」

そういつて方は席を立つた。その何も読み取れない背中を、他の面々は不思議そうに見つめていた。

29. 忍び寄る影

それから少し時が過ぎて、朝晩の寒さが初冬の訪れを告げるある日、IS学園の面々はバスに乗っていた。というのも、遠足と称して一泊二日のスキー・スノーボードへ行くことになったのだ。

そのバスに揺られながら、万はただぼーっと外を見ていた。臨海学校の時に好評だった例のおもしろ大福をさらに個数と種類を増やして作って持ってきたのだが、本人の口にあたる前にいつの間にかバスの中にいる人間に順繰りとわたっていた。もつとも、こんなこともあるのかとかなり多めに作っておいたため、問題はなかったわけだが。

また、それだけの個数を作るのにそれなりの時間と労力を使ったために、それ以外のおやつはそこまで個数はなく、ただ手持無沙汰に機体の状態などを確認するくらいしかやることもなかったが、それももうすでにほとんど終わり。

要するに、特にやることもなく、ただ外の景色の変化を見ることくらいしかやることがないわけである。

「なあ万、今何時だ？」

隣にいた一夏に聞かれ、万は左手首にはめた時計をちらりと見た。

「一時半過ぎだ。向こうには二時過ぎに到着予定だから、もうちよいつてことか。つてか、そんなくらい自分で調べろよ」

「いやーそれが、妙なバグがあるみたいで、時間が妙に表示されるんだよ」

「じゃあ、俺のも妙かもしれないぞ。一応これ、電波時計と普通の時計を自動できりかえるようにしてあるらしいけど、時計の電波が届いてないんじゃないやなくてくるつてのなから、おかしくなつていても仕方がない」

「そんなこと可能なのか？」

「時計の電波に似せて別の電波を流してやれば可能だ。もつとも、時計の側が誤受信するレベルには正確じゃないといけないがな」

「どちらにせよ、表示がくるつていて、というより表示がされない、というところを見ると、おそらくは電波を遮断されているのでしようね・・・」

そういわれて方は頬杖をついたまま眼鏡のフレームを軽く小突いた。レンズの端に表示されるはずの時間は、確かに「……」——「……」という奇妙なものになっていた。

「え、じゃあ集合時間とかどうするんだよ」

「お前予定表見てねえだろ。日没までには戻つてくること、つてきつちり書いてあつただろうが」

「あ、そういうえば」

「とにかく、あと三十分ないんだ。ある程度の準備くらいはしておけ」

そういつつ自分も眼鏡をもう一度小突いて前に手を置いた。おそらく、そこに仮想キーボードがあるのだろう。そして、そのまま指を動かした。

そして、予定通りに目的地へたどり着いた一行は、そのほぼすべてが荷物を置くと速攻で更衣室へ直行した。というのも、都心にほど近い所があり、雪があまり降らない I S 学園に暮らす人間としては、この一面銀世界というのはそれだけで十分はしゃぐ理由となりえるものだろう。

そうしてそれぞれが学校でレンタルされた——一部自前のものを使うものもいたが——スキーウェアに着替え、板をもって繰り出した。教師も「迷惑にならないようにしろよー」とは言うが、その程度だ。仮にも高校生ということ、大丈夫だと判断したのだろう。また、こんな時に思いつき叱るのは教師にとつても生徒にとつてもごめんだ。

普通、このような場で一気に難しいコースに進んでいく人間などなかなかない。なにせ、スキーなどほとんどしたことがない人間ばかりだ。よほど運動センスがないと速攻で転倒をしてしまう。

そんなある種当たり前とも思えるセオリーを正面から粉碎する人間が一人いた。そして、その人間は。

「いやっほうー！」

普段ならまず出さない声で楽しんでいた。ちよつとしたジャンプスポットでは高く飛び、特に障害物が無いのならどこまでスピードが出せるかを自分で試していたりと、どう考えても滑り慣れているとしか思えないような滑りを披露していた。だがもちろん、彼は生まれてこの方スキーなどしたことはない。つまりは初見で滑っているわけなのだが、それを知ってか知らずか他の人は驚いていた。

「全く、こんなところにいるとはな」

そういつて近寄ってきたのは箒だった。声だけで誰かわかった方は滑りを止めずに答えた。

「まあ、なんとなく滑れそうな気がしたから・・・な！」

そういつつ最後の一字でジャンプ。今度はジャンプスポットが高かったこともあつて一回転させることに成功していた。

「・・・楽しんでるようだな」

「まあな。こんな機会、今までは一度としてなかったし？」

そういつつ斜面の終盤であることを確認すると両方とも滑りを止めた。

「そういえば、篠ノ乃はどうしてここに？」

「一夏に様子を見てきてくれと頼まれてな。私がここを滑れる可能性が一番高そうだから、と」

「・・・なーる」

確かにいくらほかも運動ができるほうであるとはいえ、剣道で全国優勝した猛者に運動神経でかなうとは到底思えないだろう。

「ま、おたくが滑れるのはさすがってとこだな」

「まあ、私もなんとなく、というものだ。だいたいこんな感じ、といったくらいにな」

「そ。でも、俺みたいに少々規格外な行動をしているわけじゃねえんだから、十分すごいと思うぞ」

そんな会話をする二人に息が切れている様子はなかった。というものの、例の手合わせ以来二人はたびたび剣でもISでも模擬戦を繰り返しているのだが、決まって持久戦になってしまふ——さらに言えば大抵持久戦になれば方が、短期決戦なら箒が勝っている——ので、二人ともそれなりに鍛えているのだ。

先ほどから自然な体で周りを見る方に、箒は疑問を抱いていた

そして、その疑問は、リフトに乗った時に口に出た

「ところで、お前は何をさつきから警戒しているんだ？」

「・・・いや、なんとなく、な。嫌な予感っつか、胸騒ぎっつか・・・うまく言えねえんだが、とにかく周りを警戒しておく必要があるそうだな」

そういつて方は軽く微笑んだ。

「ま、どちらにせよ降りかかる火の粉は払うだけだ。お前らはただ楽しんでりやいいい。俺みたいに警戒を怠らないのも必要だけど、休めるときに休んでおくのも必要だからな」

そういつて方はいつの間にか登り切っていたリフトから体を下ろした。

「さて、んじゃ俺はもう一滑りするからよ。あいつらには心配無用だと伝えといてくれ」

そういつて彼は斜面のほうへと歩いて行った。

方は斜面を滑っていた。

その方向は、何者かに誘導されていた。それは万もわかっていた。なにせ、そのルートにほとんど人がいなければ怪しむのも当然とあったところだろう。だが、方はある一種の確信をもって滑っていた。

そして、その終点とも思える地点に立つと、方はおもむろに声を出した。

「誰が隠れてるのは知らんが、とつとと出てこい」

だがそれでも相手が出てくる気配はない。少々のいらだち交じりに、万は周りの雪から水分を抜き取り、鞭のような形状にして周りにまとわせた。

「三秒以内に出てこい。じゃなけりや、位置はわかってるから、そのあたりごとでめえを斬る」

その凶暴さを示すように、水はうねっている。本気の殺気をまき散らしながらカウントを開始すると、そこから出てきたのは見覚えのある少女と見覚えのない少女。

そして、その見知らぬ少女は、そのショートカットといい、幼さが残るとはいえ凛とした顔立ちといい、その少々きつめの目元といい、かつて世界最強と言われた女性に酷似していた。

「……デメテル、って言ったっけ？それと、そっちはどちら様？心なしか、俺の知っている人によく似ているような気がするんだけど」

「……この子が何者かなんて関係ない。私はあなたに用があった」

相も変わらず発散される殺気の動じるどころか眉ひとつ動かさず、デメテルは淡々と答えた。

「あつそう。で、いったい何の用だ？下らん用なら本気で斬るぞ」

「あなたにとつてはくだらないかもしれないけど、私たちにとつては重要」

その直後、彼女らを円形に囲むように雪に深く跡がついた。

「とつとと本題を話せ、じゃなけりや次はこれがどこに飛ぶかわからないぞ」

本気で不機嫌で強い殺気を放ちつつ万は言った。だがそれでも動じる様子がない辺りはさすがと言えるだろう。

「私たちはセレネが今どうしているのか知りたい。あなたなら知っているはず」

「そんなの俺にもわからん」

「なら、あの子がどこにいるのか、それだけでも。あなたならわかるはず」

「ずいぶんと買われているみたいだな」

「どういう理由であれ、端から助けるつもりじゃなければそもそも命を奪わない理由はない。どすれば、どこかに匿ったか、あなたが利用しているはず。なら、あなたならどこに彼女がいるのか、知っているはず」

その言葉に対しても最初は軽く流すつもりだった。だが、デメテルの目を見て万はその気持ちに迷いが差した。その眼は、わずかな殺気、そして疑問、そしてなにより、顔の見えない相手に対する心配が、それぞれ混じり気ないものとしてそれぞれそこにあつた。

彼女らがどういう境遇だったのか、何の因果で亡国企業ファントムタスクに入ることになったのか、どういう関係だったのか。そんなことはこの際どうでもよかった。今重要なのは、この目の前の少女が、本気で深名の心配をしているということだ。

「・・・学園都市に、あいつはいる。けど、何をしているのかはわからん。特に最近は、連絡が入らなくなってるからな」

「・・・そう。わかった。ありがとう」

そういつて去ろうとするデメテルに、万は思い出したように声をかけた。

「あ、そうそう。あいつなんだがな、今は『月島深名』っていう名前になってるから。前の名前前で呼んだらきつと機嫌めっちゃ悪くなるぞ」

その声が聞こえたかどうか、それは万の知るところではない。

「で、あんたの用件は何だ？」

そして、残った少女に万は声をかけた。答えたのは幼さの残る、どこか凜とした声。その声も、記憶にある情報とよく似ていた。

「私はお前に用はない。だが、スクールから伝言を預かっているのな」

「スクール、ってのは、例の金色のISのやつか？」

「・・・おそらく、それだ。伝言は『すぐに会えるから、準備しておいてね、坊や』とのことだ」

その言葉の意味を正確に理解した方は軽く片方の口角を上げた。

「・・・OK、『素敵な返答を用意しておくからそのつもりで』とでも返しておけ。で、それだけか？」

「ああ、お前にはな。また会える日を楽しみにしている」
「すぐにそれはきそうだけどな」

そういうと、二人はどちらともなくその場を離れた。

そして、その日の夜。仮想ディスプレイで作業をしていると、端末が着信を告げた。端末の「ライト」の文字を見ると、万は迷わずにとつた。

「全く、夜型なんだな、お前は」

「あなたに言われたくないわよ。聞いた話じゃ、作業とか課題とかほとんど夜に終わらせてるらしいじゃない」

「まあ、な。俺にとつては速攻で終わるやつばかりだからな」

「うわ、むかつく。それ、織斑一夏とかに言わないほうがいいわよ、絶対」

「言わねえよ。・・・で、何の用件だ」

「いや、特にこれといった用件ではないの。ただ、あなたの声が聞きたくなっただけ」

それなりに緊迫した答えを予想していた方は、その台詞にあきれた。確かに、時たま雑談のためにかけてくることはあったが、こんな理由を言われたのは初めてだ。

「なんだよ、その遠距離恋愛してるようなセリフは」

「ほつとしてよ、私だつてよくわかってないんだから。それに、いい加減ちよつとこぼし

「たくなつたしね」

「・・・なんかあつたのか」

「なんかあつたというか：遠慮なく暴れるのは、まあ、それなりにいいんだけど・・・。なんか、最近もやもやして」

「もやもや？」

「私でもわからない。でも、少なくともいい気持ではない。これは確実」

「なるほど、ね。なら、それも一種のモチベーションととらえてもいいんじゃないか？」

「え？」

素つ頓狂な声を上げる深名に、万は続けた。

「だから、そのもやもやが収まらないって気持ちとかを、そのままストレートに自分のパワーに変えてみるのも一つの手なんじゃないか？少なくとも、俺ならそうする」

「・・・相変わらず、殺いのね」

「そういうわけじゃねえ。ただ単に、そういう感情を抱えっぱなしってのが嫌なだけだ。それに、この解決方法は世間一般では憂さ晴らしと思うぞ」

「・・・面白い人。さて、私、朝早いから、またね」

「ああ、無理すんなよ」

「しないわよ、子供じゃあるまいし。おやすみ」

「おう、おやすみ」

そういつて通信は切れた。

その通信が切れてから方は考え込んだ。暴られる、ということは深名が本格的に実働体に入っている、もしくはは入る可能性が——その高低は別にして——あるということだ。

前者か後者かはわからないが、どちらにせよ、いざというときは彼女と戦うことも考えなくてはならないだろう。

「・・・あいつと、再戦、か・・・」

自分でも理解できない、どこか鬱屈とした感情を抱えつつ、方は天を仰いだ。

30. 白銀に煌めく黒

そして、その次の日。

予定通り起床してクラス代表としてクラスの点呼を行った方たちはそのままバスに乗り込んだ。今日はこの後軽い登山をした後にそのままバスで帰ることになっている。

「なあ、万。そっちって誰かと会った？」

「ん、まあ、会ったな」

例によって手持無沙汰にしていると隣の席に座る一夏がそう聞いてきた。別に隠すことでもないので肯定すると、彼にしては珍しく——と言つては失礼千万だが——考え込むような表情をした。

「そつか、そっちにもだつたんだな……」

「ファントムタスク亡国企業、か？」

おもむろにその名前を言うと驚いたように目を見張つた。

「考えるまでもねえよ。そっちにも、つて言つたのはおまえだろ。それに、俺がこんなところで知り合いに会うわけがない。となれば、そっちも宣戦布告食らつた、つてとこだ」

「……相変わらず、だな」

「ああ、この程度、さっさと考えねえようじゃ今頃俺はあの世にいるよ」

そんなことを言った直後、バスが轟音とともに大きく揺れた。その直後、タイヤのきしむ音とともにバスが急停車した。半ば反射的に窓を開けて空を見上げる。

そこには、どこか蝶を思わせ、それでいてどこか気高い、黒いISがいた。

「クソが！」

一言毒づくくと、万は強制的にバスの扉をこじ開けて飛び出した。バスから出た瞬間にセイリユウを展開して、高速上昇をかける。

「てめえは何者で何の用なのか10秒以内に答えろ。じゃなけりや攻撃を開始する」

その言葉に、相手はただ静かにたたずむだけだった。仮想ディスプレイに現れたのは、*「黒騎士、世代不明」*の文字。

やがて、内心でのカウントがゼロになる。

「警告はしたからな」

バイザーの下で一言そういうと一気に棍をもって肉薄した。かなり低出力でのチャージからの最大出力による瞬間^{イグニッションブースト}加速からの右からの振り下ろしをなんなくいなす。そこからの左の下からの振り上げ、左からの横なぎ、左のジャブを混ぜた後逆手に持ち替えたうえで右からの攻撃。これらをすべて受け流されたところで、一度方は距離を取った。

（あの猛攻しのぎ切っちゃまうのかよ!? いったい何もんだ、こいつ）

その一瞬でそんなことを考えた。

万は武闘家ではないにせよ、生身の近接戦闘でかなりの腕前を持つ筈と同じ土俵でほとんど同格にわたり合えてしまうくらいの實力はもつ。その万の一発は入るだろう、とみた連撃が一つも入らない。そのことに驚いた。

そして、その手に握られたのは大きな銃。二秒ほどで狙いをつけると、万は引き金を引いた。そこから吐き出される弾丸の大きさを物語るような轟音とともにそれが火を噴き、反動などないというような速度で一気に踏み込み、例の棍を薙ぐ。

その直後、万は信じられない物を見た。

そこには、傷ひとつない機体で、つばぜり合いを繰り返している機体がいた。

（あれを食らって傷一つねえとか考えられねえ。避けた、つてのも考えにくい。とすれば……）「……斬つ……た……?」

驚きから漏れた声に対し答えたのは幼きの残る声。

「狙いをつけている時間が長かったものでな、おかげで斬りやすかった」

その言葉に万は絶句した。確かにある程度距離はとったが、それでもそれなりに距離だ。おまえはどこぞのブラッキー先生か、と突っ込みたくなるのをこらえた万は遠い過去に聞いた言葉を思い出した。

(ちっ、どこでも考えることは似たようなもんってかよ・・・!)

その瞬間、鏑迫り合いの手は緩めず、思考が高速で回ります。その思考が落ち着いたときに、こちらの仮想ディスプレイに一つの表示が出現した。それを確認すると、万はあえて少し力を抜いた。瞬間、敵が慌てたように後退する。直後、まさに敵がいたその位置にレーザーが降ってきた。と思うと、一瞬で肉薄する白い閃光。誰かは確認するまでもなかった。白と黒が交わった瞬間、心なしか、黒の口元が歪んだように思えた。

「・・・ったく、おっせえぞお前ら」

「あなたが無鉄砲すぎるだけだと思えますわよ?」

思わずこぼした万に対して返ってきたのはあきれたような声だった。

「全くよ。それに、私や簪なんかクラスが違うんだから、出てくるのに時間がかかるのは当然でしょ?」

「それについては、私も嵐さんと同じ、かな」

「俺としては、この異常事態に代表候補生を出撃させない理由が考えられないがな。さて、と・・・」

そこまで言ったところで戦闘に目を戻す。そこには、互いの得物をもつてたたずむ黒と白。そして、静止状態だからこそ、その口元ははつきりと見えた。

間違いない、笑っている。狙っていた得物が出てきたような、今すぐにも目の前の

敵を狩りたい。そんな、強者の笑みだった。

「なんだろう、どこか面白そう、っていうか……。不思議な表情」

やや戸惑ったように声を出すシャルロットを無視して方はすばやく判断した。

「やばい、かな。とりあえず、俺はあいつらの援護に回る。とにかく、そつちは一般生徒の安全を……。っ！」

すべて言い終わる前にリーダーに感があらわれたことを見ると、全員が速攻で回避に入った。

「おいおいおい、私を忘れてもらっちゃあ困るなあ？」

どこか挑発的で、そして高飛車な口調。そこには、蜘蛛型のI.S。そこにびつたりとピントを合わせると、「アラクネ、第二世代」と表示された。

「お前は……。っ！」

箒が驚いたように声を出す。

「オータム様だよ、忘れたかあ!？」

どこか怒りに我を忘れていような口調。だが、それはあくまで理性的な怒りである。と、方は直感的に思った。なら、こいつをここで潰せば、と思つた矢先にオータムがまた声を出した。

「ところでお前ら、こんなところでもたもたしてると、お仲間みんなやられちゃうぜえ？」

いいのなあ？」

その瞬間に、万は下を見た。バスの進路上のそばにおそらく人間であろう熱源があった。それを見た瞬間、そちらの方向に飛んでいた。

万はI Sの展開を解除し、そのまま能力で全身に空気をまとわせた。絹旗の〃
オフェンスアーマー
窒素装甲〃を応用した拳をもつて重力加速度を利用した大出力の攻撃は、標的にあたる寸前でせり出された土の壁が防いだ。

「……やっぱりてめえか、デメテル」

そして現れたのは自分より少し年上かと思われる少女。

「安心して、殺すのは命令違反になるから。ただ捕まえるだけ」

「へえ、15、6の女子を大量に捕まえて何するつもりだ？ 高校生ソープでも開くか？」

「そんなことはしない。信じる信じないは勝手だけど」

「あつそう。ま、そんな御託はどうでもいい。今は……」

そういつて万は頭を切り替えた。

「ええ、幸いここなら周りを気にしなくてもいい」

「雪崩くらいは起きるかもしれないねえがな」

そういつて万はかまいたちを繰り出した。しかし、そのすべてをデメテルは生身で回

避け、そのうえで何やら唱えた。その瞬間、周りが輝くと、そこには土でできた巨人がいた。だが、完全に土でもない。ところどころに多量の水分、そして全身の温度を勘案して得られたのは、

「なるほど、雪が混じるくらいならものともしない、つてか」

「そう。さすがね」

「んなもん、どうでもいい。要は、お前を潰せばいいんだろ？」

そういつて風を使う。その瞬間、土がせりあがってきた。そこに生まれたのは、土でできた木偶。それが、見たところ数体、いや、

「一気に5体、か。こいつは、ちときついかな」

「大丈夫。あなたは特に殺せない。聞くことが多すぎるから」

「そりやどーも。んじや、一発本気をかまさせていただきますかね」

そういつて方は一つ深呼吸をして体晶を飲み込んだ。こんなこともあろうかとあらかじめ口の中に入れておいたのである。カツと目を開くと、地面をけった。その向かう先は木偶。その一体目を手早く潰すと、その次の瞬間には標的を変えて手を横に薙ぐ。それだけで二体が巻き込まれた。そのまま目にもとまらぬ速さでデメテルに肉薄しかかる直前、そこを巨大な足が踏み抜いた。あまりの風圧に一瞬思わず目をつむる方だった。一瞬で能力をリーダー型に設定、速攻で肉薄した。

そのまま能力で強化した拳がとらえたのは人体の感触ではなく、土人形の感触。そのフォームのままもう一方の手を横なぎに難いだ。するとその延長線上にあつた接近中の土人形が粉碎した。そして、デメテルへと一気に肉薄する前にもう一度巨人の踏み付けが襲う。それを今度は能力で相殺しつつ、万はデメテルに一気に肉薄し、その拳をふるった。が、その手がとらえたのは人体とは違つた、硬質の感触。

彼女の手には、ほっそりと、それでいて鉄色の輝きを放つ、一般的には、レイピアと呼ばれる西洋剣と、一般的にマンゴージュと呼ばれる短剣が握られていた。

デメテルはその鍔が広い短剣で強化された拳を受け止めたのである。しかしながら、ところどころに土がついているところを見ると、

「・・・なるほど、土から金属だけを抽出した、ってわけか。器用なことをする」

「その通り。だけど、それがわかつたところでどうにもならない」

「それもそうだ。んじゃま、ラウンド2、といこうか？」

そういつて万はボクシングのようなポーズをとつた。そして、どちらからともなく二人は踏み込み、仕掛けた。

万が飛んで行ってからというものの、空も大変なことになっていた。

例のアラクネはどうやらそれなりのチューニングを施されているようで、たいていの攻撃はいなされてしまうのだ。しかも、相手は一人ではない。黒いIS——黒騎士の影響で、こちらも攻めあぐねていたのだ。というのも、アラクネのほうは有効打が与えられず、黒騎士は一夏の白式しか狙っていないので、今はなんとか引き分けと言えなくもない状況になっていた。

そこで、彼女らは攻める方法を変えた。今までのように突っ込んでいったのでは意味がない。しかも、こと一対一、もしくはは一体多の戦闘では絶対的ともいえる戦闘力を有する黒騎士に対し、この攻め方はいささか分が悪い。ならば、

「簪さん、凰さん、麦野さん、私とともにオータムのほうをお願いいたしますわ！ 簪さん、一夏さん、シャルロットさん、ラウラさんは黒騎士を！」

もし有事で万が前線指揮をとれないときは、と任されたセシリアはすばやく指示を出した。簪と一夏の機体は対になっているから、外せない。そのうえで考えると、指揮官タイプのラウラ、そしてラウラとタッグを組んだことこそないものの、一緒に訓練を行っていることの多いシャルロットである。あとは残りであるが、それでもうまくやれば十分に勝てると踏んだ。

そして、この判断は正しかった。黒騎士のほうは明らかにいらだって攻撃にムラが見え始めているし、アラクネのほうも徐々に押され始めていた。

その中に現れた、一瞬のスキ。本来はできるだけすべての敵に注意を置かなければいけない中で、今まで前線で戦ってきた凰に注意が向いた瞬間を、セシリアは逃すことなく指示を出した。

「簪さん、山嵐を！」

「うん、わかった！」

そういつて発射された山嵐最大火力。1秒おきに6発ずつ8回、計48発放たれるミサイルは名を体現する。それらすべてを、

「なめんじゃねえぞー！」

オータムは罅迫り合っていた風を押しつけて、その増設された砲門ですべて撃ち落とすにかかる。しかし、

「鈴さん！」

「OK！」

それを姿勢を立て直した凰の衝撃砲で体勢を崩されたうえで、ブルー・ティアーズによる飽和攻撃。そして、とどめは。

「麦野さん！」

「了解！」

方によって改造されたことにより片手で射撃が可能になった空色のレーザーライフ

ルと同色の磁力狙撃砲、麦野のビットとライフルの同時攻撃、そして撃墜しきれなかった山嵐の一部により、おびただしい黒煙を上げた。

「くっそがあああ!!!」

まるで呪詛のように聞こえる断末魔とともに、アラクネはその機体の動きを止めた。

その直後、黒騎士がこちらに躍り出てきた。驚きつつ防御を取る麦野に注意を向けつつセシリアが見やると、そこには体勢を崩したラウラのフォローをするシャルロット、そして、

「一夏さん!」

撃墜された一夏のもとに駆け寄る箒の姿があった。

魔術師と能力者、その二つがぶつかっていた。キンという硬質の音と、ヒュンという風切り音が絶え間なく響く。

そう、普段はどちらかといえば飛び道具を使うことの多い戦闘が、今は肉弾戦を繰り広げることとなっていたのだ。

ほどなくして、ほぼ同時に二つの轟音。待機状態となつたセイリユウから、アラクネと白式の撃墜を知らせるアナウンスが小さな表示で出現する。

「・・・どうやら、長々とはやらせてくれないらしいな」

「そうみたい。私としても、そろそろ終わらせたい」

そういうと、彼女は短剣とレイピアを合わせた。生まれるのはレイピアほどではないが細身の西洋剣。そして、そこから放たれるは明らかに一撃必殺を狙う輝き。

「・・・受けて立つ」

そういうと、万はもう一回分体晶を飲み下した。そろそろ体晶に頼るのも限界に近いだろう。それでも。

「できるだけ巻き込む人間は最小限に抑える。そのために、ここで潰させてもらう」
その自身に課したルールがために、負けられない。

「そう。なら、いくよ」

直後、あたりに爆音が響いた。

31. マドカの正体

文字通り地を揺るがす轟音とともに真つ白な煙が上がった。そちらのほうへ一瞬気を取られた隙に何とか粘っていたセシリアも一気に劣勢に追い込まれた。先の戦いでお披露目となったあのサーベルを手に入れてから、万から白兵戦の指導を受けていたとはいえ、これほどの相手ではさすがに相性が悪かった。

「くっ……!」

「解せないな、どうしてそこまで足掻く?」

かけらほども疑問を感じられない相手の問いかけに、セシリアは答える。

「あなたを行かせれば、何が起こるかわからない。守るべき人のために、私はこうして戦います」

「そうか。その信念で私を倒せるのならやってみろ」

そういつて二人はさらに剣を打ち合わせる。その瞬間、四方八方から緑色に近い色の光線が迸った。思わず飛びのいた先にさらに数発。それに一旦距離を取った先に見えるのは片手にライフルを持った機体。

「忘れるなよ、お前が相手取ってるのはそいつだけじゃねえんだよ」

それに腹立たしげに舌打ちをしてから、黒騎士はその剣を上段に構え突撃してきた。それを受け止めんとセシリアはサーベルと短剣で受け止めんと構えた。

三本の剣が交わり、けたたましい音を立てる。がしかし、その均衡は一瞬。一瞬にしてセシリアの防御は崩れ去り、弾き飛ばされた。その隙について特攻してきた麦野だったが、簡単に麦野の近接戦闘力をもつてしても拮抗までしか至らない。それほどまでの近接戦闘力を有していた。

(予想以上に強いな、こいつ・・・！)

その麦野も、決して手加減しているわけではない。息つく暇ない連撃の応酬をそれぞれが防御、反撃と繰り返しているのは、ひとえに彼らの技量の賜物だろう。

しかし、それにも終わりは来た。もともと遠距離主体の麦野と、元のフィールドが近距離の黒騎士では、そもそもが戦闘における間合いが違いすぎる。同じように遠距離も近距離にも戦闘ができるからと言っても、元のレンジの違いがその差を生んでいるのだ。かといって、一旦距離を開けることは黒騎士が許さない。

やがて、麦野は黒騎士の攻撃に防戦になり、そして完全な防御に回りだした。

その防御も長くない、と麦野自身が判断した直後、轟音とともにその肩越しに一発の銃弾が飛んできた。それは変わらず黒騎士に直撃し、両者をさがらせた。

「あなたでは役者不足です。退きなさい」

その冷水のような声とともに降臨したのは鈍色のISだった。その手に握られるはまるで槍のような形状をした長い棒のようなもの。しかし、それしか握られていないところを見ると、おそらくあれは銃なのだろう。

「貴様、何者だ」

興味なさげに、あくまで必要だからといった風情で黒騎士が尋ねる。それに対してイージスがとつたのはシオルダーアーマーを前に持つてきて、楯のようにすることのみ。

それに対し、黒騎士はその剣を構えた。

そして始まる、無声の戦闘。そこにあるのは、澄んだ金属音、時折響く銃声、そして純粹な殺意のみ。そこに他者が介入する余地などなかった。

二本の剣からうまれる剣劇をその長剣でいなし、強力な光学兵器を楯でしっかり防ぐ。そして、隙があればつく。

この攻防は拮抗しているように見えて、明確な優劣があった。というのも、二本の剣と強力な飛び道具をもつてもわずかなダメージしか入れられていない黒騎士と、大剣と楯のみで攻撃をしのぎながらわずかながらでもダメージを入れているイージスでは技量の差がはつきりしていた。

やがて、イージスはその剣を抜き放った。その瞬間に周囲を眩い光がつつむ。その一

瞬のスキを、イーグスは見逃さなかった。左の鞘で右の剣を封じ、右の槍を量子変換させ、代わりに出現した鞭で剣を弾き飛ばした。

「とらえたぞ、黒騎士！」

そう高らかに宣言した。その瞬間、イーグスの右腕についていた楯代わりのシヨルダーアーマーが黒騎士の周りにとりついた。素早く飛びのいたイーグスが右手を前に出すと光が黒騎士から迸った。視界フィルター越しに見えたのは、黒騎士にまわりついていたシヨルダーアーマーが放電しているような光景だった。

「があああああああ!!!」

聞いている側が痛々しくなるような叫び声。その声が収まったのはISの展開が終わると同時に放電が収まった時だった。落下点に素早く回り込んだイーグスがその小柄なパイロットを抱えると、近くに高温の熱源反応が現れた。麦野はとつさに警戒したが、今の自分が相手になったところで雑魚でもなければ敵う相手ではないと分かった。現に、その予想は正しかった。なぜなら、そこに現れたISは黄金であったからだ。見覚えがないわけがない。デメテルを迎えに来たあの金色だ。

「・・・デメテルだけでなく、Mまで破るとはね」

「まあね、さすがに苦戦したけど。あ、ちなみに殺そうと思っても殺せないよ。今の機体状態でも、電磁フィールドを張るくらいは造作もないから」

「・・・なるほど。で、どうするつもり？」

「どうするも何も、生かすだけだよ。その後の道は、この子自身が決めるべきこと。違う？」

「なるほど、ね。それに、あなたの機体とは相性が悪いみたいだし、ここは引いてあげる。もう少ししたらまた再戦に伺うからその時はよろしく」

「あつそ。返り討ちにしてあげるから、せいぜい遺書でも書いておきなよ？」

「その減らず口、黙らせる日が楽しみね」

そういつてはるか彼方へ飛び去っていく金色を、その騎士は静かに見つめていた。

「さて、そろそろいろいろはなしてもらいましょうか・・・黒川殿」

そんな時、後ろに回っていたラウラがそう発した。その瞬間に、イージスはその顔を覆う装備の一部を解除した。具体的に言えば、顔を見えるようにした。そして。

「まったく、勘が良すぎるってのも考え物だとおもうぞ」

そのパイロットたる方は、そういつてまるでいたずらがばれた子供のようになつた。

そうして何とか所定の日程でIS学園に戻った後、万も含める専用機持ちの面々と冬と真耶は保健室に来ていた。そこにはもう一人、ゆつくりと眠っているM——一夏曰く織斑マドカがいた。

「さて、と。いろいろ話してもらおうぞ、黒川」

「もとよりそのつもりですよ。．．．さて、と。まずはこの子について話しましょうか。いつ目が覚めるかもわからんし。っていつても、二つ仮説があるわけなんですけど」

まるで世間話でも始めるかのように方はそう切り出した。

「まず一つ目。こっちの事の発端は学園都市内部のある実験だ。名前を、レディオノイズ量産能力者計画。その名の通り、能力者を量産しようって計画だ。やり方としては、ベースとなる能力者のクローンを作り、それをホルモン調整剤やらで一気に成長させる、つてもの。で、そのベースとして用いられたのは、あんたらも知っているはずの人物だ。なにせ、学園都市の広告塔みたいなものだからな」

その言葉に、その場にいた全員が意外そうな顔をした。

「まさかとは思うけど、御坂美琴．．．？彼女、とてもそんな計画に賛同するとは思えなかったけど」

「そのまさかだ。っていつても、正確には騙されたらしい。名目上がどうだったかは知らんけど。で、その計画を下っ端がぼろっと漏らしたんだろう。結果はたぶん漏らしてないがな」

「なぜそう言い切れるんですか？」

不思議そうに聞く真耶に方は簡潔に答えた。

「簡単です。その計画は失敗だったから、ですよ。生まれたのは確かに能力者ではありませんでしたが、その力は、どれもオリジナルたる御坂美琴の1%にも達しなかった。のちに彼女らはまた別の実験に利用されることとなったわけですが・・・脱線するのでまたそれは違う機会に。で、それを聞いたIS側の人間も似たようなこと考えたわけですよ。つまるところ、ISで最強と名高いブリュンヒルデ、そのクローンを作れば、ISにおいて最強の軍団が作れるのではないか、と」

「ありえない、そんなことは断じてない」

そこで話が見えたのであろう千冬が断固とした態度で否定した。だが、それを万は淡々と否定した。

「いえ、ありえない話ではない。あなた個人に接触がなくとも、DNAマップを取る方法などいくらでもある。たとえば、その毛髪や血液を採取する、とか。毛髪なんか、家に入ればいくらでも転がっているはずですし、血液に関しても健康診断か何かの血液をひっそりと入手すれば十分に可能です」

「だから、そんなことなど・・・」

「ここまで話が大きくなっているんです。ほとんどこれといった痕跡も残さず、血液や毛髪を採取する。学園都市の能力者を利用することができればそんなこと造作もありません。一夏は学生である以上学校に行かなくてははいけませんし、その間は家を空けざ

るを得ませんから。パイプがあればなおのこと容易ですし」

「・・・嘘、だろ・・・」

「信じられんと思うが、これについて考えるのは後にしろ。・・・で、その産物がこの子、織斑マドカつてわけです。で、もう一つ。さっきの否定の仕方を見るに、こつちの可能性のほうが高いかもしれない、と俺は踏んでますけど。で、そのもう一個の可能性つてのは、この子があなたたちの実の妹、つて線です」

「・・・え、それつてどういうこと？だつて、一夏の家族は千冬さんだけなんじゃ・・・」
戸惑つたように凰が声を上げる。だが、それについて表情を変えずにだんまりを決め込んでいるところを見ると、

「・・・どうやら、やはりこちらが当たりだつたようですね」

「・・・どういふことだ、説明しろ」

今にも雨月か空裂を部分展開しそうな筈に対しても冷静に万は告げた。

「一夏は今年高校一年生。で、対する織斑先生は何年か教師をやつてるところを見ると、おそらく20代半ばから後半。となると、10歳差くらいのはず。物心つくのは、早くてほしい6，7歳。見た目の年齢が俺らとほとんど変わらないところを見ると、おそらくこの子も同じくらいのはず。となると、その時に何かしらでいざこざがあつても、篠ノ之も一夏も覚えていないことになる。その姉たる織斑先生が口を開かない限

り、な」

そういつて方は真正面から千冬を見た。睨んだとも取れる目つきだったが、その眼に動じた様子はない。

「織斑という家になががあつたのかは知らない。けど、そろそろ話してもいいんじゃないですか？一夏も篠ノ之も、もうガキじゃない。自分たちのことは、それぞれ考えられる年なんですし」

さらにかげられたその言葉が背を押したのか、ゆつくりと息をつくると千冬はゆつくりと話し出した。

「・・・事の発端は、年子で一夏に妹ができたことだ。その時からすでに、私は東につき合わされて、ISのために家を空けることが多かった。両親同士が友人だったこともあって、何をしているのかを聞かれることはなかった。だが、ここだけは家にいる、と、そういわれて家にいた私を待っていたのはありえないことだった」

「つまるところ、マドカは本当の意味で妹ではない、と？」

「そうだ。正確には、この子たち、だがな。この子・・・イオリとシオリは双子だった。もともと、二卵性双生児であるとは言われていたが、二人ともあまり似ていなかったのだ。イオリは私にそっくりだったが、シオリのほうはどちらにも似ていなかった」

「ちよつと待った、その、二卵性ナントカつて？それと、マドカの本当の名前は？」

「二卵性双生児つてのは、たまたま子宮に二つあつた卵子がそれぞれに受精して育つた双子のことだ。見た目などは、普通の兄弟姉妹と変わるところがない。それと、マドカの本当の名前は庵いおり、草庵などの庵いおりという字を書く。双子のもう一人は詩を織ると書いて詩織しおりだ。

とにかく、二人ともそれはそれは大いに怒つた。お互いにどうして黙つてたんだ、そつちだつてこれを隠しているだろう、そんなことを言つたらそつちだつて、といった具合に、かなり白熱した口論に発展していた。最終的に、両方とも喧嘩別れになつて、父さんが詩織を連れて出て行つてしまつた。その次の日に、庵も姿を消していたよ。よほど詩織か父さんか、あるいはその両方が恋しかつたのだろうか。それからというもの、抜け殻のようになつた母さんは、やがて心中を図つたんだ。いわゆる、塩素自殺というやつでな。だが、それにいち早く気付いた私は、一夏を逃がして母さんを助けようとしていた。だが、最後の最後で子の私に情が移つたのだろうか。私に「逃げて、一夏とともに生きなさい！」と。それが、最後の言葉だつた。その後、その家には住めなくなり、母の遺した財産で近くにあつた物件に越すことになつた。新しい家に越すころには、私たちも塩素中毒による経過観察の入院があつたからか、その話題も薄れていてな。妙な目で見られることもなかつた。この新しい家というのが、今の私たちの家だ。ちょうど、白騎士事件の少し前、一夏が6歳のころだ。・・・私の知っていることは、これだ

「けだ」

「十分です、ありがとうございます」

そういつて方は深く頭を下げた。いくら真相を知りたいからとはいえど、ここまで話してくれるとは彼も予想していなかったのだ。

「さて、ならここからは推測になりますが、話しましょうか。その、詩織ちゃんがいまどうしているのかはこの際おいておくとして、マドカ改め庵さんは、その後スクール、だったかな？とにかく、亡国企業フアントムタスクに拾われたのでしような。で、今まで育ってきた。かなり歪んだ状態で、ですが」

「どういふことですか？」

「推測にすぎませんが、庵さんにお母さんは家の連絡先などを持たせていたんだろう。そこから、催眠術か洗脳か何かで偽の記憶を植え付け、歪んだ知識をつけさせた。そこで植えつけた記憶は、自身の名前がマドカで、自身は織斑に捨てられた、といったところだろうな。こうすれば、半分は本だから、完全に嘘ではないし。事実婚ならぬ事実離婚状態なら、姓も変わってないし。で、ここでもう一つ、彼女自身は『織斑』に復讐する、つて目的が生まれるわけだ。その目的の筆頭として挙げられたのが、織斑千冬。あっただったわけだ。なにせ、織斑家きつての有名なわけだからな」

そこまで話したところで、彼は片手を庵の頭に、もう片方の手をおなかあたりに当て、

目を閉じた。そして。

「……っ！」

自身の手をその体にうずめた。何人かが息を呑むがそれに構っている様子はない。何秒、いや何分か、あまりに非現実的な光景に時間間隔がおかしくなる。そして、そのままゆつくりと手を体から抜き、体に手を触れたまま自身の能力で糸を使わない縫合をしていく。といえればわかりやすいものの、傍から見ればひとりでに傷がふさがっていく光景に、全員が信じられないといった表情を浮かべていた。

「……でもって、都合のいい、駒として、亡国企業フアントムタスクの、一員として、活動していた、つてわけだ。ご丁寧に、こんなものを、埋め込まれた、うえでな」

さすがにかなりの集中力を使ったのだろう、軽く息を上げながらそういった。その手の中には、ごくごく小さな部品の集合と思われるもの。

「……ナノマシン……!?!」

ラウラが驚いたように声を上げた。その言葉にゆつくりとうなずいた。

「そうだ。このナノマシンは、バイタルを測り、反逆の意志があつた人間を殺すために埋め込まれているらしい。取り除くには、あちらさんの施設を使うか、それか今見たく一気にすべてをかき集めてとつちまうか、どつちかだ」

そこまで言ったところで、庵がゆつくりと目を覚ました。それにいち早く気付いた万

は一瞬でカーテンを閉めた。いったいどういう知識を植え付けられているかは知ったことではないが、千冬を見た瞬間にパニックを起こされなどしてはたまらないと判断した結果だ。

「……は……?」

「……がどこかなんぞ今はどうでもいい」

そういう万の声は機械的だった。

「俺は、君は真実を知るべきだと思っている。そして、その方法もある。君が望めば、俺はそれを実行に移そう」

「どういう、ことだ……! さっきの感覚と言い、その言葉と言い……!」

どうやらかなり腹が立っているようだ。それもそうだろう、気を失っているのをいいことに、体を一気にスキャンしていじくりまわしたようなものである。だが、それでも万の言葉は淡々としていた。

「今は知る必要のないことだ。あんたの知っている歪んだ知識を、正す方法があると
言っている。

てめえを害するつもりはない。あれば——」

そういつて万は虚空からリボルバーを取り出した。そのまま流れるように安全装置（スーフティ）を解除する。静かなカチリという音は、人間の生まれついて持った生存本能に対し、

しっかりとその効果を發揮した。

「今頃こいつでドタマぶち抜いてる。どうするんだ、やるならさっさとやっちまうぞ」

その言葉に、庵は長いこと考えていた。が、やがて、低く唸るように言った

「……頼む」

その声は低く、声量も決して大きいとは言えなかったが、それでもはつきりと耳に届いた。

「先生、お願いします」

そういいつつ、カーテンの切れ目から左手を伸ばした。その向こうから千冬の手が伸び、その手に触れる。右手で庵の頭に触れ……。前に体晶を一つ噛み砕き、頭に触れる。そして、もう一度方は目を閉じた。

「トレス接続……オン開始」

古いアニメの真似事としてはじめ、ここ一番の癖となった言葉をつぶやく。その瞬間に、左手から膨大な情報量が頭に流れ込んできた。そのすべてを感覚的に受け止め、処理し、右手を通して送る。ようやく処理が終わった時には思わず膝から崩れ落ちた。

「お……ねえ……ちゃん……」

その一言とともに、庵はゆっくり目を閉じた。

3 2. 天使の真実と万

しばらく万はしゃがんでいたが、やがてよろよろと立ち上がるとカーテンを全開にした。

「・・・どうだったの？」

かなり顔色も悪いのだろう、シャルロットが心配そうに聞いてきた。それに対して、万は何とか立ちながら答えた。

「とりあえず、意味記憶として——思い出ではなく意味として、織斑先生の記憶を叩き込んだ。読み取るより脳には負担がかかるはずだから、少し目が覚めるまで時間がかかると思う。それと、意味記憶とはいえど他人の記憶を埋め込んだことに変わりはないわけだから、目が覚めたときに記憶の混乱が見られるかもしれない。ま、その辺は眠っている間に脳が処理すると思うけど」

そういうながらもまだ少し残る体晶の効果で自身の脈拍、発汗、体温などを整えた。これで少しはもつだろう。

「・・・なんで、なんで千冬姉は俺に俺のことを教えなかったんだよ!? もっと早く教えてくれてもよかったですだろ!」

「じゃあ聞くが、お前、もし聞いてたら・・・技量の問題とかを抜きにして、俺を本気で落とせたいと思うか？」

一夏の激したような反駁は、冷静な万の言葉で掻き消えた。言い返された一夏は口ごもった。

「・・・それは・・・」

「無理だろうな、お前は優しすぎるから。もし殺したら、なんてことを考えるんだろ？だから教えなかった。・・・違いますか？」

「・・・その通りだ。悪かった、一夏」

そういつて頭を下げる千冬に、一夏は今度こそ言葉を失った。それを見て、万はそのまま続けた。

「だけどな、一夏。そのやさしさは、お前の長所でもある。使いどころを見誤るなよ。

・・・さて、んじやま、俺の知っていることを話そうか。ま、といつても、聞きたいことはひとつだろうけど」

「ああ。あの機体、アイギスとは一体どのような機体だ？」

「アイギス？」

ラウラの問いかけに対し、箒と一夏の頭の上にクエスチョンマークが出た。

「あの機体の名前だよ。読み違えるやつも出てくるだろうなーとは思ったけど、ここま

でわからないとは思ってなかった」

「どういうことだ？」

それに答えたのはセシリアだった。

「イージスはA e g i sの英語読み。ラテン語読みだと、これはアイギスと読むのです」
「そうだ。そして、アイギスとはオリュンポス12神の中でも、ゼウスとその娘であるアテナが使ったとされているもので、楯とも肩当てとも、はたまた楯に張った皮だとも伝わるものだ。そして、そのアテナ神は・・・」

そこでいったん言葉を切ったラウラは、万の灰色の目を真正面から見ていった。

「フクロウを従え、灰色の目を持ち、戦いにはその楯と槍を用いた女神であったとされている・・・。夜行性のふくろうのような夜型の生活に、灰色の目。即座に、私はあなたが思い浮かびましたよ」

「・・・まったく、お見事、としか言いようがないな。だが、セシリアはどうして気づいたんだ？」

「攻撃の動きがあなたに似ていた、というのが一つ。そして、決定打となったのはこれですわ」

そういつて取り出したのは小型のボイスチェンジャー付のボイスレコーダーだった。

『IS学園の子ね?』

そこから流れたのは、テンペスタの襲撃の時の声。だが。

「これは、あの時の……。だが、これは女性の声ではないのか？」

「ええ、このままではそうですわ。しかし、これを100Hzほど下げると……」

そういつてボイスレコーダーを操作し、もう一度再生をかける。すると、

『IS学園の子ね?』

それはそのまま万の声だった。

「これを初めて知った瞬間は驚きましたわ。その瞬間に悟ったのです。あの機体に乗っていたのは万さんである、と。そういえば、セイリユウには光学迷彩も含まれるステルスがございませいわね?」

「……まったく、お見事としか言いようがないな」

言外に降参といった様子で万はもろ手を挙げた。

「俺はアイギスの機体設計者であり、そのパイロットだ。あの機体のショルダーアーマーは福音のアイデアをもとにした。つまり、あれが最強の防具であり、最強の矛でもある。その威力は……。まあ、過去の戦いのデータを見れば一目瞭然、ってやつだな」

「防具つてのはわかる。だけど、最強の矛ってどういう意味だ?」

不思議そうに聞く一夏に、万は軽く後ろの頭を掻きつつ答える。

「矛盾じゃなくてもよかったんだが……。ま、つまるところ、福音の背中についてる翼は

補助スラスタールと広範囲攻撃に用いられるものとなっていたらどう？あれと同じようなからくりを搭載したわけだ。あと、あれにはもう一つ、俺がつけた、他のISとは一線を画す機能が存在する。っていつても、紅椿には負けるかもしれんがな」

「紅椿には、とは？」

「わからないか？篠ノ之」

いきなり名指しを受けた筈は、最初こそ戸惑っていたが、少ししてからまさかといった風情で答えた。

「・・・エネルギーの回復、か？」

「ご名答。っていつても、さらにもう一つ機能が存在してな。俺の機体には防具たるどころに砲門がある以上、そこにいかにロスなくエネルギーを通すか、っていうのがネットワークだった。そこで、俺は飛行機の機能に目をつけた」

「飛行機？って、なんでそこで飛行機が？」

デュノア社社長令嬢ということでもかなりISについて勉強していたのだろうからか、何とか話題についていけているシャルロットがクエスチョンマークを浮かべた。

「飛行機、というより、旅客機だな。旅客機、特に国際線のそれなんかは大量の燃料を積むために、燃料タンクを複数搭載している。要するに、どでかいタンク一個じゃなくてある程度小さくてもタンクを複数積むことで少しでも多くの燃料を積むことを目的と

したってわけだ。ISにも同じような機能をつけなければいい。つまるところ、エネルギー保存箇所を複数作つちまえばいいじゃねえか、と」

その時点で一夏の頭の上に煙を幻視していたが、万は構わず続けた。

「結果は成功。で、問題はこのタンクをいかにして有効活用するか、つてところに目が行った。なにせ、この予備タンクだけで数時間の連続機動もできる計算になったからな。満タンにして戦おうにも、チャージに時間がかかる。

そこで、俺が考えたのは、このタンクにも別口でチャージ機能をつければいいんじゃないかねえのか、つて考え。そこで、砲門が無数に開いていることに目が行ったわけだ。つまり、穴ぼこ状態なら、そこからエネルギーを回収することも可能なんじゃないのか、つてな。

ただ、ここで一つ問題が発生する。エネルギーとは何か、つて話だ。セシリア、この世界に、エネルギーがつくものを思い浮かぶだけ言つてみ？」

「またもや突然の名指しだったが、セシリアは動揺せずに答える。

「電気エネルギー、熱エネルギー、運動エネルギー、位置エネルギー、光学エネルギー、といったところでしょうか」

「・・・ま、パツと思いつくのはそのくらいだわな。で、位置エネルギーはともかくとし、それ以外のエネルギーはそのエネルギーの二次利用と思える用途がかなり多い。たと

えば、電気エネルギーなんかは文字通り電気とか化学反応に使われるし、化学反応で言えば熱もそうだな。熱はうまく使ってやれば電気にもなる。これは光学エネルギーにも共通する。

：つまり何が言いたいか、っていうと、エネルギーだとあいまい過ぎるんだよ。で、それらのうち、ISが起動中に発生するエネルギーの一部を、できるだけためれるようにした。つてわけだ。この結果、あの楯は打撃による膨大ないし継続的な物量や衝撃による破壊が発生しない限り、どんな遠距離攻撃も効かない」

その言葉に、全員が絶句した。

だが、そんなのはどこ吹く風と言わんばかりに万は続けた。

「で、あの剣については、実は前セシリアと一夏に言った内容がそのまま答えなんだ。一応ほかのやつにも言っておくと、剣の一部が鞘となっている。で、俺の演算とともに鞘が抜けるようにしたうえで鞘をはずすと、その瞬間にあれ自体がフラツシユグレネード代わりになるっていう優れものだ。ま、大剣から長剣つてのも考えたんだけど、こつちのほうが万が一、機体が奪われたとしても安全だしね。あと、あの銃は引き金をボタンに変えてできるだけシンプルかつスマートにできるか、つていう末の試作品。うまくいって何より、つてとこだけだね」

そういつてふつと笑う。その顔は、年頃の青年の顔ではなかった。そこから、さらに

気を引き締めていった。

「俺が言える最後のこと。それは、なんでセイリユウが無人で動いていたのか、つてところだ」

「そりや、あれが無人運用をもとにした設計をなされていたからでしょ？」

「ま、それもあるんだが……。そもそもが、ISを無人で動かせる、つてところに疑問を覚ええないか？」

「そりや、遠隔で操縦するとか……」

「でもそれじゃ、あの時セイリユウが動いていたことの説明がつかない。違うか？」

そういわれた瞬間に、全員の口が閉じた。

「事の発端は、なんでISが女性にしか動かせないか、つてところに発する。そこでだ、女性の人格を与えられたAIなら動くのでは、と考えた。結果は成功で、その過程で作られたのがあいつら——三つ子で、その気になればAIに制御を預けることもできた」

「ちよつと待つて、今までAIでISを動かしたなどという実例は……！」

「そう、ない。今考えれば、なぜなのか、というのがわかる」

驚愕の声で聞いたです千冬を遮って方は静かに告げた。

「ただし、この仮説を証明するにはある仮定がある。そのための確認がある。——」

夏、篠ノ之」

万はおもむろに煙を出している一夏と、何とかといった体の筭を見据えた。

「ISを開発した篠ノ之東氏は、対人恐怖症ないし重度の人嫌い、もしくはそれらに準ずるものがあり、結果として他者に関わらなかつた。が、それにも例外があり、その例外の中に織斑先生、一夏がいる。……違うか？」

「……そう、だ。でも、どうして……？」

その言葉を聞いて、ふうと一息をついた。

「仮定が成立したところで続けようか。その前に、一つ説明しなくてはならないことがある。それは、A Iというのは、大きく二種類に分けられる、ということだ。便宜上、M型とH型としようか。

M型A Iとは、膨大な数の条件分岐が重なったものだ。プログラムの説明するなら、If a then b Else if c then d Else if e then f Else if …といった感じに、な。つまるところ、Aと聞かれればBと答え、Cと聞かれればDと答え、Eと聞かれればFと答え……”つてな具合に、な。これはただの言語ルーチンと行動ルーチンの集合であり、その数があまりに膨大なために知性のように思えるだけだ。本質は、ただの機械にすぎん。今の、いわゆるA Iはすべてこつちだと思ってい。……ここまでOK？」

それに対して何とか全員が理解していることを確認してから、万は続けた。

「対して、もう一つ。H型AIとは、真の知性と言える。早い話が、人間のように考え、心を持ち……ってなもんだ。アプローチとしては、機械で人間の脳を再現する、ってことだ。そこに知性を宿すことができれば、そこに宿る知性は、真に“知性”と呼べるものとなりえる。けど、公には成功しなかった。

……さて、本格的な説明に入ろうか。

皆さ、親に好みが似るとか、仕草が似るとか、そういつたことに覚えがあるだろ？」
それに対して全員が頷いた。

「よし。」

でだ、それがAIにも起こりえるなら。それこそ、さっきの説明で言う、H型にそれが起こったら？ってというのが発端だ」

その後、万はほんの少しためたうえで言った。

「俺は、ISコアはH型AIなんじゃないか、と考えている。であるがゆえに、女性しかISが動かせないなんて言う奇妙な現象が起こっているのだろう、とも」

その言葉に、全員が発すべき言葉を失った。ある程度時間を置いたうえで万は説明を再開した。

「続けるぞ。……この場合、H型AIのすべての親は篠ノ之束だ。彼女しか知らないの

であれば、ISのAI——便宜上、コアAIと呼称するが——これは、その影響をかなり色濃く受けることとなるのではないのか？と。ならば、コアAIが極度の人嫌いになることとなることになる。だが、彼女と過ごすうちに、彼女と同じ女性なら、信頼してもいいと考えるようになったらどうだろう、と。おそらく、女性しか動かせない原因はここだ。

コアがブラックボックスになるのなんて当たり前だ。なにせ、人間の脳の構造をどうにかして機械で再現したのだから、それを解析しようとしても、人の脳がどのようなになっているかなど誰も知りえない。心がどこにあるのか、とかな。だからわからない。

一夏が動かせる原因は簡単だ、人嫌いの例外の中にいたから。だからこそ、一夏を認識したISは動くこととなった」

「ちよつと待って、それがなぜAIでISが動かせるという結論に至るの？」

「まあ、そう急くな。

ならば、H型の、しかも女性の人工知能なら動く可能性は十分にあると踏んだ俺は、さつそく実行に移すとした。っていつても、やり方はこの上なく胸糞がわるいものだけだな。

…早い話が、能力で人体のスキヤニングをかけたんだよ、俺は。より正確には、人

間の脳に、な。そこから得られたデータを解析し、それに共通項を見出した俺は、その部分をもとにH型AIの開発に成功した。そこからしばらくして、女性型、男性型の開発にも成功。

当時のセイリユウたちのプロジェクトには、補助AIに状況分析、そして判断をさせ、その指示にパイロットが従うというものだ。俺たちは、仮想無人状態って表現していた。その補助AIのプログラミングが終わったぐらいいよいよやくH型AIが完成できたくらいだから・・・かなりかかったことになるのかな。

さらに俺は、俺の暗部時代の戦闘能力をAIに学習させた。なにせ、AIっていつてもその正体はまさに真の知性、そこに宿るは人と同じもの。学習は早かったよ。ISコアを用いた仮想の世界で、そのAIたちは俺と同等以上の戦闘力を見せた。たぶん、並のIS使いなら撃墜されるくらいのをな。

そして、そいつらを実際にISに乗せてみた。結果だけ言えば、今でも最初期の起動のみに人を必要とするが、それだけで動くことがセイリユウによつて実証された。もつとも、セイリユウにのみしか実証されなかった、というべきなのかもしれないがな。

でも、最初はセイリユウでさえ動かなかった。だけど、少しずつ反応が良くなった。最終的に、仮想世界並に反応は良くなっていたよ。そこで、この仮説が立つこととなった」

「そういえば、楯無先輩も言っていた。私のIS適性が一気に上がっていた、と。関係があるのか？」

「ああ、大ありだ。

・・・俺は、ISの適正値ってのはIS側からの信頼度が現れた形だと思っている。つまり、ISからいかに信頼されているか。それが適正値となって表れる。

俺が動かさせたのは、セイリユウやブラックバード、ガンチャリオットたちが、俺のことを信頼してくれたからだ。そこまでくれば、あとはISのコアネットワークで拡散して、その結果として、アイギスのコアも答えたんだろう。

で、篠ノ之の適正値が大幅に上昇したのは、どんなに時がたついてもお前が篠ノ之箒だからだ」

「どういう、ことだ？」

「臨海学校の様子を見るに、篠ノ之束という人間はずいぶんとシスコンらしいな。ということは、ISコアも少なからずあんたに興味を持っていたはず。だけど、たぶんあの紅椿のコアは意固地な奴だったんだろうな。しばらくはあんたを信用できなかった。だけど、しばらく一緒に過ごすうちにあんたに心を開いて、それが適正値となって表れた。

・・・これが、俺の仮説のすべてだ」

その仮説を聞き終えた瞬間に、全員がそれぞれの表情を浮かべた。千冬ははるか友を思いやる柔らかな表情を。

真耶は突拍子もない仮説に対する驚愕の表情を。

一夏は幼馴染の姉の自分に対する思いへの感謝を。

箒は自身の姉からの自分への思いを理解した涙を。

ラウラは人の思いというものがつむぐ超常的なことに対する疑問を。

シャルロットは箒や一夏の向けられる思いに対する羨望を。

凰は離れていても家族に愛される者の幸福への羨望を。

簪は束の箒への感情に対する深い理解を含んだ笑顔を。

そこに音はなく、また誰も必要としていなかった。そこにあるのは、それぞれの純粋な思いが生み出した静寂だけだった。

33. 少女の選択

そのまま解散となった後も、彼はその場に残っていた。そこには、いまだ静かに眠る庵がいた。

彼があの時やったのは、彼女が封印された記憶を読取り、それを千冬の記憶を参考にしつつうまく調整させただけである。早い話が、頭の中に入っていた思い出したくない記憶をうまく解き放ったのである。

だが、頭の中に残る、後遺症とも取れるようなものを悟られなくなかったというものがあつた。というのも、その膨大な量の情報量を処理したからか、頭の中にまだぐわんぐわんというような感触が残っていたのだ。そして、ある一つの仮説も。

「・・・大丈夫なのか？」

「何言ってるんですか、余裕ですよ」

その場に残った織斑姉弟の姉である千冬から声をかけられた。それに対して、万の答えは一瞬遅れる。

「嘘だな」

その返答は即答で来た。その声はいつものように凜としていたが、どこか淡々として

いた。

「そんな顔色で何を言うか。一回鏡を見てきてみる。それとも、立てないとかいうのではないのだろうか?」

「俺、そんなに顔色悪いですか?」

「お前、気づいてないのか? 顔真つ青だぞ」

その声をかけたのは一夏だった。この朴念仁まで見破られるということは相当なのだろう。

「……さすがに、疲れているだけです。人二人分の記憶を読み取るつてのは、思いのほか疲れました」

「そのうえ、洗脳を無理やり解いたのだろう。ずいぶんと無茶をする」

「ええ、おっしゃる通り。でもま、ここまで体にくるつていうのは、予想外でした。ま、予想外ついでに、思いもよらぬ収穫があったんで、良しとしますけど」

「収穫?」

ファンタムタスク

「亡国企業の目的、ですよ。いやはや、どこぞの魔王とかみたいに世界征服とか言い出したらどうしようかと思いましたが、良心的で安心しました」

「白書を奪おうとしたり、世界中のISを奪おうとしているのか?」

「目的が手段を正当化することはないけど、でも目的はいいと思うぜ。」

「……亡国企業ファントムタスクの目的は、ISの研究、ひいてはISによる差別の撤廃を理想として
いるようです」

「……なるほど、ISを研究して、ISに含まれた謎を解き明かし、それをもとにして
ISによる差別をなくそう、というわけか」

「ええ。ですが、ISは世界に少なすぎるし、何より女性の彼女らが言っても説得力など
なかった。だからこそ、彼女らは奪うしかなかった。でも、今読み取った限りでは、彼
女らにとつてもコアはいまだ未知のものらしいですけど」

「なら、あんたのデータを渡せば……」

そう声を上げる一夏に対し、淡々と万は告げた。

「あくまで俺のは仮説だ。正しいと実証できたわけじゃない。もし違う可能性があつ
て、それにたまたまピースがあつただけなら、この仮説は間違つてることになるからな。
それに、忘れちゃいかんがコアから男性という生物に対する信頼を得なきゃいけない
し、材料とか分からないことだらけだ。俺がデータを渡しても根本的な解決にはならね
え。それに、だ」

そこまで言った瞬間に、千冬が端末を取り出した。その顔が見る間に険しくなった。

「悪いがその説明は今度にしろ、黒川」

「敵襲、高温の熱源が1。違いますか？」

「・・・なぜわかった」

「なんとなく、ですよ。そろそろ来てもいいかなー、って。・・・さて、じゃ、俺は行き
ます」

「どこにだ」

「勿論・・・」

手近な窓に足をかけたまま千冬の質問に答える方は、どこか無感情な笑顔を浮かべ
た。

「ケリをつけに、ですよ」

それだけ言うと、そのまま身を踊りだした。左手をまつすぐ前にだし、アイギスを展
開する。そして、そのまま上空へ飛び立った。

上空にいたISは万の予想に違わぬ金色のISだった。それに対して対峙するは鈍
色のIS。

『・・・念のため、Mをどうしたのか、聞いてもいいかしら?』

上品で丁寧な口調だったが、その中には品定めするような、油断のならない声音が含
まれていた。

「生かしたよ。今までの記憶の封印を解いて、な。今はまだ寝ているはずだ。何分、脳に

負担をかける作業を行ったものでな」

『……そう。ということ、あの子から返事は聞けていないわけね?』

「……ああ、そうだ。で、あんたはどうするんだ。ここに来たってことは、まあ、やることはひとつだろうが」

静かに長剣を構える。剣を持った右手を前に正眼の位置で構え、左足は後ろに引き半身に近い体勢で構えた。

『そうね。話が早くて助かるわ』

それに対して相手が行ったのは熱線と思われる細いワイヤーを激しく振動させることのみ。

戦いは無声のまま始まった。蛇腹剣のようなものと長剣が火花を散らすたびに、あたりに轟音が響く。時折距離を取ったかと思えば、互いに砲撃を撃ち合う。その戦いに音はあれど、声はなかった。そのまき散らされる感情が、声以上に物を言っていた。

「なぜ……」

十何度目、いや、もつと回数を積んだかもしれない。それだけの回数、鏢迫り合いの時に、ぼつりとスコールが言った。

「なぜ、セレネも、Mも。あなたは助けるの?」

「ただ単に、気紛れだ。それに、情報も欲しかったしな」
腕に込める力は緩めず、そのままの体勢で方は答える。

「なるほど、ね。で、その気紛れであの子たちに危害が及んだら？不幸になったら？あな
たはどうするつもり？」

「俺は最初から選択肢を絞ってはいない。あくまで、あいつの希望だったから逃がした
んだ。それだけだ」

「・・・そう」

その言葉で、やり取りは途切れた。鏢迫り合いが終わる。もう一度双方構えなおし、
再び間合いを詰めようとした、その時に――

「双方剣を引け！」

間に、黒い蝶のようなＩＳが割り込んだ。バイザーに顔の半分が隠れ、顔を判別する
には至らない。だが、その声で、その機体で。双方が、パイロットが誰か当てること
ができた。

「・・・織斑、庵・・・」

そこにいたのは、黒騎士――織斑庵だった。

万が飛び出してから少しして、ゆつくりと庵は目を覚ました。頭を襲う鈍痛から、自分分は死んでなどいない、と思った。体が楽であることに気付いて不思議がっていると、声がした。

「・・・千冬姉！」

その声は、記憶にあるものより低かった。が、その口調は変わらず。

「わかつている」

そちらの声は記憶にあるものと変わらず。

「・・・目が覚めたようだな・・・庵」

それらの顔立ちには、眼差しは。間違いなく、記憶にあるものの延長にあるものだった。姉と兄を見たときに、何か得体のしれない物が一気に胸に押し寄せ、とっさに顔を隠してしまった。

「・・・どうしたんだ？」

こちらを慮るような兄の声。

その声に含まれる優しさも、覚えているものと変わらない。

なのに、どうして。

——嬉しい、筈。なのに、なぜ。なんで、私は、この人たちを、憎いと思っているのだろうか？——

なんで。どうして。なんでどうしてなんでどうしてナンデドウシテナンデドウシテ。そればかりが頭の中でループする。

「……落ち着け、庵。悪い夢は終わったんだ」

いつもの凜とした声に含まれる優しさ。それすらも、心のどこかで強く拒絶する。

「……一夏」

「え、ちよ、千冬姉!？」

驚いたような兄の声と、遠ざかる二つの足音。やがて、少し遠くから声が聞こえた。

「私は少し出ている。大丈夫だと思ったら、枕元のスイッチで呼べ」

その後に、ドアが開閉する音。

そして、静寂。

その後、いろいろ考えた。

自分は何者か？——織斑庵だ。

マドカではないのか？——それは昔の名だ。今は庵だ。

庵こそ昔の名前だ。マドカだろう？——マドカは作られた名前。本来の私の名前

は庵だ。

なら、お前が庵だとして、お前は何者だ？——お姉ちゃんとお兄ちゃんの妹だ。妹なら、なぜ憎む？織斑千冬が、織斑一夏が、お前に何をした？——分からない。分からないことはないだろう。お前のことだから。——それでも分からない。なら、お前は本当に庵なのか？——そうだ。それは間違いない。

それならば、なぜ——

自分のことに関することが、ひたすらに頭の中でぐるぐるとまわっていく。終わりのない思考だと分かっている、止まらない。そんな時、心のどこかで、声が聞こえた。

——泣きたくなったら、空を見上げな。そうすれば、あつたかい気持ちになるから

無理やりにも止めようと、ふらふらと窓に寄って行った。たまたまその窓が開いていたのは、はたして幸運だったのか。

目を上げた、そこで火花を散らしていたのは、金色と鈍色。

顔までは見えない。だが、金色のほうは見覚えがあった。数回しか見てないが、あの金色は間違いなくスコールのISのそれ。

ならば、あの鈍色は。その時に蘇る、あの身ごなし。思えば、あの鈍色のISは似ている。一挙手一投足が、それに外見が。とすれば、搭乗者は。

そう思った瞬間に、無意識のうちに俺は窓から身を踊りだしていた。その動作は、まさに先刻同じことをした青年と同じ動きだった。そのまま自身のISを展開して飛翔し、両者の間に割って入る。

「双方剣を引け!!」

その声は、本当に自分でも驚くほど自然に出た。

『M!?!』

驚いたような声を、スコールが上げる。常人では流れ弾を食らうのがオチの戦闘に割って入り、その戦闘を中止させたのだから。しかも、それしたのは自分の部下。驚くなどというほうが無理だろう。

「・・・驚いたな、まさかも目覚めるとは」

「私自身も、少々まだ混乱しているからな。目が覚めたとは言い難いよ」

「それでも、だよ。俺としては、意識が戻るのすらもう少し先だと思っていたからな」

「そうか。だが、今はそのようなことはどうでもいい。今重要なのは、二人が何を知っているのか、だ。まだ私には、知るべきことがある。・・・違うか?」

「違うな」

その問いかけに、万はバイザーを取って即答した。

「今、お前に必要なのは、知識じゃない。知識に関しては、与えられるだけ与えたからな。だから、あと必要なのはお前の決断だ。」

これからどうしたいのか。どちらにつきたいのか。

お前が選べ。それは、俺らにはできないことだ」

それに対し、庵はゆっくりとうつぶした。

「・・・私は、もう、道具ではいたくない。それ以外のことは、まだわからない・・・」
「わからないなら、探していけばいい。今は、どちらの手を取るか、だ」

そういつて方は右手を差し伸べた。少し遅れて、スコールもその手を前に出す。

「あなたは、私に、私たちにとって、かけがえのない仲間よ。戻ってきてくれないかしら？」

今までに庵が聞いたこともないような優しい言葉。スコールの声をした別人なので
はと一瞬思ったほどだ。しかし、違う。目の前にいるのは、まぎれもなく亡国企業フアントムタスクのスコールだ。

微かに、本当に微かに、庵の心の天秤が傾いた。その天秤に従って、庵は手を伸ばした。

34. 新たな力

「・・・いいのかわ？」

伸ばした手を見て、万は言った。決して大きくない声だったが、それで十分だった。

「・・・ああ。私が私で居るために、私が何者かを探すために、こちらにいたい・・・！」
大きくなくても、力を込めた声で言いながら、織斑庵は万の手を取った。

「・・・いいだろう。合格だ」

満足気に笑いながらそういって、万は自分の手を取った手を握り返した。

「・・・そういうことらしいぜ、スコール」

「そう・・・」

その声には隠せない失望と、悲しみが宿っていた。その声に反応して振り向いた庵の目に宿るのは、強い光。それを見て、ひとつため息をつくとき、スコールは何かを投げ、庵が片手でそれを掴んだ。それと同時に、黒騎士とアイギスの仮想ディスプレイに一つの通知が小さく表示された。

「機体名へ『ゴルデンドーン』からプライベートチャンネルの開通が申請されました。

承認しますか？」

プライベートチャンネルはチャンネルを合わせるだけで全員に聞こえるオープンチャンネルとは違い、電話のように片方が開けて、それを受けたもう片方が開けなければ成立しない。しかも、同時に違うチャンネルとは通信できない。まさに、「プライベート」のチャンネルなのだ。

たいていは登録されているので、断る理由がないのでさっさと開けても問題ない。登録だけなら問題ないと判断した二人はほぼ同時に即決で承認した。

「これで私の機体のプライベートチャンネルを開けたわ。それと、その紙は連絡先。頼りたくなったら連絡なさい」

「いいのかよ、そんな簡単に情報を渡しちまって」

「問題ないわよ。遠くないうちに敵も味方もなくなるから」

「それはどういうことだ、スコール」

「いまいち意味を理解できない俺がスコールに問い返す。その横で、意味をすぐに理解できてしまった自分に嫌気がさした。」

「その坊やはわかつているはずだから、教えてもらいなさい。じゃあまたね、坊やたち。．．．元気でね、俺」

そういつてスコールは去って行った。

二人そろって地上に降りて、ISを待機状態にした瞬間に、庵は崩れ落ちた。

「……まったく、無理しやがってこの馬鹿」

そういつたのは読んでいたような動きで横から抱えた万のもの。

「……すまない、体に力が入らなくて……」

「頭が、つていうか脳が疲れてるんだろ。あんだけの情報が一気に流し込まれて疲れな
い脳みそとか見てみたいわ。……とにかく、今は休め。こういう時は時間だけが特効
薬だ」

「……すま、な、い……」

そういつて、庵はストンと眠りに落ちた。その様子を見て、万はふと微笑んだ。

「全く、謝る必要ないっての」

そういつて、万は庵を背負って歩き出した。

そのまま戻ってきた保健室には、いつの間にかまた全員集合となっていた。

「おいおい、どうしたんだよ」

「……大丈夫、なのですわよね？」

いたっていつも通りを心がけながら出した声に答えた声は、今まで聞いたことのない

ような、不安しかたないような声だった。

「・・・ああ、もう大丈夫だ。俺も、こいつも、な。だから安心しろ」

努めて明るい調子で言つて、万は俺をベッドに寝かせる。そのまま振り返つて、周りの表情が晴れないことを見ると浮かべようと思つた微笑みを引つ込めた。

「・・・つていつても駄目そうだな。どうしたんだよ、揃いも揃つてそんな顔して」

「・・・なあ、万。お前は何を抱え込んでるんだ？」

「抱え込んでるつて、何のことだ？」

「とぼけたつて無駄だぞ。ここ数日、寝るとき以外ほとんど整備室にこもりつきりだったんじゃないか？」

「そりやまあ、これを人前に出すわけにはいかないからな。一応こいつ、実戦戦闘を視野に入れて作られた機体だし。そうそうおいそれと人目に出すわけにはいかねえよ」

「そういつつ、万は左手の袖を軽くまくつた。そこには、銀色にも似た鈍色の腕時計。他でもない、アイギスの待機状態だ。」

「それでも、あなたのこもっている時間は異常、だと思う。いつも一つないし二つの整備室が、使用中になつてた。少なくとも、私の知っている限りではずっとだったから、相当な時間になる。そんなに長い間、何をしていたの？」

「・・・そんなに長くねえよ。さきつと設計、製作、あと機体の調整をしてただけだ。白

式と紅椿以外の機体の、追加武装をな」

「・・・して、その数は？」

「結構な個数になつてると思うぜ。たぶん、60超えるか超えないか。俺も細かい数とか数えてなかったからわからないけど」

「60って、夏休み終わつてからだとすればだいたい一日一個ペースじゃねえか!? マジかよ!」

「マジマジ大マジ。かなり多めに材料持ち込んで正解だったよ。おかげさまで俺が新たに持ち込んだ量子ボックスの中身は新しいやつでだいぶ埋まったし、新しいボックスもいくつか開発に成功した。いや、大変だったけど、それはそれは楽しかったよ。

ま、いくつかは戦闘データを取らずにぶっつけ本番になるかもしれないけど」

「・・・どういう、ことだよ」

「ISってのは世界を変えすぎた。今まで男が女を必要以上に虐げてきた世界の在り方が正解だとは思わない。だがな、それがぶち壊されたことよって、男ども、特に今まで利権を貪っていた連中にとっては面白くないことになったわけだ。いや、この言い方は正しくないな。より正確には、不愉快なわけだ。

しかも、あれだけの圧倒的な航空戦力なわけだ。兵器として利用しない手はない。先進諸国は秘密裏に兵器開発を進めていたはずだ。で、それらが手を組んで、まず潰すと

したらどこだと思う?」

「それは、篠ノ之博士、ではないでしょうか?」

「ま、真つ先に潰すとしたらそうだな。だけど、当の本人は雲隠れしていて所在はわからん。よっぽど高度なステルスを張っているのか、秘密裏に襲ってきた追っ手をことごとく潰したか……。ま、その辺は当人ないしその関係者しかわからんな。」

とにかく、奴さんらは篠ノ之博士の殺害を諦めたんだろう。

じゃあ、次はどこを狙うと思う?」

そう言いながらまるで講義をしているかのように彼は周りを見回した。一名を除いて考えているがわからないといった風の面々を見て、にこりと微笑んだ方は再び口を開いた。

「国際的なISに関する、兵士ではなく選手の養成所……。つまりは、IS学園。ここだよ。ISが生まれてからかれこれ10年。そろそろ頃合いだろう。力もいい感じに蓄えられているだろうしな」

「回りくどいな、珍しく」

麦野が少々意外といった風情で言った。だが、まるで筋書きがわかりきっている茶番を見せられている観客のような、ひどくつまらなそうな表情をしていた。

「ストレートに言ったらどうだ。このままじゃ皆殺しだ、って」

「ま、それができれば言ってるさ。だけど、俺が言っているのはあくまで仮説だ。それを裏付けるような証拠がいくつか上がっているとはいえど、それでも仮説に過ぎない。風説の流布っていうのは、時として危険極まりない。ここは盗聴器とかはないみたいだからこうして話せるが、もしこれを大勢にばらまかれるようなことがあつたら、最悪何者かの手によつて、学生寮に文字通り血の海が出来上がる。そんなのは俺も御免こうむるからな。」

「……ついてきてくれ。あんたらに、見せたいものがある」

そういつて庵を再び抱えると、つかつかと方は歩き出した。その後ろから、全員がついてきた。

そのままたどり着いた先は整備室区画だった。迷わずにいつも使っていた区画まで歩いていくと、ドアの前でいったん立ち止まった。険しい顔でドアの隙間に片手をかざして動かした。いったい何をしているのだろう、と後ろの面々が疑問に思っていると、かざしたほうの手を正面に、もう片方の手でドアを一気に開けた。開けた瞬間に一気に突風が吹き荒れる。わずかに、開けきった瞬間に中で何かが動いた。

「あらあ、ずいぶんなぐ挨拶ね？」

そういつて中にいた少女は扇子を開いた。そこには「暴力反対」の文字が、例によつて達筆に書かれていた。

「・・・ほとんど占有していたのは認める。が、鍵までかけてしつかり出ていったはずの部屋に入っていた人間にご挨拶もあるかよ」

「そうだけど、一応私は生徒会長だし？生徒が一つの整備室をほとんど占有して、いや、占有させて何かやってる、つて聞いたものだから、心配になっちゃって」

「あつそう。心配になるのは結構だけどよ、なら本人に聞いてみるつてというのが一番手つ取り早いんじゃないか？飯とかはしつかり食つてたわけだし」

「でも、時間をずらしてみても駄目だったのよねえ。だから、強硬手段に出た、つてわけ」

「強硬にもほどがあるだろうが。それに、一応今は俺の時間のはずなんだが？」

「そうねえ、でも気になっちゃつて。それに、なんだか今日は大人数だし、愛しの妹もいるわけだから。いいじゃない、少しくらい。ね？」

あざとさとと最大限に利用するような口調と、上目遣い。この女の本性がどのようなものなのか、とてつもなく興味がある万だったが、出てきたのはため息が一つだった。

「・・・わかつた。ま、とりあえずこつちの連れに説明やらなんやらする。そこにいてくれればいい。ま、少々場所を動いてもらうことになつたりするかもしれないがな」

「それくらいはいいわよ。ありがとう」

そのまま、万はコンソールのそばに歩み寄った。そこには、例の量子変換ボックスがいくつつか、色分けして置いてあった。そのうちの青いボックスを、万は手に取った。

「さて、と。会長、使うのでそこどいてもらえますか？あと、セシリアはこっちに」

呼ばれたセシリアは、万の横に立った。そのまま、コンソールを操作しながら万は前を見ながら言った。

「そのハンガーに、ティアーズを展開してくれ。君はそのまま戻ってきてほしい。説明したいから」

「あ、はい」

言われるがままにティアーズを展開してそのまま戻ってくると、コンソールには例の青いボックスが接続されていた。

「今からやるのは追加武装のダウンロードだ。順番に呼ぶから、俺の言うとおりにしてくれ。じゃねえと、うまくできないかもしれない。つっても、紅椿と白式に関しては、追加領域ないんで無し。ないものはどうしようもないからな。」

さて、ティアーズへのダウンロードの中身としては——

そういつて別のキーボードを片手で操作し、別のディスプレイにウィンドウがいくつが表示された。

「実弾銃、ピストル系多機能射撃武器、多機能ビット、あとは……あーくそ、やっぱ足

りないか」

「どうしましたの?」

「拡張領域パススロットが足りない。心配すんな、裏ワザがある。あと一つは追加のスラスターなんだが・・・こいつはちと待ってくれ。3分、いや2分で終わる」

そういつてその追加スラスターと思われる物のみを実体化させると、左手を軽くかざした。そのまま、キーボードを右手一本で操作し、少しすると、そのパーツを能力でティーズのそばに置いた。それからさらに少し操作をすると、ブルーティーズに少しのスラスターが装備された。

「さて、もう大丈夫だ。で、足りない装備なんだが、ボックスに入ってる。普通の装備が入っているフォルダではなく違うフォルダを開くイメージでやればいけるはずだ。ま、その辺は慣れだな。ちゃんと訓練すれば一週間もすれば慣れるだろ。一つ一つの武装が多くの役割を果たしていることが多いが、その辺はあんたなら扱いきれると踏んでの判断だ。これ、追加された武装の説明書。わからんことがあればまた教えてくれ。」

さて、次は凰だ。同じように甲龍を展開させてくれ」

万がそういうと、待機状態に戻したセシリアと入れ替わる形で凰が自信の専用機である甲龍を展開した。その間に、万は臍脂ともとれる、濃い赤色のボックスを手にして、先程と同じように機器と接続した。

「OK。んじや追加武装のダウンロードを始めるぞ。

こっちの中身としては——」

そういつて、また片手をもうひとつのキーボードに走らせる。すぐに、ディスプレイにいくつかウインドウが表示された。

「ビット型追加スラスター兼装甲、レールカノンなど大砲系が数本、多機能小銃、あと光学兵器をいくつか、つてどこか。全体的に燃費が悪いから気をつけてくれ。・・・あくそ、やっぱり足りない」

「だから、そういうときどうしてるのよ？その裏技つて何!？」

それなり以上に苛立った様子で言う風に、万はコンソールを弄りながら冷静に答える。

「考えたことないか？普通のポケットとかの中に四次元ポケット入れたらどうなるのか、つて。ま、四次元ポケットじゃなくても中に入る量と全体の体積が逆転してるやつなら何でもいいんだけど。似たようなこと試してみたら、意外なことにバグのひとつも起こらず、きつちり両方とも機能してくれてな。」

ま、つまるところ、だ。ISの量子変換を利用して、ボックスを量子変換させた。その中の情報量は変わらないはずだから、何でできたのかは成功した俺にとつても謎なんだけどさ。

あ、箱の中身を取り出すときはわざわざボックス取り出さなくても大丈夫。さっきもちらつと言ったけど、違うフォルダから取り出すような感覚。ま、基本的にはきつちりイメージしてやればいい。武器に関しては、ボックスをイメージして一回ボックスを出してやって、ボックスの“全収納物取り出し”ボタンで一回出しちまえば見れる。ただし、この作業はアリーナかここでやれよ。周囲に迷惑だ。

・・・つと、終わつたようだな。次はデユノア、あんただ。やることは分かつてるだろうから説明はせんぞ」

同じようにシャルロットがハンガーに自身の専用機を展開したのを確認すると、同じようにコンソールを操作しだした。

「追加するラインナップとしては、追加スラストアーにワイヤーブレード、レーザー兵器が数種、つてところだ。あんたが一番苦労したぞ、武装考えるの。いろいろ持つてるし。ま、その代わりちよつといじりたいんだけど、いい?」

「・・・いいけど、何するの?」

「何、ちよつとCPUを改良して出力の特性やらを変えるだけだ。と言つても、できるだけ同じように使えるように配慮するから、その辺は安心してくれ」

「というか、そうじゃないと困るんだけど・・・」

「そーだよなあ・・・お、追加武装のダウンロードは終わつたな。んじや、ポコポコポコつ

と・・・」

妙な擬音を口にしながら明らかにその擬音には似合わぬ、某百裂拳かと思まがうようなタイプ速度で一気にコンソールを操作していく。その間、いくつもの画面が立て続けに表示されては消えていく。

「・・・え・・・」

その光景を見ていた楯無が驚きのあまりしばし絶句した。簪も、その隣で言葉を失っている。もともと口数の少ない簪はともかくとして、常に人を食ったような、つかみどころのない楯無が絶句するという光景はなかなか新鮮だった。

「どうしたのよ、簪」

様子がおかしいということを察したのか、隣にいた風が聞くと、半ば呆然とした様子で答えた。

「いや、だって・・・。彼、出力特性とか、全部マニュアルでやってる・・・」

「・・・それってどれくらいすごいなの？」

「えっと・・・」

「計り知れないわよ、そんなの」

「言いよどんだ簪に代わり、楯無が答える。

「言うなれば、パソコンの根幹プログラムのエラーチェックや効率化をすべて手動で

行っているようなもの。私だってこんなリスクいな真似しないのに……。こんなことできたら、立派にIS技師名乗れるわよ」

「二応、元IS技師なんですけどね、俺。……さて、終わった。全体的なパワーを上げてあるけど、その分出力特性がややピーキーになったのと、燃費がちよつと悪くなってるから、その辺気を付けてくれ。

んじや、次はラウラだな。あんたもちつとばかし根幹プログラムをいじることになるな。インストールする特性上」

「わかった」

そういつて、今度はラウラが自身の専用機を展開した。それを確認して、また高速で万がコンソールを操作しだした。そのまま、顔だけを——より正確には目線だけを別ディスプレイに向けた。それから少しして、先ほどと同じような光景が出現した。

「お、できた。やってみればできるもんだな。つと、そんなのはどうでもいいか。追加武装はスラスタがほとんど。あと、短剣が二本と、ガトリングに、超高出力レーザーカノン。レーザーカノンについては連射不可だからな。注意してくれ。

んでもつて、ちよいと面倒なことをするから、こつちでだいぶ時間が食われると思う」

「面倒なこと？」

「具体的には、拡張領域パススロットの追加、基本パッケージの変更、つてどこか。あと、できれば機

動力上昇をできればやりたいけど……。こっちはまあ、できればいいな、つてところ。でも、そうすると処理限界いっぱいになるかもしれないからなあ……。ま、その辺は様子を見ながら、だな」

「処理限界……？」

「ISつてのはパイロットの思考によつて操作される。ということとは、まあ、ある程度機体のスペックにも影響はされるが、最終的に処理の判断を行うのはパイロット自身、もつといえはその脳だ。その脳を補助機能として、主となる演算は機体自身が行つている。パソコンでも、一気に多数の処理を行えば動作が重たくなったり落ちたりするように、ISの機体にも能力低下が起こる可能性があるんだよ。戦場のど真ん中でそんなことが起こつてみる、文字通り命取りだ。だから、だいぶ安全設計になるようにしてあるんだよ。あ、ちなみにここまでやった3人に関しては問題ないから。全部の武装を同時展開して射出とか、そういう無茶苦茶やんなければ大丈夫。

おし、ダウンロード完了。んじゃ、いっちょやりますか！」

そういつて高速でコンソールを操作する。今度は、二つのディスプレイにまったく違うと素人目にわかるような内容が表示されている。が、その二つを難なく、持ち前の高速操作で処理していた。先ほどの技術について飛び出した超人的な技術に、周囲は今度こそ息をのんだ。

「・・・敵じゃなくてよかった」

「それはこつちもだよ」

思わず一夏が漏らしたつぶやきに、同じようにつぶやきで返す。その言葉には、今までであった余裕が消えていた。

「・・・よつし、終了!・・・っだー、なんでこんな面倒くさいプロテクト使ってるんだよあれか機密の漏えい防止ってかななことしなくてもパツと見どれが待機状態なのかわからないから奪いにくる輩とかいないしそもそもこれの所有者なら並大抵の刺客なら返り討ちだしそれに奪えるくらいの腕前なら大抵のプロテクトは突破できるってもんだから大して意味もないだろうがあー!」

一息に悪態を長台詞で言い終えると、軽く肩で息をしながらラウラのほうを振り返った。

「うーむ、やっぱり機動力の改善のほうは無理だった。その代わり、基本パッケージについては、今までのレールカノンがなくなつて、今回新しく取り付けたスラストアーツがついてる。レールカノンについてはほかの武装と同じく、量子変換した状態で格納されている。イメージすれば今まで通り出てくるはずだ。パンツァー・カノーニアについては、ボイスコマンドで「ツヴァイ・カノーニア」で二本の砲身が出てくるし、「パンツァー」で防御シールドが出てくるように一応設定されてるけど、ま、慣れれば思考で一瞬だ

な。その辺は、まあ、ラウラならどうにでもなるだろう。

よし、んじやとりあえず最後、簪」

その言葉を聞いて、簪が打鉄式式を展開した。それを確認して、さらりとコンソールを操作する。

「追加される武装としては——」

そこまで言うのと、ひとりでに別ウインドウが動き出した。

「——複合実体シールドをメインに、チャフとフレアのそれぞれの発生装置。あとは、ハイパーセンサーの高感度化にステルス、つてところだな。複合実態シールドのほうは——」

そういうと、再びウインドウが多数出現する。

「——シールドっていうより、どつちかっていうと飛び道具的な意味合いが強い。盾として、つていうより、それに内蔵されてるガトリングのほうが怖いかな。口径もでかければ威力も大きい。その代わり、こいつを使うとどうしても動きが重くなるのと、長時間ばらまけば、その閉鎖的な構造上排熱がうまくいかなくなつて破損する可能性も高い。理論上だと限界は3分つてなつてるけど、できれば半分以下が望ましい。冷却にはそれなり以上に時間がかかるし。ま、とにかく、前線指揮機つていうのをコンセプトにしたからな。ラウラだけだと万が一に対処ができない。となると、次に向くのは簪か

な、と。ま、余計なお世話かもしれないが、あつて損はないはずだ」

そういういつつあと少しコンソールを操作するとゆっくりと振り向いた。

「さて、これで追加武装のダウンロードは終了。理論上はすぐ使えるはずだ。とりあえず、使いづらかったりしたらデータとともに俺に持ってきてくれ。できる範囲で改善の努力はする。

とりあえず、見せたいものつてのは以上。

一応言っておくが、これから使いにはかかるなよ」

「かかれないわよ。もう疲れたし」

「それもそうだな。いろいろありすぎた。・・・先生、明日、俺らは休日でしたよね？」

「明日あさつては土日の振替で休みだ」

「なら寝させてもらいますか。んじゃ、俺は部屋に戻ります。お前らもしっかり休めよ」

そんなのんきな声を残し整備室を去ろうとする方を、背後から千冬が呼び止めた。

「待て、黒川。更識妹の機体に乗せた武装は、明らかにアラスカ条約違反だ。教育者として、それを見過ごすわけにはいかない」

「そりやそうですよね。チャフもフレアも立派に兵器ですから。

・・・で、どうするんです？俺を拘束でもしますか？」

「最悪、そうせざるを得んだろう」

その言葉に方は軽く眉を上げた。

「だが、本当に大群がここに押し寄せてきたら・・・」

「防衛力としてISを起動せざるを得ない。そうなれば、アラスカ条約は形骸化する」

「その通りだ。だから、今はお前を拘束しない。お前の在学中までにもし襲撃がなかったら・・・」

「わかっていますよ。あと、俺に関してはどうなろうと俺は文句言うつもりはありませんので。じゃ、失礼します」

そういつて片手をひらひらと振りながら、今度こそ整備室を後にする方に、生徒全員が呆気にとられていた。

こうして、長い、本当に長い一日が終わりを告げた。

35. 一夜明けて

万は少くない疲れを感じながら自室に戻り、ベッドに倒れこんだ。今日だけで少ない数の体晶を使っている。自分が思っている以上に脳はポロポロだろう。体のほうも少なからず負担がかかっていることはわかっている。だが、こちらもダメージは大きいだろう。

(こりや、やばいかな。過去にもあれの使いすぎで廃人コースっていうこともあったらしいし。いい加減セーブしねえと)

手を天井に向けて広げ、もう一度閉じる。体のほうは大きなけがもなさそうだ。これなら、しばらく休めば今まで通りだろう。脳も、しばらく能力を封印すれば問題はないだろう。不便ではあるが、我慢しなければならぬだろう。

(せめて、最後の力だけでも、残しておかないとな)

とりあえず、今日のところはもう寝よう。一にも二にも、今必要なのは休息だ。そう思つて、能力で自身の脳波を操作せずに、ただ眼を閉じた。幸いなことに——といつても当然といえれば当然だが——、疲れがたまっていたらしく、そのまますぐに眠りに落ちた。

次の日の朝、目が覚めると人の気配がした。慌てずに寝返りを打つように空となつて
いるはずのベッドに体を向け薄目を開ける。そこには、庵がすやすやと寝息を立ててい
た。自身の経験上、ここ以外に特に音がな以上、人の気配は彼女で間違いないだろう。
そう判断すると、静かに身を起して、そのままセイリユウの待機状態である眼鏡をつけ
た（なお、アイギスの待機状態である腕時計は、寝ている間はずつつけたままである）。
時間を確認すると、10分ほど遅れてはいるものの概ねいつも通りといった時間だつ
た。なおもぐつすりといった様子子の庵を起こさないように静かに身支度を整えている
と、部屋の机の上に置手紙が置いてあることに気付いた。これまた静かに手を取ると、静
かに黙読した。

さて、これを読んでいるということは目を覚ました、ということだろう。
まず、いくつか業務連絡だ。

庵に関してだが、どういう処分になつても文句は言わない、というお前の言葉に甘え
ることにした。もろもろの事情を加味しても飲み込む人間でないといけない。お前が
適任だ、ということと教員一同落ち着いた。なので、お前は庵と同室になつてもらおう。
本来、教師陣の頼むところだが、事態が事態なだけに頼める人間がいなくてな。わかっ

ているとは思うが、拒否権はない。

そして、彼女の身分に関して、IS学園に編入させるということで落ち着いた。もともと、黒騎士もゼフィルスも顔の見分けを付け辛い機体であることもあり、知っている人間などごく一部だろう。クラスは3組だ。あのクラスだけ専用機持ちが編入していなかったからな。

身分としては、一夏の双子の妹、ということになっている。正確には双子ではなく年子なのだが、見た目で判断できる人間など皆無だろう。編入は休暇明けだ。

襲撃に関しては、かなりきな臭い、としか言えない状況だ。今現時点で確証はつかめていないが、それらしい、というようなことはいくつか挙がっているらしい。曰く、ばらばらになった兵器のパーツらしきものが流れてきている、下仕官が妙な動きを見せている、などなど。

こちらに関しては、限りなく黒に近いグレー、としか言えない。

あと、お前のISについては秘匿するというところで教師陣の意見が一致した。以降、有事が発生するまで、あの場にいた全員には守秘義務が発生する。むろんお前もだ。もしこれを破った場合、何が起ころかは保証できん。それだけは覚えておけ。

この手紙は読み終えたら処分しておけ。焼くなり刻むなり好きにしろ。以上。

文面、書体からしてまず間違ひなく千冬のものでらう。彼女の字は数えるほどしか見たことがないが、それだけでも筆跡を覚えるには十分だった。穴のあくほど読み直し、しつかりと内容を反芻すると、灰皿の上で手紙に火をかけた。簡易的とはいえシンクもある部屋だ、水道も無論ある。その水道に手ごろなタオルをしつかり濡らして絞ると、火は下火になっていた。灰皿の上からタオルをかけ、少ししてからとると、紙と少しあつた煙草の吸殻は燃えて灰となつて、火は消えていた。

何はともあれ、寮監室へ来いと言われている以上、行く必要があるだろう。だが、教師である以上、この時間は学校に詰めているはず。昨日の今日ということで、外出届は出さなくてもよく、しかもなおかつ未使用のアーリーナは届け出を出せば使用可能と来ている。普通の生徒は休日ということで各々自由自適に過ごすと思うが、少なくともそうしない人間に数人心当たりがあつた。そう思った方は、静かにIS学園の制服に着替えると、寮監室へと足を向けた。

寮監室の前で、一回身なりを確認する。やましいことなど特にない。だが、あの先生の前ではどうしても背筋が伸びる。問題ないことを確認すると、静かに二回ノックした。

『誰だ?』

「黒川です。お呼びと伺い、参りました」

『わかった。入れ』

「はい、失礼します」

声をかけてドアを開ける。その先には、自身の担任である千冬がいた。

「で、俺に何の用です？　．．．って、聞くまでもないですかね」

「まあな。なら早速だが．．．。アイギスはどうするつもりだ？」

「しばらくの間、存在自体を隠します」

「そういう話ではない。登録はどうするつもりだ？」

「それならもう済ませてあります。もっとも、企業名はともかくとして、開発者その他も

ろもろは、すべて偽造ですけど」

「そうか。では次に、俺のことだ」

「それこそあなた方の問題だ。俺には関与する理由がない」

「いや、これは質問だ．．．なぜ助けた？」

「最初は単なる情報収集ですよ。で、助けた後はただ単に好奇心です。どんな奴なのか、興味がわきまして。それ以上でも以下でもないですよ」

「本当か？」

「本当です」

あくまでも疑り深い千冬に対し、万は人を食ったような笑みで答えた。

「・・・そうか。要件はそれだけだ。下がれ」

「んじや、失礼します」

一言そういつて部屋を出る。背を向けた瞬間に、万の顔はまるでお面のようになつて無表情になつていた。

それから少しして、フリーの射撃レーンに銃声が響いていた。ゆったりと寝そべって遠くの射撃の的をスコープ越しに覗く。少ししてから、何回か連続で大きな射撃音が響いた。長く息をついてから、もう一度スコープを覗いた。

「全弾命中、うち60%以上が中央とは・・・腕を上げましたわね」

「そんなに当たつてねえ。56、7%つてとこだろ・・・。てか、ぬるりと出てくんな、心臓に悪い」

「あら失礼、以降気を付けますわ」

優雅に笑いながら近づいてきたセシリアに対し、静かに言った。

「・・・で？ 何の用だ？」

「わたくしのティアーズの整備をお願いしたいのです。お願いできますか？」

「OK、お安い御用だ。・・・てか、よく俺がここにいるつてわかつたな？」

「決戦の時間が近い、というのに、自分だけ何もしない、というのは、いささか考えにくいと思いましたの。前に万さん、ライフル狙撃が苦手だとおっしゃっていましたが、それを克服しようとしてここに来た。違いました?」

「違わねえな。まったく、慧眼恐れ入るよ」

軽く笑いながら、万はライフルを軽く担いで出口に向かった。

その後、整備室に入った二人は、展開されたティアーズを前に立っていた。

「具体的にどんな感じなんだ? 全体的に武装とかがしつくりきてない感じか?」

「いえ、むしろ武装は複雑な作りなのに使いやすく、驚いていますわ。しかし、スラスタアのほうがどうしてもピーキーすぎる印象がありますわ・・・」

「あー、OK。つっても、たぶんたいした違いは出ないぞ。それでもいいか?」

「構いませんわ」

「OK、んじやはじめるか」

そのままパタパタとコンソールを操作し始めた。まもなくして、万の顔が目に見えて渋くなった。

「あっちゃー、こりや使いにくいわ。訂正、これ意外と変わるかも」

「と、いいいますと?」

「一番ピークパワーが出る代わりにとんでもなくピーキーになってた。こんなの初見じゃ誰でも手を焼く。ある程度最大パワーを犠牲にしても出力特性がマイルドになるようなセットに仕上げるから、これでなんか変なところがあつたら教えてくれ」

「ありがとうございます」

「いいって、これに関しては俺のセッティングミスだし。幸いなことに履歴とかも残ってるから、それに近い形になってくれればいいな、ってとこ。ほかに要望があればできるだけやってみるけど、ある？」

「できれば、で構いませんが、ロールの速度を上げてもらえるとありがたいのですが……」
「OK、了解。ちょい待ちな、すぐ終わるから」

そういつてさらに追加でコンソールを操作すると、ゆつくりとスクロールする画面を凝視し、やがて満足げにほほ笑んだ。

「よし、これでOK。また調整が必要なら連絡くれ。あ、それと、俺はしばらくここにいるから、誰かが捜してたらそう言ってくれ」

「ありがとうございます。覚えておきますわ」

「おう、んじゃ」

お礼を言うや否やすぐ走っていくセシリアの後姿を見ながら、万はすと顔を引き締めた。昨日の今日ということで、整備を必要とする人間が大量に出てくるだろう。どちら

にせよ、ああいった手前、しばらくはここにいなくてはならない。ならば、その間に少しやれることをやっておこう。そう思い、見かけ上封印してあるところにある、展開こそされているもののそれだけの機体に向けて語り掛けた。

「さて、んじややりますか。素直な反応^{レス}を期待してるぜ……銀^{シルバリオ・ゴスベル}の福音」
 そういつつ、さらりと仮想ディスプレイを叩き、数値等の整理を始めた。

予想に違わず駆け込んできた専用機もちのそれぞれの要望に応えながら、ほとんど片手間ではあるが、万は銀^{シルバリオ・ゴスベル}の福音の復旧作業を完遂した。といっても、あれからこれだけの時間がたてば、さすがに自己修復能力でほとんどが修復されていたため、万が手を加えたのは、実質散らばっていた数値の整理と合理化、それと追加武装をいくつかインストールしただけであった。追加武装といっても、セイリユウで得たデータを基に、自身のアイギスに載せる予定だったプロトタイプで、こちらも片手間に過ぎなかった。

「あとは、パイロットがどういう反応をするか、だな」

そう思つて、この事態を想定してあらかじめ用意しておいた書置きをコンソールの前に置き、万は整備室を出た。

「……で、私の前に来たということとは、つまりはそういうことというわけね？」

「ええ、そういうこと、です」

日数にすればほんの数日のはずなのだが、どこか相当久しぶりのように感じる学校に行き、直接職員室に行った方は、そのまますすぐナターシャのもとへと向かっていった。

「俺の使っている整備室にあります。いつでも大丈夫です」

「わかったわ、ありがとうね。そうね・・・今晚20時、アリーナを使えるようにしておくということでもいいかしら？」

「分かりました。んじゃ、今日の20時、整備室で」

一例をしてから、くるりとその場で回って去っていく。そのまま職員室を出ていく。その姿からは、ひたすらに何も読み取れなかった。

そして、その後、夜。約束通り整備室を訪れたナターシャを招き入れた方は、奥に鎮座する福音にかかっていたカバーをばさりと取り除いた。そこには、新品かと思紛うような輝きを持った福音がいた。その輝きにか、しばらく見とれていたナターシャが、やがて静かに漏らした。

「ありがとう。もう、大丈夫そう」

「わかるのか？」

「言ったでしょ。私は、物の記憶を読み取ることができる。だからわかるの。この子が、もう大丈夫だって、いつでも飛べる、って言ってる。・・・アリーナの使用許可は取っているわ。お願いできる?」

「元からそのつもりです。念のため細かいセットアップを行いますんで、乗ってください」

そういわれると、ゆつくりと福音に腰かけた。その横のコンソールを高速で操作し、多少なりとも変化のあつた体に機体を馴染ませる。

「よし、これで一次移行は完了です。^{フリーストソフト} 続いて、飛行準備に入ります。操縦者は、垂直カタパルト申請をお願いします」

あくまで事務的な態度でコンソールを操作しながら言う。すると、すぐにモニターが切り替わる。

「システムチェック開始。射出時刻、20秒後に設定。パワーユニット、問題なし。上部開口、問題なし、あと5秒で全開。コースチェック、問題なし。計測機器チェック、計測された値は誤差範囲内、問題なしと推定。システム、オールグリーン。

カウントダウン、5、4、3、2、1、ゼロ!」

最後の一声とともに、^{シルバリオ・ゴスベル} 銀の福音は轟音とともに空へと舞い上がった。髪が後ろへとなぶられる感覚が収まると、万は自身の能力で開口部からアリーナに立った。そこか

ら、リンクをあらかじめつないでおいたセイリユウのディスプレイに表示された数値群を見る。

「数値としては、これで予想の範囲内です。コントロール性などに難があるのなら何なりとおっしゃって下さい」

『全く問題ないわ。．．．それにしても、不思議ね』

「それはよかった。．．．何がです?」

『飛べなかつた時間は短かつたはずなのに、こうして飛んでみると久しぶりに飛んでいるかのよう．．．。心が洗われる気分だわ』

「そりゃよかつたです。最近、俺は空飛んでばつかつたんで、そういう感覚はなくなつてきているんですけど」

『あら、そうなの? でも、わかる気はするわね』

「ま、俺はあくまで『技師』のほうが強いですけど。で、細かなフィーリングはOKですか?」

『大満足よ。で、もうひとつのお願いは大丈夫なのよね?』

「ええ。そちらが大丈夫なら早速はじめますけど、どうします?」

『なら、お願いしましょうか』

「OK、了解です。んじゃ、いきますよ」

そういうと、そばにあった端末を一気に繰る。すると、大量の仮想ターゲットが表示させる。

「武装は通常通り拡張領域にありますんで、量産機と同じ要領で取り出せるはずですよ。無論、銀の鐘シルバークロウも実装済みです。いつでもいけます」

『わかったわ』

そういうと、手始めに大量に展開されていたのを一気に銀の鐘シルバークロウで一気に破壊する。この武装の特性上、納得のいく話ではあるが、実際に目にしてみると壮観だ。

「さっすが広域殲滅特殊武装……。ま、この程度は想定範囲内ですかね。出力の上昇度合いも想定範囲内です。使用フイリングはどうですか？」

『全く問題ないわ。次は追加武装のテストでもいい？』

「むしろそれは俺が聞くことなんですが……。ま、些末なことは気にしないで行きましようか。テストのほうはいいですよ。新しくの出します」

さらに端末を操作。すると、また大量の的が出現する。

「頼まれていた武装はとりあえず一通り搭載しておきました。搭載した武装内容を送信します」

そういつて、今度はセイリユウの仮想ディスプレイを操作する。一瞬でいくつかのテキストファイルが福音に転送された。

「とりあえず、今乗ってるのは以上です。なんか質問等あれば答えられる範囲で答えませんが」

『特にないわ。・・・というか、よくこんなに用意できたわね?』

「俺を誰だと思ってるんですか? 睡眠なんて、数日のうちに固めてとればその前は寝ずに3、4日くらいはいけますし。ま、そんなのはどうでもいいや。とりあえず、計測機器は問題ないですから、さっさと始めてください」

『了解』

そういつてその手の中に現れたライフルを構えて的を次々に打ち抜いていく。その光景を、万はモニターと見比べながら見ていた。

ひとしきり飛行を終えて、ナターシャはふわりと万の前に飛んできてISを解除した。と同時に開口一番呆れた口調で言った。

「まったく、本当に人間離れしてるわね、あなたって」

「二応褒め言葉として受け取っておきます。・・・で、どうでした、追加武装のフィードバックは?」

万としては自分が周りに比べてどうかはどうでもいいので、そちらのほうを聞きたかった。技術屋としては、その解答如何によって修正する必要があるからだ。今からな

らデータもある程度は確認しなくても覚えているから、その分作業も効率化できる。

「まったく問題ないわ。しいて言えば、ライフルとSMGのバースト切り替えが慣れないけど……。そんなのは使っていれば慣れるだろうし」

「切り替え、ですか……。つまみの位置ってことですか？」

「そうね、そうとらえてもらって構わないわ。前使っていたものと少し位置が違うから、それで、ね。でも修正とかは必要ないわよ」

「……。そこまで言うのなら、そのままにしておきますが……。本当に大丈夫ですか？
今なら、細かいブラッシュアップでもすぐに終わりますが」

「大丈夫よ」

「分かりました。その前に、整備室によってもらえますか？ 念のため、今のテストフライトによる機体への影響と、細かい調整を行いますんで」

「了解。頼りにしてるわ」

ほほ笑みながら肩を一つたたくと、そのまま二人は整備室へと歩く。その間、細かい話は一切しなかった。というのも、万はセイリユウに先ほどのデータを流しながら歩いてきたため、話しかけることができなかつたのだ。仮に話しかけていても、まともな返答は期待できなかつただろう。それは、隣を歩いてきたナターシャもよくわかつた。

整備室に入ると、万はコンソールの前に立って準備を شدした。それを見て、ナターシャもハンガーに福音を展開する。展開が完了したのをちらりと見ると、万は再びコンソールを操作しだした。

（元ＩＳ技師だつていうけど、こんなレベルまづいらないわよ……。学園都市の超能力者とは聞いていたけれど、彼、いったい何者・・・？）

そのコンソールを操作するスピード、次から次へと目まぐるしく映る画面を確認する能力、さらにそれを分析して意味のあるものにする理解力。どれも、並みのＩＳ技師ではなしえない芸当だ。それを、目の前にいる青年はさらりとやってのけている。そのことに、少なくとも驚きを覚えた。

「気になるんならこっちきたらどうだ？」

その操作風景を一心に見ていたナターシャは、その万の声が発せられたことであろうやく部屋に誰かが入ってきたことに気付いた。そこには、楯無姉妹に連れられた庵がいた。

「あら、なんで私たちがいるってわかったのかしら。あなた、一度も後ろ振りむいてないのよ」

「メガネのレンズに反射したんだよ。これだからメガネってのは便利なんだよ。で、何の用だ、生徒会長」

「別に、用つてほどのものでもないわよ。庵ちゃんに、この学園案内してただけ。どうしても、夜に案内したほうが都合がいいからね」

「あんたが楽しみたいだけなんじゃねえのか」

珍しく(?) 殊勝な理由に、万が混ぜつ返す。その返答はすぐに飛んできた。

「失敬な、そんなわけないじゃない。私はただ、善意で・・・」

「え、違うの?」

直後、ドサツという音。大方、簪の一言が止めとなつたのだろう。

「ま、そんなのはどうでもいい。で、どうしたんだ?」

「庵ちゃんが、あなたのもとへ連れてつてくれ、つて。ここ最近、連続で整備室に詰めたから、ここかな、つて」

「あー、そういうこと。悪い、見ての通りこっちは取り込んでから、用事があるなら後にしてほしいんだが」

「終わるまで待つている。それに、私もここでの用だから、特に問題はない」

「あつそ。なら少し待つて。・・・と、とりあえず調整終了です。少々出力特性が変わっています。・・・ま、本当に若干変わった程度なんで、問題ないと思います。この程度なら、使つて数分で慣れるでしょう」

「わかつたわ。ありがとう」

「いえいえ、飛んでる最中に機体の不調で落ちた、とかなったら、シャレになりませんか
ら」

「それでも、よ。じゃ、私は退散するわね」

「はい」

そんなやり取りの後、彼女は整備室を出ていった。その背を見送ってから、万は正面から庵を見据えた。

「で、どうしたんだ、庵さんよ」

その優しげな口調とは違い、その眼は相当以上に鋭かった。

36. 万と庵

「そういえば、まだお互い名乗っていなかったな。黒川万だ。よろしく」

口元には笑みすら伺える、柔らかな表面とは裏腹に、その眼だけはまるで射抜くように鋭かった。妙な動きをしたら即座に実力行使をするつもりだろう、というのは、深く考えなくてもすぐわかった。

「改めて、織斑庵だ。」

疚しい考えは一切ない。安心してくれ」

「悪いが今はその言葉に素直に頷くわけにはいかないってのが建前ってやつだ。俺らは、両方ともスクールとのチャンネルを持つてる。疑われるのがわかりきっている以上、表面上だけでも、お互いがお互いを牽制しあうのが双方にとってベストなんだ。俺個人としては、あんたのことは信用したい。けど、それとこれとは別問題だ。・・・悪いな。」

「・・・で、何の用だ？」

「私の機体にも、手を入れてはくれまいか？」

「あー、ま、良くも悪くも目立ちすぎたからなあ、おたくの機体・・・。」

で、具体的には？塗装？追加武装？それとも全体的なブラッシュアップ？」

「・・・そのすべてをできる範囲で、というのはいらないだろうか？」

それぞれの要求の目的は、この上なくわかりやすいものだ。塗装に関しては、学年全体に対して、一度は完全に敵対したことに対するもの。追加武装や全体的なブラッシュアップについては、純粋な戦力強化だろう。

だが、その言葉に方は思わず渋い顔をした。いくら彼の作業効率が少々かじった程度の人間では何をしているかわからないレベルとはいえ、

「・・・無茶ぶりにもほどがあるだろう」

さすがにこの要求すべてを満たすとすると、不可能の一言に尽きる。

「・・・すまない、無理ならどの範囲ができるのか教えてほしい」

もつとも、庵のほうもさすがに要求がすべて通るとは思っていなかったのか、しおらしく言ってきた。

「まず、武装は無理。あんたの戦闘スタイルとか、どんな得物を使ってきて、得意としているか。BT適正値。そもそも、黒騎士に積まれている武装。それらすべてがわからない以上、時間がかかりすぎる。どう見積もっても、一週間やそこらで済むもんじゃない」
そこまで言い切ったところで、庵の肩が目に見えて落ちる。

「まったく、俺は武装は”は”って言ったろうが。それ以外はどうにかなるぞ、たぶん。そ

ここまで時間かからないし。ただ、そのためにはあんたの希望を少なからず聞く必要があるけど」

カバツと擬音がつくような勢いで上がった庵の顔は、アニメならキラキラというエフェクトが間違いなくかかっているだろう状態になっていた。

(わかりやすつ)「……まあ、だからとりあえず専用機をここに展開してくれ。ああ、もち、点検状態にしてな」

思わず喉まで出かかった本音は腹の中に押し込めてどうにかした。この数日間何度使ったかわからないコンソールの前に立ち、準備。専用機の展開を確認すると、万はコンソールを操作しだした。

まずは基本的なデータの確認。それをしないことには何も始まらない。しかし、万が目にしたのは、今まで経験したことのない数列パターンだった。

(白式と紅椿は見たことないけど、第三世代にも、第二世代にも見れないパターンだ。なんだこれ。いったいどういう法則がある?)

今までとは違うその構成に、思わず食い入るように画面を凝視する。多様性という点において、level15クラスとされる能力の演算を可能とする頭脳がフル回転する。その思考から、ある一つの可能性が浮かび上がる。

「……まさか——」

一言つぶやくと、一気にコンソールを操作する。今までに得られた情報から推測された、まず信じがたい一つの可能性。

「・・・うっそ、だろ・・・マジか・・・」

この機体名は、黒騎士。

世界的に有名なＩＳで、今日の発端となった機体名は、白騎士。

白と黒。古くから対とみなされることの多い二つ。

これらが表わすもの。

それは、この上なくシンプルなものだった。

「・・・これだけハイスペックで、第一世代だと・・・。いったい何の冗談だ、おいコラ」
目の前に表わされた、あまりに非情で、信じがたい事実には、思わず方は片手で前髪掻き上げた。しかし、目の前の情報は、ただただ真実だ。受け止めなければならぬとわかっていても、そうそう簡単に呑み込めるようなものではなかった。

あれだけ必死になって、いかに効率よく、より強力に、より早く動かせられるか。それのみを追求していた。それは、その環境に身を置いてきた自分が、誰よりも身に染みてわかつている。その結晶が、代表候補生の専用機だろう。パイロットも、そこらの人間ではない。勝つことを想定し、訓練し、鍛錬を積んできた人間たちだ。

この機体は、その尽くを軽く一蹴できるであろうことは、戦った万自身よくわかって

いた。まさにそれができる機体が、今ではほとんど引退している、老骨、アンティークと呼ばれる類のものであったなど、そうそう簡単に受け止められるものではなかった。

だが、万にはおおよその理由がわかっていった。

「第一世代つてのは、今の世代とは大きく違い、兵器としてISを大成させようとしたもの。今のものは、あくまで平和的利用を前提としたもの。その部分は、小さいようで、とてもつもなくでかい。

真つ向のタイマンになったら、あくまで兵器であり兵士である人間の前に、安全な競技者が勝てる道理はない、か……。

……理屈じゃ納得がいくが、煮え切らんな」

今現行で開発されているISを、改造されたエアガンだとすると、このISは大口徑の実弾銃。もともと作られた目的が違う。どちらがより実践的か、と聞かれれば、答えは火を見るよりも明らかだろう。

(となると、まずは……)

「どうした？」

明らかに様子がおかしい万を、横からひよここと庵がのぞいた。

「……ああ、何でもない。それより、塗装の色とか、特に希望ってあるか？」

「色、か？」

「ああ。表面にトンでも素材を使ってるってわけでもなさそうだし、大抵の塗料は使えらるとみてまず問題なさそうだからな。結構細かい色まで指定しても、適応できるつもりではあるぞ」

「そうか・・・」

「あと、ちよつと飛行テストもしてほしいな。今現在、どういう不満を持っていて、どんな方向への調整をしてほしいのか。そこがわからないといじりようがない」

「データがわからない以上、少しでもデータがほしい。どの数列群が、どのように影響しているのか。それがわからないことには何も始まらない。」

「わかった。なら、飛びながら考える。今から大丈夫か？」

「ちつと待つてな」

「そういつて、コンソールをもう一度操作。一応、一年は振替休日となつてはいるものの、登校そのものは禁止されていないから、アリーナを使用するということに関しては問題ない。あいているアリーナを使うことに關しても、許可があれば使用してよしというだけで、時間で禁止する校則がないことも確認済みだ。——もつとも、本来不文律で常識的な時間にしか使用しないのだが。」

「幸いなことに、この整備室から直通のアリーナは未使用だった。」

「OK、大丈夫。乗つて。カタパルトで発射するから」

一言、そういった。カタパルトのカウントダウンを少し長めにとり、セイリュウと黒騎士のリンクをつなぐ。そこから、右と左に違う映像を投影した。右には、根幹数列群を。左には、出力等の生データを投影する。生データの計器を介さない解析など、今の万には朝飯前だった。また同様に、右と左で別々の情報を表示させてみるというのも慣れたものだ。

庵が登場したことを確認すると、万はコンソールを操作する。特に何事もなく、カタパルトから黒騎士は飛び出した。

「よし、そのまま暫く自由に飛び回ってくれ」

『了解』

計測されたデータと、飛行の軌道、そして根幹プログラム。すべてを並列で思考し、頭の中で一気にまとめあげる。やがて、意味不明な数列は、頭の中で意味のあるものへと変化を遂げていた。

かなり全力で飛行しているらしく、得られたデータはかなりわかりやすいものとなっていた。下手にコントロールされると、数値が流動的になりがちなのだが、全力で飛ぶとそれがほとんどないからだ。それゆえに、思いのほかすぐに用件は終了した。

「もうOKだ。いつでも降りてきて大丈夫だ。なんかやりたいこととかあれば言ってくれ。俺のできる範囲でやる」

『大丈夫だ。戻るところは同じでいいか?』

「問題ないが・・・わかるのか?」

『大体、な』

その言葉とともに、開いていた射出口から垂直に戻ってきた。そのまま、何事もなかったようにかがんで飛び降りる。

「よく戻るところがわかったな?」

「飛び出したポイントと飛んでいる位置の相対関係がわかればこのくらいできるだろう」

「・・・いやいや、あんだだけ全開で飛んでいて、そこまで意識するってかなりの難易度だ
と思うんだが」

「そうか?」

軽く呆れつつ応じる方に、どこか不思議そうに俺は言った。つまるところ、俺は方向感覚がかなりいいのだろう。少なくとも、高速飛行をしつつも、相対位置をほとんど意識せずにあてられる程度には。ならばと、方は腹をくくった。

「一応聞くが、あれって最高速だよな?」

「少なくとも、今現在では、な」

「OK、それだけ分かれば十分。で、あんたが良ければ、少々じゃじゃ馬になっても最高

速を底上げすることはできない。けど、正直言つて、この機体は、これ以上劇的な改良は望めないと思う。少なくとも、俺の腕では無理だ」

「それは、どうしてだ？」

「根幹プログラムにしても、それぞれの末端プログラムにしてもそうなんだが、とことん効率化が図られているんだ。一技術者としては、こつちが勉強になるような使い方はかたまりだ。これほどまでとは正直思つてなかつた。知らず知らずのうちに、俺は思い上がつていたらしい。いやはや、何事にも上には上がいるな」

万の言は決して誇張ではなく、本心からのものだった。

「もつとも、これに対応できるあんたもあんただがな」

「そうか？」

「人間つてのは、意識してから行動するまで、ほんの少しタイムラグが存在する。個人差はあるが、大体平均で0.2秒つてとこだったかな。だから、普通の機体はその分を考慮して作動するまでにわずかな時間を設けるようにしてある。だけど、こいつにはそれがない。」

確かに、理論上こつちのほうが最高速、そして反応速度において高い数値を得ることができる。だけど、少なくとも俺はこうはしない。ちよつとでも大きくミスるとそれだけで大きく機体バランスを崩すことになりかねないからな。

と、まあ、長いこと言ったわけなんだが・・・要約すると、これは、最高速、および作動速度において大きなアドバンテージを得ることができる。だけど、同時にほんのわずかなことで変化が起きてしまうということでもある。安定性を欠く代わりに、何よりも早い反応速度を得、最高速にもブーストをかけた、つてとこか。そういう、ある種ピーキーな機体を安定して稼働させるってことは、十分すごいと思うぞ」

こればかりは、万も驚いた。最初、根幹プログラム群を見て戸惑ったのは、このプログラムのいわば“遊び”の部分になかったのと、第三代には必ずあるオートクチュールの部分を完全に機動のほうに使っていたことによるものだった。それさえなければ、あまりにもきれいなプログラムに、ある種の感動すら覚えたものだ。

「ならば、ブラッシュアップのほうはいい。現状、特に不満もないしな」

「OK。で、色のほうは決まったか？」

「大体は。銀色、というのは可能か？」

「OK、銀色ね。それは全体的に？それとも飾りでほかの色も入れる？」

「飾りでほかの色も入れれるのなら、ほしい」

「OK、んじや飾りの色も入れる方針でいくか。ちょっと待ってな」

そういつて今度はコンソールではなくパソコンを操作しだした。それからしばらく、タッチパネルを操作すると、やがて振り向いた。

「さてと、こんな感じで草案としたんだが、どうかな？」

その声に反応して庵が横から画面を覗く。そこには、3DCADで製作されたと思われる、黒騎士が映し出されていた。そのカラーリングは、銀色をベースに、ところどころ黒や赤のラインが入っていた。

「ま、銀色ベースって言うから、こんなとこかな、って思ったんだけど・・・かなりこれだと雑だし。もうちよつと要求とかあれば、可能な限り反映させるけど」

「いや、基本はこのままでいい。というか、むしろこれをそのまま反映させるというのは可能だろうか？」

「いやまあ、不可能ではないけど・・・いいのか？こんな即興で作ったようなやつで。しかも、俺結構その手のセンス無いほうだぞ、自分で言うのもなんだけど」

「それを言ったら、私などそういつたことに頓着したことなどない。どっちもどっちだろう」

思いのほか、庵が食いついてきたことに驚きながら、方は画面を見つめた。

「・・・わかった。そこまで言うんなら、このまま反映させる。幸いなことに、塗料もここにあるし・・・ま、どうにでもなるだろ。ま、そんなのはどうでもいいとして」

そこでいったん言葉を区切ると、パソコンの画面に目を落とした。

「これじゃ、『黒騎士』とは呼べねえよなあ・・・どこが『黒』だよってなるし」

「……言われてみれば、確かにそうだな」

今まで気づいてなかったのかよ、というツツコミは心の中にしまつて、万は二の句を継いだ。

「ま、とにかく、新しい名前が必要だな……。どうする？」

「どうする、とは？」

「こいつはあんたの機体だ。何か希望があれば承るぜ？」

その言葉に、暫く庵は考えていたが、やがて困つたような表情をした。

「といつても、特にこれという名前は……。しいていえば、『マドカ』というのが思い浮かびはしたが……。』

「亡国企業連中にはモロバレだし、そこから情報が漏れるとも限らんな」

「やはり、そうだよな……。』

おそらく唯一浮かんだ名前も、万にはつさり斬つて捨てられ、庵はがくりと肩を落とした。その反応を見て、万はばつが悪そうに頭を搔いた。

「あー、その、なんだ。希望がなかったら、俺が決めるが……。無論、最終的な決定はお前に任せるけど」

「ああ、頼む」

こればかりは、彼女を責めることはできなかつた。おそらく、組織として最低限の知

識しか与えられていなかったのだろう。仮に自分に刃が向いたとしても、たやすくその価値観を歪められるように。その意図と、それを一瞬で読めた自分に嫌気がさした。

だが、それでも思考は止めない。そのまま、頭の中でデータベースを繰る。少しして、名が少しずつ思い浮かんだ。

「ランスロット関連かな、やつぱ。その辺が思い浮かぶし、何よりしつくりくる」

「何なのだ、それは。槍か何かか？」

「ランスじゃない。人名だ。アーサー王伝説における円卓の騎士の一人で、その中では随一の芸達者な人間だ。あんたは、俺が白兵戦で勝てる自信がない、数少ない相手だからな。ぴったりかな、と。どうかかな？」

「構わない。そのあたりに、私は疎いからな」

「OK。でも、ランスロットって直接名づけるのは気が引けるから、そうだな・・・レイクナイト、なんてどうだ？」

「ずいぶんと変わったな」

「まあね。ランスロットは湖の騎士って呼ばれていたから、そのまま横文字にただけだけど、どう？」

「どう、と言われても・・・。ただ、湖の騎士というのは、この機体に合う気がする。なんとなく、だがな」

振り返って自身の機体を仰ぎ見て、優しく微笑む庵の目を見て、万はふつとどこか来るものがあつた。その時の方にはそれが何かわからず、すぐに頭の中のスイッチを切り替えた。

「さて、さつさと塗装やつちまうか。離れてな、念のため」

そういうと、どこからともなく塗料を取り出した。それを近くの機械にセットし少し操作をすると、その足でコンソールを操作し、すぐさまその場を離れた。

「さて、と。塗装開始、つと」

すると、その機械が動き出し、やがて塗装が始まった。やがて機械が動き出し、塗装をしていく。念のため離れておけ、と言つた方の言葉を裏付けるように、塗料を撒き散らしながら下地が一気に塗られていく。下地が終わると、先ほどまでの塗り方とは打つて変わつて慎重になつたかのようにゆっくりと塗っていく。そんなことが暫く続き、機械の稼働が終わつたころには、まるで先ほどの画面から飛び出してきたかのような、黒騎士改めレイクナイトが佇んでいた。その輝きには、隠し切れない高貴さがあふれていた。

「・・・綺麗だな」

思わず、そんな言葉が万の口から出た。意識せずとも口からこぼれた一言だつた。

「・・・そう、だな。礼を言う」

「いいって。俺のほうも、これを見て大満足だし。・・・さて、ちょっと待つてな、すぐ終わる」

それからさつきとコンソールを操作し、1分経つか経たないといったタイミングでその操作を終えた。

「よし、これで登録も終了。これで大丈夫。念のため、暫くここで放つておく必要があるけど、そんだけ。とくに問題なし」

「暫く放つておくのは何か意味があるのか?」

「学園都市の特殊塗料を使ったからそんなことはないとは思うけど・・・念のため、塗料が乾くまでの時間。たぶん、5分も置いておけばどうにかなるんじゃない?」

「わかった、5分だな」

「ん。それと、無断で飛ばないことな。飛ぶんだったら、誰か先生か、俺か、まあとにかく一声かけること。OK?」

「わかった」

「よし、んじや、今日はこれまで、だな。ほかにも用件があれば話は別だけど」

「ならば、部屋について少々取り決めをしたいのだが」

「あー、それは後でいいか?とりあえずは腹が減つて仕方ねえからよ。飯を食いながら」

「わかった。しかし、食堂などに出向いたら目立つのではないか?」

「部屋で作って食べば問題なし。何でかは知らんけど、ここの寮は全部屋に簡単なキッチンがあるからな。どうでもいいけど、寮に戻るんなら制服に着替えておけよ」

最後の一言で、庵はようやく自分がどのような恰好であるか思い出したらしく、万同様コンソールを操作して制服を量子変換した。そのまま手早く制服に着替えると、レイクナイトを見ながら万に言った。

「でも、この後は特にやることもないのだろうか?ならば、ここで部屋について取り決めて、そのあと部屋に移動してから夕飯のほうがいいのではないか?これこそ、放置するわけにはいかないだろう」

「・・・それもそうだな」

確かに、こんなところにかにも専用機です、といった機体があれば、持ち主が発覚するどころか、いろいろ根掘り葉掘り調べられかねない。もつとも、学生にお遊び程度で破られるようなプロテクトは組んでいないが。それでも、面倒なことになるのは間違いないだろう。

とにかく、暫くここで部屋の取決めやらなんやらといったことを決めておいて、ご飯を食べている間はただ純粹に世間話で済ませるべきだろう。

「では、まず料理についてなのだが、これについては私は一切できない。だから、とやか

く言うつもりはない」

「OK、ま、それはしゃーないわな。できないことに対して口出すとか俺でもしたくないし」

それについては納得。てつきり組織で必要なことしか学んでいないのなら突拍子もないことを言い出すだろうと思ひ込んで——生活については必要か、と思ひ直し——

「こちらの洗濯物等についてもそちらにお任せしたいのだが・・・」

「いや、待て、ちよつと待て」

前言撤回。この手の突拍子もないことを素面で言えるところを見ると、やはり一般常識というか、倫理観というか、そういったものが欠如しているらしい。

「仮にも俺は男で、おたくは女。衣服含めて全部俺が洗うつていうのは俺としてもいかななものかと思うんだが」

「・・・すまない、何が問題なのかさっぱりわからない」

予想していたとはいへ、この返答にはしばし言葉を失った。どうやら、この手のことをこの少女に言っても特に効果はないらしい。頭を抱えたくなるところを、ため息をつく程度に止めた方は、とりあえずこの話題は横に置いておくこととした。

「・・・まあ、この手の話はまたあとでいいや」

「いいのか？」

「いいんだよ。また教えなきやいかんことがあるってことが分かっただけでも収穫だし。・・・で、次の話ってのは？」

その言葉に促されるように、庵は言葉を発した。

「うむ。ベッドの位置については、今の状態で構わないのだろうか」

「それはこつちから聞きたいことなんだが。そつちが大丈夫ならこつちは一向に構わないし」

「なら、今の状態でいいか？」

「問題ないぜ」

「ありがとう。しばらくの間、食事はどうしようか？」

「俺が作り置きしとく。だから食いつばぐれるってことはないし。俺の料理って結構評判いいらしいし」

「そうなのか。なら、心配なさそうだな」

「おうよ。もし何か問題があったら全部俺の責任ってことでどうにかなるし」

「もし、あなたが寝坊したりしたら、どうしようか？」

「万でいい。あなたなんて呼称を使われるとむず痒い」

もつとも、普段から上品な口調のセシリアは例外だが。

「で、寝坊した時、か……。文字通り、ぶっ叩いて叩き起こしてくれても構わないが」
「わかった。ではそうしよう」

「ちよつと待てえい！冗談だから本気にするなし！」

「……。そうなのか？」

「どうやら、冗談もあまり通じないようだ。」

「まったく……。寝坊した時は軽くゆすつてくれれば起きる。それでも起きないときは
（こ）を押せ」

「そういつて見せたのは自身の腕時計。そのひとつのスイッチを指さしていた。」

「これは、身体にちくつと注射することで覚醒を促すつてもんだ。もしこれでも起きないようなことがあれば、遠慮無くぶっ叩いてもいいけど、あくまでぶっ叩くのは最終手段。OK?」

「わかった。……。そういえば、塗料のほうは大丈夫だろうか？」

「あー、多分もうそろそろ大丈夫。試してみたら？」

その言葉に背を押されて、展開された状態のレイクナイトに触れても、その指先に塗料がつくようなことはなかった。そのまま待機状態にすると、左手首に金属質のリストバンドのようなものがまかれた。

「よし、んじや部屋に戻るか。んで、飯にしよう」

そういつて、二人ともその場を去った。

37. ドタバタな二人

IS学園の制服を着ていたということ、特に目立つことはなく部屋まで無事に戻ってくる事ができた二人は、さつそく料理にかかっていた。もともと、少々失敗しても大丈夫なように、食材には少し余裕を持たせてある。二人分とはいえ、十分に足りる量だろう。

「さて、んじやま、始めますか」

部屋着に着替えて、軽く袖をまくる。その部屋着の上にはシンプルなエプロンがあり、本格的な料理モードだ。

「そういえば、万殿」

「殿なんてやめろ。今時そんな呼び方をする奴なんざいねえぞ。呼び捨てでいい。それか、さん、または君付け。OK?」

約一名、殿と呼ぶ人間はいるが、そちらのほうがレアケースなので今は省く。

「わかった。それで、私が手伝えるようなことはないだろうか?」

「特にないな。というか、普段の俺の方法は、たぶん普通じゃないから。今日は普通の方法でやるけど」

「そうなのかな？」

「ま、俺の場合、能力も使って料理する、とかってことも結構多いからね。でもそれだけだし、今日のメニューはそもそもいつも能力を使わないものだし。だから、問題なし」

「一応聞くが、何を作るんだ？」

「んー、そろそろラーメン用の麺は賞味期限が怪しくなってきたはずだし、野菜も多めにあるから、焼きそばでもするかな、と思ってるよ。だから」

そこでいったん区切って、俺の頭に手をぽんと置く。

「安心して座ってる。できたらもって行ってやる」

「それでは万にもしものことがあれば私は食いはぐれてしまう。少しでも料理を覚えなくては」

「その辺はおいおい、な。それに、ある程度コツがつかめれば、料理なんて簡単なもんだぞ？」

そういつて、片目をつむる。その顔は、ただひたすらに善意だけしか感じられなかった。

「どちらにせよ、私にはやることがない」

「ならテレビでも見てればいいじゃねえか」

そういわれて初めて、この部屋にテレビがあることに気付いた。どうやらこの部屋、

普通に生活できる程度には家具家電一式が揃っているらしい。学生寮というくらいなのだから、娯楽用品は一切ないと思ひ込んでいた。

「実際そうだぞ。テレビとかはともかく、パソコンとかの家電は俺が持ち込んだものだし」

その言葉に俺は目をむいた。あくまで心のうちにとどめて、口には出していないはずなのだが。

「あんた、自覚ないかもしれないけど、かなりわかりやすいぞ。たぶん、表情を隠すとか、そういったものも催眠つつか、洗脳に含まれていたんだろうな。正規の手順を踏めば、それだけ残してっていうのも可能だったんだろうけど、俺は強制的に全解除しちゃったもんだから、それもまとめて吹き飛んだ、つてどこか。ま、それも訓練していくとして、だ。おとなしく待っとけ」

そうまで言われては、食い下がるのも不自然だろう。おとなしく自分は奥の部屋で待つとした。考えてみれば、アジトの中でそういった娯楽に触ることはあまりなかった。ほとんど初めてといってもいいほど見るテレビは新鮮だった。ニュースなどはもっぱらスクロールたちが持ち込んでくるようなものしかなく、どれもこれも味気のないものばかりだった。それもあって、このような、見入るための工夫が凝らされたニュースというのは新鮮で、暫く見入っていた。

暫くすると、大皿の上に乗った、ソースが麺によく絡んだ焼きそばが出てきた。だが、それすらもなかなか気づかないほどに画面に見入っていた。

「聞こえてるかー？」

覗き込むように言われて、初めて今までしていた「いい匂い」が近いことに気が付いた。

「すまない、テレビというものがかなり新鮮だな」

それに対し、万はわずかに顔をしかめた。本当にかすかだったので、傍から見ればすつと表情が消えたようにしか映らなかった。しかし、庵はその表情の変化を見逃さなかった。

「どうかしたのか？」

「どうもしない。予想していたことが尽く的中するような予感がして、軽く嫌気がしただけだ。・・・さて、温かいうちに食っちゃおう。くどくなりすぎないようにチーズも軽く入れてあるから、冷めると食べにくくなる」

そういつてそれぞれの前に小皿を出し、長い箸——調理に使った、ただの長い箸(菜箸ではない)なのだが——をそのまま麺の横において、自分も小皿に麺をとった。

「・・・どうかしたのか？」

手を付けない庵に、万は不思議そうに聞いた。

「いや、このような料理は初めて出てきたもので、少し以上に驚いているのだ」

そういつて俺も自身の皿に麺を盛る。それを見て、二人とも箸を進めていく。

「あ、そうなのか？もしかして、洋物ばかりだったのか？」

「そうだな。基本的には洋風のものが多かった。たまに和食も出たが」

「へえ、どんな？」

「ちらし寿司、だな。あとは肉じゃがとかの煮物の類に、刺身もでたな」

「そりゃまあ・・・手間のかかることで」

「そうなのか？」

「手間がかかるっていうより、神経使う。刺身は均一にしつかりと切るって時点で結構気を使うし、ちらし寿司はすし飯をしつかりと作るのにも結構大変だからな。俺もめつたにやらないのに」

「そうなのか。私は料理をしないから、知らなかった」

「てか、普段料理しない人は大抵知らんと思う。少なくとも、しょっちゅうやりたいものではないしな」

そこで一度会話が途切れる。一瞬だけテレビの音が聞こえるが、二人とも気にも留めなかった。

「ところで、先ほどの洗濯物の件なのだが」

「あー、あれな。よく覚えてたな」

「それは、それなりに重要なことだったからな。で、結局あの件は」

「俺がやる」

俺の先手を打つ形で万が言った。

「そつちに理屈が通じない以上、俺が我慢すればいいだけの話だからな。どちらにせよ、そつちができない以上俺がやるしかないわけだし」

「それはそうだし、とてもありがたいのだが……。結局、いったい何が問題なのだ

その言葉に、少々万は言葉に言いよどんだ。彼本人にも異性と生活する、などという真似は仕事だけで、滅多になかったといつてもいい。それでも、異性の間にそのようなものがあるということは認識している。だからこそ、ここまでとはさすがに考えていなかった。

「まあ、なんだ。異性間には、そういう、遠慮があるんだよ」

「それは、なぜ？」

その返しに、今度こそ言葉に詰まった。大方、そこに端を発する疑問だろうとはいらんではいた。が、こうも正面切つて訊かれると、答え辛いというのが本音だった。

「その、まあ……。あれだ、男女つていうと、つまりは……。繁殖するためのつがいだな、で、その、そういうのがわかる年頃——つまり俺らくらいだけど、そのくらいだ

とそういうのを嫌がることが多いんだよ。なんか、うまいこと説明しづらいんだが……
伝わったか？」

「なんとなくは。今後そういうことがあるということは頭の中に入れておく」

「……うん、そうして」

我ながらこんな説明でわかるのか、というような説明だったが、本人が分かった、というのだからいいだろう。とりあえずは、俺が分かればそれでいい、ということで、深く考えないことにした。

「ま、でも、あんたがそういうことに抵抗を感じないってなら、俺がやつても特に問題はないだろうから、俺がやる」

「しかし、万のほうにそういった抵抗があるのでは？」

「その程度我慢すればいいだろ。そうすれば丸く収まるのなら、それが最善だ」

なぜか、万と呼ばれたことに対してかすかに体が反応したが、そのことはおくびにも出さずにあつさりとは返答した。

それから少しの間は比較的黙々と箸を進めていたが、やがて大皿の上にあつたものがなくなってきた頃合いを見計らって、万が切り出した。

「さて、と。飯も終わったところで、ある程度俺らの状況をまとめておくか」

その言葉に、俺の顔も引き締まる。あの手紙の内容に関して、話そうか話さないかと

いうのは暫く悩んでいたが、せめて庵とだけは情報を共有しておいたほうがいいだろう、という結論に至ったわけだ。

「先に言っておく。質問はまとめて後にしてくれ。

まず、あんたの身分だ。

あんたは、I S 学園の1年3組に編入することになった。休暇明けだから、あさつて、つてことになるかな。一応、一夏の双子の妹、ということになっている。編入の手続きとかに関しては、詳しいことは知らんが、たぶん織斑先生がやってくれるんだろうな。幸いなことに、ゼフィールス、黒騎士ともに顔の半分以上をバイザーで覆う、顔が分り辛い機体だったこともあるから。ばれてもしらを切れ。

で、俺の機体、アイギスについては秘匿されることになった。無論、あんたにも守秘義務というものが発生する。

I S 学園はある意味治外法権みたいなところもあるから、とりあえずの身分と安全は保証された、つてことだ。

レイクナイトに関しては、さっきの塗装の時に、ついでに情報登録の変更も行ってある。普通に使ってもらって全く問題ない。

とりあえずは、以上。何か質問があれば、答えられる範囲で答えるが」

「では、いくつか。

まず、なぜ1年3組なのだ？普通に考えれば、万と同じ1組か、嵐と同じ2組、簪のいる4組あたりにして、紐をつけておくと思うのだが」

「まず、1組というのはない。今現時点で1組には専用機持ちが集まりすぎている。これ以上増えてはパワーバランスを崩すだろう。あまりに不公平すぎるからな。で、そもそも学年の先生方はあんたの首にひもを付けるといふことは考えてないんじゃないか、というのが俺の考えだ」

「それは、なぜ？」

「あんたにかけられた洗脳とかの類をすべて俺が解除したから。加えて、昨日の騒動の、本当の幕引きを知らない人間にとっては、フアントムタスク亡国企業とのパイプを持っているとは思えない。思っているとしても、使えないと思っているだろう。結果的にあんたは俺の手を取り、あつちの手を拒絶したわけだからな。だからこそ、教師陣はあんたに監視を付けるよ、学年としてのバランスを重視した、と俺は考える。って言っても、これはあくまで推論だから、一から十まで鵜呑みにするなよ？」

「わかつている。だが、今の言葉で大体納得がいった。

では次だ。私の身分に関してはばれることはないのだろうか？」

「多少はあるだろうけど、ほとんどないって言っている。これは俺が保証する。なんたって、ここは女を男と偽って入学させちゃった前例がある学校だぜ？それに、ぱつと

みて年子か双子かなんて見分けはつかん。二卵性双生児なら、普通の兄弟と何ら変わら
ないんだから」

「何だ、その、ニランセ何とかというの？」

「二卵性双生児。詳しいことは省略するけど、双子つてのには二種類ある。一つは、一つ
の受精卵が何らかの要因で別々に育った、というもの。もう一つが、たまたま子宮内に
二つ卵子があつて、それぞれが受精卵として成長したつてももの。後者が二卵性双生児。
確かに、出産のタイミングこそほぼ同日だけど、実質普通の兄弟だよ。性別が違う、な
んてこともあるしな」

「そうか。まあ、早い話が本来の身分が公になることはないと考えていいのだな？」

「少なくとも在学中は」

「そうか。それで安心した。」

ところで、食後のデザートというものはないのか？」

「ない。しいて言えば、冷蔵庫に買ったための安物があるくらい。でも今はあるかどうか」
「あれば欲しいのだが」

「あいよ。どちらにせよ、俺一人じゃそこまで食わないしな」

そういつてもう一度万は席を立った。ついでに、空になった大皿も流しまでもつてい
く。再び訪れた沈黙に、まだ続いていたワイドショーの声が克明に聞こえてきた。

「次のニュースです。都内のマンションで火災が発生し、火元とみられる一室が全焼。近隣住人の一部が一酸化炭素中毒で病院に搬送されました。」

今日夕方5時ごろ、〇〇区のマンションの一室から大きな火が上がっていると通報があり……」

「またこの手のニュースか」

そういつてそれぞれの前にプリンを置く。それより、目の前の青年の言葉に俺は気を取られていた。

「この手の、というと？」

「こういう、火災とか、交通事故とか。そういう手の『事故』が、だよ。そんなのは日常茶飯事だし、誰も気にしないだろうけど、詳しく調べてみると怪しいんだよな」

「怪しい？」

「頭数が合わないんだよ。もつと具体的に言えば、子供がいない。しかも大抵一家全滅だ。ここまで連続で同じような事象があれば怪しいってもんよ」

その言葉が示す意味を、最初は理解できなかつた。その顔を見て読み取れるものもまた皆無だつた。

「ま、知る必要のないこと、つてやつだ。知らないのなら、そのままにしておいたほうがいい」

「なぜだ。何事も、知るといふことは悪いことではないはずだ」

「ああ、その行為自体はな。だけど、その行為によつて何を感じるかつていふのは別問題だ。今回は、その何を感じるかつていふ部分がかい。知ることで見ると地獄があるつていふのなら、知らなければいい。それだけの話だ」

「そこまで言われては沈黙するしかなかった。ここまで半直接的に『追求するな』と言つていふことが分からないほど鈍感でもない。」

「まあ、そんなのは置いといて。いろいろ教えとかかないとな。あの学校、普通じゃないほど設備が整つてるし、おたくの暮らしてきた環境を考えれば、校則つて何、つてとこから始まるだろ」

「いったい何を拘束するのだ？」

「たぶんそれ字が違うな。大方、縛るとかそういう方の拘束を思い浮かべてるだろ」

「違うのか？」

「違う。つてか、学校の話をしよつとしてる時に、一体全体なんでそんな尋問か何かに使つていふような言葉を出さなきゃいけないんだよ、理解に苦しむ」

「だから私もわからなかつたのだ」

「校則つていふのは、学校の規則だ。学校の中でこれこれこういうことをしちゃいけません、とか、これこれこういう権利がありますよ、だとか。そういつたことを全部ひつ

くるめて、校則って呼んでるわけ。OK?」

「なるほど、理解した。そういうことなら、理解ができる」

「ん、理解して。で、とりあえずその手のことを一通り教えなきゃいけないわけだ。明日で制服のサイズが合いませんでした、じゃどうしようもないだろうから」

ちょうどそのタイミングでドアがノックされる。そのままの体勢で返答すると、

「私です。庵さんに制服を届けに来ました」

自身の副担任の真耶の声。

「はい、今出ます。・・・噂をすれば、だな」

最後の一言だけつぶやくだけにとどめ、万はドアまで歩く。念のため、外の様子を確認した後にはドアを開ける。

「はい、これ。庵さんに渡してください。細かく採寸をしていないので、彼女に合うだろうというサイズを一通り持ってきました。一番丁度よさそうなサイズを後でまた教えてください」

「わかりました。ありがとうございます」

「それと、織斑先生から伝言です。私の妹に手を出すのならそれなりの覚悟をしてあげ、とのこと。私としては、まだ学生なのですから、婚前交渉なんてとんでもないと思っていますけど」

「そもそも、織斑先生の逆鱗に好き好んで触れようとするやつがいれば、俺はその物好きを尊敬しますけどね」

その言葉に、真耶も苦笑いを浮かべた。

「それもそうですね。国家代表であろうと誰であろうと、教え子が間違っているのなら問答無用で鉄拳制裁をしそうですね」

その言葉に万はくつくつと声をこらえる形で笑った。

「思いつきり想像ができます、その絵。とりあえず、制服に関してはこっちでやりますんで。また後ほど報告に伺います。どちらに報告すればいいですか？」

「どちらでもいいですよ。予備ももう一着ずつ用意してありますから、暫くはその二着で我慢してもらおうことになりますけど……」

「ま、それは仕方ないでしょう。誰もこんな時期にいきなり編入生が来るなんて想像してないですし。しかもこんな形で。ま、元凶は俺なんですけど」

「本当ですよ。学年団の先生方は、真相を知って一様に頭を抱えていましたよ？」

「あら、それは悪いことをしましたね。ま、とにかく、俺は後悔してません。だから、俺は俺のなせる最善をします。それが、どのような結果を生もうとも、です」

真剣に言い切った方に、真耶はふと微笑んだ。

「そこまで言い切ったからには、それなりには結果を出してもらいますよ」

「もちろん。では、また」

その一言でドアを閉める。渡された制服を手に部屋に戻ると、そこには差し出されたプリンを黙々と食べる庵がいた。

「それが、制服か？」

「ま、そうだ。おたくの体格から考えて合いそうなやつを数種類見繕ってきたそうだとはいえず、サイズ合わせるぞ」

「サイズ？ ああ、やけに量が多いと思つたらそういうことだったのか」

そういつてプリンを置いたかと思うと、さらりとその場で脱ぎだし——たところで慌てて方は止めた。

「待った待った、いきなり脱ぎだすなバカ」

さすがにこのような行動に出ると思つてもみなかつた。いや、多少は想定してはいたが、まさか実行するとは思つてもみなかつた。

「さっきの話！ まさかもう忘れたとは言わせんぞ」

「ああ、だがそれはあくまで衣服の問題だろう？」

「肉体はもつとだめだから！ とにかく、俺は隣の部屋にいるから、これ着替え終わつたら教えて」

そういつて押し付けるように制服を渡す。そのタグはもう事前に確認済みだった。

慌てて隣の部屋に駆け込んだ方は、ゆっくりとだが肩で息をしていた。

「つたく、何だつてんだよ、本当に」

ここまでドタバタするようなことはないが、仕事柄、潜入してサーチ&デストロイ、などということもあつた（元をたどれば、IS技師になつたのも潜入調査の一環だ）。その性質上、女性と部屋を共にする、ということもあつた。なのに、どうしてあの少女相手ではこうも妙な態度となるのか。

（ただ単に仕事じゃないから、か？それだけにしてはこうも動揺するのはいささか不自然なところもあるが……。まあ、そんなのはどうでもいいか）

そこまで考えたところで、外から声が聞こえた。着替えが終わつたと思つた方はそのままガチャリと扉を開けた。そこには、着替えが終わつた庵の姿があつた。

「で、どうだ。ちつきすぎるとか大きすぎるとかねえか？」

「特にそういうのはないぞ」

「そうか？まあ、念のためちと確認するぞ」

本来は女性にやつてもらうのが最善なのだろうが、この場には万しかない。それに、一応庵のことはまだ秘匿事項で、部外秘でもあるので、仕方なく確認をする。軽く袖や裾を引っ張つて、大丈夫そうだといいことを確認すると、すぐに手を離れた。

「うん、大丈夫そうだな」

「だからそういつているだろう。それに、胸元の確認はいいのか？」

「だから！」

そこまで言つて、怒鳴りかけた声をすぼめた。これ以上何を言つても無駄だろう、ということくらいは簡単に察することができた。

「・・・男女間の遠慮つていうのは、そもそも肉体的性差に基づくものなわけだな。特に、胸元とか下腹部とか、そういつたところはお互い積極的には触りたくもなければ、触られたくもないわけ。男の胸元ならともかくとして、男性が女性に無理矢理そういう行為をするとお縄だ。そこんとこOK？」

「なるほど、そうだったのか」

「そういうこと。でもそれはあくまで一般的な話で、夫婦とか恋人とか、そういうのは例外として存在する。以上、了解？」

その言葉に、庵は素直にこくりと頷いた。

「とにかく、そういうことだから。それは念頭に置いておくこと。」

で、それはそれとして、きついところとか緩いところとかない？」

「だから大丈夫だと何度も言っているだろう」

「それならいい。丈も丁度よきそうだしな」

そういつて距離をとる。これ以上この至近距離においては先ほど自分が言ったことに

説得力がなくなると自分に言い聞かせた。

「さて、んじや部屋着に戻してくれ。それは軽くしわ伸ばして、入稿日の明後日には着れる状態にしておく。それまでは、校則やらなんやらを教えて、だな」

そういうと、万は立ち上がって風呂のほうへと歩いて行つた。不思議そうに見上げる庵に対し、万はなんてことはないように答えた。

「風呂入ってくるだけだ。そんな顔すんな。できるだけすぐ出てくるから安心しろ」

そういつてぽんと一つ頭をなでて、万は脱衣所へ向かつた。

風呂につかりながら、万はぼんやりとこの後のことを考えていた。

なりゆきとはいえ、こういう状態になつてしまい、しかも教師に向かつてあれだけ盛大に啖呵を切つた以上、自分にできる最高の仕事をしなくてはなるまい。もとより、手を抜くつもりなど一切ない。が、与えられた時間は決して長いものではない、ということもわかつていた。

スクールに言われるまでもなく、下剋上のための狼煙を揚げるにはそろそろ頃合いであることは容易に予想がついていた。もつとも、それが明日なのか、あさつてなのか、一週間後なのか・・・そこまではわからない。少なくとも、半年内には始まる。万は大体そのような目算を付けていた。

当面、自分のすべきことは、戦力の拡充もそうだが、今の状態からさらに個人個人の

練度を上昇させること。そのような短期間で一気に戦力を集めようとしてもそううまくいかない。しかし、ここはIS学園だ。ことISに関してなら、敵と此方のどちらの理解度が高いかなど、考えるまでもない。いくら学生とは言えど、ISに関する専門知識を学ぶ此方に対し、相手はあくまで撃破対象としてしか見ていないだろう。ならば、教える知識の、いわば“密度”ともいえるものを上げてやれば、十二分に戦力としては使えるものができるはずだ、と方は睨んでいた。代表候補生、というからには、優秀なISパイロットとなりえる素質が備わっているということでもあるのだから。本来はすべての代表候補生に接触したいところだが、いかんせん時間がなさすぎる。学年が違っているても、代表候補生であることには変わりはないとして、その件は無視することにした。実際、彼の予想に違わず、彼女らの操縦技能は飛躍的な向上を遂げていた。パイロットとしては優秀な部類に入るだろう、というくらいに。しかし、彼女らに決定的に欠けているものがあるのもまた事実だった。それを埋めることはできないだろう、とも方は踏んでいた。

欠けているもの、それは——人殺しに対する忌避感が強すぎることである。

こればかりはどうしようもならない、というのはわかっていた。軍人であるラウラや、暗部でさんざん人を殺してきた麦野や庵は、——否、暗部の家柄だという更識姉妹もある程度は大丈夫だろう。少なくとも、人が血の海に臥しているというだけで嘔吐

したり失神したりということはあるまい。だが、他の候補生はどうか。人として人殺しを忌避するのは仕方ないのかもしれない。が、それで自体が片付く、ということはないだろう。一番の状態は、候補生はISを撃墜させるだけで、あとの血なまぐさい処理は先にあげた人間と自分の5人で行う、というものだ。しかし、楯無は国家代表で、文句なしで一流のIS乗りだ。そもそも、5人ですべてを行いきれるということは可能だろう。だが、相手はそれこそ雲霞のような大群をなしてくるだろう。それを相手に、楯無とその他の戦力を欠いた状態で戦え、というのも無理な話だ。となれば、状況に応じて人員を割かなくてはならないということは目に見えている。ならば、そういった倫理観のリミッターと呼ぶべきものを解除することも覚えさせておく必要があるだろう。だが、こればかりは万自身もしたくなかったし、現実問題できなかつた。そういったものは実地で慣れるのが地道で一番の近道だからだ。だからと言って、今から戦場に送り込むなど正気の沙汰ではない。ただ殺されるか、(一夏以外は)レイプされるのが落ちとあったところだろう。

だからこそ、万も対策を織り込んであった。もうどの候補生も気づいてこちらにメールを送ってきているが、目線を覆うゴーグルのようなバイザーをすべてに入れてあったのだ。

無論、これには目的がある。

一つ目はシステムの容易なアシストの容易化である。いくら仮想ディスプレイの技術が発達したとはいっても、実際のディスプレイのほうがすぐれている点は多々ある。その一つがこれだ。決まったポイントに特定の情報を表示させるには、仮想ディスプレイだと電力を食ってしまう。電気も立派なエネルギーのひとつである以上、その消費を抑えることは目下一番の目的だ。

二つ目は戦略上の理由だ。戦場では、目線を見て予測する、などという技はかなり役に立つ。もつとも、スナイパーのスコープ越しに相手の目を見るだとか、そこまでの技は求められない。だが、至近距離になればなるほど、目線で相手の動きを予測することは容易になる。実際、照準をつける能力者との戦闘で、目線で動きを読んだり、またフェイントをかけたなりということは多かった。だが、それはあくまで相手の目が見えるのなら、という話だ。

そして、三つ目。これが最大の理由だ。だが、これを口にする気にはどうしてもなれなかった。然るべき時がくれば話すこともあるかもしれないが、少なくとも今のところは話す気にはなれない。それが、万の個人的な感情だった。

「それに、この理由は一時しのぎにしかならんからな……」

それまでは、シミュレーターを利用した仮想訓練に徹するほかない。どうしてもアリーナをさせる時間は限られるからだ。それに、レイクナイトの状態も確認する必要が

ある。特にこれといって手を加えていないが、念のため確認しておかないと気がすまない。

庵自身の白兵戦能力は文句がない。だが、射撃能力は一夏ほど悪くはないが、決して高いものではない。それは戦った自分自身がよくわかっている。飛んだ感覚はほとんど変わっていないかったところを見ると、催眠を解除したことで身に着けた技能を失ったということはなかったのだろう。だが、催眠を解いたことで得た技能というのもまたないはずだ。なにせ、彼女が催眠を受けたのは幼少期だったのだから。ましてや、戦闘技能などは変わってはいないはず。射撃機能がついていることは確認済みなので、あとは本人の技能を上げるのが先決だろう。少なくとも、一夏のようにシューターフロアから練習必要があるということはないはずだから、そこまで時間がなくともいけるだろう。「ま、それは明日になってから考えるか」

そこまで言ったところで方は風呂を出た。脱衣所で寝巻を着て、軽く頭を拭きながら部屋まで戻ると、そこにはそのままちよこんと座る形で庵がいた。

「風呂、空いたぞ」

「ああ、分かった」

その短いやり取りすら待っていたかのようなタイミングで端末が鳴った。端末が音を立てると、となると、現状九分九厘万なので、急いで端末に駆け寄る。いつものもので

なく、映像を映すタイプの画面の表字は「月島深名」となっていた。まさかもう情報を手に入れたのか。ほとんどないであろうその可能性を思い浮かべながら、万は通信回線を開いた。

「よう、久しぶりだな」

『久しぶりじゃないでしょ。たかが数日じゃない』

「あれ、そうだっけか」

そういわれて考えてみると、なるほど確かにそうだ。遠足の初日の夜に電話がかかってきて、その次の日に亡国企業ファントムタスクの襲撃、それから今日だから、日数的には2日程度だ。

「そうだな。ちよつとこつちもいろいろあつて、時間間隔が狂つてた」

『人には徹夜とかするな、つて言っておきながら、自分が徹夜？体に良くないよ？』

「体に良くないっていうのは重々承知だ。てか、そうじゃなきゃ体晶なんて使わないし」

そんな会話をしていると、後ろから声がかかる。

「誰と話しているんだ？」

「ああ、俺のダチだから気にしなくていいぞ」

一言後ろに向かつて声をかける。だが、目の前に映っている少女は大きくその眼を見開いていた。

『今の声って・・・まさか、M・・・？いや、でも・・・』

「そのまさかだが？」

このままでは思考の泥沼にはまっついていくだろうということが容易に想像することができた方は先手を打つ形で言った。

『そうよね、あんな声M以外には……ってえええ!!?!?』

「いい反応アリガトウ」

顎が外れんばかりに驚愕する深名に対し、一厘として感謝の念がこもっていない平坦な口調で方が言う。画面の中では、まるで喉に物が詰まったように目を白黒させる、万とほぼ同い年の少女がいた。

『いや、Mって……え、どういうこと!?!とらえられたってこと!?!目的は!?!まさかレイプとかしてないでしょうね!?!』

「まあ、半分なりゆきみたいなもんだがな。目的は戦力増強と亡国企業フアントムタスクの内部を知るため。それと間違っても身をひん?くことはねえから安心しろ」

『なりゆきって……Mは亡国企業フアントムタスクの切り札って言われたほどの実力者よ!?!それをどうやって!?!』

「使い方を誤った大きな力は、上手に使った弱い力よりも劣るってことだ」

矢継ぎ早に疑問を飛ばしてくる深名に対し、方は冷静にそれらをさばいていく。依然として画面の中は大混乱といった様子だが、そんな状態でも彼はとことんまでに冷静

だった。

やがて混乱が落ち着いてきたのか、深名がゆっくりと切り出した。

『・・・ふう。とりあえずその件は置いておくとするわ。で、今回はもう一個情報が入ったから、伝えに』

「どんな情報だ？」

情報、という言葉聞いて、万も顔色を変えた。

『襲撃時期。さつきちらつと聞こえたんだけど、大体1か月から2か月後。でも、2か月も必要としないと思う』

「確かか？」

『たぶん。少なくとも、50%以上は』

「OK、分かった。ありがとう、頭に入れておく」

『気を付けてね』

「そつちも、体は大切にしろよ？」

軽口ともいえる、いつもとほとんど変わらない口調で通信が切れる。完全に切断されたことを確認して、万は自分のベッドに寝転んだ。

「2か月以内、か」

具体的な時期が分からなければ徒に体力を消耗するだけだ。だからこそ、この情報は

有益だった。

——
決戦の日は近い
——

38. 庵の入学

思いのほか物覚えのいい庵のおかげで校則、ISの法律、倫理観を教える作業は思いのほか捗った。倫理観に関しては通り一遍のことしか教えられなかったが、それでも前よりはマシだと思っている。教えることも教えられることもほとんどなかった万としては、その反応などがすべて新鮮だった。

庵の幼少期は、大人について回っているところを見てきた、ということにした。
ファントムタスク
 亡国企業のメンバーとして世界各地を転々としていたことは事実だし、そのメンバーが大人ということも事実だ。捉え方さえ気にしなければ嘘をついていることにはならない。騙している時点で五十歩百歩だが。

そんなこんなで、気付けば前日の夜だった。

「ま、とりあえず生活に必要なことは教えだし、他は学校生活の中で学んでいくしかないだろ」

「そんな適当でいいのか？」

「いいの。それにな、ISの実習に関しては、専用機持ちが固まってることで1組とどっか別の組の合同で行うことが多いんだ。サポートはしやすいと思うぜ」

「それならいいが……。正直、ここまで接してくれたのは万だけだからな、不安なのだ」
「ま、でも案外大したことないぞ。案ずるより産むが易し、つてやつだ」

「なんだ、その言葉は」

「案ずるより産むが易し。あれこれ考えるより実際にやつちまつたほうが簡単なこともあるつてことだ」

「なるほどな。友人などはどうすればできるのだ？」

「わからん。俺も、上っ面だけの付き合いだけで済ましてきたとこがかなりでかいからな。ま、その辺も含めて楽しめばいいじゃねえか？」

「そんな……。！いつ襲撃があるとも限らないんだぞ!？」

「だからだよ。命短し恋せよ乙女つて知ってるか？」

「なんだそれは。今は関係ないだろう」

「あるんだよ、これが。さっきのは、一生つていうのは短いから、その間を精一杯生きろつてこと。どれだけ短くても、その間を全力で生きることができればいいんじゃないやね？」

その言葉に、俺はしばしの間黙り込んだ。そんな考えが思いつかないような生き方をしてきたことは、細かく考えなくても簡単に予想がついた。

「……努力はしてみよう」

「ん、いい心がけだ」

返ってきた答えに満足げに微笑む。そのまま、自身は自分のベッドに寝転ぶ。

「とにかく、明日の朝は早めに出るぞ。職員室に行つて軽く挨拶しておかないといかんし、ちよつと話があるつて聞くしな。本当はもつと前にやつておくべきんだけど、状況が状況だしな。そのために早く寝ろ」

「うむ」

そういつて庵もベッドに寝た。ほどなくして規則正しい寝息が聞こえてくる。どうやらこの少女、かなり寝付きはいいらしい。対する方はもともと寝つきも悪ければ眠りも浅い。寝転んだはいいが、相変わらず寝付けずにいた。

庵の手前、ああ入つたが、正直本人も気が気ではなかつた。せめて自分と同じ組であつてくれれば四六時中フォローもできるが、そういうわけにもいかない。できることといえば、ちよくちよく3組に顔を出すことくらいだ。その間に何かしらボロを出すようなことがあれば怪しまれる。完璧すぎて怪しまれるということも世の中にはあるが、いかにも怪しいと思われるよりはマシだろう。

だが、それこそ、案ずるより、というやつだろう。とにかく、ことが起こつてからある程度対策を立てればいい。そんなことを考えていると、やがて万の意識も眠りへと落ちていった。

翌朝、起きると何やらベッドに妙な感覚があつた。疑問に思つて見まわしてみると、自分の横に安らかに寝る庵がいた。大方寝ほけてもぐりこんできたのだろう。日頃の凜とした佇まいとは違つた、年相応の少女の寝顔があつた。

少々以上に悪戯心がわいた方は、その寝顔に触れてみた。手始めに頭を撫でてみる。女性ばかりの中にならなからなのか、その髪はよく手入れされていた。癖が少なく真つ直ぐで、固すぎず柔らかすぎず、撫で心地のいい髪だつた。

そのまま少しの間髪感触を堪能したところでふと思ひ出して左手首の時計を見る。時刻は6時少し前を示していた。そろそろ支度を始めないと、予定していたことができなくなる。方は静かにベッドを抜け出して、枕元に置いてあつた伊達眼鏡をかけて、台所に向かった。

それから30分ほどして、弁当を作つた方は、ベッドの横から軽く頭を叩きながら声をかけた。

「ほら、起きろ。そろそろ時間だぞ」

その声に、庵は少しだけ唸るとゆっくりと目を開けた。

「……もうそんな時間なのか？」

「ああ。ずいぶんとぐつすりだつたな？」

ま、それはそれとして。とつとと支度はじめる。40秒とは言わないけどな」

そういつて自身は再び台所に向かった。ついでにボックスの一つに軽く触れ、制服に着替える。さすがに異性に着替えを見られるということに羞恥があることをしつかり理解できているのか、完全に視界から外れたところで衣擦れの音が聞こえてきた。その音を聞きながら、庵の学園生活に対する反応が少々心配になった。それこそ「案ずるより」というものだ、と自分に言い聞かせ、少々の落ち着きを得た。

そんなことがあつて、双方とも支度を終えて部屋を出た。寮の廊下は閑散としていた。時刻を見ると、時計は7時より10分ほど早い時刻を示していた。こんな時間ということもあつて生徒の影はほとんどない。その間を、二人は横に並んで歩いて行った。

「いつもこんなに静かなのか?」

「この時間はな。生徒の国籍はあつても学校としてどこの国家に帰属するつていうのがない以上、どうしても部活の大会には出場できないし。例外的に、ISの大会に招かれて出場する、とかつて例は過去に数例あつたらしいけど。とにかくそういうわけで、部活に入つてないつてやつもちよいちよいっているわけで、朝練も必須じゃない場合がほとんど。だから、この辺の時間はのんびりしてるやつが大多数だから、ここまで静かなんだよ」

「朝練？」

「朝の練習。大会とかないから、あくまで趣味の延長線上なんだし、そこまでして頑張る必要もないってことで、あんまりないんだよ」

「大会があれば、やるというのか？」

「まあねー。なんでもそうだけど、全国大会に毎回出場したり、優勝したりするところって、朝の6時とかから朝練して、夜は22時とかまでやるとかかってところもあるらしい、とは聞くし。大会でいい成績を残すっていうことはそれだけで大きなステータスになるから」

「そういうものなのか？」

「そういうもん。織斑センセなんかいい例だろ」

「・・・ああ、なるほど」

そこでようやくやく納得したらしい。それを見て、万はさらに一言漏らした。

「そういうこと、これから先多いだろうけど、何でもかんでも質問しまくるなよ。よく思わないやつもいだろうから」

庵が素直に頷いたところで、その頭に一つぽんと頭に手を置いて、また横に並んで歩いた。

そうこうしている間に、二人は学園についていた。煩雑な手続きは、こっちに降りてこなかったところを見ると一応の保護者である千冬が一手に引き受けたのだろう。教職というのも大変だろうに、頭の下がる思いだ。

二つノックをして、ドアを開ける。一声「失礼します」と声をかけてから、万は中に入った。続いて、做うように庵も入る。素早く耳打ちをされて静かにドアを閉めたことを確認すると、万は腕を引っ張るようにして3組の担任の元へ向かった。

「失礼します。今、お時間よろしいでしょうか？」

「ええ、大丈夫よ。あなたは1組の黒川君ね。どうしたの？」

「いえ、本日編入の、織斑庵を連れてまいりましたので、ご挨拶にと」

「あらら、それは手間をかけたわね。後ろにいるのが、織斑さん？」

「はい。・・・ほら、いつまで隠れてんだ」

最後は小声で、自分と入れ替わるようにして前に出す。少々以上に驚いたような顔をして、庵は担任の前に出た。

「織斑庵です。よろしくお願います」

誰の目にもそれと分かるほど緊張して固まっていたが、それでも丁寧な口調は相手には好印象だったらしい。担任はにこりと柔和に微笑んだ。

「うん、よろしくお願いますね、織斑さん。事情は大体織斑先生から聞いてるわ。急な

編入で大変だったでしょ」

「どうやら、何かの事情で急にこの学園に編入することになった、ということになっているらしい。いったい何の事情なのかは知らないが。」

「いえ、周りも良くしてくれましたから。何とか」

「そう？ それならよかった。ま、ゆつくりと慣れていくといいわ」

そこに取り繕った建前などは感じられない。どうやら、襲撃に対する緘口令は相当徹底されているようだ。

「まあ、書類とかは織斑先生が捌いてくれたみたいだから、気にしなくていいわ。あとは、先生方へのあいさつだけ……まあ、学年団の先生方はもう集まってきているから、先に済ませてしまいいましようか。それでも、案内する時間までにはまだまだ間があるから……黒川君」

「学内の案内ですか？」

「うん。じゃ、私は先生方を呼んでくるから、隣の進路指導室までお願いね」

先手を打つように万が言ったのに対し、さらりと返すと担任教師は手際よく学年団の先生を呼びに行った。その間に二人も移動する。さらりと顔合わせが済むと、万は学校の施設を順に回っていった。片手に地図を持ち、それぞれの施設の概要を確認していく。その一つ一つに殊勝に頷く庵を見ながら、万は不思議な感情に囚われていた。

自分で言うのもなんだが、黒川万という人間は人に教えるということが大の苦手だ。人の前に立つなどという人柄ではない。そもそもが、人の輪の中に混じるといふ行為すら、彼にとっては苦痛だった。というのも、生まれてからこの方というものの、神童やら天才やら化け物やら、何かしらの声が飛んできた。そして、その声にどのような形であれ応える必要があることは、幼いながらもわかっていた。しかも、その声に適切に応えなければ、帰ってくるのは罵倒だった。だからこそ、彼は集団というものを忌み嫌っている。今でも、なんで女というものはこうもすぐに群れたがるのか、と甚だ疑問に思っている。だが、集団にいたにもかかわらず、この少女だけはなぜか好むことができた。何故なのかは万にもわからないが。

そんなことを考えながら時計を見ると、もう顔合わせの時に指定された時間の少し前になっていた。移動時間を考えると、ちょうどこのくらいの時間がいいだろう。

「さて、そろそろ時間だし、行くぞ」

「ああ」

短い会話とともに歩き出す。二人の歩調は、大して意識してはいなくてもほとんど同じになっていた。

そのあと、短いホームルームの後にいつも通りの授業となった。移動教室でもなかつ

たので、そのまま自分の席に座っていたのだが、その表情は晴れなかった。

というのも、庵のことが頭から離れないのだ。自己紹介は失敗していないか、質問でぼろを出したりしていないか、うっかり自分の機体を黒騎士と言っていないか、授業についていけているか、そういったことだ。考えが浮かぶたびに、そうならないようにちゃんと対策を立てただろう、大丈夫だ落ち着くと、自分に言い聞かせる。そんなことを考えながら、なるほど子を持つ親の気持ちというのはこういうものなのかもしれないとどこか冷めた状態で考えていた。

「さて、では、黒川、ここの部分の答えを言ってみろ」

突然当てられ、一瞬思考がフリーズしたが、すぐに冷静さを取り戻してすぐに答えを頭の中ではじき出す。

「えー、と。等比数列なんで、128、ですね」

「そうだ。答えとしては見事だが、だからと言って授業をおろそかにはするなよ。先ほど——」

さらに続いていく授業の中でも、少々以上の不安は残っていた。レイクナイトの待機状態は白式と対になるような左手首のリストバンドのため、授業中に大つぴらに触るというのはどう考えても目立つ。セイリュウのように、頬杖を突きながらちよいちよい、というわけにはいかない。それに、その手の悪知恵を働かせる頭があるとは到底思えな

かった。ならば、今のところは庵を信じて平常に徹するほかない。そこまで考えたところで、もう一度当たった方は黒板をぼんやりと眺めていた。いつもに増して、その内容は頭に入つてこなかった。

その後の授業も似たようなもので、あれやこれやと取り越し苦労をしている間にあつという間に昼になった。食堂があるということもあつて、この学校の昼休みは各々かなり自由に移動して昼食をとることが多かった。だからこそ、人気のないところに誘導するのも容易かった。

「庵さん、ちといいいか？二人で話しときたいことがある」

思い切つて3組の教室に入つてすると庵のところに行く、開口一番で言い放つ。その顔は「とにかく来い」と言わんばかりの表情になつていた。庵も察したのだろう、周囲に断わる以外は特に何も言うことはなく素直についてきた。

そのまま方は廊下を歩く。弁当は例によつてボックスに入れてあるので問題ない。庵にはあらかじめ渡しておいたボックスに「使い方の説明」と称して弁当を入れてあつた。だが、出し方の説明はしていない。朝で少々以上に急いでいたということもあり、それを説明し忘れていた。——というのは口実で、心配になることは少なからず予想できていたため、わざとしていなかつたのだが。

そのまま二人がたどり着いたのは屋上だった。

「さて、飯にするか」

「それはいいのだが、そつちにも付き合いはあるだろう。いいのか？」

「問題なし。もともと俺は一匹狼だからな。一緒に食うのは一夏たちくらいのもんだが、ここにいないつつーことは食堂かアリーナ、たぶん後者だろうな。大方、専用機持ちが一夏と箒に稽古をつけがてら新武装の慣らしをしてんだろ。あそこまで上り詰めた時点で相当の努力家達だしな」

今回は主に機動力を上昇させるためのパッケージをインストールしている。それも、キャノンボールファストのような完全最高速仕様で戦闘をある程度無視したものでなく、完全に戦闘を考えてのものだ。それに、それらすべてに対応AIを搭載している。それには自分が今までテストも含めて行ってきたデータが詰まっていた。どのような体勢ならばどの出力状態がベストなのか、というものがほぼ完全だ。あとは、その動きにパイロット側が対応できる状態にしておかなくてはならない。ずっとエネルギー限界まで限界飛行を続けるという修行のようなことをし続ける必要があるだろう。それができると判断したからこそ、万もそれを行ったのである。それに、その状況でただ飛べるといっただけでなく、さらに攻撃、防御、回避を行わなくてはならない。近接特化の白式ならいざ知らず、機体が学習したことで射撃武器も解放された紅椿含めほとんど飛

び道具を持っていて。つまり射撃のために狙いをつける必要がある。セシリアのブルー・ティアーズなどはその最たる例だ。そのために飛行時間は積んでおくに越したことはないだろう。

「ま、ここに連れてきたのはボックスの使い方説明。出し方教えてなかったろ？」

「そういえばそうだったな。だが、ISの量子変換と同じようなイメージでいいのだろうか？」

「そういうと、さりとて片手に弁当袋が出現した。量子変換と仕組みは同じなのだから確かに同じ要領で取り出せるわけなのだが。」

「一発かよ」

「珍しいのか？」

「少なくとも俺は想定してなかった」

「そういうながら方は適当に腰を下ろした。俺もそれに倣う。それはいいのだが。」

「パンツみえてんぞ」

「冷静に指摘しても、俺は訝しげに首をかしげるだけだった。」

「一般的にはそういうのはよくねえんだよ。スカートは体の下。足は閉じる。そうすれば隠れるはずだから」

「随分と詳しいのだな」

「体の構造考えりやわかる」

と言いつつ、実は女子の座るときの状態を思い浮かべただけだったりする。初めて割と本気で周りが女ばかりのことに感謝した。それにしても、

「本当に最低限のことしか教えられてねえのな。箸は使えるな？」

「ああ、一応は。というか、結構まめなのだな、万は」

「ま、物心ついた時から家事は自分でやってたからな。慣れたもんだよ」

そこまで言ったところ、万は弁当箱を開けて箸で口に運んでいく。ある程度したところで万が切り出した。

「どうだ、学校は」

「意外と大したことないのだな」

「だからそういったじゃねえか」

「ああ、そうだな。だが、女子というのはどうしてあそこまで知りたがるのか・・・」

「やっぱ質問攻めにあつたか。大丈夫だったか？ポロとか出してないな？まかり間違っても亡国企業フアントムタスクのこと言ったりとかしてないよな？」

「大丈夫だ。亡国企業に關しても何も喋ってなどいない」

そこまで言ったところで、自分も弁当をつつきながら一瞬顔を上げた。その万の顔は、今までの表情より幾分か和らいでいた。

「まさか、そこまで心配だったのか？」

「え、顔に出た？」

「それと分かるほどに顔色が変わっていたぞ。まったく、人のことを言えないな」

「おっしやる通りだな」

そういつて苦笑する。

「さて、放課後にアリーナの使用許可をとつてある。軽く手合わせと行くから、そのつもりでいろよ」

「了解した。して、どこのアリーナだ？確か、複数あるのだろうか？」

「さすが、よく覚えてたな。第一アリーナだ。それだけと、あとは様子を見るためだ。教室までは自分で戻れるよな？言っておくがIS起動させるのはなしな」

「ああ、・・・たぶん」

その言葉に軽いため息をつきながら言った。

「その調子じゃ心配だな・・・。んじや、放課後も教室で待つてろ。一緒に行くぞ」

そんなやり取りをしていると、二人とも弁当を食べ終わった。改めて地図で施設の場所を確認していると、予鈴が鳴った。

「よし、んじやここまで。また放課後迎えに行くから」

「分かった、待つている」

そういつて、二人はそれぞれの教室へ歩き出した。

39. 新兵器開発

放課後のアリーナで、二人は向かい合っていた。機体を展開し、己の得物を持ったレイクナイトの姿は、その名の通り騎士を彷彿とさせる。対するセイリユウは、いつもに増して静かで、その静けさが不気味だった。

突然鳴り響いたブザーに両者が一気に飛び出す。一瞬で最高速まで到達し、そのまま近接格闘に持ち込む。凡人ではまず目でしか追いつけないほどの速度で一気に己の得物を使って戦っていた。セイリユウはどこからか取り出したのか、長い棍棒を器用に使って剣と渡り合っていた。

「凄過ぎて参考にならない……」

後学のために見学していた周囲の生徒の一人がぼそりとこぼした。それもそうだろう、いったい何が起きているのかを正確に理解できるとしたら、教師の一部だけだろう。

その間も、接近しては得物を叩き付け、離れたと思ったらその直後には鏢迫り合いを繰り返している。また離れたと思うと今度は銃を打ち合っている。相手のほとんどを

回避してこちらのほとんども当てにかかると、牽制ではないことが見て取れる。あまりに上下左右にめまぐるしく移行するアクロバット寸前のような飛行は、それでいて攻撃を受けずに当てるということを考えられた飛行だった。そういう飛行機動はオート操作では少し以上のラグが発生する。そのため、少なからずマニュアルにする必要がある。その状態でこの戦闘は、なるほどレベルが違いすぎて参考になどできないだろう。

やがてその踊りのような戦闘は終わった。というのも、仕切りなおした瞬間に、セイリュウのパイロットの青年が声を上げたからだ。

「ストップ。今日はここまでだ。映像を見よう。その後で、お互い反省点を洗い出す」
その声に、レイクナイトのパイロットである少女も動きを止めた。そのまま二人は連れ添ってピットに戻った。

ピットに戻って、三つの画面に同時に映像を流した。そのそれぞれが別アングルで二つの機体のどちらかいないしは両方を映していた。

「さすがに、無駄が多すぎたか」

「そだな。ちよつとパフォーマンスの部分の大きすぎた感はある。けど、基本ができてこそそのパフォーマンスだ。そういうことを考えると、まあ、この辺だろ」

「もし一兄いちにいがこういうことをしようとしたら・・・」

一瞬、一兄いちにいって誰だと思っただが、すぐに誰を指すか頭の中で特定することができた。「あいつだったら、そうだな、一分は持たんな。んでもってその間に何もできずに落とされる」

「そういうものか」

「ああ。特にあいつは高速機動しながらの作業は苦手の最右翼としてるらしいからな。まったく、その辺しっかりしねえと雪羅も活かせないだろうに」

「雪羅には砲撃も搭載されているのだったか、確か」

「その通り。つつても、本人があああの射撃センスだから、滅多に使わない。それに、あいつはそういう小賢こけんしいこと考えるより、剣一本で突貫するほうが強い。そういうやつだ」
「確かに。冬姉ふゆねえもそうだった」

そのコメントを聞きながら、万はもう一度立ち上がった。

「さて、なら今度は的当て競争だ。今度の敵は、それこそ雲霞のような大群だ。なら、その手の訓練は必要だ」

「分かった。さっそく始めようか」

その万の言葉に庵も立ち上がる。その反応を見て、傍のコンソールをさつきと操作しにかかった。

そのあとの訓練では、二人の間だけという限定的な環境ではあったが、連携の確認もした。さすがは亡国企業フアントムタスクの切り札とまで言われた人物、そのあたりの飲み込みは早かった。だからこそ、万もさっさと順応して連携をとることに成功していた。

「ま、今日の訓練の収穫はでかかったな」

食堂で夕食の秋刀魚定食をつつきながら万が言った。対面に座った庵は、その言葉に首を傾げた。

「ふおふなおふあ?」

「口の中の物飲みこんでから喋れ。行儀わるい。」

今日の訓練のおかげで、お互いの弱点、それを補うための戦闘方法、それに仮想敵の戦闘までやることができた。こいつは大収穫だよ。それに、そこまでわかってくれば、武装の構想も練れたしな」

何回かに分けて口の中の物を呑み込んだ庵は、それに食いついた。

「もうか?」

「頭の中ではもうある程度の構想は——」

「どんなものなのだ!?!」

万の言葉に、食事そっちのけで身を乗り出す。その目の中に星を見たのは間違いでないはずだ。

「落ち着け。それとメシはちゃんと食え。」

今のところ考えてるのは光学系の多機能ピットに、容量が許せばだけど、山嵐の改良型を載せるつもりだ」

「山嵐、というと、あれだな、打鉄式に搭載されている、マルチホーミングミサイル」
「こそ。あれを光学系の兵器にも対応させたりとか、ま、その辺は出来上がってからのお楽しみってことで。できるだけ急ピッチで仕上げるけど、ま、すぐには難しいだろうね」
「そうか」

その言葉に少々以上にながっくりといった表情を見せた。あつさりと秋刀魚定食を食べ終えた方は、横に座ってから庵の頭にぼんと手を置いた。

「大丈夫だ。絶対間に合わせる」

その言葉に、庵は笑って頷いた。

部屋に戻ってから、庵がふと思いついたように言った。

「そういえば、今朝起きたときに万のベットにいたような気がするのだが……。気のせいだろうか？」

「気のせいじゃね？ 大方寝ぼけてたんだろ」

万の嘘はいつも自然だった。息をするように嘘をつくとはこのようなことを指すの
だろう、としばしば思った。

「さて、勉強で分からんこととかつてあるか？」

「そのあたりは問題ない。むしろ、知っているような問題ばかりで退屈なくらいだ」

「退屈なのはいいが、授業サボるなよ」

もつとも、そんなことを言っている方が授業をさぼっていることがあるのだが、その
あたりはご愛嬌だろう。

「さて、整備室は開いているようだし、ちよつくら行つてくるか」

「私も行きたい」

その言葉に、万は振り返った。庵にふぎけたような表情は見受けられなかった。

「きつとものごく退屈だぞ？」

「構わない」

一歩も引かない、といった風情の庵を見て、万は一つため息をついてから言った。

「分かった」

姉弟そろつて頑固というか、一途というか、そういったところがあるらしい。

整備室に入った瞬間に方は右手を横に振った。右にいた俺は予備動作を読み取ったのか、すと後ろに下がって事なきことを得ていた。すぐ後にキンという硬質の音がして、カランと何かが落ちる音がした。

「あらあ、ずいぶんな歓迎ね？」

闇の中から聞こえた声にはその方向を正確に睨んだまま唸るように返した。

「うるせえ。闇討ちの可能性もあったからな、警戒しないわけにはいかねえんだよ」

そういつて電気をつける。そこには「Ca不足？」と書かれた扇子を持った、水色の髪に赤い目の女生徒がいた。

「誰がカルシウム不足だ、誰が。てかなんで元素記号なんだよ、カタカナじゃねえのかよ」

「だってカルシウムって長いじゃない？」

「高々5文字だろうが。つーか、それ鉄扇だったんだな」

「まあね。護身にもなるし。ほら、私ってばか弱い乙女だし？」

「あんたが弱い乙女なわけあるか。むしろ人を化かして食らう女狐じゃねえのか？」

「あらやだ、酷いわね。で、その子が例の編入生ちゃん？」

「まあな。急だったから俺のルームメイトだ。で、俺がここに來るって言ったらついてくるって聞かなくてな」

「へえ。面白い子ね。」

初めまして、この学園の生徒会長、更識楯無よ。よろしくね」

「織斑庵です。よろしくお願いします」

自己紹介に対して、庵も自己紹介する。変わらない楯無の食えない笑顔に、万はそつと腹話術を使つて耳打ちした。

「気を付けろよ、人化かすのが大好きな変人だから」

「ちよつとそこ！変なこと言わない！」

「俺は別段変なことを言つたつもりはありませんが」

「人を化かすのが好きつて、そんなわけないじゃない！悪評の流布よ！」

「あ、そうでしたね。正確には妹を溺愛していてウザがられている腹いせに人を化かすのが大好きな変態さん、でしたね」

「なおのことひどいわよ！」

まるで漫才のようなやり取りに、庵はクスリと笑つた。その顔を見てか、万が話の方向性を変えた。

「ま、とりあえずシスコン変態生徒会長は置いといて——」

「シスコンはともかく変態じゃ——」

「俺らは目的を果たすとするか」

合間に入る抗議を完全にスルーして方はコンソールをいじりだした。例によってそのスピードは規格外に早い。腰につけたボックスを放り投げると、何も無いハンガー部分に材料がガラガラと音を立てて落ちた。材料と一口に言っても、銀色、銅を思わせる光沢のある茶色、何やら樹脂と思われる白に近い色など、パツと見ただけでもかなりの種類が混ざっていることが分かる。

「さて、始めるか」

そう言つて軽く腕まくりをする。もう一度向かい合い、操作を再開する。コンソールを操作するスピードはさらに上がった。

「あれからさらに．．．!？」

驚きのあまり楯無は絶句する。その反応を聞こえていないかのように——実際聞こえていないのだろうか——周辺機器を一瞬で操作しながら、自分の望むものを一気に形作つていく。多数の金属や非金属材料があつという間に形を変えていく。

「さて、今日はこの辺かな」

そういった頃には、もうすでにそれぞれがどういった部品になるのか大体想像することができくらいいはなつていた。

「なんていう速度．．．」

楯無はいまだに驚いているようだった。といつても、俺も自分の機体の調整くらいは

できるが、これほどの速度でというのは到底できない話だ。

「ま、コツつかめば結構簡単ですよ」

「そういう問題かしら・・・?」

「そういうもんです。とりあえず、部屋に戻らないと。織斑センセにどやされる」

素晴らしいながら、やや遠くに転がっていたボックスをとって部品をその中に格納する。戻ってくると、すつと庵の手を取った。

「さて、軽く走んぞ」

そのまま部屋の扉を閉めて、ランニング程度のスピードで走り出した。

「ふうん。面白い取り合わせね。」

残された楯無は、楽しそうに笑いながら扇子を広げた。そこには「今後に期待」と書かれていた。

40. むべ山風を

それから暫くはまた整備室に通い込む日が続いた。さすがに休みの日のような暮らしはできなかつたが、それでも整備室かアリーナにいたことが多かった。そして、庵は万のいるところであればほぼ常にそばにいた。その様子は、ある教員に「実の兄妹である一夏君よりも兄妹のよう」といわれるほどだった。もつとも、言われた当人たちは複雑だった。

「なあ、無理して俺に付き合うことないんだぞ？」

ある日、万はアリーナで庵に言った。ビツトの調整を行ったり、山嵐改良型（こがらし） 凧（こがらし）のフィーリングを聞いたり、確かに庵が近くにいてくれるというのは開発も捗るといふものだが、こうも毎回いられると逆に不安になってくる。というのも、確かに安全すぎるくらいに十分な教育をしたのは認めるが、宿題などはやらなくて大丈夫なのかと心配になってくるのである。

「無理などしていいない」

「宿題とかはどうしてるんだ？」

「学校でその日のうちに終わるくらいの量だからな」

つまりは授業の片手間で済ませているらしい。ベクトルは違えど、織斑の血というのはいつたいうようになっていのかと少々以上に興味がわくほどだ。

「俺が言えたことじゃねえけどよ、授業は真面目に受けるよ」

「大丈夫だ。ちゃんと答えられるくらいには予習をしている」

どうやら実技重視の天才で感覚肌の姉と兄とは対照的に、こいつは相当以上に頭が切れるらしい。

「そうか、ならいいけど。——ほい、風の調整完了。とりあえず出たらすぐに大量の的を連続で出しまくるから、風で片っ端から撃ち抜いてみてくれ」

「了解」

その言葉とともに俺はカタパルトから飛び出していった。開発者たる自分が言うのもなんだが、風というのは相当以上にピーキーで使い手を選ぶ兵装だと思っている。それを使いこなしてしまうという事は、相当な腕前とセンスの持ち主だということだ。敵にいれば怖いのが、味方なら相当に心強い。

そんなことを考えながら絶え間なく機器を操作する。万の腕前をもってしても、休むことなど許さないスピードで状況はめまぐるしく変化していく。もともと背部に備え付けられていたスラスターを改造する形で取り付けられた風は、最大連射弾数が軽く100を超している。自爆を防ぐために連射間隔を調整する機能もある。だが、最速で1

00連射を3秒足らずで吐き出すという連射能力は、そのすべてが実弾ミサイルであることを考えると驚異以外の何物でもない。

しかも、光学兵器も発射可能で、その場合偏向射撃フレキシブルを利用した上で連射速度を上げるという機能まで存在する。開発者としても、秒間100発を超える光学兵器に偏向射撃などというのは、いくら補助AIがあるといっても使用者を選ぶものだ。さすがに極限過ぎる性能なのだが、それすらも使いこなすという庵を見ると、織斑の女というのはある種化け物なのかと思つたほどだ。庵の場合、育つた環境などによるものが大きいのだろうか。

片方の目でパイロットのバイタル、脳波、姿勢をモニターし、もう片方の目で破壊状況などを確認する。その速度で確認し続けるのは彼をもつてしても相当な難易度だった。これだけあれば十二分というほどのデータが取れたところで、的の出現を停止させ、無線を繋いだ。

「OK、ご苦労さん。戻ってきてくれ」

頭の中でデータを整理する。もともとパイロット側に対する余裕——遊びともいえる部分がかかなり削減された、かなりピーキーな機体だと思つていた。それに合わせて調整した追加武装があることで、相当以上のじゃじゃ馬、もとい化け物に仕上がっている。ISの競技規格を細かく覚えてはいるわけではないが、これでは明らかにそれに違反

するか、違反すれすれといったところだろう。もつとも、これほどまでの化け物は彼女以外には扱えまい。

「どうだ？」

「うん、これくらいの方が私にとっては丁度いい」

技術者としては、これではいくらなんでも兵器側の反応が早すぎて、とてもではないが使えたものではないと思っていた。だが、それを丁度いいとは。

「・・・マジかぁ・・・」

ここからは完全な未体験ゾーンだ。何が出るかわからない。それこそ、鬼が出るか蛇が出るかだ。しかしもうすでに賽は投げられている。一発賭けてみるしかないだろう。

「分かった。技術者としてはこの状態ですらあんまり推奨したくはないんだが・・・。そちらがいいというのなら、続行だ」

「何が悪いのかよくわからないんだが・・・」

「端的に言くと、今のレイクナイトの状態は、機体側の反応が早すぎるんだ。人間ついでうのは思考してから体が動くまでに若干のラグがある。考えてから機体が動くまではそれよりさらにラグがあるわけだ。だけど、レイクナイトは殆ど考えてすぐ動く状態だ。並のパイロットなら、まずその動きの速さに順応ができない」

「自分が想定しているより機体が早く動きすぎること、かえって危ない、ということ

か」

「ま、そういうこと。だけど、あんたがそれに対応できるってことは、ま、それだけ頭の回転が速いってことか。もしくはそれ相応のトレーニングで培ったか」

「特殊なことなのか？」

「特殊っちゃー特殊。だけどその気になればできると思う。」

「つーのも、人間はまず神経系が先に発達する。発達度合いとしては、大体ハイティーン……っていつてあんたにはわからんか。つまりは10代後半までに9割以上が完成するといわれている。んでもって、そのちよつと手前の頃のガキの頃っていうのは物覚えっていうのが滅茶苦茶いい。だから、そういつたときに体を積極的に動かしたり、楽器をやったりっていうことをすると、結構先までできるってことがまあある。一般的に、この物覚えのいい時期っていうのをゴールデンエイジっていうんだが、その時期っていうと丁度IISの特訓をしていたりする最中だったんじゃないか？」

「ああ、そうだ」

「だらうな。で、その結果、人並み外れた操縦技術と反射及び判断能力が身に着いた。ま、こんなとこかなー。どちらにせよ、フロントムタスク亡国企業が結構エグいセットアップの機体を持つていることも分かったし」

「レイクナイト並、ということか？」

「さすがにここまでエグくはないだろうな。正直言つて、これの根幹プログラムを見たときの俺のびつくり度合いは筆舌に尽くしがたいよ。でもま、これより、そうだな、0.1秒無いくらいの差だろうな。そうじゃなければこんな早く順応することなんざ不可能だ」

会話をしながら、データを一気にまとめていく。的の命中率、命中位置、出現してからの速度、それらを一気にまとめ、分析する。結果は——

「うん、流石。概ね問題なし。若干ながら、射撃したのと反対方向にある的の破壊が甘いのが気になるけど、まあ、許容範囲。背面への射出口も使いこなしてるみたいだし」
「当然だ。使いこなしてこそその武器だろう」

「ま、そりやそうなんだけど。ロックオンしてぶち抜くっていう感覚さえつかめれば、実弾でも簡単なのは。エネルギーの残量はどうか？」

「今回復して・・・大体8割といったところだ」

「いける？」

「私は大丈夫だ」

「OK、じゃエネルギーが回復し次第ゴー。今度は風の実弾のみでぶち抜いてくれ。これの特性上、弾切れっていうのは発生しないはず」

「分かった」

そこでいったん言葉を切ると、おもむろに量子変換をして後ろを向いた。その手にはいつぞや使ったリボルバー。だが、そのセーフティが解除されることはなく、すぐに銃口を上にあげて再び量子変換で消えた。

「なんだ、セシリアか」

その銃口を向けられた相手は少々怒りのこもった微笑を向けながらこつちに歩いてきた。

「ご挨拶がいささか以上に過激ですわね。思わず背中に汗をかきました」

「悪いな。ちつとばかりテスト中だったからさ。先の件もあつてかなり神経質になつた。それに、てつきりおたくらは別のアーリーナにいてと思つてた」

「今はほかの人たちの順番ですの。わたくし達だけで占領するのはよくないですから。ところで、わたくしは信頼に足るということですか？」

「たりめーだ。誰がわざわざ信用できないやつと組みたがる」

その言葉に、セシリアは呆れたように一つ息をついた。

「まあ、いいでしょう。それより、すごい兵器ですわね、先ほどの」

「ああ、あれな。凧つていうんだ。もう一発テストして、本人のフィーリングチェックと調整をするつもり。早い話が慣らしだな」

「慣らしで、あれですか」

「慣らして言っても結構全快でぶっ放してた節あるけどな。しかも、BT適正はびつくり、計測不能ときた。推定Sオーバー。こういうっちゃ悪いが、俺らとは物つつーか、格が違う」

「そうですわね……。Sオーバー、ということとはもはや申し子ですわね」

「そだな」

そういうセシリアの顔に悲壮感はなかった。そこにあるのは、あくなき向上心だった。

「ところで、レイクナイトというのは？」

ふと思い出したようにセシリアが言った。よく考えてみれば、この改造は一切学校側に伝えてはいない。必要もないのだが。

「黒騎士のままじゃ目立ちすぎるからな。あれ、と思うやつも出てくる可能性がある。そのための処置だ」

「なるほど。確かに、色彩だけでも変えてしまえば、印象は大きく変わりますものね。もつとも、わたくしもわからなかったクチですが。」

それにしても、手を加えすぎではありませんこと？」

「ま、それはあるかもな。どちらにせよあの化け物は庵にしか扱えんよ」

「化け物？レイクナイトが、ですの？」

「十分に化け物だ。思考してから動くまでの遊びがほとんどない。パイロットの技量次第で化け物にもポンコツにもなる」

「もはや、じゃじゃ馬ですわね」

「正直言つて、俺にも何が起こるかわからん。こんなペースで使つて、パーツの耐久とか、その辺が、な。通常のそれより格段に早いだろうってことだけだ」

そんな会話をしていると、唐突に光が発せられた。

「エネルギー充填が終わった。出るぞ」

「OK。・・・悪い、セシリア。ちと静かにしてくれな」

「わかりました・・・？」

この男がこんなことを言うのは珍しい。不審に思いながらも、こいつのことだから何か考えがあるんだろうと思ひ、従うことにした。

「よし、始めるぞ。カウントダウン。5、4、3、2、1、開始！」

その声とともに無数の的が出現する。少し遅れて轟音。その音は途切れることがなく、連続で続く。まるで花火が絶え間なく咲いているような、そんな轟音だった。もの見事に出現する端からの的を撃ち抜いていく庵とレイクナイトを映すアリーナの映像から少し目を離し、万を見る。すると、そこには二つの画面を見ながら完全なブラインドタッチでコンソールを操作し続ける技師がいた。この的の制御にとどまらず、計測ま

でおそらく彼が行っているのだろう。到底常人には真似ができない技術だった。(すごい……)

思わず、その作業に見とれた。今までになく真剣なその横顔と流れるような手つきに。どんな絵画でもこんな気持ちになったことなどなかった。まるで無駄を一切そぎ落としたような、機能美の究極系。それが美しい。

「……OK、戻ってきてくれ」

一言万が告げると、その轟音はやんだ。同時に目頭を押さえて軽く頭を振る。あれほどまでの情報量なのだ、いくら天才、神童と評された彼でも疲弊するだろう。

「お疲れ様でした」

そういつつ、右手に水筒を量子変換。自分のものなのだが、ここまで疲れている相手に何もしないというのは、己の矜持が許さなかった。

「ああ、……ありがとう」

ゆつくりを目を開け、水筒を受け取る。中身はスポーツドリンクだ。多少でも糖分が入っている以上、お茶よりましだろう。

「にしても、すごいですわね。今のは、なんという武装ですか?」

「あれも冨だ」

飲み物を飲んで一息ついた方が答えた。それに、セシリアは疑問を覚える。

「あら、凧というのは先ほどの光学兵器の名前では？」

「凧は実弾、光学両方ともいける。設定を切り替えることだな。正直言つて、これはどう
いう風に調節してもじゃじゃ馬。エネルギー食いまくるし」

「ものすごい兵器ですわね」

「まったくだ」

そんな会話をしていると、庵が戻ってきた。

「どうだ？」

「光学兵器と多少感覚が違うが、問題ない」

「すごいですわね、この兵器」

「そうだな。長時間使うと、流石に疲れる」

そんな会話をする女子二人の横で、時計を見た方が言った。

「そろそろ時間だ。ちようどいいし、今日は三人で飯と行くか」

「そうだな。私も、オルコットのことを知りたい」

「セシリア、で構いませんわよ。庵さん、とお呼びしてよろしいかしら？」

「問題ない」

「んじゃま、行くか。つつても、庵は一回着替える必要があるけど」

「それに関しても問題ない」

そういうと、俺は虚空から制服を取り出して羽織った。さすがにもう少し羞恥とかそういうったことはないのかと思つたが、指摘するだけ無駄だということは学習していた。

「食堂でいいか？」

「構いませんわ」

「私も希望などはない」

「了解。んじゃ行くか」

その万の言葉で、三人は歩き出した。

4 1. 日常、そして凶報

そんなことがあつた日から2週目、I S実習の授業がやってきた。その日は、1組と3組の合同だった。

「さて、今日から本格的な飛行訓練に入る。これがしつかりできれば、空中戦も容易だろう。三組はこれまでおそらく、飛行しながらの戦闘風景など、行事やイベントでしか見たことがない生徒が多いだろう。そういうわけで、織斑妹、黒川。円軌道のシューターフロアを見せてみる」

「それはいいですが、なぜ俺ら二人だけなのでしょうか？」

「分かる説明がしやすいだろう。織斑がうまく説明できなくても、黒川ならデータで分析して説明することもできるだろう。お前が手を入れた機体なのだから」

その言葉に周りがざわめいた。少々調整程度ならできるが、データ分析から説明ができるほどに手を入れたりするのは、この学年では万だけだろう。

「飛びながらデータ分析しろってことですか？」

「そういったつもりだ。朝飯前だろう。通信はつなげたままにしておけよ。こちらで聞こえるようにしておく」

（「朝飯前だろう」って、俺でもそこまで楽勝ってわけじゃねえんだが）

内心で軽く反論はするが、それを許さない眼光にその言葉が口から出てくることはなかった。

「了解です。んじゃ行くか、庵」

「ああ」

その言葉とともに専用機を展開する。展開がコンマ数秒のうちに終わるあたりは、二人とも慣れていてる。

「早・・・」

「何を言っている、お前もこのくらいはできるようになれ。・・・じゃあ、飛べー!」

感心する一夏を一喝して、号令。同時に二人が飛んだ。

「で、もう始めてもいいんです?」

「ああ、始めろ」

「了解です。んじゃ、まず円軌道から」

そういつて、二人はゆっくりと横に旋回を始めた。

「ただ旋回飛行するだけってのは簡単。オートの制御で十分ですから。けど、こうするとデジタル制御だとどうしてもとっさの動きに反応ができない。そうすると」

説明途中で庵が撃ってきた。とっさにかわす。一瞬動きが乱れるが、まったくもって

問題ない。

「こういうときの回避ができなくなる。少々難しいですけど、マニュアル制御でこれくらいをできるようにしておいても、少なくとも損はないと思います・・・っと」

説明しつつ、撃つてくる庵の攻撃をかわす。

「あつぶねー。せめて説明くらいはちゃんとさせてくんねえ?」

そういつつ、お返しとばかりに撃ち返す。が、その程度を苦にする庵ではない。

「これを捌くくらいは簡単だろう」

「いや、説明しながら分析しながら攻撃躲せて結構無茶だからな・・・と」

いつの間にかシューターフローに移行していることに気付いた方は、さらに説明を続けた。

「結構自然にやっていますけど、これがシューターフローってやつです。今回はお互いに光学系なんで、リコイル・・・銃の反動はそこまで考える必要はないですけど、多少は考える必要があります。実弾系ならリコイルがこれの比じゃないんで、そのあたりまで頭に入れる必要があります。んでもって、お互い立ち位置が固定されていないので、その中で狙いを定めて撃つ必要がある」

「そして、相手から撃たれる可能性もある。その時のためのマニュアル操作だ」

「そ、つまりは、とっさに回避するのはマニュアルってわけ。だから、こうして撃つて躲

してをお互いやってるわけなんだけど、その行動は全部マニュアル。最初は疲れるけど、これができるなきゃ射撃戦はまず勝てないよ・・・と」

「よし、説明はその辺でいいぞ。私がよしと言うまで続ける」

「了解」

そういつて、一気に手の動きを速めた。説明しながらだとしてもスピードが落ちる。仕事の一つ減ったのならば言うことはない。

「んじゃ、やりますか」

ここからが本当の本気だ。そう思いつつ、銃をもう一丁取り出した。

そのころ、下では、繰り広げられる光景のハイレベルさに数人の生徒が目回していた。曰く、「凄過ぎて全然参考にならない」、「前も思ったけど、この二人つて本当に候補生じゃないの?」、「努力しても追い付けなさそう」、などなど。だが、それでも目を離す生徒はほとんどいなかった。

やがて、千冬が通信機に向かって指示を出した。

「よし、もういいぞ。降下して来い。今日は二人とも5cmを目標としろ」

5cmか。よし、ちよつとふざけるか。

そう思った方は、庵と同時に降下する。庵は普通に降下したのだが、万はというと。

生徒たちは、藍色の機体が自分たちのほうに向けて落ちてくることに言いようのない恐怖を覚えた。ラウラがとっさに自身の専用機を展開し、AICの発動準備に入る。気が付いたらセイリュウは少し離れた地点に着地していた。

「2cmちよいか、ま、上等かな」

「何が上等だ貴様」

叱責の声とともにIS用の武器が飛んできた。大方近くに置いてある訓練機から出したのだろうが、生身で投げるあたりが千冬である。

「生徒たちに突っ込もうとした挙句、それを個別連続瞬時加速リポルバレイクニツジョンブーストで躲せ、などというふざけた指示を出した覚えはないぞ」

「本気で突っ込むわけじゃないですか、ふりですよ。それと、個別連続瞬時加速はちよつとしたパフォーマンスです」

「パフォーマンスの度合いを考えろ。さすがにあれは私も気が気ではなかったぞ」

「いやー、確かにやっちゃってたら大事故でしたねー」

あははと笑いながら言っていると、後ろから二筋の光条が頭の横を通って行った。ギギと音を立てるようにそちらを向くと、専用機を部分展開するセシリアと、展開しきつたレーゲンのレールカノンをこちらに向けるラウラの姿。

「いや、冗談だし、ね?」

「冗談でも言っているいいことと悪いことというのがございますわ」

にっこりと笑いながら、しかも口調も柔らかいのに、一切柔和な雰囲気がない。

「そうだな、私はかなり当てる気だったぞ」

「いやちよつと待て、それやったら割とマジで俺が無事で済まないんだが」

「無事で済ませる気もない」

ラウラのほうはいつも通りと喋っているのか、相変わらず表情が大きく顔に出ることはないが、かなり怒っているというのが分からないほど鈍くもない。一瞬だが確実に背筋が冷えた。

「まあ、とりあえず、二人とも落ち着こうぜ、な？」

「ああ、これ以上この授業で無茶をしないことが条件だな」

「分かった、条件は飲むから、機体をしまってください」

「それはお前が言うことではない！」

一喝ともに出席簿の一閃。その痛みに思わず蹲る。つくづく、あの出席簿には鉄板でも入っているのではないだろうか。

「とにかく、専用機持ちのところに分かれる。ふざけた偏り方になるようならこちらで決める。高校生なんだ、そのあたりは周りを見る。以上、別れ！」

その授業では特にトラブルなどもなく、そのまま授業が終わった。その足で整備室に直行する。セイリユウを展開すると、そのままコンソールを一気に操作する。

「やっぱりか」

先ほどの授業で、いくら機動力と攻撃力を集中させたパッケージでも、あんなに簡単に大技が成功するとは思いつらい。もう少し難易度が高いはずなのだ。なのに、できた。もう少しマージンがありそうだということくらいは簡単に分かるほどに。

結論として、得られた情報としては、多くの武装の書き換えなどにより様々な戦闘スタイルを学習した結果、もう間もなく二次移行セカンドシフトが発生するということだ。前に一夏の白式をいじったときに出てきた履歴データの一部によく類似した一角が散見される。間違いないだろう。

開発者兼パイロットとしては、一抹の寂しさと嬉しさが交ぜになって、妙な心地を生み出していた。以前の庵の時もそうなのだが、まるで子を持った親の気持ちだ。庵の時はそうでもなかったのだが、セイリユウは開発に自分が密にかかわった機体で、その思い入れも大きい。それもあろうのだろう。

万が予想している大規模戦闘が現実のものになったら、まず間違いなく彼の専用機はアイギスとなるだろう。だが、二次移行セカンドシフトを完了したとなれば、この機体もただ廃却とは

いかない。だが、最悪、この機体には活路がある。それは、もうすでにわかっていた。「やはり、ここにいましたのね」

その声に振り向くと、そこには金髪の生徒の姿。

「どうしたんだ、セシリア。機体の調整か？」

「いえ、そういうことではございませんの。」

単刀直入に申し上げます。わたくしとお手合わせ願えませんか？」

その目にはふざけていたりからかっていたり様子はない。もとより、セシリアはこんな冗談を言うような性格ではない。

「それは、武装チェックの最終確認、つてことか？」

「それもありますが……。純粹に、力試し、ですわ。あの時から、お互いどのくらい変わっているのか。どれほど上達しているのか。それが知りたいのです」

その言葉を聞きながら、セイリユウはブラインドタッチで端末を操作した。後ろから飛んでくる伊達眼鏡を後ろ手でつかみ、それをかけながら万は聞いた。

「だが、アリーナはどうすんだ？」

「それについては問題ありませんわ。今日はわたくしの日ですので」

「あー、なるほど」

要するにもう場所取りは済んでいるということだろう。その確認をとると、万は歩き

出した。その横にセシリアも並ぶ。

「時間は放課後か？」

「ええ」

「分かった。ただし、俺はこいつだ。その辺了解？」

伊達眼鏡のフレームを軽くたたきながら言う。軽い笑みで彼女は返した。

「こちらからあれこれ言う筋合いはありませんわ」

「OK、ならその線でいこう。で、ちつと急ぐぞ。時間がやべえ」

「ですわね」

二人は歩いていていたペースを軽いジョギング程度に切り替えた。

その日の放課後、二人はアリーナで向かい合っていた。

（そういえば、なんだかんだで最近アリーナによく来てるな。ま、仕事がないよりはあるほうがいいけど、忙しすぎるのもどうかと思うな。現に、最近反応が鈍くなってきた。ま、とにかく、）

そんなとりとめもないことを考えていると、カウントダウンが一桁まで落ちたことを告げる音が鳴る。すつと頭の中のスイッチを切り替える。

（今はこつちだ。さて、やるか）

試合開始。その瞬間に、万は今までとは違い横に飛んだ。いつもなら一気に突っ込んで終わらせるのだが、今回はとりあえず回避をする。しかし、その先にはビツトの光。

「やべ」

思わず声が出ていた。そんな暇なく、左腕に鏡面装甲を出し切り抜ける。だが、想像以上の弾幕でなかなか躲しきれない。ビツト増設させたのは確かに自分なのだが。

「さすがに弾幕きちーな」

こうなったら仕方がない。少々のダメージは覚悟を決めて一気に突っ込んだ。その瞬間、周囲を煙幕が包んだ。

その正体にはすぐに気づいた。スモークグレネード。確かにその射出機能は搭載したが、そこまで使えるようになっていたのか。

「こいつは、やばい・・・な！」

手に持った剣をそのまま横に薙ぎ払う。剣の腹を使ったことよって生まれた風で煙幕が途切れる。ハイパーセンサーを駆使して相手を補足すると、万は切り札を使うことにした。

「スラスター追加展開、一気に決める！」

瞬間、横に向けて瞬間加速^{イグニッションブースト}。そのまま、もう一度同じ方向に瞬間加速。そのまま手

に持った棍を横に一閃、その回転の勢いそのままにもう片手のアサルトライフルをフルオートで乱射。それにより数機のビットを撃ち落とす。安心するのもつかの間、そのまま瞬間加速で後ろ向きに移動しつつ、回転。横に薙ぐと、硬質な手ごたえとともに振り抜く。そのまま数発さらにアサルトライフルを放つ。ドドドン、と大きな音とともに煙がたつ。

煙が晴れる前に、一気に突っ込む。そのまま白兵戦に持ち込む。縦横無尽に攻める方に、セシリアは防戦一方となっていた。

（やっぱり、近接だところちのほうが上か。このまま押し切る！）

そう思いつつ手を休めず攻める。どころか、ラビットスイッチ高速切替で呼び出した近接武装を駆使して一気に攻めたてる。

だが、突然方が瞬間加速で横に飛んだ。一瞬遅れてセシリアも横に飛ぶ。その直後、二人が先ほどまでもつれ合っていたところに光が飛ぶ。

「あつぶねー、おつかねー」

「煙越しに突っ込んでくるあなたが言えた義理でもないと思いますが」

一回仕切りなおして憎まれ口を叩きあう。

「まあ、そりやそうかもしれないけどよ。それより、ここらで分けて気はない？」
「勝負は最後までわかりませんわ」

確かに、ブルーティアーズから闘志は消えていない。

「そっか。なら、こっからは本気の本気だ」

そういうと、武装を変更。背後の武装の一部も換装する。

「さて、仕切り直しだ！」

今度こそ一気に突っ込んでいった。

戦闘を終えた二人はそろってくたくたになっていた。

「いやー、強いな。ここまで苦戦したのは久々だ」

「いつまでも昔のままだと思ってもらっては困りますわ」

「ま、そういうことだな。とりあえず、反省とかは後回しにするか」

そういうと、臆面もなくその場にごろりと寝転がった。

「はしたないですわよ」

「いーじゃねーか。俺とセシリア以外に誰もいないんだし」

その言葉に、思わず一瞬言葉が無くなった。頬が紅潮するのが自分でもわかる。もつとも、本人はそういうつもりで言ったわけではないのだろう。それも含め、さらに二の句を継ごうとしたが、その眼鏡に数列の波が並んでいるのを見て口を閉ざした。

「何をしていらっしやるんですの？」

「あー、これ？データの解析。念のため、な。プログラムにバグとかあったりすると、この数列群にも問題が出るからさ。目に見えないバグがあったら大変だし」

「ですが、反省は後ほどと今さっきおっしやっていたではありませんか」

「それはそれ、これはこれ。反省をしたところで、今の状態じゃ体が動かないからな。この程度のデータ解析なら、何とかなる。幸い、頭のほうはまだ動くからな」

そんなことをあつさり言う方は、やはり規格外なのだろう。

「反省するだけなら今でも可能なのでは？」

「分かってねーな。俺にとつて反省は改善のためなの。だから、反省した直後にそれを改善するために動くんだよ。だけど、こんだけ体が疲れてるとなあ・・・」

そういういつつ、目線はほとんど動かさない。よほど集中しているのだろう。

「さて、終わった。このまま寝よっかな」

「それですと後々が面倒ですわよ」

「それはそうなんだがなあ・・・」

納得をしてはいるようだが、起き上がる気配は一切ない。どころか、その瞼はどんどん落ちて、やがて完全に閉じられた。すうすうと規則正しい息の音から、完全に寝てしまったということも分かった。

軽いため息をついて、どうしようかとセシリアは思った。そこでようやく初めて気付

いた。万はここまでほとんど休んでいないのではないのか。というより、働いた時間と休息の時間が明らかに釣り合っていないのではないのか。

考えてみれば当然の話で、セシリアも含めた5人の機体の武装を作って、それに応じた根幹プログラムの改良方針も決め、自分の機体の武装も決め、おそらく試験飛行もし、個々の調整に関する要求まで引き受け・・・と、これだけやっているのに、不信感を与えないように休息は人並み。そんな生活を長く続けていた万は、自分とは比べ物にならないほど疲労困憊だったのではないだろうか。

そう思うと、自然に体が動いていた。先ほど万が言ったように、ここには万とセシリア以外誰もいない。つまりは、ある程度恥ずかしいような真似をしても、本人たちが悶えるだけで大した問題はない。——と、言い訳気味に考えながら、すると寝ている万の近くに寄ると、その頭の下に自分の太ももを挿した。俗にいう膝枕である。

「お疲れ様ですわ」

そういつつゆっくりと額をなでる。すっかり熟睡しているのか、万は身じろぎひとつせず、静かに眠っていた。

暫くして、ゆっくりと万は目を覚めました。目を開ける前に、頭の下の方で暖かな感触と、規則正しい寝息が聞こえた。まさかと思いつつ目を開けると、足を延ばして自

分を膝枕しつつ、座ったまま眠るセシリアがいた。起こさないように静かに左手首の時計を見る。時間はもうすでに7時を示していた。

(やべ、時間。でも、セシリア起こすのも忍びないしなあ)

少し考えた結果思いついた結論をすぐに実行に移すと、万とセシリアはそこから離れた。

体を静かに揺さぶられる感覚で、セシリアはゆっくりと目を覚ました。

「起こしちまったか」

近くから聞こえた男子の声。すぐに万だとわかったが、理解が追いつかない。自分は今足を動かしていない。なのに、体は確かな前方向の速度を感じている。それに、いつもより少し視線が高い。——視線が高い？と、そこまで考えたところで今の状況がようやく理解できた。

「よ、万さん、あの、わたくしも自分で歩けますので、その、降ろしていただけますか？」

今、万に顔を見られる体勢でなくてよかったと割と本気で思った。そう、万がセシリアを負ぶって運んでいたのだから。恰好もお互い制服になっていた。

「おう、そいつは悪かったな」

ゆっくりと地面に降ろされる。恰好を簡単に直すと、後に続いて歩く。万は、ふつと

背中越しそに声をかけた。

「その、サンキュな、その、．．．さっきの」

軽く頬を掻きながら言う。微かに見える耳が赤い。この青年がここまで照れることは珍しい。それにつられるかのようにセシリアの頬にも、いったん冷えた熱が戻ってきた。

「あ、いえ、そんな、それほどでも、ありませんわ」

そんな会話をしていると、パタパタと走ってくる足音。

「いたいた、やっと見つけた。こんなところにいた」

そちらに顔を向けてみると、庵と嵐がこちらに走ってきていた。

「お、珍しい取り合わせだな」

今までの照れはいつたいたいどこへやら、あつさりと表情をいつも通りに変えた方は、二人に向かつて言った。

「まったく、今までどこにいたのよ？みんな探してたのよ？」

「そうなのか。アリーナで練習してたらくたくたになつて、二人そろつてピットで居眠りしちゃつてな。で、なんか用件があるのか？」

「なんかも何も無いわよ」

「スコールが来た。万に会いに来た、と。何かアポとか聞いているか？」

「いや、聞いてない。が、用件に心当たりならある。今、客人はどこに？」

「とりあえず学生寮の応接室に通したって、真耶ちゃんが言ってた。今は千冬さんと楯無さんが相手をしてるらしい」

片や国家代表IS操縦者にして学園最強。片やモンドグロツソ二連覇、そして三連覇の最有力候補であり、山肌を走って下るといふ人間チートをあしらえるくらいの人間だ。不足はないだろう。が、相性としてはよくない。

「分かった。すぐに行く。専用機持ちをどつか一部屋に集めてもらえるか？俺は先に行く」

了承も聞かずに走り出す直前、セシリアが待ったをかけた。

「わたくしも行きますわ」

「私も行くぞ。スコールがわざわざ出張ということとは、それなり以上に重要案件だろうからな」

「分かった、行くぞ。ついてこい」

短いやり取りののち、3人はそれなりの速度で走って行った。

部屋に入ると、そこは戦場かと思うような雰囲気に含まれていた。千冬はスコールのことをにらみつけ、スコールのほうは千冬を涼しい顔で見つめる。その涼しい顔という

のがさらに千冬の目線を鋭くしているのだが、スコールのほうが一向に動じる気配がない。楯無はいつでも仲介に入ることができるようにと身構えてはいるが、緊張はしていない。なかつた。

「失礼します。黒川です」

入室を促したのも千冬ではなく楯無だった。しかも、ドアを開ける形でだ。万のほうも部屋の前に立った時点でかなり緊張感ある雰囲気だということはわかっていて。それを裏付けるような行動だった。

「待ってたわよ」

「お待たせして申し訳ありません。慣れてるって言っても、この環境下でずっといるというのは精神衛生上あまりよくないですね」

「そうよー。今度何か埋め合わせね」

「はいはい、分かりました」

小声でやり取りすると、すぐに視線を前へ移した。それに気づいたスコールがまず声を発した。

「ごめんなさいね、突然押しかけて」

「俺としては突然でも大して構わないんだがな。で、用件てのは、襲撃か？」

「ええ。先ほど、デメテルが学園都市外へ何人か人員が、おそらく秘密裏に出たというこ

とをつかんだわ」

その言葉に、万は目を細めた。セシリアは驚きにか目を微かに見開き、楯無は笑みをわずかに深くし、織斑姉妹は表情を一切変えなかった。

「ま、手段は聞かないでおいてやる。で、それだけか？」

「いいえ。共同戦線を張らないか、って話。私たちとしては、ISを破壊されるわけにはいかない。私たちの目的は——」

「確か、ISの研究、ひいてはISによる女尊男卑の撤廃、だっけか」

さえぎつて正解を当てた方に、スコールは驚きを示した。

「・・・なぜそれを？」

「俺の洗脳を解くときに、な。記憶の一部も引つ張り出すことができたから、その時に一緒に覚えてたっただけだ」

「そう。なら早いわね。あなたの目的は、いったい何なの？でも、そちら側に立つということは、少なくとも彼らと同じではないのでしょうか？」

「敵の敵は味方、ということですか？」

「ええ。あなたたちにとつても悪い話ではないと思うのだけど」
「確かに悪い話じゃなさそうだが、断らさせてもらおう」

その言葉に、スコールは少なくとも驚きを見せていた。

「そう。それはどうして?」

「二つ目、俺があんたを信用できない。二つ目、俺に目的なんて御大層なものはない。以上」

指を立ててカウンントしながら言い放った方の言葉に、スコールは納得した。

「確かに、ちよつと前まで戦おうって言つてた身だし、信用に足らないというのは十二分に理解できるわ。倒した後に味方相手から背中を刺されるなんて言うのは冗談じゃすまないからね。ただ、あなたには目的がないってどういうことなの?」

「俺は、最初はなりゆきでここに来たにすぎなかった。けど、ここには、今まで経験できなかったものができた。正直言つて、こんな気持ちになつたのは初めてなんだが、俺はここを守りたいんだ。依頼がどうか、そういったこと抜きで、な。こんなのは目的なんて御大層なもんじやない、ただの俺の願望だ。ま、俺自身も最近になつて自覚したんだがな」

最後の一言は自嘲的だった。が、その言葉を聞いて、スコールは笑みを深めた。

「なるほどね。でも、それは十分に目的といえるのではないのかしら?」

「目的じゃねえよ。少なくとも、俺にとつてはな。 : : で、話を戻すが、俺は協力を断つた。が、代わりに、おたくらがどういう行動をとろうが、干渉をしない。それでどうだ?」

「もう少し詳しく聞かせてもらえるかしら」

笑んでいた顔を引き締め、軽く身を乗り出す。内心でかかったと思ひながら、万は続けた。

「簡単に言つちまえば、そつちが何をしようがこつちには関係ない。結果的に共闘するかもしれない、だけど闇討ちをするかもしれない。それに、戦つた後はお互いどうなるかわからない。ま、戦つた後にどうなつてるかもわからないから、こつちは当然つちやー当然なんだがな」

スコールは暫く沈黙を貫いていたが、やがて軽く肩を揺らした。

「ふふ、面白いわね、君。分かつたわ、その線で行きましょう。ただ、襲撃まで日がないということとは覚えておいてね」

「ああ。忠告感謝する」

そういつて去つていく。完全に姿が見えなくなったところで、万はゆつくりと息を吐き出した。

「お疲れ様です」

声をかけてきたセシリアに答える声も力がこもっているとは言いがたかった。

「ああ。さすがに気が張る。まさかこんな形になるなんてのは計算外だったからな」

「こういうところにはオータムが出てくることも少なくないのだが・・・」

「おそらく、戦力的に不安だったんだろうな。だから自ら出てきた」

「それだけ買われてるってことか。とりあえずはそう受け取っておくか」

そういうと、軽く膝を叩いて立ち上がる。

「さて、嵐のところに行きますかね。専用機持ち集めろって言ったのは俺なんだし」

応接室を後にする。その背中に、庵が一言問いかけた。

「終わったら、万はどうするつもりなのだ？」

それに対する返答は少し間があった。

「さてね、どうなることやら。ただ一つ確実に言えるのは——俺はここから去るだろう、ということかな」

そんな言葉を残して先に部屋を出た。

集まっている専用機持ち、より正確には一年の専用機持ちと楯無に対して、開口一番で万は言い放った。

「まず先に言っておく。——近々、この学校は攻められるぞ」

その言葉に、驚きはなかった。

「それにあたって、軽く作戦会議一つか、役割分担を決める。各々たぶん追加武装の慣熟は済んでるだろうから、それを前提として進める。そこを頭に入れておいてくれ」

そして、空間に現れるのは地図。その中で、方は実戦形式の作戦を組み立てていた。

42. 最終局面―狼煙―

それは、そこから数日後のことだった。

学校中に警告音が響き渡るようなことはなかった。ただ、それはすぐに知らせられた。

「来たよ」

静かに、官制で待機していた簪が、小さく呟いた。

『了解。各自持ち場につけ。事前に話した通りだ』

すぐに帰ってくる青年の声。それに対応するように、若い男女の声が響いた。そして、報告した本人も、行動を開始した。

「今回想定される敵は数えるのが馬鹿らしくなるくらいの大群だろう。それに、相手も戦闘機やらステルス機やらもいるだろう。それに、学園都市からの応援があるってこと

は、おそらく能力者からなる歩兵もいる。そいつらも立派な戦力だ。まず、その歩兵に
関しては、麦野、それから会長に任せたい。異存はありませんか」

「特にないわ」

「こつちからもなし。能力は使ってもいいんだよな?」

「もち。ただし、一般生徒に危害を加えないことが条件。まかり間違っても一般生徒が
入り混じってるのに拡散支援^{ジリ}半導体^{コシ}使って皆殺しとかはダメ。OK?」

「分かった分かった」

「よし。つーわけで、二人は主に歩兵戦力を任せたい。不足はないだろう。」

で、後方支援は簪に任せる。先生とうまく連携とつてくれ。それと、最初の見張りは
簪、俺、庵の三人が交代でやる。官制で確実に後方支援ができるのは俺らだろうからな」

自分で言った言葉を思い出しながら、万は手を動かす。

『先生への通知は終わってる。官制からの指示も、たぶん遅くないうちに来る』

「OK、サンキュな、簪。こつちはもう間もなくだ。残り時間推定2分」

『なんでそんなに早いのか?!』

「事態を想定してれば動きも早くなるってもんだ。喋ってる暇あったら行動しろ。敵の距離は？」

『最短で、推定77000くらい。音速は出してないみたいだから、多分数分で到着すると思う』

「了解。先制組、大丈夫か？」

『問題なし』

『準備は終わっている』

『今、向かっている。けど、先制攻撃までには、間に合うと、思う』

「後方出撃組は？」

『こちらも問題ありませんわ』

「OK、各々持ち場で待機。先制組はレーダーに引っかかった瞬間にぶっ放せ」

喋りながらも手は止めない。その間で作業を終えた方は、目の前に鎮座する機体たちをそつと撫でた。

「ごめんな。お前さんらには、もっと別の道を歩ませたかったんだけど」

自身の生み出した、子と同じような存在を戦場に送らなくてはならない。それに、少ない心痛を覚えていた。だが、彼女らの起動はもう終わっていた。もう、後戻りはできない。それは、彼自身が一番分かっていた。

「敵襲を感知した直後に、俺は学園の地下に行く。セイリユウのステルスを使えば潜り込めるはずだ。そこで、学園に訓練機として置かれているブラックバードとガンチャリオットを叩き起こす。その間に、おたくらは寮から出撃。三つ子を飛び出させた後、俺もアイギスで飛び出す。飛び出す場所は廊下からでもいいし、その辺は任せる。ただ、同室のやつには話さないこと。それが条件だ」

「同室の子に話さない理由って何？」

凰が一言聞いてくる。確かに、パツと理由は思い当たらないだろう。

「単純に情報漏えい防止だ。この襲撃のタイミングは細かくはわかっていたが、そろそろかなとは思ってたんだ。というのも、向こうからこつちに少し情報が流れてたんだ。わずかでも流れてくれるだけありがたいってもんでな。で、何が言いたいかっていうと、こつちがやつてることを相手がやっていないって保証はないっつーことだ」

「早い話が、信用ができないと？」

「いやにらみながらも箒が言う。自分と同じように生活している人物をそのように言われて、いい気分になる人間はいないだろう。」

「ま、そういうこと。言わないに越したことはない。」

で、こつからはしつかり聞けよ。最初の立ち位置に関して説明するからな」

『別に恨んでなんかないよ』

突然、無線に聞こえた合成音声の声。はつと見上げたそこには、ハンガーに掛けられた3機のヘルメットにあたる部分がちちらに向いていた。無人機であることを悟られないように全身装甲にしたその体が、こちらに向いていた。

『そうね。むしろ、感謝しているくらい』

『あなたがいなければ、私たちは生まれてなかった』

『それに、あなたも言っていたでしょう？ 所詮、ISは兵器だつて』

『ならば、戦場に出るのは至極まっとうなこと。違うか？』

その機械の声は、心に響いた。今まで感じたことのなかった感情に押しつぶされそうになる。

「それでも、俺は、ISの平和的な使い方つていうのを突き詰めたかった。その先駆けとして、お前らを送り出したかった」

殺し慣れてしまったからこそ求めた、ISを、兵器殺すためでなく、生かすために使う方法。そんなものは到底ないのだろうとわかっている、求めずにいられなかった。

『それなら簡単でしょ』

『至極単純明快な話だ。生きて帰ってこればいい』

『そして、その暁には、その方法を探せばいい。違う？』

その言葉に、思わず万は言葉を失った。それから、軽く笑って言う。

「そう、だな。じゃ、俺からの命令だ。——全力を尽くして、生きて帰ってこい！」

『了解だ』『そうこなくっちゃ！』『はい！』

揃った返答に、万は手元のコンソールを操作する。

「カタパルト、固定確認。OK、天井開口、OK。アリーナシールド、解除確認。システム確認、オールグリーン。射出準備完了。——行って来い！」

最後の一言ともにカタパルトから勢いよく機体が飛び出していく。飛び出した3機を目で追い、自身もアイギスを展開し、飛び立った。

「まず、簪、ラウラ、俺は先制組として待機。ハイパーセンサーを長距離にしておいて、先制で射撃をぶちかましてやれ。その射撃が終わり次第、残りが出撃。敵を殲滅していく。んだが、この時に、全員バイザーを着用すること」

「それって何か意味があるの？」

「視線か」

シャルロットの言葉に続くように言ったラウラに、一つ指を鳴らすことで肯定の意を示す。

「視線で相手の攻撃を読むっていうのはよくある話だ。俺にも覚えがあるしな。バイザーで目を覆ってやればそれはできなくなる。ちつさいかもしれないけどアドバンテージだ」

本来、バイザーを付けるということはもう一つ別の意図がある。だが、それはばらしてしまつたら意味がない。

「それと一応言っておく。今回の作戦は、絶対死人が出る。これはまず避けられないことだ。だけど、大抵のやつは人殺しをためらうだろう。でも、やれ。ためらうな。じゃないと、こつちがやられるぞ」

やがて、レーダーにちらりと先頭の影が映った。三次元レーダーから射出目標を定める。それは、ステルスで最前線に隠れていたアイギスにもはつきりと分かった。

そして、弾丸が放たれる。凧と山嵐から放たれる雨あられの弾丸、それを縫うようにレールカノンと極太のレーザーが飛んでいく。

「よし、行くぞ」

その一言で、アイギスも含めたISが飛び立った。

「本格的な戦闘になった時の立ち位置だが、基本的には俺、セシリア、篠ノ之、凰の組とシャルロット、一夏、ラウラの組、それから簪、三つ子、庵の組で動く。お互い通信を忘れるな。」

組って言っても、確認のためのグループ分けみたいなものだ。別に、セシリアのフォローを一夏がしてもいいし、簪がシャルロットの背中を守っても一向に構わん。簪と庵に関しては、簪が安心してサポートできるように護衛してやれ。庵の機体はかなりオールマイティな機体に仕上げたつもりだから、可能なはずだ」

「三つ子はその支援に入るといふことか？」

「ああ。それに関しては俺から伝える。幸いなことに、俺はメンテのためにちよくちよくあの2機の近くに行ってるからな。近々、つて言っても、最短で3日くらいは必要だろう。明日、学園に行つたときに作戦概要は伝える。あいつらのことだ、作戦遂行能力に関して、問題はないだろう」

「まあ、あのコンビネーションは脅威だったね。あれを単騎で打ち破った人もいるけど」

言いつつ、シャルロットは万のほうに流し目を使う。が、当の万は冷静だった。

「あれは俺とアイギスだからできたことだ。俺だから2機のコンビネーション攻撃が読めたし、アイギスだからその対処もできた。ま、あそこにいた無人機くらいだったらあの2機なら余裕だろうな。」

と、そんなのは置いといて。学園都市は無人制御というのも発達させている。つまり、機械類は少なからず無人制御が含まれるだろう。機械類は目下最大火力だろうから、それを考えれば、そっから叩くのが一番早いだろうな」

「人殺しをしたくなければ、機械類から叩いてこと？」

「理解の仕方なんざどうでもいい。どちらにせよ、戦闘機やなんやらあたりから叩いたほうが効率上がるだろう、ってだけだ」

高速飛行で敵軍に接近する。その間に、万は気づいた。明らかに万が知っているバードス駆動鎧とは違う機械がいくつか混じっている。それらの機体はもれなく有人制御も可能となっていることも、遠目から確認することができた。

「IS、いや、パチモンか？」

コア反応もなければ、スコープ越しに補足したのに機体情報も出ない。ということ

は、おそらく疑似ISだろう。兵器としてならISではなくとも似たようなものなら十二分に開発可能だということは、一時期とはいえ住人だった自分が一番分かっている。だが、どちらにせよ、

「叩き潰すまで」

そういつつ速度は緩めない。

『先制、命中は約8割。あとは撃ち落とされた』

「了解。そのまま支援射撃を続行、後発隊とともに攻撃を続けてくれ」

その指示を出しながら、片手に長剣を出現させる。

「交戦^{エンゲージ}！」

一言叫ぶと、すれ違いざまに一太刀。それで片翼を失った戦闘機は、そのままきりもみ落下していった。それを確認することなく、後方に確認した新型駆動鎧に向けて進路をとる。

今ここに、戦いの火蓋が切って落とされた。

あちこちで戦いの音が聞こえ始めたころ、生徒たちも何事かと目を上げだしていた。

「生徒諸君に連絡します、生徒は全員地下シエルターに避難しなさい。繰り返しします—」

その放送は、寮だけでなく外にも聞こえた。

「全員ごめん。今、寮に放送があつた」

それを聞いて、簪は通信を繋げた。

「それと一応言っておく。今回の目的はあくまで防衛戦だ。その過程で殲滅をするつてだけだ。で、防衛戦だから、生徒や施設を守る必要がある。だから、あんまり破壊力の大きい、周りを巻き込みかねない攻撃は禁止。ただし、周りに被害が出ないようにコントロールできるつていう自信があるのなら使つていい。

で、生徒の避難とかもさせるはずだ。その連絡は、戦場を経験したやつなら、無線とかで伝えるとか、ちよつと古風だけど伝令で伝えるとかすると思うんだけど——」

「ここは荒事に慣れていない人間が多い。そうならないことも十二分に考えられるな」
続けて言つた庵の言葉に、万は大きく頷いた。

「最悪なのは放送とかで声高に案内をしちやうこと。敵さんのほうにもバレるからな。そうなつた場合は、そこを重点的に防衛することになる。その場合、ラウラと篠ノ之がそつちのほうについてくれ。おそらく、避難先は地下シエルター。場所で言えばこの位置だ」

そういうと、地図の一角が囲われる。

「ラウラは初期位置でこのあたり。篠ノ之だとこのあたりだ。歩いていく歩兵部隊よりどう考えても早いだろう。ラウラは比較的近い位置だし、紅椿の機動力は折り紙付きだ。でも、二人とも全力で飛んでくれ。生徒が移動する前にそこを潰された場合、それ以外で安全な場所っていうとおそらく学校の施設になる。てことは、屋外を移動することになるだろう。」

相手の目的は、おそらくI Sの操縦者根絶。いくら技術があっても、それを使える人間がいなければ話にならないからな。なら、間違いなく狙うのは人間が密集するポイントだ。そこが分かっているのなら狙えばいいだけの話。特にそのポイントで守るのは二人だけど、他も頭にだけは入れておいてくれ

で、放送に気付いたやつは誰でもいいから無線でメンバーに連絡。OK?」

「もし放送に気付けなかったら?」

「そのままだ。攻撃が集中し出した時点で自主的な防衛に切り替える。ま、その場合、おそらく目標がそつちに集中することになるから、自然とそうなるだろうけど」

無線を聞いた方は、剣を振りながら盛大に舌打ちした。

「まったたく、平和ボケした馬鹿どもが……！ラウラ、篠ノ之！」

『わかっている！』

『今向かっている』

二つの声を聞きながら、万は先に進む。時折ばらまかれる弾幕を避け、斬り、防ぐ。新型の駆動鎧は1機でも撃墜する必要があるだろう。生憎とその新型は奥のほうにいた。ならば、奥まで突っ込んで撃破するしか、手段はないだろう。

(さて、行くか、本丸！)

自分に喝を入れ、一気にスラストを吹かした。

「学園都市のことだから、超高感度サーマルセンサーくらいは持つてくるだろう。となれば、歩兵部隊が突入してくるのは生徒の避難したタイミング。さすがに輸送機とかは空中で送ってくることはないだろう。とすれば、おそらく、潜水艦とか、もしくは陸路で来る。陸路って言っても、ここは島だから、おそらく前者。どこから接岸してくるか、つてとこだけ……大きな可能性は、形式上の港であるここか、逆に絶壁の……、それから低地になっっているここやここだな」

そういうと、いくつかのポイントが地図上に表示される。が、

「・・・多いな」

「ああ。だから、俺は2つの作戦を提案する。ひとつは、ふたりに2ポイントで待機してもらおうやつだ。感知できない範囲は、簀、篠ノ之、俺、三つ子のハイパーセンサーと官制で補うっていう方法だ」

「その2ポイントというのは？」

「正直言つて、港のほうは形式上とはいえ警備がある。そこを突破するとなると大なり小なり消耗があるから、そこは避けるはず。その日の風にもよるけど、絶壁を上るっていうのも、同じ理由で却下。となると、低地の2か所。そのどちらかに来るだろう。そっちに山を張る。これはうまくいけば周りをほとんど気にせず戦闘できるから、戦いやすいっていうメリットがある。が、当てが外れる、くらいは特に問題ないかな。最悪なのは戦力を分散された場合。そこを撃破しても、目的を達成させられる。相手は殲滅が目的だからな。」

で、もう1個。俺はこつちを推奨したいんだが、これは避難先の近くで待ち構えるって方法だ。相手はおそらく避難先を狙って叩き潰す腹だろう。だったら、そこで待ち構えて一気にやり返す。これは、もし相手の目的が破壊なら取り返しがつかないうえに戦いにくい。が、その目的が考えている通りなら問題ない。どうする？」

「足して2で割ればいいじゃねえか、一面倒くせえ」

「つーと、片方を避難先に回して、もう片方を低地に回すってことか？」

「低地にじゃねえ。この2つをよく見たらよ、どっちもこつからはルートがほとんど同じじゃねえのか。こつから、こういう風に言って、そつからこうだろ」

地図上で麦野は指を走らせる。それを見て、万は頷いた。

「うかつだった、言われてみればそうだな。なら、片方をそこに配置するってことでいいのか？」

「正確には私だ。こういう場には私が適任だろ？」

「そうか。なら頼む」

「確かに提案したのは私だけだよ。こうも的中しちや、ある意味笑えるな」

迫りくる敵を前に、麦野は笑っていた。本来、学園都市のスパイとしてはやってはいけない行為なのだろうが、あのいけ好^方かないガキには貸しがある。ここに潜入しようにも、彼の協力は不可欠だったのだから。それに、ここまで来て彼に敵対したとあれば、学園都市に戻ってからも面倒なことになるだろう。

「じゃ、ここでもやりますかね。久しぶりだから加減はできねえ・・・ぞー!」

宣言し、自身の能力——原子崩しを放射状に放った。

「となると、会長の役目は防衛です。避難してきた生徒たちへの兵の前に立つ、すさまじい重圧を伴う役目ですが……」

「誰に向かつて言ってるの?」

そういつて手元の扇子を広げる。そこには例によって達筆で“心配無用”の文字。

「お願いします。最悪、あなたのISなら部分展開して、ということも可能でしょう。それと、これらを」

そういつて渡したのは、銃身部に色がついた三つの銃。だが、それは銃と呼んでいいものなのか、と思うほどにいびつな形をしていた。

「アビリティウエボン能力銃器です。引き金を引けば、その色に応じた能力が使えるってからくりです。青は氷、赤は炎、黄色は電気です。出力に関しては、横のダイヤルで調整できます。動力は電気ですけど、よっぽど浪費しなければ電池切れにはならないので大丈夫なはずです」

「ありがとう。うまく使わせてもらおうわ」

地下シェルターの入り口近く、そこからでもレーダーにちらほらと敵影が映るようになってきていた。低地の2カ所は麦野が防衛している。ということとは、こちらに向かつてきているのはおそらくもう2カ所のどちらかからの敵。どちらにせよ、更識楯無がやることはただ一つ。ここを守り抜くこと。一つ腹をくくると、彼からもらった青い銃を空に向けて放つ。

あの暗がりで彼と出会ったことが何よりの証左だが、この身にも能力は宿っている。たまたま、学園都市に一瞬とはいえ在籍したことで生まれた能力、その名をハイドロコントロール液流操作。その名の通り、液体ならたとえ液体金属であろうと液体窒素であろうと操作ができるという能力。液体でなければならぬという制約こそあるものの、液体であれば何でもい。例えば——溶解した氷の水でも。

彼は渡す時に「氷の能力が使える」といった。が、あとからこれをすっかり見てみると、温度の調節機構までちゃんとついていた。つまり、ギリギリ融解する寸前の氷を打ち出すことも、十二分に可能だったのだ。

そして、この液流操作の最大火力の攻撃。それは、一気に温度を上げることによる爆発。油ならそのまま文字通り「爆発」するし、水でも水蒸気爆発で攻撃ができる。タイミングを見計らい、一つ指を鳴らす。瞬間、敵の真上で起きた水蒸気爆発は、敵の3割を戦闘不能に追い込んだ。

戦闘は徐々に激化していった。

43. 最終局面—小波—

本丸へと万が切り込んでいったその頃、先鋒は一夏達の元へ向かつて行つた。

雪片を振るい、敵の戦力を確実に削いでいく。その中で、一夏は疑問に思つていた。

（これだけの量を無人で動かすつて、それつて全部AIつてことだろうけど……。本當に全部機械任せなのか？一機くらいは機械じゃないのがあつても……。）

これまでの攻撃も、もし人が乗つていたら確実に死ぬようなところには当てていない。が、本當にこれはすべて機械なのかと思ひ出してた。一瞬だけ動きが鈍つた瞬間に、すぐ後ろに迫つていた敵が爆散した。ついで、地上でも爆発が発生する。誰が援護したのかはわからないし、地上での爆発は誰の仕業なのかもわからない。が、

「余計なこと考えてる時間はない、か」

一言呟いて、一夏は目の前の航空機を撃墜しにかかった。

ちやうど同じころ、セシリアと背中を預ける形で戦う凰は少々劣勢に追い込まれてきていた。

「どんだけいるのよこいつら！」

「ぼやいていても仕方ありませんわよ！」

短くやり取りをしながら倒していく。二人のコンビネーションは格段に向上していて、以前のように醜態をさらすことはなかった。

「それもそうだけどさ、こんだけいるとぼやきたくもなるって」

「万さんもおっしゃっていただけでしょう？ 敵は雲霞のごとく大群だと」

「ま、そうだけど。そっちはどんな感じ？」

「まったく終わりが見えませんわ。ですが」

「ここにくたばるわけにはいかない、でしょ？」

その一言に笑みをかわし、再び二人は飛び立っていった。

何とか本丸までたどり着いた方は、新型駆動鎧の相手を始めた。長剣を目の前の一機に突き刺す。瞬間、中から鮮血が飛び出した。

（やっぱりか！）

アイギスは目の前の機械類から確かに熱を感じ取っていた。しかし、それは機械の出す廃熱だけでないことも、見ただけで判断できるくらいには分析ができた。

目の前の敵は間違いなく人間が乗っている。そして、この感覚は、

「I S コアなしでI S を再現したってどこか」

学園都市ならやりかねない。万はある意味納得していた。

金が動いたのか、それとも何か弱みを握られたか。どちらにせよ自分には関係ない。有人であるのが一体どれだけあるのかはわからないが、とにかく叩き潰すまでだった。

それとほぼ同時刻、簪は打鉄式式の補助も使って何とかE M P の解除を試みていた。万がお墨付きを得ていた三つ子の連携は完璧で、中でもセイリユウは状況に応じて武装を換装しつつ戦うというスタイルを用いていた。確かに万も頭が切れたし、その気になれば高速切替など余裕だろう。が、こうも簡単にぼんぼんと使って戦う様はまるで人間のようなだった。さらにそばには庵もいる。強力なガードの下、解除のみに集中することができた。しかし。

「どうだ!？」

「だめ、全然。揺らぎすらしない。相当強力なやつを使ってるんだと思う」

さすがの簪もここまで強力なものを解除できるほどのハードがなかった。彼女に与えられた追加武装はこのようなE M P を解除するようなものもあつたが、出力がまるで足りなかった。

「学校の施設に接続して共振させないと難しいと思う。ついてきてくれる?」

「分かった」

そういつて二人は移動を開始した。それに伴って、三つ子も移動を開始する。その光景は明らかに目についた。

その頃、奇しくもその接続する地点付近では一波乱が起きていた。

「なん、の……つもり、だ……」

「もう私は、使われるだけの人間じゃない。それに、私はこんなこと望んでない」

その一言と共に一筋の光。同時に、無線も壊す。

「一応、ここには借りもあるしね」

そういつてつかつかと歩く。その行く先は本来向かうべき場所。しかし、目的は正反対だった。

その頃、地下シエルター上空にはラウラと箒が戦闘を開始していた。互いに遠距離と近距離の短所と長所をうまく補いながら、即席とは言えどコンビネーションで切り抜けていた。

だが、戦況が崩れる要因は唐突に訪れた。

「敵、高速で接近！高度がかなり高いぞ！」

「どこだ！」

箒から入った報告にラウラが即座に反応した。

「直線距離で約100000だ」

高度が高く、直線距離約100000。ということとは、航空機の色度を考えると、どんなに遅くとも数分のうちに到達することになるだろう。

「分かった。とりあえずは殲滅を続けてくれ」

「了・・・解！」

会話をしつつ敵の防衛をする。が、そのためにはとりあえず目の前の敵の一掃が要求される。

その頃、一夏達はじり貧だった。数で押されているだけでなく、一夏達の「殺しへの忌避感」から攻撃の手が緩み、それが相手の反撃の隙になっていた。もつとも、近接で攻撃することが主である一夏は、その機動力をもってそのほとんどを避けたり、また引き寄せて斬つたりしているわけなのだが、それでもそれにより攻撃の芽を確かに摘まれているのである。

「くそっ・・・」

思わず毒づくが、それはあくまで自分に対して。しかし、それで状況が変わるわけ

もない。だが、その直後。自分たちを避けるようにして、光を伴うエネルギー弾が降り注いだ。思わずそちらを見ると、そこにはかつて見たシルエツトが。

「まさか、シルバリオ・ゴスベル銀の福音……?」

それは、かつて自分が大破撃墜させたはずの機体が佇んでいた。

「まったく、無事? 織斑君」

その声は、(自分たちにとっては) たまにしか教壇に上がらない教師の声だった。

「ナターシャ先生!?!」

「ええ。迷ってたら死ぬわよ」

そういつて、手元に銃器を展開する。それは、一夏の雪片も含めたI Sの武装にしては異常に武骨だった。

「さて、行きましょう」

そういつて銀色の機体が突っ込んでいく。それに続く形で一夏も切り込んでいった。

最初はナターシャが手に持っているものが何なのかを判断することができなかった。が、すぐにその正体が分かった。

「アサルトライフル……って、どこで?」

「万君よ。彼、このくらいの兵器開発はなんてことなかったみたいだね。この子を調整する過程で作ってたみたいよ。なかなかの使い心地で気に入ってるのよ」

その言葉に思わず一夏は言葉を失った。自分たちの武器を作るだけでなく、さらに武器を作っていたとは。

「ぼーっとしてる暇なんてないわよ」

素晴らしいながら、ナターシャは三点バーストを何回か繰り返し、敵を倒す。その言葉にはつとした一夏は、後ろに迫ってきていた敵を一閃で倒す。それには、今までであった迷いがなかった。

「やればできるじゃない」

そういいつつ、後ろに目を向けて銃を一連射。それにより、敵が地に落ちていく。その光景を見るナターシャの目は、完全にそういうものを見慣れた目だった。

だが、その内心で、一夏は人を殺してしまったかもしれないという、得体の知れない不安に襲われていた。が、迫りくる敵が、その不安を強制的に吹き飛ばした。

その頃、地上部隊は二人が獅子奮迅の活躍をしていた。そのうちの一人である麦野は、迫りくる敵をなぎ倒しながら疑問に思っていた。

（おかしい。いくらなんでも、これだけじゃないはず）

いくら銃火器を持った歩兵より応用力という点で上回るとはいつても、たった二人でここまで抑え込める相手を送るほど敵も馬鹿ではないはずだ。ということとは。

「やっぱり来たか」

その後ろから見えるのは銃器を持った大人。数も半端ではない。それを確認して、麦野は三角形が集合したような板を取り出す。

「あいつが禁止していたのはただ一般人を巻き込まないこと。なら、巻き込まなければいいんだろうが・・・よ！」

最後の一言と共に板に閃光が放たれる。瞬間、そこから拡散し、周りの兵士を何人も巻き込んだ。

「そういえば、あいつが言ってたっけな」

「それと、防衛戦がオープンスペースでの戦いになった場合とか、状況によってはISを部分展開するのも手。生徒会長の霧纏ミステリアスレイディの淑女はまあ、難しいところはありますけど、麦野は別。Oビットとか、ナガミツとか、その辺を使えば戦えるだろう。特に、背中への攻撃とか、その辺の対応もできるってことは大きなアドバンテージとなりえる。ただし、」

「周りを巻き込むな、だろ？」

「そーゆーこと。あんたならやりかねないからなー。前科あるし」

「そんな覚えはねえが？」

青筋がたつているのは気のせいではないだろう。

「そうか？絶対能力者計画絡みで研究所防衛した時に、散々研究所の壁やら管やら穴ばここにしたらって話は結構聞くぞ？」

こういう仕事柄、そういう話もよく聞く。特に、施設防衛に失敗した挙句、その施設には明らかに侵入者ではなく防衛者側の能力による損傷が多数あった、という話はしばしばなされた。というのも、ある種笑い話のタネとしてなのだが。

「あれはあのシヨンベン臭え第三位が逃げ回るから——」

「はいはい、言い訳は結構。とにかく、地面を穴ぼこにするくらいならともかくとして、同士討ちとかはシャレになんないから避けること。OK？」

「なら、やるか！」

そういつて周りに8つのビットが出現する。それらは自在に動き、次々に敵を殲滅していった。

「んだよ、この程度かよ。質で劣る分を数で補うっていうのはもともとだけだよ、補いきれない差つてもんがあるっていうのが分からないのかねえ。ま、どちらにせよ、——

てめえら、ここで全員ブチ殺し確定だクソ野郎ども!!」

そういつて、Oビットともども光がともる。その直後、数条の閃光が奔る。その光の奥で、麦野は獰猛に笑っていた。

やがて、万は上空で戦いながら新型をどんどん後ろにそらしていることに気付いた。確かに撃墜数は着実に伸びている。が、相手がそれを越す数を一気に叩き込んできていたのだ。

「しゃーねーか。シルベルレプリカ偽・銀の鐘、起動」

万だつて、ただ銀の福音の調整をしていたわけではない。ちゃんとデータもとっていた。それに、そもそもこの機体の広域殲滅兵器は銀の鐘シルバールをもとにしたものだ。そのデータを応用し、さらに昇華させたものが、このアイギスに搭載されているものなのだ。さらにアップデートを続け、今日に至ったことにより、本家に勝るとも劣らないものとなっていた。それが、シルバール・レプリカ、略してシルベルレプリカだった。

エネルギーは先ほどから飛んできている飛び道具などを吸収させているため申し分ない。

「——蹂躪しろ」

その一言とともに、シオルダーアーマーが放射状に開かれる。と、レーザーを極々短く

したような光の嵐があたりを包んだ。嵐が収まったところには、その周辺の敵の数が相当減っていた。

「悪魔め……」

駆動鎧部隊の誰かが漏らした台詞に、万は薄く笑った。

「ああ、俺は悪魔だ。だから——遠慮なくかかつてきやがれ」

その笑みは、酷く獰猛で、挑発的で、それでいてよく似合っていた。

上空の様子を見ながら、楯無は考えていた。

（ナターシャ先生も援護に入った。あれは、確か銀の福音。大破していたって聞いてたけど。おそらく万君の仕業ね。まったくあの子は……）

とにかく、あれは軍事ISだから、あつちは任せても大丈夫そうね。一夏君が足引つ張らないことを祈るけど……。とりあえずは……）

「ここを守り抜くことだけ考えましょうか」

そういうと、霧纏の淑女のアクアクリスタルのみを展開した。右手には赤いしるしの付いた、そして左手には黄色いしるしの付いた、銃に似たものがそれぞれ握られていた。

「さて、じゃあ行きましょうか！」

アクアクリスタルを稼働させる。発生した水滴に向けて左手の人差し指を動かす。

直後に、右手の人差し指をほぼ同じところに向けて放った。直後、爆発が起きる。

「いったい何が!？」

相手の子供が焦ったように叫ぶ。それに対し答える義理はない。実際、その叫んだ間に楯無は水の刃で相手を切り伏せていた。

「焦る気持ちはわからなくはないけど、こういう場では焦ったほうが負けよ?」

余裕の笑みを絶やさずに相手に向けて言う。その顔には風格とも呼べるものが漂っていた。

「くそっ」

その一言と共に放たれた炎。それは、彼女のアクアクリスタルによって生まれた水と彼女の能力によって容易く無効化された。

「いやあねえ。その程度だつて思われてたの? 私」

笑みを絶やさないうで広げられた扇子には「油断大敵」の文字。そのまま、炎を消した水を刃に変え、多数の敵を屠る。それに、得体の知れない恐怖を覚えた学園都市の歩兵の士気が下がったのを楯無は肌で感じていた。

44・最終局面―変遷―

アイギスを駆使しつつ戦う方は、一抹の違和感を覚えだしていた。

（おかしい。俺がこの機体を最強に恥じない兵器として育て上げたのは確かな事実だし、こいつには俺の戦闘経験記録をコピーした。今なら、レギュレーションなしのガチンコなら、少なくとも、ここで負ける自信はない。だけど）

思考をしつつ、群がってくる敵を叩き潰しつつ、周りの敵に向かって叩き潰す。

（いくらなんでも、ここまで群がるか？）

ハイパーセンサーを戦っている最中に使わなくては、この中で生き残ることはできない。が、ハイパーセンサーを使っていると明らかに敵がこちらに集まってくるのが分かる。おそらく有人機も多い、新型機もこつちに來ているのだろう。それ自体は確かに喜ぶべきことかもしれない。が、これだけ集まった敵を倒さないわけには防衛戦に加わるわけにはいかない。このまま無理に加わろうものなら、二次災害を生み出しかねない。だが、ここまで自分に敵が集中するとはさすがに思っていなかった。このまま戦っていたら、撃墜は免れない。

「それと、一つ言っておく。もし本当に、撃墜が免れないような状態に陥った場合、——切り捨てる」

あえて冷酷に万は言い切った。その言葉に、一夏は身を乗り出した。それを見て、手を前に出して止めた。

「お前のことだ、どうして、つて言うんだろうな。けどどな、こういう作戦を立てる身としては、無理矢理助けるっていうことは、うまくいけば二人とも助かってそれで終わるだけだ。けどどな、断言してもいいが、そんなうまい話はフィクションの中だけだ。切り捨てれば一人の犠牲で終わる。けど、助け出せなければ二人とも共倒れになる可能性が高い。だからなんだよ。ただでさえも貴重な戦力なんだ、できるだけ失いたくない」

「目の前で死ぬかもしれないってやつを見捨てろっていうのかよ」
静かな声は、その表情も相まって深い怒りをよく表していた。

「ああ、そうだ」

同じ静かな声だったが、万は変わらず静かだった。

(・・・仕方ないか。あんまり使いたくなかったが)

ある種のあきらめにも似た思考と共に、劍を横に薙ぐ。その直後、一つ目を閉じた。瞼の裏に浮かぶのは多数の数列。

彼の白兵戦能力、そしてシルベル・レプリカがあるとはいえ、彼がなぜここまで絶対的な自信があるのか。そもそも、それだけで、彼が最強の機体と考えるのだろうか。答えは否だ。この機体を最強たらしめているその理由は、パイロットが彼であるからだ。

彼が目を閉じると、その周辺の機体が妙な軌道を見せた。徐々に動きがゆつくりになり、やがて停止した。だが、落ちる気配はなく、そのままそこで静止したのだ。その範圍は少しずつ広がり、やがてアイギスの近くの機体ほぼすべてが似たような挙動に陥った。そしてそのすべてが氷漬けになっていた。

これは、アイギスと彼だからこそ可能な技。

アイギスに搭載された、能力演算補助機能。それを使用することで、疑似的にすべてを凍り付かせる絶対零度を作り出すことよって、すべての生体反応を途絶させる、彼とアイギスの最終奥義。これこそが、アイギスが最強たるゆえんである。

彼が能力を解除した瞬間、その凍結した機体群が揃って地に堕ち、尽く粉碎した。その光景に、運よく範圍外にいたり、何とか回避が間に合ったりした敵が震え上がった。

「ば、化け物・・・」

誰かが呟く。それは、万の耳にはつきり届いていた。その声に、万は鼻で笑った。

「その程度のモンなのかよ、おたくらって」

口調は挑発している。だが、先ほどと違って、それに対して無条件で向かってくる相手はいなかった。

その頃、簪たちは丁度本拠地にあるEMP解除装置の下にたどり着いていた。そこには、一人の少女がいた。半ば反射的に銃を向ける簪を庵が制した。

「久しぶりだな。今は深名と言ったか」

「ええ、久しぶりね。今は確か、庵さん、だったっけ？」

「ああ。で、なぜここに？」

「もとは学園都市の部隊としてここに来ただけだね。多分、今頃IMA（作戦行動中行方不明）かKIA（作戦行動中死亡）として処理されてるんじゃないかなー」

「答えになっていないぞ」

「まあまあ、そんなに慌てない。で、部隊は私も含めて全滅したことにしちゃった。ちよつと犠牲は払ったけど、誤魔化したと思うし」

「そういつつ、片袖を軽くまくる。そこには少々以上に痛々しいとも取れる痣があった。」

「最悪、裏切ったことがバレてるかもしれないけどね」

直後、その横に藍色のISが滑るように飛んできた。そのままひざを折り、その前の装甲を開く。

『乗ってください』

一瞬、その合成音声のような声がどこから聞こえたのか、理解することができなかった。

『私の命を、あなたに預けます』

が、この言葉で、すぐに理解することができた。この目の前の機体が、まさに自分にその身を預けようとしているのだ。その事実には、少なくとも驚きを覚えていた。

だが、迷いはなかった。ISスーツはないが、この際仕方ない。と、思っていた矢先に、ISスーツが投げられた。

『万殿より、預かっておりましたゆえ。あなた様は私たちがお守りします』

その言葉に一も二もなく頷いていた。素早くISスーツを身にまとうと、機体に体を預ける。初めて乗るはずなのに、その機体はまるで長い間使っていたような居心地の良さがあった。

[JP MULTITEST TYPE CODE γ restart.]

A New Pilot is recognized.

First—Shift ready……start.」

一瞬だけ流れた英字。直後に、頭の中に情報が流れ込む。だがそれも一瞬で、すぐに機体は意のままに動いていた。

「あなたの名前は？」

さすがに、J P MULTI TEST TYPE CODE Y——日本の種々の試験機 Y 型、というのが正式名称というわけではあるまい。

『私に名前などありません。私はセイリユウの中の AI です』

「そっか、なら・・・インディゴ。今からあなたはインディゴ」

藍色の機体、その色からインディゴと名付けた。我ながら安直なネーミングだが、咄嗟なのだから仕方ない。

『・・・わかりました。これからよろしくお願ひします。マスター』

「うん、よろしく」

やり取りを終えたころには、簪たちは自分たちの作業を終えていた。

「終わったよ。けど、すぐに解除されちゃうから、暫くここに張り付いていないと」

「となると、ここで簪を防御しながら大本を叩く、ということになるな」

「それなら私たちに任せて。ここは死守するわ。それに、庵さんと私たちとでどちらが戦闘能力が高いかなんて比べるまでもないわけだし」

「それはそうだが・・・」

「大丈夫。発信源の逆探知も大体終わったよ。もつとも、攻撃手段をどうしようかって話だけだ」

「どういうことだ？万はかなりの状況をシミュレートしていた。大抵の状況には対応できるはずだろう？」

「確かにそうなんだけど・・・水中だから」

「敵さんのことだ、むぎむぎとやられるとは考えにくい。パツと考え付くのは電波妨害、その手段はチャフやEMPだろうな。」

チャフはおそらく使つてこない。ただでさえも空中戦が繰り広げられている空間だ、チャフなんか使おうもんならどうなることやら。

EMPに関しては、簪の機体の追加パッケージにある。ダウンロード過程で少しプログラムをいじらせてもらった。その時に使えるようになっていたはずだ。もし出力が足りないのなら、学校側からエネルギーを融通すれば解決するはずだ。もつとも、それを使うとオーバーロードするから、少々リスクだがな。そうじゃないのなら、学校側のリーダーをハッキングして対EMPの対策とする、とかな。ただ、後者の場合、技術

的には可能だろうが、成功した後にはちゃんと報告すること。面倒なことになる」

「でも、リーダーの出力程度で大丈夫なの？」

「まったくもって問題ない。電“波”だからな。波の合成の原理でやれば問題なく対抗できるはずだ。最悪でも改善くらいはできる。」

だが問題は発信源だ。これはあくまで対症療法だし、おそらく解除するまで簪はそっちにかかりつきりになる。考えられる発信源は超高高度からか、水中だ。水中に関しては、ラウラを除く射撃型の誰かがやってくれ。音響弾があるはずだから、そいつで位置を特定して、超音波弾で破壊して流れになるかな。あわよくばほかの水中戦力も無効化できれば御の字だけど、そこまでは状況を見てくれ。無理に遂行しようとはするなよ」

「高高度の場合はどうするの？」

「その時は、庵しかないいな。一気に距離を詰めて片を付けろ。無論、ステルスを使ってな。そうそう簡単に破られるようなセキュリティを組んじやないから大丈夫だ」

「その時の簪の護衛はどうする？」

「三つ子に任せる。施設内防衛だけど、あいつらならやり遂げるだろう」

「大丈夫。守り通して見せるから」

その言葉の裏に強い覚悟を感じた庵は、少しの逡巡の後に頷いていた。「分かった。ここは任せる。さっさと行って終わらせて来る」

そう一言告げると、手近な窓を破って外に出ていった。

その頃、万は少々劣勢に追い込まれていた。絶対零度はあくまで奥の手で、使用には多大の集中を要する。それに感付いてさえしまえば対処は容易だ。それに、その攻撃特性上、敵も味方も中立も関係なく殲滅してしまう。それに気づけば対処は容易だ。再び物量で押しつぶしにかかった敵の前に、万は再び苦戦に陥った。いかにシルベル・レプリカがあるとはいえ、流石に敵の量が多すぎた。軽く舌打ちを一つすると、剣を振り、もう片手の細身の銃の引き金を引く。それでも、敵は一向に減らなかつた。

「つたく、俺を倒して何になるってんだよ。ここまで兵力を偏らせてもやる必要のあることなのか？」

ぼやいていても始まらないとわかつていてもぼやかすにはいられないほどに敵は膨大だった。ここにいるのが氷山の一角だとしたら、彼の想像していた以上の大群だ。さすがにこれは危ないと思いだしたところに、見覚えのある青い閃光が数筋走った。

「おいおい、マジかよ」

『（無事ですか）』

「ああ、大丈夫だ。サンキュな、セシリア」

正直に言つて巻き込みたくなかったが、こうなつてしまつては仕方がない。それに、一人だけならギリ貧だが、援護があるのなら問題はなからう。

「悪いけど暫くお付き合いたただけるか？セシリア」

「もとよりそのつもりですわ」

近接戦闘で切り抜けて、万のすぐそばまで来たセシリアは、真つ直ぐに剣先を敵に向けた。

「悪い。サンキュな」

そういうと、万は再び突つ込んでいった。後ろには援護がある。それが今までにない安心を万に与えていた。

その頃、地下シェルター上空には不穏な影が差していた。

「来たぞ！」

「了解した」

おそらく、落下速度でミサイルの威力を上乗せする腹積もりだろう。相当の速度で落下すればI Sのシールドエネルギーを一撃で刈り取ることも可能だろう。ならば・・・そのまま機体を仰向けにする。そのまま、右手を前にかざし、目を閉ざす。A I Cを

使う感覚が、体を包む。今までの感覚とは少し違う感覚だ。それで分かった。

ハイパーセンサーがちらりとミサイルを感知する。すぐこちらに到着するだろう。

A I C を壁のように展開する。

遮断するものの設定を、より大雑把に。かつてはそんなことをしようものなら何もできずに、むぎむぎと攻撃に身をさらしただけになる。

目を見開く。遠くにミサイルが見えた。それに付随するかのようには、航空機。おそらく戦闘機だろう。今までなら止められない。

だが、今なら——止められる。なんとなくだが、確信があった。

手を広げる。その先に、A I C 発動の結果が、まるで壁のように見えた。不思議なことに、その壁は厚くなり——やがて、その壁にミサイルや航空機が差し掛かると、次々に、まるでブレーキがかかったように静止していった。

その様子に、ラウラは薄く笑った。いまだに莫大な集中を要する状況ではあるが、口もきけないというほどではない。A I C の範囲を調節し、そのまま少し距離をとる。

「ドライ・カノーニア」

短く、静かなコール。それだけで、両肩に重みが加わった。右腕にも重みが加わる。それを確認して、ラウラはA I C を解除し、直後に引き金を引いた。弾頭を撃ち抜かれ、

その機体に穴をあけられたことにより、それらは例外なく炎上し、空中で爆発した。

（ここ）まで予測していたのだとしたら……まったく、慧眼恐れ入るな）

先ほどとは違う笑みを浮かべながら、ラウラは先へと進んだ。

その頃、一夏達の下にも件の新型が迫っていた。基本的にはナターシヤが迎え撃つが、それでもすべてを対処できるわけではない。どうしても一夏達のほうにも新型が向かった。

始め、一夏は新型をISだと思っていた。話を聞くに、学園都市の内側の科学技術はかなり進んでいるといわれている。ならば、ISを作ることも可能だったのだろう。そんなことを考えつつ、手にした雪片を、相手の胴へ一閃する。何事もなく、——と言つては少々語弊があるが——そのまま落下していくはずの機体から、飛び散るはずのない鮮血が飛び散った。

「え……?」

茫然とした。雪片を使って、人を傷つけたのはこれが二度目だ。万も、今回は人死に出るといつていた。だが、実際に直面した瞬間に、一夏の体は硬直していた。

「織斑君、何をしているの!」

ナターシヤが叱責する。その声も一夏には届かない。無防備な一夏に入りそうにな

る攻撃を放つ相手を、アサルトライフルの弾丸が撃ち落とし、見えない弾丸が吹き飛ばした。

「一夏、ボーっとしている暇はないよ」

だが、その声すらも届かない。が、この中の一人はまったく違う行動をとっていた。その一人はそのまま傍まで飛ぶと、拳で一発殴った後に、その胸倉をつかんだ。

「ふざっけんじゃないわよ。あんたは腹くくれてなかったわけ？」

激ししやすい嵐だからこそ、その口調の静かさがかえって恐ろしい。殴られたことも相まって、一夏にはその本気度合いというものがよく分かった。

「・・・悪い」

何とか一言絞り出す。その言葉に、嵐は突き飛ばすように手を放し、横と後ろに向け片手に持っていたレールカノンを放った。その弾丸は轟音を立ててその先の相手を撃ち落としていた。

「本当に分かったんなら、行動で示しなさいよ」

その目もかなり険しい。どうやら自分が思っているより本気で怒っているようだ。

「悪い」

だが、おかげで腹をくくることができた。ほかの人間からしたら遅すぎるかもしれない。だが、それでも無駄ではない。

ハイパーセンサーが背後の敵を感知する。少々距離があるということが分かると、一夏は雪羅を荷電粒子砲の状態に切替え、一発放った。命中し、相手はそのまま地に墮ちた。だが、もう一夏は振り返らなかつた。振り返るのは、この場ですることではない。

庵はステルスを駆使して高速機動を続けていた。相手のポイントはおおよそ推測がついている。推測ポイントの近くに到達すると、凧を起動させる。そのまま機体の状態を水中でも稼働可能にし、水中から一発だけ音響弾を発射する。この手の小技までできるような性能になっているあたり、あの男は本当に優秀な技師なのだろう。そのまま、自身の耳と目を集中させる。

キーン、コーン、ポーンと三種類の音が響く。少し遅れて、反響が帰ってくる。その時間からそれぞれのポイントからおおよそその距離を算出する。そこから、おおよそとは言えど場所が算出させられた。

(見つけた……!)

凧の射撃モードを全連射に変更し、弾頭は対潜兵器へ。おおよそのポイントへ向け、その兵器を一齐に発射した。EMP攻撃拠点を潰すことに成功していた。

「簪、一応お前が言ったポイントにいたと思われる敵は潰した。状況はどうだ？」

『大丈夫。そのまま戦線に加わるから、戻ってきて』

その一言を聞き、俺は浮上を開始していた。

セシリアと合流し、敵を順調に撃墜する方にも、流星に疲労の色が見えていた。

「多すぎねえか」

「多いだろうといったのはあなたでしよう？」

「さすがに俺にここまで集中するとは思ってねえよ。このままだと押し切られるな」

疲労と共に焦燥にも似た危機の色も見える。セシリアが、この短時間でも少なくとも疲労を覚える戦闘を、おそらく開始直後からずっと繰り返しているのだろう。だとすれば、彼の精神力の強靱さは圧巻の一言に尽きる。だが、このまま突破するのが難しいというのはセシリアも感じていた。そう思っていた時に、それが現れた。

前の敵を下から切り上げ倒す。が、その直後に横に敵が現れた。セシリアのビットも遠い位置にある。一撃は覚悟すべきかと背を向けた瞬間に、そのあたりが爆炎に包まれた。その熱量を吸収し、アイギスのエネルギーが回復する。それを確認すると、一つの回線を開いた。

「とりあえず、感謝すべき状況なのかな、これは」

『別に感謝とかは必要ないわよ。私も、目的のためにはこの人たちは邪魔だから』

聞き覚えのある声。それに、やはりと思った。ハイパーセンサーを少し意識すると、

そこにはやはりとすべきか、金色の機体が佇んでいた。

「セシリア、あの金ぴかには攻撃するなよ。向こうが攻撃してきたのなら話は違うけど」
「分かりましたわ」

理由を聞かないあたり、この少女の聡明さには感謝だ。いちいち理由を説明しているほど悠長な暇はない。

「とにかく、叩き潰すぞ」

実力は一瞬とはいえ直接対峙した自分がよく分かっている。だからこそ、危険であり、頼もしかった。

同じころ、麦野も疑問に思っていた。いくらなんでも、こんなに簡単に防げるものなのかと。歩兵の戦力など、ハウンドドッグ猟犬部隊や、一度は壊滅したとはいえ、人員だけでも復活させたスクール、ブロック、メンバーなど、かき集める気になればいくらでも集められるだろうに。

（楯無と私のほかに食い止めている人間がいるってことか？）

それこそありえないだろうが、それでもなければ説明を付けることが難しかった。だが、自分のやるべきことはここから一人たりとも通さないこと。ならば、それを遂行するまでである。

その考えを頭から捨て去り、再び能力を前方に放つ。その後気付いた。遠く、本当に遠くだが、壁のようなものができていて、増援が少ない理由は、おそらくそれだろう。誰なのかは知らないが、楽にしてくれているのは確かだ。そう思った麦野は楯無の下へと向かった。

4 5. 最終局面—中波—

金色の I S を操るスコールに対して、万は手を止めずに聞いた。

「そういえば、あの蜘蛛女はどうした？ オータムって言ったっけ？」

「あの子は、今回はお留守番よ。それに、何度かあなたとコンタクトをとっている私や、そもそも顔をほとんど知られていないデメテルに比べて、あの子だったらその場であなただちに牙を向けかねないもの。一応、この戦いが終わるまではお互いできるだけ干渉しないということになっているしね」

「ま、ボスであるおたくがそれを破ってこうして接触している以上、説得力はないがな」
「あら、破っているのはどちらかしら？ そもそも、横槍を入れたのは認めるけど、その後、に会話を切り出したのはどちら？」

「そういわれるとぐうの音も出ない。確かにプライベートチャンネルを開いたのは万だし、今の会話の口火だって万だ。」

「あつそ。ま、利害は一致してるんだ。とつとと終わらせるぞ」

それだけ言って、もう一度シルベル・レプリカの起動準備に入った。

楯無の下にたどり着いた麦野は、少々面食らった。というのも、楯無のほうも完全に戦闘終了しており、楯無自身は霧纏の淑女を完全に展開した状態だったからだ。

「あら、麦野さん、なぜこっちに？」

「通信だとわからないこともあるからな。それより、この様子を見るに、こっちも、か」ということは、そつちも増援はぱったり止んでるわけ？」

「まあな。遠目ながら、壁みたいなものを確認した。仕事人の小僧ならあれくらいは朝飯前だろうが、この学校にそんなことをできる能力者って——」

「はつきり言って、いないと思うわ。それほどの力を持つていたら目立つもの」

「だよなあ・・・敵じゃなければいいが」

「少なくとも敵じゃない」

突然横から割り込んできた声に、ふたりともとつさに身構えた。

月明かりに照らされ出てきたのは、自分たちと同じか少し下くらいの少女だった。

「やっぱりデメエか、デメテル」

「覚えていたのね。それと、やっぱりって？」

相変わらず抑揚の少ない口調だ。

「あの壁、遠目だが、土かなんかでできてたんじゃねえのか？で、あんたの戦闘スタイルも土を使ったモンだ。共通点があるのなら、可能性も十二分にあるだろ？それに、あの

金ぴかは目立つしな」

そういつて空を指さした。そこには、鈍色に協力するように舞う青と、少し離れたところでも穢滅をする金色があった。

「なるほど。気づかれないように入ったつもりだけど」

「いつ来たのかはわからなかったが、あんだだけ派手に壁作っちゃモロバレだ」

「そう。あなたたちのためだと思っただけれど」

表情も少ないが、その表情は微かに残念がっているようだった。

「ま、でも助かったのは確かだ」

「お礼を言われる筋合いはない。あの子がいるところを守るのは当然のこと」

あの子というのが誰を指すのかはわからないが、それは今考える必要のないことだろう。

「どうやら、利害は一致しているようね。なら、協力してくれないかしら？」

「なれ合うつもりはない。結果的に共闘することになるかもしれないけど」

「なるほどね」

どうやら、前交わした万との約束に従う方針のようだ。それに二人は顔を見合わせて笑った。もつとも、いつも通り食えない笑みの楯無とは対照的に、麦野のそれは獰猛な肉食獣のそれだった。

「なら、そういうことにしておきましょうか」

「そうだな。さて、これからどうする？つてか、おたくの作った壁っていうのはどれくらい食い止められるもんなんだ？」

「原始的な手段を使えば、一枚当たり2分と仮定したところで大体10分くらいだと思う」

「原始的な手段・・・よじ登るつてことか？」

それに対し、こくりと頷く。確かに、壁をよじ登るなどという装備をわざわざ持つてきているとは思えない。となると、学園都市の歩兵の力を借りることになるのだが、それでも大能力者レベルがいたとしても時間がかかる。二分というのはある意味では妥当かもしれない。計算をそのまま当てはめるのなら五枚分の壁を作ったということになる。

だがそれでも油断はできない。あくまで10分というのも仮定の話なのだから、その時間を無駄にするわけにはいかない。

「さらに壁を作ることは？」

「できなくはないけど、時間がかかりすぎる。間に合わないかもしれない」

「それなら危ないわね・・・。この状況に誰もいないのは、流石に危険だし」

そういうと、楯無は少し考えた。防衛力を高める方法。そして、短時間でもできそう

な方法。

「デメテルさん、つて言ったっけ？ここらを中心に、半径45、いや念のため60mくらいの地面を強化したいのだけど、可能かしら？」

「ただ純粋に硬くすればいいの？重くし過ぎちゃ駄目とか、そういうのはない？」

「しいて言えば目立たないように、つてくらい。できる？」

「それだけしか条件がないのなら」

「ならお願い。麦野さんは、一時的に空中戦の援護をお願い。あなたならここからでも十分狙えるでしょう？」

「了解」

その簡易の指示に、楯無は動かなかった。槍もだらりと下げ、自然体だった。

「お前は どうするんだ」

「ここで守るわ。さっきも言ったでしょう？ここに誰もいなくなるのはまずいって」

相変わらずその心は読めないが、そこに覚悟があることくらいはわかった。

「分かった。じゃあ、行くか」

麦野は自身の機体を出した。訓練機によく似た、艶消しの臙脂の機体は夜に溶けるように飛び立った。

「私もここを守る。あの子がここでどんな生活を送っていたのかは知らないけれど、

知っている人が悲しむのを見て何も思わないほど冷たい子ではないから」

「どうやら、この少女にとつて『あの子』というのはよほど大切な存在らしい。疑問に思い、聞いてみることにした。」

「ちよつと気になったただけなのだけど、あの子、つて誰なのかしら」

「私の妹。本人が知っているかはわからないけど」

短く答えると、デメテルは空中に何やら文字を走り書き出した。

もつとも敵が集中しているところにスコールという強力な戦力が援護に来たことにより、かなり戦闘は楽になっていた。また、本来地上の生徒を攻撃するはずだったミスイルと歩兵も、目論見を大きく外れることになってしまい、かなり手詰まりになっていた。

だが、戦況がよくなってきたところに、簪から凶報が入った。

『敵、大量に接近している模様。数は推定100000!』

「はあ!?! 見間違いないかねえの・・・か!」

思わず大きな声が出た。戦闘しながら簪の声に耳を傾ける。

『残念ながら違ってみたい。私だつて信じたくないけど・・・』

その言葉を聞いて、剣を振り回し、時折銃を撃ちながら考える。

「……分かった。そっちはとりあえずそのまま援護。ただし、俺は戦闘に加わってくれ」
『分かった。あ、それと言い忘れてた』

「手短に」

『セイリユウに深名さん？が乗ってる。なんかセイリユウが迎え入れたみたい』

その言葉に、軽く目頭を押さええなくなつた。何やつてんだあいつは。誰に似たのか自由奔放で、でも結果はそれなりにいい。だけどこの行動はさすがに想定外だつた。

「分かつた。とりあえず、そこは放置で。とにかく、」

死ぬなよ。

一オクターブ下げられたその口調の真剣さに、通信機の向こうでひるんだような気配がした。が、すぐに気を持ち直したようで、すぐに了解と返事が返つてきた。

それからというもの、一気に殲滅する方たちにも、増援が見えてきた。どうやら学園都市だけでなく、外の物も混ざっているようだ。が、数が多すぎた。

「仕方ない、か……」

そういつて取り出したのは体晶。今の状態を考えると、これを使うのは得策ではない。最悪、この後の人生すべてを棒に振ることになるだろう。しかし、このような事態となつては、これを使わないことには危険だ。

自分一人と、この学校、そしてI Sにかかわる人間。

重要視すべきなのはどちらかなど、考えるまでもなかった。

体晶を口の中に放り込み、嚙下する。瞬間、自身の感覚が一気に研ぎ澄まされ、ハイパーセンサーと自分の感覚、両方によって敵がどこにいるのかを瞬時に把握することができる。その感覚に、かなりの負担がかかっていることもすぐに分かった。

「あれだ。あれが仕事人だ」

「生け捕りにしろ」

「最悪殺せ」

「あいつの仇イイイイイイイ」

「殺す・・・殺してやる」

「今死ねすぐ死ね骨まで砕けろお！」

さまざまな声も、感覚によって聞こえてしまう。直接聞こえることはないが、自身の能力で観測できてしまうのだ。

「やっぱり、か」

自身の能力を使い、射出した鉄球に異常なまでの加速度を与え、操作しながら、万は冷めた頭で考えていた。

そもそも、なぜ自分だけにここまで攻撃が集中したのか。自分だけに集中しているところを見ると、自分だけに合ってほかの人間にはない特徴があるとしたか考えられなかった。

人殺しの経験がある？——そんなことを煎つたら軍人のラウラも同じだ。

ISに明るい？——そもそも、そんな人間などいくらでもいる。

神童？——昔の話だ。それに、織斑千冬という規格外もいる。

ならば、——学園都市、それも暗部絡みだろう。

方にだけ集中しているのは、ただ単に航空戦力で出張ってきているのが万だけだったからだろう。もし麦野が下におらず、上にいるのなら同時に襲われている可能性がある。そこまで考えて、この采配にして正解だったと方は思った。

やがて、方は周りの機体ほとんどが、先ほどと違う機体になっていることに気付いた。その直後、彼の頭の中に演算式が組みあがる。

「さて、やるか。——二人とも、少し離れていてくれ！」

「了解ですわ！」

「分かったわ。期待しているわよ、坊や」

声を張ると、即座に二人は離脱した。今度は目を閉じる必要などない。もともと、彼は体晶と相性のいい体質なのだから、暴走させれば大抵いい結果に転ぶ。あとはそのま

ま解放してやればいい。蛇口の大本たる元栓を開放してしまえばいいだけだ。周囲が凍り付く。

まず、アイギスに斬りかからんとした機体が凍り付き、その周囲の機体が凍り付く。その光景に、一部の機体は一目散に逃げ出すが、もう遅い。先ほどとは比べ物にならないほどの速度で次々に凍り付く。ハイパーセンサーで二人はもう完全な効力外に逃げていることが確認できていたから、万も遠慮などは一切なかった。

先ほどとは比べるまでもない速度と範囲を持ちながら、その凶悪な威力はそのままに、万の周囲すべてが凍り付いていく。そこだけ、まるで氷によって時が止まったかのようにだった。

「凄まじい、ですわね・・・」

効力外に脱しながらも、なお背面飛行で万から距離をとったセシリアが、その光景を見て絶句した。その隣で、スコールはバイザーの下で食えない笑顔を浮かべていた。

「本当に、ね。だけど、あの子にしては、ちよつと珍しい気がするわね」

「そうですね。彼は、効率性を重視するお方ですから。確かにこの手段は有効ですが、ここまではする必要はないですわね」

「そういうこと。まあ、目的は読めるけどね」

「目的……それは、いったいどういう……?」

「じきに分かるわ。……さて、そろそろやりましようか」

直後、まるでばねのようにらせんを描いていたゴルデンドーンの熱戦がまつすぐ前に伸びた。それを見て、セシリアもスナイパーライフルを構える。

「いいこと、敵機が落下を始めたら、一気に撃つわよ」

「承知しておりますことよ」

スコープをあえて低倍率にして、万の様子と首位の敵機の様子が分かるようにする。低倍率でも相手を狙い撃つことなど、今のセシリアには可能だった。同時に、ピットも動かす。ゆっくりと射撃体勢に移行していった。

やがて、機体が次々と地に堕ちていく。その瞬間、セシリアの目には迫りくる機体しか目に入っていないなかった。無感情に引き金を引く。意識的に感情を殺しでもしなれば、人差し指を動かすことはできないと、直感的に感じていた。

自身のライフルから光が迸り、隣のゴルデンドーンの熱戦から炎が奔る。その光は二つの機体を正確に撃ち抜いていた。先ほどのような、まるでガラスが崩れ落ちるようではなく、真正正銘きりもみ落下していく。あえて、セシリアはその光景を見つめた。一瞬でも確かな隙となりえる。だが、これは紛れもなく自分が奪った命だ。それには、ちゃんと向き合う必要があった。

「お嬢ちゃん」

慌てて様子のないスコールの声。セシリアも気づいていた。だからこそ彼女は、手に持った武器をサーベルに切り替え、振り返りながら突き立てた。

突き飛ばすような感覚とは大きく違う、骨を砕き、肉を貫く感覚。耳元で聞こえる断末魔。どんどん小さなものになっていく、相手の——おそらく女性の——呼吸。そして何より、自身の胸から腹部にかかる、暖かな液体。それが何なのか、考えるまでもなかった。微かに焦げ臭いにおいはとどめに放ったピットから出た光の影響か。だがそれも、今の彼女の前ではひどく無機質なものにすぎなかった。

そのまま無慈悲に剣を引き抜く。傷口からさらに血がどぶりと溢れた。そのまま、相手の駆動鎧は落ちていった。その光景は目で追わなかった。

この作戦を考えた青年も言っていた。『この戦いでは人死に出る』と。当の昔にその覚悟はできている。先ほど、その青年と背中を預けて戦ったときにはこの手の敵はいなかったが、その時にはもうすでに覚悟はできていたし、直後のあの空間を凍結させたかのような——実際そうなのだが——ことをあの青年が行ったことで、その覚悟は確固たるものになっていた。

「やるわね、お嬢ちゃん」

「とうに覚悟はできておりますゆえ」

その目は、まだ続く戦いを見据えていた。青年は、さらに迫りくる敵に対して、再び一騎当千をかけようとしている。それをさせまいとセシリアが飛んだ。次の瞬間に、バイザーの裏に文字列がよぎった。

[Blue Tears clear to fulfill the requir
red conditions of Second Shift.]

Preparation of Second Shift is already
y conpreted.

Second Shift ——— start.]

瞬間、ブルーティアーズが光に包まれる。一瞬の光が収まったのちに現れたのは、先ほどより一回り大きくなり、より頼もしくなったブルーティアーズだった。直後、バイザーの片隅に文字列が短く表示された。

[Second Shift finished ——— clear.]

New name of Blue Tears is "Noblesse O
bligee"]

ここに、ブルーティアーズ第二形態 “ノブレスオブリッジ” が誕生した。

46. 最終局面―奥手―

ブルーティアーズが二次移行した瞬間、万は何が起こったのかをすぐに理解した。もともと、データをとった時に二次移行が近いとは思っていた。驚きはない。だが、この土壇場で力を発揮するあたり、やはりセシリアなのだろう。

「呆けてる暇はないぞ。とつとと新しいスペック把握して合流しろ。何なら戦っている間に把握するのも可」

あえて回線をプライベートチャンネルに切り替えてから話す。直後、ノブレスオブリッジのビットが特殊な軌道を描き、様々な方位から迫りくる敵を落とした。どうやら、ビットの動きの制御を補助するAIが組み込まれたようだ。

それと同時に、操縦者たるセシリアの動きも変わっていた。今までよりも先を読んで動くようになった。それに加えて、二次移行した結果機動力も上がった。その結果、キルスコアの伸びは急激に上昇した。

「大丈夫か？」

やがて、万が訊いてきた。

「体は何ともありませんわ」

「そういう問題じゃねえ」

まだ足りないとはかりに群がってくる敵を次々に落としながら、セシリアの返答を即座に斬つて捨てた。

「内面^{なか}はどうなんだつてこと。きついのならいったん離脱しろ。簪のところにいけば——」

わざわざこちらに向き合い、真正面から目を見て万は問いかけた。だが、その言葉が終わりきる前に、セシリアはその手に持った銃を放つた。万の顔のすぐ横を通り、直後に爆音。それを確認してから、彼女は言った。

「今は、そんなこと言っている場合ではないでしょう？」

それを言ったセシリアがどんな表情をしているのか、彼女自身にもわからなかった。ただ、一つ言えるのは、もう今までの日常に戻ることはできないだろうということだ。

「……分かった。引き続き頼む」

それだけ言うと、万は得物を握りなおした。その顔は、どこか悲しげだった。そのまま次々に敵を屠つていく姿は、まるで赤い吹雪で舞う踊り手のようで、どこか魅入られてしまうようなものだった。もつとも、魅入られようものならその命を無情に散らされる魔性の魅力だろうが。

だが、いくら彼らが奮闘しようと、敵の数はほとんど減らなかつた。そんな中、実弾

とレーザーが雨あられと振り注いだ。器用なもので、セシリアと万だけでなくスコールにも当たらないようにしつかりとコントロールされていた。その光景を見て、万はにやりと笑った。

「さつすが庵。風を完璧に使いこなしてやがる」

「そうですわね……」

セシリアはその圧倒的な実力に驚いていた。

庵の実力は群を抜いている。それはあのテストの時からわかりきっていた。だが、こ
うも間近で見せられると、やはり圧倒されるものがある。だが、こちらもむぎむぎ負け
てなどいられなかった。なにせ、こちらは二次移行した機体なのだから。

その思いが、新たな文字列を表示させた。

「Noblesse Oblige's One-off Ability is
available.

It name is "Noblesse Oblige".」

微かな光が、ブルーティアーズよりスラストが増え、機体のサイズも一回り大きくな
ったノブレスオブリッジを包む。それが兆候だと、セシリアはすぐに分かった。

ブルーティアーズのビツトが、手にしたスターライトブレイカーの周りに集まる。そ
の機体の名前が冠せられた一撃が、その砲門から発せられた。その極太のビームは、多

くの機体を撃ち落とし消えた。しかも、その威力にしては、シールドエネルギーの消費は少なかつた。

これこそがノブレスオブリッジの単一使用能力^{ワンオフアビリティ}。その威力に、セシリアは戦慄した。それと共に胸に刻むのは戒め。なるほどノブレスオブリッジ——高貴なる者の責任とはよく言つたものだ。

普通に使えば明らかにオーバーキルである。もし競技で使おうものなら、これで相手のシールドエネルギーの大半どころか、一撃でシールドエネルギーが吹き飛んでも不思議ではあるまい。

スターライトブレイカーは出力をオーバーロードさせたためか、暫く冷却が必要なようだ。だが問題はあるまい。接近された時のためにと、万に近接戦闘の心得を受けている。彼にとつては、場合によってはお互いに片手間だつたり合間だつたりといった状態だつたが、それでも続けた分だけ成果は出ていた。国家代表レベルと張り合えるとは言わないが、少しは粘れるくらいにはなつていた。その程度でも腕があれば、そう大して腕のないレベルの相手など楽勝だろう。そう思いつつ、片手に取り出すのはリーチのあるサーベルではなく取り回しのきくタガー。これだけ乱戦なら、こちらのほうが便利だと判断した。これも、あの青年から教わつたことだ。

「いいか、セシリア。間合いによつては、武器の選択が明暗を分けることもある」

「それはそうでしょう。近距離からライフルを使う人間などいませんわ」

ある戦闘訓練の終わった夜、夕飯を共にしながら二人が会話している。

「うんにゃ、場合によつてはそれが有効だとなりえる。ライフルは長距離狙撃銃だ。つまり、弾の初速は拳銃に比べ遙かに早いし、命中精度も高い。一説ではライフル弾の初速は拳銃のそのの三倍、もしくはそれ以上に匹敵すると言われるほどに、な。つまり、拳銃では削りきれなかったり、拳銃でも十分な距離だが、より正確に狙いを定めたいときだったりするときやなんかに、スナイパーライフルを持ち出すつて言うのも、まあアリなわけだ。」

他にもいくつか、武器の選択が必要な時がある。何かわかるか？」

「実弾とレーザー、ですか？」

「ま、それもある。が、俺が言いたいのは別だ。近接戦闘でも、武器の選択が重要な時があるんだよ。時として、な」

「それは、槍か剣か、ということですか？」

「まー、それもあるっちゃあるかなー。俺が言いたいのはそういうことじゃない。そもそも、あんたの近接スタイルに、槍なんて言葉はないだろう？」

「……まあ、それもそうですが」

「だったら、この際教えても意味はない。んでもって、俺は今、一つヒントを出した。それをもとにして答えてみ」

それを聞いて、セシリアは考える。この青年がこういう言い方をするということは、これまでの会話の中にヒントが隠されている、ということだ。そこで思い当たった。自分の近接戦闘の時は、基本的にサーベルとタガー、つまり長剣と短剣だ。ということは、「武器の長さの違い、ですか」

「その通り。さすがはセシリア、頭の回転が速い。」

確かにタガーに比べてサーベルは一撃が重たい。それに、リーチが長いということは、それだけで武器となりえる。だけど、それが仇となるときもある。長くなるってことは、それだけ重心が先に寄るってことだ。しかもだ、重心が遠くなるだけならまだいいんだが、剣自体の重さも、タガーに比べれば重くなる。ということは、取り回しが悪くなるってことになる。それに、セシリアの使うサーベルっていうのは細身の剣だ。比較的がっしりした、所謂ロングソードっていう部類にしなかつたのは、ただ単に短剣との組み合わせを考えてのことだったんだが、ま、そんなの今はどうでもいい。とにかく、細身ってことは、無理に叩き切ろうとすることができない。正確には、できないわけではないけど、剣に大きな負担をかけることになる。最悪ポキリだ。これは、前言ったかも

しれないけどな」

「そこで、引き斬るといふ技術が生まれたわけですわね」

「そ。だけど。引き斬るつていうのは、その名の通り剣を引くようにして斬ることだ。無造作に叩き斬るときとの大きな違いは、手首や腕の使い方だ。それによつて、結果的に集中力も食うことになる。一対一ならまだしも、乱戦になつたらこれは危険だ。いちいち斬るたびにそんなこと考えてたらやがて集中が切れてあの世行きだ」

「ですが、そこでタガーというのは——」

「有効なんだよ、これが。」

乱戦の時に必要なのは、周りの状況を見ることが。タガーなら、一撃離脱を繰り返すつ場合でも、かなり自由度が高い戦い方ができるだろうけど、サーベルはそうはいかない。ひっかけられたらそのままハチの巣にされるだろうな。そこでタガーなんだよ。タガーなら取り回しが利くからな。そういう乱戦の時にはこつちのほうがいいときもある。ま、これはその時になつてみないとわからんところはあるけどな」

あの時は正直言つてぴんと来なかつた。だが、こうしてみると彼の言つていた意味が

よくわかる。確かに、この場面ならサーベルで突いたり切ったりするより、タガーで機動力を重視して落としていくのが得策だろう。それに、ブルーティアーズにはそこまで負担はなかつたらしく、そちらはまだ使える。ただし、こちらも乱発はできないだろう。だが、それでも十分である。その判断の下、敵のもとへ飛び込み、その短剣で落とす。もうその手の感触に嫌悪を強く覚えることはなかった。敵を感じて振り返った先にいた敵の群れは鈍色と銀色によって蹂躪されるように撃ち落とされた。

「クーリングタイムか？」

「ええ」

「なら下がってろ。庵」

「分かっている」

短いながらも確かなやり取り。その一言で、二人は敵の群れに対してその切っ先を向けた。それを挑発と受け取った相手がまず機関銃を連射してくるが、それを問題にする二人ではない。万のほうはそのシオルダーアーマーで受け止め、庵はその剣ですべて弾いた。茫然とする二人に、セシリアを中心として背中合わせになった二人が銃を円形に乱射する。

「守られるだけに、甘んじるつもりなど毛頭ありませんわ」

「だけど、お前は後方支援向きの戦闘スタイルだろ？」

「近接も鍛えられました。それは、他ならぬあなたがご存知でしょう?」

そこまで言われれば万も黙って頷くしかなかった。

「分かった。無理するなよ。庵、スリーマンセルで動くぞ」

「了解」

その号令と共に、三人とも敵の群れの中に突っ込んでいった。後ろから追撃にかかった敵は爆炎に包まれる。

「あら、若い子のほうが楽しいだろうっていうのはわかるけど、お姉さんみたいな大人の魅力というのも乙なものよ?」

妖艶な笑みは、見るものを魅了し墮落させる魔性の笑みか。それに、敵は明らかに二手に分かれた。

一方、一夏達は苦戦を余儀なくされていた。万の下に敵が集まってきているとはいえ、それはあくまで氷山の一角。いくら元軍人で軍用ISを駆るナターシャがいるとはいえ、あくまで彼女は一人しかいないのだ。一夏も含めた生徒も、ある程度覚悟を決めてかかっているとはいえ、所詮はその程度だ。だが、それもやがて崩れた。

一夏が目の前の敵を数頭落とす間に、後ろに敵が接近してきた。生憎なことに、凰もシャルロットも違う敵を相手にしていて、援護ができない。一撃覚悟で振り返ると、そ

ここを一筋の光が貫いた。その部分の損傷が完全に焼け爛れていることから、その威力の高さがうかがえる。射出元を見ると、そこには閃光を纏った麦野がいた。

「悪い、助かった」

「口を動かす暇あつたら手動かせ、クソガキ」

いつもよりかなり口が悪いが、気にしている暇はない。とにかく、戦況が少しでも好転するのならば万々歳だ。そう思いながら、一夏は再び剣を振るつた。その剣がまた更に敵を捉え、落としていく。少なくとも嫌悪感は消えないが、そんなことを気にしている暇はない。

「案外やるじゃねえか」

「やらなきやいけないからな」

周りには頼りになる仲間もいる。振り返っている暇はない。それに、この手はすでに血濡れだ。ならば、今やることは一つしかない。ようやく、腹がくくれた。

「やらなきや、やられる」

また一機と倒しながら、一夏はその言葉を口の中で反芻した。その様子に、麦野はやれやれと言った様子で首を振ると、右手にナガミツを展開して再び突っ込んでいった。先の閃光と、その時に持っていた得物がライフルだったことから遠距離型だと決めつけていたのだろう、相手が一瞬怯んだ隙を見逃すほど第四位たる彼女が甘いはずもなく、

その機体も含めて数体があつという間に地に墮ちた。油断せずにOビットを空中に放ち、さらに数機を墮としにかかるが、これは躲された。

「さすがに同じ手を何度も食らうほど甘くない、か」

ならば仕方ない。万から本当にここぞというときにしか使うと言われて渡されてきたものを使うときだろう。

「本当に、本当にピンチだったりとか、そういう場面のみ、こいつを使え」

そういつて渡されたのは透明なケース。その中身は白い粉末。だが、それが何なのか、麦野は一目で見抜いた。

「必ずしもいい結果が出るとは限らないと思うけど?」

「それでもだ。何も無いよりマシ。それとも、ビビってるのか?」

「まさか」

「なら受け取つとけ。俺の分はあるから大丈夫だ」

そういつて押し付けた彼の目は、今までにない光を宿していた。

「分かった」

その場面を思い出しながら、麦野は手に透明なケースを取り出した。その中身は白い粉末。それを少し、ほんの少しだけ経口した。それだけでも、変化は激烈だった。勝手に頭の中で起動式が組みあがる。ビットなど関係はない。ただ自分が手を前にかざすだけで、複数の光の球が出現した。そこから光の筋が伸びていく。その近くに味方がいることなどお構いなしに、その光は敵を一気に貫いた。

「ちよ、危ないじゃない！」

ギリギリで当たらなかった凰が抗議の声を上げるが、迫ってくる敵は見逃さない。ややポーつとする頭を半ば無理矢理に動かし、右手の長剣を振るう。その範囲にいた戦闘機は回避が間に合わず、片翼をもがれ落ちていった。それにとどめの一撃を放ったところで、シャルロットが気付いた。

「麦野さん、まさか、さっきのって……体晶、だっけ？」

「ああ。だから今の私には近づかないほうがいいぞ」

遠距離からの砲撃を自身の能力で作った楯で無効化し、そのまま極太のレーザーとして打ち出して攻撃とする。その光景は、まさに蹂躪だった。

47. 最終局面―仕事―

「増援が無くなってきた。どうやら終局に向かつてるみたい」

『そうか、それは吉報だな』

今もなお前線で戦い続ける青年に、簪が無線を入れる。答える声は心なしか安堵が含まれていた。

「でも注意して。まだ増援が途切れたわけじゃないし、増援のほとんどはそつちとこつちに向かつてる」

『りよーかい。そつちも死ぬなよ。きついと思つたらその場を放棄してすぐに逃げろ』
「分かった」

通信を切る。瞬間、弾丸が飛んでくる。だがそれは、自分にあたる前に割り込んだ黒い影によつて真つ二つに斬られた。

『ご無事ですかマスター』

「大丈夫。ありがとうね」

『いえ、当然のことですので』

ブラックバードの合成音声と会話をして、簪は再び周囲に目を向けた。おそらくステ

ルスも使用していたのだろう、リーダーに映っていた数より多い敵影が周囲に合った。だが、こちらも万謹製のステルスを起動させているし、そもそもこの程度で負ける自分ではない。

「行くよ、打鉄式」

自身がその身を預ける機体に一言つぶやくと、簪は敵へ飛んだ。近距離からフレアを放つと、本来ジャミング用として使われるそれは十二分な威力となつて相手を撃墜させた。見えないところからの一撃は確かに有効だったが、すぐさまこちらに狙いを定めて撃つてきた。おそらく、熱源を探知してきたのだろう。万ならばその辺まで誤魔化すこともできそう——実際は彼でもできない——だが、今の自分には不可能だ。こういうことは予想できていたから、ステルスはすぐに解除する。直後に、山嵐を一気に射出した。万により手を加えられた山嵐は、従来の性能を上回る60連射マルチロックオンということも可能としていた。その最大火力を周囲に叩き付ける。一部、否、目算で半分は落とされたものの、その周囲には銀色の小さな紙のようなものが漂っていた。弾頭にチャフがついていたのだ。このあたりの小技も含めて調整してしまうあたり、つくづく彼には敵わない。

それが何かを断定するまでの短い間は、簪が薙刀で複数の敵を片付けるのには十二分な間だった。もとより、この身は暗部に通じるもの。死体など見慣れている。殺人に関

する忌避感など、当の昔に消え去っていた。同時に、脇に抱えられる形で備え付けられた春雷を一発放ち、遠方に見える敵も撃破する。

後方支援の機体というと、近接戦闘が不得手であることもままある。が、その先入観に簪は当てはまらなかった。遠い敵は山嵐と春雷で、近い敵は薙刀で圧倒する。だが、それもこれも思わぬ援護に助けられていることに簪は気づいていた。

先ほどからステルスと自身の能力によつて、光の反射、音、赤外線を打ち消し、電波の反射すらも消したセイリユウは完全に場を引つ掻き回していた。

敵からすれば何も見えないし何も聞こえない、電子類も全く反応しない、なのに攻撃は存在し、こちらは着々と倒されている。いくら警戒していても、攻撃がどこから来るのかも、どのような手段で来るのかも、攻撃されるか、引き金が引かれる瞬間までさっぱりわからないのである。いくら歴戦の兵士でも、これが恐怖を呼び起こさないことがあろうか。この場において、完全にそのパイロットたる深名は最強だった。

しかも、この機体が考えうる多くの状況に対応したものであったことも幸いしたのだろう。レーザーで来ることもあれば、実弾で来る時もある。しかも、レーザーが偏光射撃でもありえない曲がり方をして飛んできたこともあれば、一気に軽く20発はあろうかという実弾が一点集中で雨あられと襲つて来たこともあった。はたまたおそらく近接武器で攻撃されたと思われる落ち方をしたのもあった。極めつけは、いきな

り見方がきりもみ飛行をして同士討ち、そこに追い打ちといった具合だ。これらすべてが彼女とセイリユウの能力で可能だというあたり、つくづくチートである。

そのあまりにも無茶苦茶なキルスコアに、相手はやがて、彼女のことを「ハデス」や「死神」などと呼びながら散り散りに逃げていった。それを見た簪は指示を出す。

「ガンチャリオット、ブラックバード、追い打ちをして。もし他機との交戦区域に入った場合、共闘してもいいし、そのまま追撃してもいい。ただし、同士討ちは避けること」
『了解しました、マスター』

「深名さんはここにいて、私と一緒に支援を。あの人のことだから、セイリユウも多少以上に支援ができる機体になつてはるはず」

「分かったわ」

深名の返答はやはり——と言つては変だが——虚空から聞こえた。

「さて、支援を再開しましょう」

一言そう言いつつ、仮想のコンソールを出現させ、操作する。返答の声は聞こえなかったが、その処理の速度から手伝つてゐるであろうことは容易に想像がついた。

その頃、万たちはいまだ苦戦していた。いくら増援が無くなつてきたとはいへど、元から居た兵が消えるわけではない。その雲霞のごとき大群はいまだに万たちを苦しめ

ていた。

「だー、いったいどんだけ湧いて出て来やがんだ、こいつらー！」

さすがの万もここまでの大群は想定外で、思わずぼやくが、それに対する答えは思いのほか近くから来た。

「ぼやいている暇などありませんわよ」

クーリングタイムが終わったのだろう、自身の真の得物たるライフルを構え、周囲に向けて一通り放ち、万の背中に自身の背中を合わせてセシリアが言った。

「ま、そりやそうなんだけども」

そういつているそばから敵が来る。だが、それはどちらかというど敗走だった。半ば無視を決め込もうと思ったが、それを負う機体を見て、その気持ちが変わった。片手に持った、槍と見まがうような簡素な銃を逃げて来る相手に向けると、そのまま数発放つ。そこまで細かく狙いを定めたわけではないが、どうやら急所にあたったようで、そのまま当たった相手が数機地上へと落ちていった。

『助かりました、盟主』

「どこでそんな言い回し覚えたんだよ。むず痒いからやめてくれ」

『では何とお呼びすれば』

「普通に黒川でも万でもいい。とにかく、蹴散らすぞ」

残りの逃げようとした機体も、どうやらはらをつくくつたらしく、こちらにその得物を構えている。どうやら戦うしかないようだ。

『御意にございませ、黒川殿』

いちいち大げさな言い方には少々むずがゆいが、彼女らにとつては万こそ“親”なのだ。そう聞かせ、何とか堪えることにした。

「津波つてのは最後が一番でかい。こつからが本番だ、気張れよ！」

「『了解！』」

その頼もしい返事に背中を押させる語りで、再び万は空を蹴った。最初のような物量作戦ではなく、完全に新型兵器や学園都市性と想われる兵器を投入した戦いとなっていた。

そんな中、万の能力による観測に妙な反応が検知される。直感的に嫌な予感を覚えた万は、それに対して自分の能力を発動させ、防御とした。少し遅れる形で、その防壁に不可視の弾丸が突き刺さる。が、この程度ならば普通に防御に成功した。が、当の本人は盛大に舌打ちをしていた。

「やっぱりきやがったか。てか、ようやくお出ましか」

そこにいたのは、青少年たちが操る、ISではない駆動鎧の群れだった。

「あと懸念されるのは、能力者が駆動鎧をまどつてくること、かな」

「それって、超能力者がISに乗っているようなもんってこと!？」

真意をすぐに見抜いた凰が声を大きくする。慌てたように唇に手を当てた方に、凰は少々頬を染めながら居住まいを正した。それを見て、万も続けた。

「でもま、概ねその認識で間違っていないかな。おそらく、その手に使われるのは皇位能力者ではなくて、いいところレベル3だろうな」

「っていうと、どのくらいの強さなの？」

シャルロットが口に出した疑問は、全員が思っている疑問だろう。それに対して、万は少々考えてから言った。

「そーだなー、俺はレベル4の中でもかなり強い部類だからな。自分で言うのもなんだけど。レベル3っていうと、個人差もあるけど、俺みたいな念動能力者だと、ま、10kgくらいの重りはそれなりに持ち上げてくれないと困るかな。でも、あくまで個人差もあるし、それに学園都市製のCPUを搭載してるだろうから、おそらく演算補助も入る。そうなると、俺レベルまで行くってことは少ないだろうが、ま、固体であれば大抵のものは動かせるって考えたほうがいい」

「区別をつけることは可能なのか」

「ほぼ無理。しいて言えば、パイロットが精々言つて俺らくらいの青少年か、それより下かつてことくらいかなー」

ラウラの疑問を、万はバツサリと斬つて捨てた。

「あと、戦闘ノウハウとかもおそらく脳に直接インストールされてるだろうから、かなりの強敵だぞ」

「仕方ねえ。一気に片を付けるか！」

幸いなことに、体晶はまだ残っている。即座に離脱可能な空間移動系、彼の能力ではそもそも干渉すること自体が不可能な振動操作系や浮力操作であれば、能力で干渉することはできない。それに、ありえないとは思うが高位能力者がこの手の機械に乗つていたら、いくら応用力に富んでいて、出力もそれなりにある方でも太刀打ちできない可能性も否定できない。

だが、観測くらいはできる。それに、能力者軍団の中に空力系の能力者がいることは把握済みだ。それくらい観測できない方ではない。それに、それくらいの対策はあちらさんも立てているだろう。空力系の能力者は一人で、それも捨て駒と見るべきだろう。ならば、自分のやるべきことはただ一つだ。

自身の能力を使って、その応用で瞬間^{イグニッションブースト}加速を静止状態から発動させる。それを何度か、一瞬のうちに発動させることで、瞬間加速はまるでレポートのように掻き消え、一気に肉薄した。あまりの速度に、相手が反応することもできなかつた。相手の胸に手を当て、一言唱える。

「壊せ」

その一言だけだつた。だが、相手は一瞬のうちに目を見開き、そのまま墜落して行つた。

今方が行つたのは、心臓の周辺に超音波を当て、的確に壊死させるという作業だ。どんな人間でも、心臓が壊死してしまえば簡単に殺せる、というわけだ。直接触れなければ使えず、しかもピンポイントで触れる必要があるのです、そんなしよっちゅう使うわけにもいかないが。

ありえないといったような表情のほかの兵士に、方は薄く笑いかける。

「何を驚く必要がある？あの世界ではこんなことは日常茶飯事だ。違うか？」

その一言の直後に、再び瞬間加速。一瞬とはいて、相手はその身を逸らしにかかるが、今回の狙いはそちらではない。一瞬で相手を斬り伏せると、その勢いを生かして空中宙返り。その過程で短剣を複数投擲、それらは過たず相手の頭部を貫いた。が、2、3本は逸らされたり、はたまた破壊されたりした。

「おいおい、壊してくれるなよ。あれでも作るの結構大変だったんだぞ？」

軽口をたたきながら、その目はもう既に異常の域だった。だが、そうなることなど万も承知の上。だからこそ、無駄遣いせずにここぞの時までとっておいたのだ。回復したかどうかは微妙なところだが、消耗していかないのならそれだけで上等だ。

「最後の戦いだからな。大盤振る舞いと行こうか！」

ここに、狂気の殺戮者にして、暗部時の依頼達成度90%以上という伝説の仕事人^{タスカ}が降臨した。

それをすぐに悟った相手は、能力も多分に使った白兵戦へと切りかえた。万はそれに対して上等だと左手で指先を上にして手招きする。その意味を理解したのだろう、とびかかってくる相手を、万は2本の長剣で迎え撃った。

隣で戦況が変化した。それは、セシリアも分かった。

『お止めなさい』

一瞬だが援護に行こうとしたところを合成音声が止めた。そこを振り返ると、相変わらず見事なコンビネーションを披露する二機の姿。

『これは盟主の戦いです』

『そして、そこにはおそらく、見方は盟主しかいません』

『あなたが行っても命を散らすだけ』

『そして、おそらくそのようなことは盟主も望んでいない』

『ですから、お止めなさい。盟主のためにも、自分のためにも』

そこまで言われて、だがそれでも、万のほうを見た。自分には何もできないかもしれない。それでも力になるだけでもしたかった。

「どうか、ゴ無事で」

無線に一言だけ告げる。そのまま、自分は二機の戦闘の援護に向かった。

一夏達の戦況はやはり思わしくなかった。いくら一夏がある程度吹っ切れ、麦野が援護に入ったとは言え、一夏の機体は如何せん燃費が悪すぎるのだ。そんな折、敵の群れを割いて赤い閃光が飛んできた。その閃光は、問答無用で白式に触る。その瞬間、かなり減っていた白式のエネルギーが回復した。

「ありがとう、箒」

「そんなことを言っている場合ではないぞ」

お礼を言ったのにこのような言葉。こういうのを、女は強いというのだろうか。そんなことを思いながら、一夏は改めて敵の下へ飛んでいった。そのまま、その剣を横薙ぎに振るう。それだけでまた一機、地面に向かって落ちていく。もう何期目かもわからな

い。だが、嫌悪感はいまだに取れなかった。

「やっぱり、後味悪い」

「そんなことを言っている場合ではないだろう」

思わず漏れた一言にもこの反応だ。やはり、自分が出るべきではなかったのか。そう思っている時に、一瞬で目の前に回った箒から、遠慮会釈なしの張り手がさく裂した。そのまま無言でまたどこかへと飛んでいく。

「ありがとな」

腹をくくれたつもりではあつたが、まだまだだつたらしい。だが、今の張り手でようやく踏ん切りがついた。もう飛んで行ってしまった幼馴染に一言札を言うと、一夏は飛んできた砲弾を一刀両断した。

「・・・手段を選んでる場合じゃないんだ」

自分に言い聞かせるようにつぶやいて、再び構える。その目は、今までよりもいつそう厳しいものとなっていた。

48. 最終局面―狂戦―

『どうか、ご無事で』

その声を聞いた瞬間に、万は果たしてその願いを自分が聞き届けることができるのかと思った。いくら学園都市でもほとんど類を見ない応用性に富んだ能力者とはいえ、これだけの強化された上に駆動鎧をまとった能力者たち相手に無傷とはいかないだろう。その時に、彼女の言う無事ということが果たしてできるのか。その不安が心をむしばみかけた。

だが、その不安も飛んでくる攻撃に吹き飛ぶ。飛んできた弾丸が電気を纏っていたところを見ると、消音性に富んだ電磁力狙撃か。確かにどれほどの能力者でも、反応できなければ何の意味もない。しかし、その程度に屈する彼ではない。容易にそれを止めると、お返しとばかりにはじき返す。その反応の速度を想像していなかったのか、何とか防御はできたものの一応のダメージを負った形となったようだ。それをよく確認する暇も惜しんで、再び敵の群れへと突っ込んでいく。

どうやら、遠距離から攻撃する能力者を集めてきているようで、これらの白兵戦能力はお世辞にも高いとは到底言えないものだった。それくらいは、少し剣を交えて場わか

る話だ。そう見切り、今度は大きな銃口に刃がついたような、銃剣にも似たものを取り出した。一気に近づいて突き立てようとした瞬間に、その周囲を光が包んだ。

(ちっ、閃光系か！)

完全に想定していなかったわけではない。人間の目は、暗いところに慣れるより明るいところに慣れるほうが遥かに早い。それを利用したのが閃光弾というものだ。だが、こんな乱戦では少なくとも多用していいものではない。こちらも、一瞬でフィルタがかかったものの、その一瞬が隙となつて襲い掛かつてきた。が、その程度だ。

もう片方の手で長剣を薙ぎ払う。あたりこそしなかつたが、その反応に敵は一瞬ながらも怯んだ。それが決定的な隙となつた。

「蹂躪しろ」

薙ぎ払うと同時に放射状に展開されていたショルダーアーマー。それが指すものはただ一つ。光の嵐による蹂躪により、さらに敵が何機も落ちていく。もはや数えている暇などない。

そもそも、いくら不意を突いた強い閃光で視界を潰そうとも、その程度で空間把握を潰せるはずもない。こちらから相手に干渉ができないということは、相手からこちらにも干渉ができないということだ。目が利かないのならば目を閉じればいいだけの事。その状態ならば、視界に使っていた部分も演算に回すことができる。ただでさえも体晶

によつて半ば無理矢理に強化している状態なのだ。それだけでどこに敵がいるかなど簡単に分かるというものだ。この程度、造作もない。

「さてと、一気に片を付けるか」

戦闘を間延びさせる意味もない。もうかなり消耗してきている。それに、この手の相手は、同じ穴の貉である自分が最適だ。その覚悟と共に、目を閉じたまま近接戦闘に入つていった。

一方、セシリアは苦戦していた。有象無象の雑魚ばかりであつたのならばよかつたのだが、あとから援護してきた人間が異常だつた。

「おいおいおい、何してんだこの阿呆ども」

見方を仲間とみなさず、必要ならば使い捨てるタイプであることは一発で分かつた。それゆえに、彼女は少なくない嫌悪の感情を覚えた。

「こんな小娘……だけじゃねえな、ちつと齒ごたえがありそうなババアもいるが、ま、ほぼ生娘だけの集団に何手こずつてんだ」

「も、申し訳ありません」

「謝つてほしいわけじゃねえよ。結果を出せ、結果を」

機体もほかのそれに比べると一回りから二回りほど大きい。何より、その体から発せ

られるオーラが違った。それは、ほかの人間とは比べるものがおこがましいほどに狂気に満ち溢れたものだった。

「お嬢ちゃん、悪いことは言わないから、ここから離脱しなさい」

「いえ、ここでこのまま戦いますわ」

その言葉に込められた意志に、スコールは一つ息をついた。

「分かったわ。死なないようにね」

「言われるまでもありませんわ」

そういうと、セシリアは両手の得物をそれぞれ構えた。

「ほう、嬢ちゃん、なんだか様になってんなあ」

「一応、褒め言葉として受け取っておきますわ」

言いつつ、ライフルを一発撃ち放つ。それを短剣で切り裂きながら一瞬で肉薄する相

手を、セシリアも短剣で受け止めた。

「なるほどなるほど、なかなか読みのいいやつだ」

「わたくしでも、馬鹿正直に正面から撃った弾が当たるほど甘くない相手であるくらいはわかりますわ」

「ほう、おもしろえじゃねえか」

会話をしつつ、両脇腹に備え付けられたブルーティアーズの実弾砲を向け二発同時に

放つ。あえて威力を落とした弾頭を選択したことにより、落ちずに怯んだ相手に、ライフルからサーベルに変えたもう片方の手を薙ぎ払う。が、それをまるで長座体前屈のように体を曲げて、躲すどころか蹴りを一発食らうことになった。

「ほう、なかなか」

「そちらこそ」

短いやり取りをしながら、相手は嗤う。その表情すら狂気に満ちていた。

万の相手側はそれからも何度か光を放っていたが、万はさほど苦にはしていなかった。まさか視界を奪われた状態で近接戦闘をするなど想定していなかったのか、何機かはなす術なく落とされた。

突っ込んだ勢いをそのまま乗せて突き立てた剣をそのまま横に力ずくで薙ぎ払い抜き、また飛んできた弾丸を斬る。先ほどもそうだが、急所を狙うのはいいが狙いをつけている時間が長すぎる。躲すよりそのまま斬ったほうが早いということを直感で理解するくらいには簡単な弾道だった。だが、このまま後方からちまちまと撃たれるのは面倒だ。そのままその狙撃手の下に飛び込むと、逆袈裟に斬り上げる。相手はとつさに銃で防御したのか、肉ではなく何か硬質のものを斬った感触が残った。そのまま返す刀で頭から一刀両断にする。生暖かい血の感触をその身に残しながら、万は振り返りざまに

片手を前に出した。すると、先ほどには程遠いものの、そこにいた敵がすべて、まるで凍り付いたかのように動かなくなつた。

「つたく、最初つからこうしときやよかつたんじゃねえか。何ちまちま戦つてんだよ俺」
誰にともなくぼやくと、通常機動で残りの敵を一気に切り裂いた。万はそのまま我が子の援護に向かつて飛んだ。

この状況で一番劣勢になっているのは意外にもガンチャリオットとブラックバードだった。いくら彼らのコンビネーションが完璧とはいえど、元となつた機体の性能がどうしても足を引つ張つていた。もともとがテストタイプである以上、出力より取り回しの良さを求められた結果だった。

そんな折、戦いの外から、彼女らを襲つていた機体の網をまるで食い破るように鈍色の機体が飛び込んできた。

『黒川殿』

「無事そうで何よりだ。とにかく、こいつら蹴散らすぞ」

『了解』

このじり貧の状況を救つたのは、その二機の作成者たる青年だった。その体はかつてないほどに血に塗れていた。それを気にすることもなく、容赦なく戦つていた。

「まったく、一騎当千なら万の大群を使えば押しつぶせるってか。本当に無粋だよな」
有効と分かっている。が、万はそれが有効であるということも分かっていた。次々に敵をなぎ倒す。が、相手もこちらの動きが少しづつ読めてきたのだろう。万が加わっても、なお劣勢に追い込まれることとなった。しかも、敵の勢いは収まっていくどころか勢いを増してきていた。

「こりゃステルス使ってこっそり大群送られたかな。仕方ねえ、やるか」

もう一度体晶を摂取する。周りがクリアになったのと同時に、微かな頭痛を覚えた。無理もない。ここまで負担をかけたのはまずない。被検体が自分であった以上、そこまです無茶をするわけにはいかなかった。かの有名な走り屋漫画の主人公がエンジンをブローさせてしまったように、限界ギリギリの無茶を続ければ負担がかかりすぎるのは自明のことだ。だがそれでも、それだけのことをする意味はあった。

ハイパーセンサーと照らし合わせ、正確な位置をつかむ。圧縮した空気の圧縮熱を吸収することでエネルギーとし、瞬間^{イグニッションブースト}加速を即座に発動させ、敵を切り裂き、回転し、銃を放つ。そのまま下がりながら銃を数発しつつ、後ろに迫った相手を切り裂く。その様はまさに一騎当千だった。

（私たちも負けていられんな）

（そうだね）

2機の間のネットワークでやりとりをした2機もそれに続く。思考回路とほぼ直結状態の特殊ネットワークは、こういった場面での連携には絶大な効果を発揮した。ブラックバードが本陣に切り込み、ガンチャリオットが援護する。言葉にしてしまえばそれだけだ。だが、ガンチャリオットが引き金を引くのと、ブラックバードが射線を開けるのがほぼ同時というようなことを何回も繰り返されてはたまったものではない。お世辞にも高いとは言えない機体性能ながら、その能力は万にも匹敵するかと思われた。しかも、万の場合は単騎なので飽和させることは可能だが、こちらは2機のため、思考を飽和させることは難しい。“二騎当千”の戦いに、若干ながらも戦況はよくなるかに思えた。

その矢先だった。順調に敵を落とす万の頭に、突然痛みが走った。激痛とまではいかないものの、その痛みに一瞬動きが止まる。その隙を見逃すはずもなく、敵が襲い掛かった。目を開いた時にはすでに遅かった。多数の敵が一気にとびかかってきて、流石にすべて捌くのは不可能だった。

(くそ、が……！)

防御を捨て、一点突破で突破口を開き、離脱するのが最善手だと直感した。だが、それをしても、損害は決して小さいとは言えないだろう。最悪、撃墜のリスクもある。だが仕方ない。そう割り切った、否、割り切るしかなかった。

その時に、自分の後ろと横をかばえる位置に二つの機影が割り込んだ。自分に向かうはずだった攻撃はすべてその二機に向き、おびただしい黒煙を上げさせた。離脱した直後にその場所を見ると、ガンメタと黒の機体がそれぞれ地面に向かって行くのが見えた。

「お前らー！」

その瞬間に確信になった。いや、割り込まれた瞬間から、この可能性しかないとかかっていった。ただ信じたくなかったただけだ。

『マスター、どうか、この戦い、勝ってくだ』

最後まで言い切る前に、その通信は完全にノイズに吞まれた。それが指す意味は一つだけだ。少くない衝撃が万を襲った。

感情に動かされるようではいけない。それはわかっていた。だがそれでも、完全に無力化するためか、あるいはデータ収集目的か、撃墜された2機の近くに敵が群がる様を見た瞬間に、その敵が見にくいハイエナのように見え、頭の中には明確な怒りが支配した。

攻撃を受けた相手からしたら、それは本当に何が起こったかわからないというものでろう。ただ一つ確実なのは、その体がもうすでに氷よりも冷たく、指一本でも動かそうものならそこから文字通り粉碎するということだ。

「触るんじやねえよ、ハイエナどもが」

静かながら、それでいて激しい怒りを内包した声でした。その声がするまで、目の前に新たな機体がいることに気付かなかった。その青年が手にした大剣を振るうと、その瞬間に取り囲んでいた敵は尽く砕かれた。

「お前ら、最後まで俺をかばいやがって・・・」

その台詞とは裏腹な、まるで悪戯を叱る親のような口調。だが、次に瞬きをした瞬間に、その目には烈火のような怒りが宿っていた。その全身から発せられる怒りに、敵は思わず戦っていた。

「俺だっていつでも落とされる覚悟はしてる。だがな、落とされた後に、その死体を漁るっていうのは、一研究者としても、こいつらを生み出した人間としても、到底見過ごすことはできねえ。」

てめえら、俺をここまで怒らせた、その覚悟はできてんだらうなあ！」

その怒号より、その気配に、相手は完全に動けなかった。直後に、その体が光に包まれる。

「Aegis clear to fulfill the required conditions of Second Shift.

Preparation of Second Shift is already

y con pre ted .

Second—Shift ——— start.」

その字を見た瞬間に、その意味を瞬間的に理解した。が、信じられないと思つた。

本来、二次移行はセコンドシフトかなり長い起動時間を経てようやく為せるものだ。いくらなんでもこんなに短い起動時間では、普通では考えられない。

「Second—Shift is finished ——— clear.

Add new name to Aegis is “Nike”」

その閃光が収まった後に現れた機体は、まさにアイギスだった。だが、シオルダーアーマーの枚数が増え、腕や足にもついていた。

nike・・・そのまま英語読みすれば「ナイキ」なのだが、ここは「ニケ」だろう。アイギス・ニケ。それが新しい名前だった。

相手からしたら、茫然として見えたのだろう。敵の攻撃が一手に集まってくる。それに対して、いつも通りシオルダーアーマーを展開し受け止める。衝撃を受け止めながら、方はぼんやりと考えた。

二次移行というのは、稼働時間と稼働率によるとされる。つまりは、超高稼働率で起動させ続けた場合、短時間での二次移行は十二分にありえる話だ。そして、この戦いと、その前の試運転も含め、ほとんどの場面は戦闘だった。ということは、稼働率は安定し

て高い状態だったのだ。それに、あの能力演算補助はかなり高い負担を強いる。それはつまり稼働率が半ば強制的に引き上げられるということだ。能力演算補助もそれなりの回数を踏んでいる。加えて、セイリユウから受け継いだ戦闘データのインストール。それらがすべて重なり合った結果として、この短時間の二次移行が実現したのではないか。そう考えると、不思議と納得がいった。

「Aegis's One-off Ability is available.」
相手の攻撃を受け止めると、その直後にバイザーに文字列が走る。それを万は見逃さなかった。使用を頭の中で指示すると、腕についたシオルダーアーマー——腕についているのでアームアーマーか——が一枚飛んで、アイギスに向かって文字通り殴りかかってきた敵に張り付いた、と思うと、すぐにその機体はなす術なく地に堕ちた。そのパイロットはまるで雷に打たれたように目を見開き、体を硬直させていた。

「Aegis's One-Off Ability's name is Thunder God.」

神の雷とは、これまた「らしい」名前だ。アテナは、その父たるゼウスの溺愛とも取れる寵愛を受け、父神のその武器を使い、気に入らない相手にはその雷を落としたという。それを基とし、シオルダーアーマーに触れたものに対して強い電気を流すことで無力化することが目的なのだろう。ここまでの高圧電流だと、もはや無力化というより感

電死のほうが正しいが。

とにかく、強力な力であることは間違いない。手にした剣にも、微かではあるが確実に電気が這っている。わずかではあるが、威力が上乘せされているのだろう。本来剣ではなく槍を持つべきなのだろうが、万は槍より剣のほうが間合いをつかみやすいという理由から剣を好んでいた。だが、二ヶという名前も、神の雷という武器も与えられた以上、いつまでも剣を握るのはと、万は武器を槍に持ち替えた。もともと大抵の武器を扱うことのできる方にとってみれば、得物が変わったところで大きな違いはない。そのまま横薙ぎに槍を振るうが、そのくらいは敵も躲す。わざと吹き飛ばされたものもいたよ。うだが、どれも致命傷となっていないことくらいは手ごたえで分かっていた。

いまだにくすぶる怒りの感情。それが、今、一番の原動力だった。そのままに一気になぎ倒していく。先ほどと同じように、電気で威力を強化された得物は、少ない手数で確実に敵を屠っていった。だが、その突撃思考の穴をついて、敵が背後に回った。それに対して脇から槍ではなく、もう片手のいびつな銃剣を刺して発砲し、撃破する。その隙をさらにつく形で、両脇から敵が襲った。一撃覚悟でショルダーアーマーを展開する。が、その敵はこちらに攻撃を加える前に、閃光によって地に墮ちた。

『少し頭を冷やせ！』

初めて聞く、庵からの叱咤の声。しかも命令形だ。だが、それだけ自分は、自覚して

いる以上に頭に血が上っていたのだろう。

「悪い、サンキュ。おかげで少しは頭が冷えた」

『まったく、しっかりしてくれ』

呆れたような庵の声。だが、その声には少々安心も含まれているように思えた。
「ああ。もう大丈夫だ」

ここからは、理性で殺す。そう心の中で誓って、万は再び両手の得物を握った。

49. 最終局面―大波―

一方、セシリアのほうはなかなか苦戦していた。突然現れた敵が想像以上に強かったのだ。遠距離から近距離から、うまく間合いを取って戦うあたりはさすがといえるが、自分のほうが劣勢であることくらいは自覚していた。

「やっぱりなかなかやるな」

「いえいえ」

本当はこんな無駄口をたたいている余裕などない。何より、自分とはとてもなく怖いのだ。

「そういう嬢ちゃんが一体どんな声で鳴くのか・・・、ああ、楽しみだねえ」

「そうはいきませんわ」

そう言つて短剣を真つ直ぐに構えなおす。

「ここから先は通しませんので」

「ほう、ますます鳴かせたくなつたよ」

そう言つて再び己の得物を振るう。男は戦斧でこちらは短剣なので、まともに打ち合うことはせずにいる。それだけでも、セシリアにとつてみれば難しかった。近接戦闘

の技量も上がっているとはいえ、もともとセシリアは遠距離から攻めるタイプ。対して、相手はどうやら近接のほうが得意としているようだ。距離をとつてもすぐに距離を詰めてくる上に、技量は一夏のそれよりも上をいく。この上なく厄介だった。

スコールのほうにはどうしてか狙わずに、セシリアばかり狙う。白兵戦を主にしているからか、スコールも手を出しあぐねていた。最初は鞭で援護することもあったが、それをすることでセシリアの指が止まってしまふことが多くなり、もう援護をしていくことはなくなつた。するとしても、たまに爆炎を放つくらいだ。それだけでも十二分にありがたいのだが、それだけだ。それに、相手はそのあたりの対策は万全なのか、爆炎程度では歯牙にもかけていない。

(・・・あら・・・?)

今、何か引つかかった。何が引つかかったのかはわからない。だが、何か引つかかった。

(落ち着きなさい、セシリア・オルコット。いったいなにが引つかかったのか、そこに糸口があるかもしれないませんわ)

再び迫ってくる相手に対して攻撃を受け止めながら、セシリアは必死に頭を巡らした。

「いいか、戦っている最中は思考を止めんなよ」

「それは、当たり前のことではありませんの？」

少し前の昼下がり、セシリアと万は二人で昼食をとっていた。白兵戦の訓練の映像を見て復習しながら、万は言った。映像の中で、セシリアは万に見事な一本背負いを決められていた。

「まー、そりやそうなんだがな。この時俺が持っている武器は？」

「短槍ですわね」

「てことは、一気に懐に飛び込んできた時点で考えられるのは？」

「・・・打突、ですか？」

「でもこの場面、ちよつと巻き戻して・・・と、ここ。槍の先はそつちに向いてるだろ。しかも、俺はこの角度だと槍が見えなくなるんだ。つまり、ここから打突をしようとする、背中越しになる。背中に目がついてるわけじゃねえからな、自然とあてずっぽうになる。んな適当な攻撃は当てづらいし、何より背中を見せた時点でがら空きだ。どつからみても攻撃のチャンスだよな。てことは、普通はしない。あるとすれば、この槍が仕掛け槍で、何か仕込んでいる場合だけど、俺はこの訓練ではそういう類は使わないつて前に宣言しておいたからな」

「ということとは、打突ではなく、他の攻撃」

「そ。てことは他の攻撃だ。ここまで間合いを詰めちやつたら、まず長物はない。とすれば、暗器の類か、体術だ。どっちにも共通するのは、リーチが短いってことだ」

「ということとは、下がるのが賢明ですわね……。でも馬鹿正直に下がると槍が来ますわよね。となると、この場合ですと万さんは右手で槍を持っていますので、右側に飛ぶのが最善ですの？」

それに、万はにんまりと笑って指を一つ鳴らした。

「理解が早くて助かるよ、マジで。その通り。できる限り背中を取る。この手の戦闘の基本な。」

つまりは、ここではその場で短剣を使って攻撃するんじゃないなくて、右側、つまりは俺の背中側から攻撃するのがベスト。で、この時に気を付けるのは？」

「反撃ですわね。あなたがみすみす隙をさらすとは思えませんから、何か逆転の一手を仕込んでいるのでは？」

「その通り。実際にちよつとばかり映像を進めてやると・・・ほれ、ここ」

少し動画を進めると、セシリアがちょうど投げられるシーンでいったん止めた。その右手を指さした。

「槍を逆手で持つてるだろ？これは、背中を取られたときに攻撃できるようになってい

発想だ」

「……気づきませんでしたわ……」

「そりや気づかないようにしてたしな。もし、そういうところに気付いていたら、俺ならあえて左に飛ぶ。背中を取ろうっていうのは当然の発想だからな。だから、あえて反対の発想も考える。」

ISには思考補助AIってのがついてる。これくらい慣れればできるはずだ。でも、それにはもともとそういう思考ができるようにしておかなきゃいけない。だから、戦いながら思考を停止させないことが重要なんだ。戦っている最中に敵が見せたちよつとしたことが、突破口につながることもある。覚えておけよ」

（爆炎は歯牙にもかけていない。ですが、レーザーには反応している……。それに、白兵戦闘も、できる限り躲している。これはいつたい……？）

逆ならまだわかる。スコールの爆炎に比べれば、こちらのライフルのレーザーは火力で大きく劣る。しいていえば、レーザーのほうが狙いをつけやすいくらいか。そこで、ひらめいた。そして、それをつく手段も、こちらにはある。

「スコールさん、わたくしに考えがありますの。協力をしていただけませんか？」

「面白いわね。どうやら、あなたはあの坊やの秘蔵っ子みたいだし。いいわ、付き合っ
てあげる」

そう言うと、スコールは自身の鞭を敵に対して振るった。煩わしそうにそれを払うと
セシリアに向かつて飛ぶ。だが、それに割り込む形でスコールがその攻撃をはじめた。
それに、相手は不愉快そうに一つ舌打ちをする。

「どきな、オバサン」

「あらやだ、私はそこまで年取ってないわよ?」

妖艶に微笑むスコールの年齢はわからない。が、相手の気を引くことはできたよう
だ。

「そのまま暫く気を引いていただけですか?」

「分かったわ。任せなさい」

そう言うと、再びスコールは近接戦闘に持ち込んでいった。相手は業腹な様子だった
が、いくら突破しようとしても、スコールはその卓越した操縦技術をもってそれを許す
ことがなさそうだと判断したようで、当初の方針を切り替えてスコールから倒すことと
した。その背後で、セシリアはライフルを静かに構えた。ビットがいくつか周辺を守る
ように飛ぶ。まるでセシリア本人だけでない、もう一人見えない誰かが背中にいるよう
に、牽制の射撃はピンポイントで決まっていた。だが、残りのいくつかのビットは、セ

シリアの持つライフルに集まってきていた。

(わたくしの考えが正しいなら・・・)

おそらく、これで撃ち抜けるはずだ。そう思考しつつ、セシリアはそのままの体勢でゆつくりと機体を動かしながら光学迷彩を発動した。これで外からは見えなくなっただけである。

そのまま静かに時を待つ。神経をこの上なく集中させ、引き金を引く右人差し指の指先にそれを集束させる。

「『Noblesse Oblige』 is available.」

その表示を確認して、セシリアはライフルだけでなく、ビットも完全に制御化に置いた。今までは不可能だった。が、今ならできる。根拠をうまく説明することはできないが、セシリアには確信があった。

これは一発勝負。いわば賭けのようなものだ。もしこれが失敗すれば、警戒されて二度目はない。

そして、その時は来た。ゆつくりと頭を内側にして大きな円を描くように動きながら狙いを定めると、一瞬ながら鏢迫り合いで両者の動きが止まる。その瞬間を逃さずに、セシリアは引き金を引いた。

先ほどとは打って変わった、集束された代わりに計り知れないエネルギーを内包した

光が、敵機を操る男の肩間の上を射抜き、そのまま体の下へ貫通した。その男は、その
獐猛な笑みのまま目を見開き、そのまま落ちて行つた。その顔は、どこか楽しそうだつ
た。

狂つたような強さだったが、狂っていたからこそ助かつたということか。セシリアと
早く戦いたい、そのためには目の前のスコールをとつとと撃破せねばならない。そのこ
とだけが頭にあり、結果として後方からの支援に向いたセシリアの存在を忘れてしま
うという、なんとも皮肉な事態を生んでしまったのだろう。もつとも、それはセシリアの
姿が見えなくなったということも少なからず関係しているだろうが。

周りに敵がいなことを確認すると、ゆっくりと息をついた。

「うまくいってよかつたですわ」

「何よ、賭けだつたわけ？」

その口調の割には言い方は険しくなかつた。

「ええ。少なくとも確信ではありませんでしたわ」

正直に言つて、今の一撃が決まるかどうかというのは賭けだつた。確信がなかつた
し、何より立ち位置がひどく流動的になる状態で、クリーンヒットどころか機体に向ま
くダメージを負わせられる自信が絶対ということとはなかつた。加えて、
ワッソオファアビリティが集束させて一点突破にできるかなどわからなかつた。

「ですが、可能性があれば試すしかないですわ。それが突破口となりえるのなら、なおのこと」

その言葉に、スコールは心底楽しそうに笑った。

「ふふ。やっぱりあなたは面白いわ。さて、当の坊やを援護しに向かいましょう。多分、あちらも大変でしょうから」

その一言と共に、ふたりともそろって飛翔した。

その頃、楯無は一種の瞑想状態にあった。周囲からは、依然として戦闘音が聞こえてくる。だが、ここから離れるわけにはいかなかった。

「強いよね、あなたは」

ぼつりと、隣に立つデメテルが言った。

「私は強くなかないわよ。ここにいるのは必要だから。それだけ」

「でもわかるの。私も、本当は飛び出したいくてたまらない。私に理性というものがなければ、とつくにこんなところ飛び出して行ってる」

「それは、あなたの言う、妹のため？」

その言葉に、こくりと頷く。雰囲気や物腰こそ本当に物静かで大人らしいが、こういうところを見ると、案外内面的なことは子供なのかもしれない。

「本人は、多分私が姉なんて知らないし、多分姉がいるってことも知らない。知っていたら、多分気付く。あの子は聡いから。でも、あの子が知らなくても、私はあの子を守りたい。守れなくて、大変な思いも、いやな思いもいっぱいさせたから。これからは、私を守ってあげたい」

その告白を楯無は静かに聞いた。その気持ちがあつたかわからないわけではない。「なんかわかる気がする」。

私もね、妹が戦つてるの。前線で戦うんじゃないで、後方支援に回すだろう、つて言つてたけど。でもそれでも不安なの。

これでも一応、更識の当主だからね。私は家の仕事もしてたから、人の生き死になんて何度も見てきた。うちの家はね、そういうことは子供の頃には見せないで、理解ができるようになってからちゃんど教える。だから、更識は殺すけど、人を捨てるような真似は極力しない。やむを得ない場合は除くけどね。でも、あの子にはそういうのを見せてこなかった。私が望まなかったから。あの子にはそういうところを見られたくなかつたしね。でもそれが原因で、一回こじれちゃつた。運がいいのか悪いのか、その後は仕事もなかつたし、そういうのを見せることもなかつた。ただ、本人が私の知らないところでそういうのを見ていれば、話は別だけどね」

そこまで言つたところで、遠くを見ていたデメテルは楯無を見上げた。

「なら、なおのことどうしていかないの？あなたにはその力もあるのに」

「もう知っているのよ。あの子はもう子供じゃないって。守ってあげなきゃってずっと思ってたけど、関係が戻った時に、もうあの子も独り立ちできるんだ、って。だから信じ切れるのよ。今のあの子なら大丈夫だって。」

妹さん、信じてあげられない？」

その言葉に、デメテルは微かに目を開いた。そのあとすぐに遠くにまた目をやって、ぼつりと言った。

「そうね。あの子は強いから。悲しくなるほどに」

消え入りそうな眩きだったが、不思議なほどはつきりと聞こえた。その直後、無線がつながる音がした。

『お姉ちゃん、そつちに敵接近、数は1000！』

その声にすぐに神経が切り替わる。

「分かったわ。こつちで対処する。デメテルさん」

「分かってる。私は私のやれることをやるだけ」

相変わらず抑揚の少ない口調だが、どこか先ほどに比べて吹っ切れたような口調だった。

遠方に敵を見る。大群と呼べるほどのものではなさそうだが、この局面で送って来る

相手がただものなわけがあるまい。

「まったく、最後の最後まで容赦ないわね」

あの青年からの援助はなかった。そもそも頭数に入っていないなかった可能性もあるのだが、こちらの実力を信じているということでもある。あの青年のことだ、おそらく両方か後者だろう。そうでなければ無理を押し通してでもやるだろう。

「でも、私をこの程度で破れると思われているとは、心外ね」

学園最強は伊達ではない。この程度で破られると思われているとは、流石に侮りすぎとしか言いようがない。

「来るわよー」

瞬間、こちらも蛇腹剣を展開し振るう。だがそのあたりは読んでいたのだろう、相手もやすやすと回避をする。だが、その直後に異変は起こった。

地面から無数の剣が出現して、一機に敵を貫いた。こればかりはさすがに相手も面食らったようで、一瞬動きが止まる。その隙を見逃さずに、クリア・パッション清き情熱で残りの機体を次々に撃破した。接近しようにも、足利義輝よろしく突き立てた剣を使い捨てて戦うデメテルの攻撃もあり、なかなか攻撃ができない。

結果的に、楯無が繰り出す遠距離攻撃と清き情熱、そしてデメテルの奇抜な戦法にうまく対策のできぬままにやられていく、とはいかず、反撃の一つも入れようと思つたと

ところに、無数の弾頭が降り注いだ。しかも、それに混じるように光学武器も雨あられと降り注ぐ。それになす術もなく敵は落ちて行つた。

「ありがとう、助かつたわ」

「私はやれることをやっただけだ」

そこに現れたのは銀色の機体。まるで湖に反射する月のようなその機体を駆るのは庵だった。

「デメテルさんも、ありがとうね。おかげで戦いやすかつたわ」

「やれることをやる。それだけ」

その声は先ほどに比べてさらにそっけないように思えた。

「そういえば、万君のほうは大丈夫なの？」

何の気なしの問いかけに、庵は少々言い辛そうに答えた。

「・・・今の彼には・・・近づかないほうがいい」

その言葉は異常なほどに不穏な雰囲気を纏っていた。

一方、万のほうは大変なことになっていた。相変わらず万は強かつた。が、時折顔を激しくしかめていた。その様はどこか激痛に耐えているようでもあった。そして、庵はもうその場にはいなくなつた。

圧倒的で、狂暴的なその力に、最後の一機が落ちて行つた。あとから到着したセシリアの目に見える範囲で、もう敵はいない。絶え間なく続いていた戦闘音も消えていた。それは、長かったようで短かった戦いの終焉を意味していた。

バイザーはどこかで壊れたのか、その眼もとははつきりと見えていた。こちらを見た万の目は、明らかに正気を失っていた。

50. 最終局面—終幕—

「万、さん……？」

今まで見たことがない、あまりにも狂暴な、野生の動物のような目つきに、セシリアは思わず戦慄した。瞬間、一瞬体制が変化したかと思えば、アイギスはこちらにとびかかってきた。

驚く間もなく応戦する。考えるよりも先に反応するようになった体が咄嗟に近接武装をコール、今まで使っていた銃の代わりに現れた短剣で何とか防御すると同時に後ろに飛び、衝撃を緩和する。間髪入れずに放ってきた銃弾を回転するように回避すると、回転飛行の最中に取り出した銃を放つ。煩わし気にそれを県では軸と、再び肉薄してくる。今度はあえて飛ばされずに、短剣と銃の代わりに呼び出した長剣を交差させて受け止める。

息のかかる様な近さ。その近くまで来てから、万の目を覗き込む。その狂ったような光をしばし見つめて、セシリアは覚悟を決めた。

普段は冷静なこの青年が、どうしてこのような状態になってしまったのかはわからない

い。だが、一つ言えるのは、今この青年が狂っているということだけだ。

今の自分では方には敵わない。それはもうわかりきっていることだ。外部から絶対防御を解除することは、絶望的なまでに不可能だといってもいい。だからといって、手をこまねいているわけにもいかない。当の昔に鏢迫り合いは終わって、遠距離と近距離を織り交ぜた攻防になっていた。そうして、再び鏢迫り合いになった時に、直接声が届いた。

「おい嬢ちゃん、すぐに離れろ！巻き込まれても知らねえぞー！」

随分と物騒な警告と共に緑色の閃光が飛んでくる。セシリアは躲せたが、アイギスには何発か当たったようで、今度は閃光を纏う麦野へと目標を移した。近接格闘能力が拮抗しているあたり、さすがは麦野といったところか。万と拮抗している。ように思えたが、ある程度打ち合うと、すぐに麦野を蹴飛ばして再びセシリアのほうに向かってきた。

今度は、それに対して白い機体が割り込んだ。

「しっかりしろよ、万！」

目の前で吠える青年の声にも耳を貸さずに、万はいったん距離をとると、その両手に出現させた銃火器をばらまく。ドドドドという銃弾の嵐が白式を射抜かんと襲い掛かる。その前に橙色の機体が受け止めにかかった。そのまま右手を前に出し突っ込んで

いく。

「いったいどうしちゃったのさ!？」

その機体に触れる。瞬間、アイギスが飛びのいた。ほぼ同時が一瞬遅れて、火薬がさく裂する轟音になる。下がった後ろにも待ち構えていた銀色の翼から無数の光弾が射出される。

「少しは頭を冷やしなさい!」

それを背面のシオルダーアーマーで受け止め、負けじとばかりにシルバープリカを発射する。だがその程度はお構いなしに突っ込んでくる。ねじ込まれるように来た拳を両手で包むように受け止めたはいいものの、そこに加えられたひねりでさらに吹き飛ばす。体勢が崩れたところに連続で数発、大砲の弾丸が撃ち込まれた。

「あんたがそんなんでどうするのよ!」

「そうです! 正気を取り戻してください!」

その二人の言葉も聞こえないようで、そのままシオルダーアーマーを六角柱にして、そのまま放つ。先ほどのシルバープリカの光が凝縮されたようなその光に、二機とも機体の一部が壊れたようで、そのまま黒煙を上げて一瞬墮ちた。だがすぐに持ち直す。そのあたりは、さすがは代表候補生といったところか。

「貴様ああああ!!」

激情を込めた怒号を上げながら、赤い閃光が突っ込んでいく。それを柳に風と受け流し、反撃を一発入れる、が、流石にやすやすとは当たらずにそのまま高速機動で回避する。今までで一番いい戦いを繰り広げているように見えて、動きを読んだうえで受け流しているのがダメージは一番入っていないかった。

そこまで来て、セシリアはようやく、覚悟を決めた。

「一番相手にしやすいのは戦うことしか考えていないようなバーサーカーだ。行動が読みやすい。冷静になってきつちり動きを読んでやれば、簡単に倒せる。けど、そういう相手は今回少ないだろう。来るとしたら、俺だ」

「根拠がありますの?」

「仕事人なんて言われてたからな。恨みもそれ相応に買ってる。仇討ちだなんだと言ってくる馬鹿どもも多いだろう。人間ってのは感情で動く生き物でもあるからな。」

で、ここからが本題だ。それはこっちにも言えること。怒りで我を見失ったら、いとも簡単にやられるぞ。だから、その時の対策として、諸刃の剣を仕込んである」

「なんだよ、それ。もったいぶるなって」

「そうだな。ド直球いうと、絶対防御及びシールドバリアの解除機能だ」

その言葉に、全員が言葉を失った。

「は!? 一体なんでもの搭載してんのよ、あんたは!」

「落ち着け、風。」

そういうときに一番聞くのは物理的な痛みだからな。適当にどつかを針でも使つてちくつとやればいいって話だ。だから、無理矢理拘束してそれを外部から起動させ、物理的にシヨックを与えてやればいい」

「言いたいことはわかるが、暴論が過ぎないか?」

即座にかみついてきた風をさっさといさめたが、直後にラウラが意見する。それに対して、万は冷静だった。

「暴論でも、これがおそらく最善だ」

(あの人は、なんでも自分でできる。できてしまう。だから、人に頼るといふことをしなくなつた。だけど、本来あの人は、とても優しいお人。優しすぎるから、どれだけつらくても、それを口に出したりすることは一切ない。そう、あの時にわたくしの傍で寝てしまったのは、彼にとってかなり不覚とも取れる出来事だったのでしょうね。そして、他の人が人殺しでPTSDを負うようなことがないようにするための、このバイザーな

のでしようね……」

頭の中で考える。ちらりと、仮想デイスプレイの隅に一つの通知が浮かび上がる。

——絶対防御及びシールドバリア解除——

それを確認してから、セシリアは万の下へと向かった。

目の前に青い機体が現れても、眉ひとつ動かなかつた。手にした長剣を真つ直ぐと前に出す。それに見せた反応も、ただ一つ獐猛に笑うだけだった。

何か妙だということを感じつけた簪、深名、楯無と彼女に抱えられたデメテルと、その場にいた専用機持ち達は、そこでありえない光景を目にした。

「……案外、痛い、ですわね」

セシリアのわき腹を深く切り裂くように、万の近接武装が走っていた。もう指一本動かすのもつらいだろうに、その腕はゆっくりと動いて、アイギスを背中から抱きかかえた。装甲越しにそのぬくもりが伝わったのか、万の狂った雰囲気は見る見るうちに息をひそめた。

「セシリア……？俺は、いったい何を……」

状況が理解できないように、万の言葉はまるでうわごとのようだった。

「よかつ、た……。戻って、きて、下さったの、ですわ……」

「セシリア……？」

先ほどよりほんの少し力のこもった、万の声。

「心配、ご無用、ですわ……」

「馬鹿喋んな」

慌てたような小声。だが、セシリアはそのままの体勢で万の肩に頭を置いた。

「私のことは、大丈夫、ですわ……」

「どうみても大丈夫じゃねえだろ。応急処置するからじつとしてろ。最低でも血止めくらしいは——」

「万さん」

まだ声に力が入らないが、そのまま、耳元で囁く。

「もう、無理、を、なさら、ない、で、くだ、さいね……」

「分かった。だから喋んな」

もうとうの昔に、得物は腹から引き抜かれている。それでも、失血死することもないのは、他ならぬ目の前の青年のおかげであることくらいは簡単に分かる。思い返してみれば、銀シルバリオ・ゴスベルの福音の時も、彼が能力で失血を防いでいた。

「無理して喋んな。意識飛ばしてもいいから」

「だから、わたくし、の、こと、は、しん、ぱい、ご無用、です、わ」

ゆつくりと地面へと向かいつつ、止血の処置もする。前も思ったが、戦闘後にここま

で集中するのは並大抵の苦勞ではないだろうに、さらりとやってのける。装甲越しでも伝わる温もりに身を任せ、そのままゆっくりと目を閉じた。

「信じて、いますわ。万、さん」

耳元で囁き、意識を手放した。

陸に着くと、すぐに応急処置を施した。こういう時に、自身の能力が直接手で触れるようなものではなくてよかったと、どこか他人事のように思った。

やがて皆が集まってきた。その全員が、腹に大穴を開けているセシリアを見て驚いた顔をした。

「黒川、いったい何があった」

何とか応急処置が終わったところで駆けつけた千冬に、万は顔を上げることができなかつた。直後に、自分がまるで人ではない化け物のようで、底知れぬ恐ろしさを感じた。

「……ごめんなさい。また、あとでいいですか」

「分かった」

何とか絞り出した一言に、千冬は頷いた。

「管制室にいる。黒川は落ち着いたら来い。ほかの専用機持ちに関しては寮に戻れ。幸

いにして、察はほぼ無事だからな」

それだけ言い残すと、千冬のものと思われる足音は遠ざかっていった。だが、遠ざかっていく足音は一つだけ。それ以外はその場にとどまっているようだった。

「なあ、万。もう、大丈夫なんだよな？」

「外部からの脅威ということに関しては。案外近くに殺すべき相手はいるかもしれないぜ？」

その言葉すらどこか他人事のようにだった。そうでなければ、理性的に物を喋ることもできなかつた。

「私がここにいる。みんなは戻っていてくれ」

「だけど……!!」

なおも言いつのろうとした一夏の肩に、後ろから手が置かれた。

「そこまでよ、坊や」

それに、一夏は一瞬驚いてから、唇をかみしめ去っていった。それにつられ、他の専用機持ちも去っていく。

「私たちもそろそろお暇するわね」

「そうか。何はともあれ助かった。

ところで、そこのお嬢さんはあいさつの一つもしなくていいのか」

ようやく顔を上げた万の表情は、心なしかいつもより皮肉気だった。

具体的に名前こそ挙げなかったが、誰のことを指しているかは本人が分かったようで、一歩だけ前へ出た。

「何のこと」

「丁度俺らしいかないんだ。あいさつの一つくらいあつてもいいんじゃないかねえの。——

詩織さんよ」

おそらく、ここに専用機持ちが一人でもいようなものなら驚愕の顔をしていたに違いない。実際、言われた本人であるデメテル——詩織も、珍しく濃い驚きと動揺を示していた。

「髪色くらいはうまく染めてやればどうにかなる。でもな、基本的な骨格とかは整形でもかなり手を入れてやんなきゃ変わらない。見た感じそこまで手を入れてる様子もないからな。幼少期の記憶を読み取った身としては、その骨格が成長すればどうなるかっていうのを予測することくらいはできる。んでもって、あんたはそのまますぎたんだよ。」

で、何か言ったらどうだ」

その一連の話の途中で、もうすでに詩織は普通の顔になっていた。

「ない。もうその子はその子の人生を歩んでる。今更縛る理由もない」

「・・・あつそ。そういう結論なら俺は文句言わない。後悔するなよ」

「後悔なんて、あるわけない。自分で決めたことだから」

そう言つて、詩織——デメテルは背を向けた。

「じゃあね、坊や。力が欲しいなら呼びなさい」

「ああ。もうないかもしれないけどな」

「あら、つれなこと」

それだけ言つと、スコールはその手にデメテルを抱えて飛び去つた。それを見届けてから、万は管制室に向かつて歩き出した。

管制室には、もうすでに皆が集まっていた。それを確認しつつ、万は口火を切つた。
「さて、早速ですが報告から。」

本日日没後に敵襲があり、戦闘の後にこれを撃退しました。確認している現状でのこちらの戦死者はいません。セシリアに関しては応急処置を施しましたが、あくまで応急にすぎません。医療機関もしくはそれに準ずる施設などにおいて、適切な処置を受けるべきと判断します」

「その件についてだ、黒川。いったいオルコットに何があつた」

「薬物により錯乱した自分が攻撃しました。戦闘記録を見ると、彼女だけでなく、織斑た

ちも攻撃しようです」

「ということは、ISを解除させた、もしくはしたところを狙った、ということか？」

「いえ。おそらく、錯乱した自分を止めるために絶対防御を解除し、あえて近接攻撃を受けたものと推測します」

その言葉に、千冬の目が細くなった。同時に。言いようのない威圧感とその場を包んだ。

「絶対防御の意図的な解除など、できないはずだがな。どうということだ？」

「万が一の時のためと、解除機能を自分が付けました。まさかこのような形で使われるとは思っても——」

最後まで言い切る前に、千冬がその胸倉をつかんだ。その行動の素早さより、間近で見る千冬の、おそらく本気で怒っているであろう顔を見て、万も口をつぐむ。

「分かっているのか貴様。こんなことをしたと公表してみろ。ただでは済まないぞ」

「ええ、分かっています。だったら簡単でしょう？——俺を殺せばいい」

あまりにもあっさりとして出てきた言葉に、周囲は言葉を失った。

「おま、お前、自分の言ってること、わかってんのかよ」

何とかといった様子で出てきた一夏の言葉。それでも、万は冷静だった。

「様々な意味でキーマンとなるべき人物が消えれば、話は簡単ですよ。理由は、そうだ

な、錯乱した時に殺した、とでもすればいいんじゃないですか？」

「本当にそれでいいのか、お前は」

「よくなければこんなこと言つてません。もとより、俺が俺である限り、学園都市からの追つてはなくならないと思えますし」

「え、どういうことですか？ 黒川君は、もう学園都市とはほとんど手を切つた状態なんですよね？」

万の言葉を受けて、千冬も手を放す。軽く服装を整えたうえで、万は続けた。

「俺も、学園都市側に取られてる人質とか、そういうのいなかっただと、もう大丈夫だと思つてたんですよ。だけど、思いのほかあそこの闇つてやつは厄介だったみたいですよ。」

暗部からは逃れられない。死にたくなければ大人しく道具に徹しろ。それが、あそこの闇のルールでした。解体された、つて言つても、完全に消えたわけじゃない。おそらく、今回学園都市から敵側に支援があつたのは、学園都市の目的に俺が含まれていたらでしょう。実際、俺を可能ならば生け捕り、殺害やむなしつていう指示も出てたみたいですよ。当の俺が消えれば、しがらみも消えるでしょう」

「それで本当にいいの!？」

「言いいなものにも、これが最善だよ」

そういう方からは何も感じられなかった。悪びれる様子も、謝罪も、同等になかった。

「殺せないのなら、自殺しますか?」

そう言いつつ、こめかみにリボルバーを押し当てる。

「おやめください!」

その瞬間に、後ろから声が聞こえた。半ば信じられないながらも、そのまま方が振り向いた。そこには、脂汗を流し、入り口に寄りかかりながらも入り口に立つ、セシリアがいた。

「馬鹿、傷口もきつちりふさがったわけじゃねえのに」

「私のことなど今はいいでしよう。今のは何ですの?」

「セシリアには後で伝えてもらう予定だったんだがなあ……」

事後処理の一環として、俺が死ぬってことだよ」

それを聞いた瞬間に、セシリアは万の手にある銃を無理矢理に奪い取ると、手早く銃弾をすべて排出した。音を立てて銃弾がすべて落ちたことを確認すると、セシリアは銃を床に捨てた。

「まかり間違っても、そんなことをおっしゃらないでくださいな。死ぬしかないなどと、どうして言えるのです」

「その辺も含めて伝えてもらう予定だった。多くの代表候補生を人殺しにし、この状況を生んだ元凶が、学園での処罰で終わりなんて、そんな虫のいい話、関係諸国が黙って

いるはずもないだろう。それが必要なことだったとしてもだ」

「それしか本当に手が無いのですか!？」

「ほかに方法があればとっている!」

どんどんヒートアップしていくかに思われた議論は、セシリアの平手で終わった。

「なぜ頼ってくれないのですか! いつもいつも! 確かに、わたくしではどうしようもならないこともあったでしょう! ですが相談くらいしてくれても良かったではありませんか!」

「じゃあどうしろっていうんだ! こんな局面、俺が死なずに事態を收拾するなど不可能だろう! 表面上でできたとしても、後々で面倒なことになりかねないだろうが! そんなこともわからないようなあんたじゃないだろう!」

感情の堰が切れたようなセシリアに、売り言葉に買い言葉とばかりに万も言い返した。だが、そんな二人の傍に忍び寄る影。

「そこまでにしておけ馬鹿ども」

二人の頭に同時にげんこつが落ちる。揃って頭を抱えて蹲る二人に、その上から千冬が言った。

「それで? オルコットには何か案があるのか?」

「ええ。これでもわたくしも、本国ではそれなり以上に名の売れた家の人間ですの。

戸籍の一つや二つ、捻出することは可能でしょう」

「……あー、なるほど。その手があったか。まったくもって発想がなかったわ」

一夏以外は万が発想した直後にどうということかすぐに分かったのか、顔をしかめたり、俯いたりしている。だが、一夏だけはどうということか理解できていないように、首を傾げていた。

「要するに、死んだことにするってことだよ。裏で、俺という存在は生き続ける。名前も変えて、そのイギリスの国籍で、な」

「つまりは、万は死なないってことか？」

「ま、そういうことになる。日本社会的には死ぬけどな」

そこまで言うと、千冬は一瞬目を閉じた。

「悔いはないのか、黒川」

「もとよりなくなる覚悟もしていた命です。拾ってくれたのなら、そこで全力で生きるだけですよ」

心なしか晴れやかな表情で言ったところで、おずおずと深名が手を挙げた。

「あの一、できればもう一つ、どこでもいいから国籍作ってほしいな、なんて。多分、私も死んだことになってるから」

「お安い御用ですわよ、深名さん。一つも二つも、大きな違いはありませんわ」

「ありがとう、オルコットさん。その代りといつては何だけど、護衛はしつかりさせてもらうね。ほら、私、幽霊って言われてたし」

「幽霊？」

「いまいち納得がいかなかったのだろう、箒が首を傾げた。」

「そ。この子のステルスと、私の能力を併用したら、どうやら敵さんには本格的に消えたってことになったみたいでね。幽霊がいるから逃げろーってなつた。あれは傑作だったよー」

「確かに。こつちに近付こうとしても撃破しちゃうから、本当に怯えてた」

「そんな話に、万も柄にもなく笑ってしまった。」

「そつか。それなら安心だな。セシリアは正攻法で行けばいいし。ほんと、サンキュな」
「いえいえ。この程度、造作ありませんわ」

「にこりと微笑むセシリアに、万は何やら頬が紅潮する感覚を覚えた。それが恥ずかしくて、口のあたりを手で覆って隠した。」

「IS学園としても、これからのあり方を問う事件となつた。確実に、ここから変化していくだろう。降りるなら今だぞ」

「毅然とした千冬の声。だが、それには誰も異を唱えなかつた。」

「いいのだな？」

最後の確認。それに対して、一夏は一步前へ出た。

「もう、俺はI Sを使って人を殺しちまったんだ。もう後戻りはできない」

「ここで降りたら、今日私がやってきたことを否定することになります」

「I Sが何かを勘違いさせないためにも、今日のことは伝えていく必要がある」

「それは、僕たちがやらなければいけないことです」

「人を殺す重み、それは、軍人として教えていく必要があると思います」

「正直に言つて、このメンツだと突っ走りすぎないか不安だから、残ります」

ほかのメンバーも、一步前へ踏み出しながら、言つた。その決意を受け取つて、千冬は強く微笑んだ。すぐに表情を引き締め、奥にいる二人を見た。

「オルコツトは、どうするのだ？」

それに、セシリアはすぐに応えなかった。目を閉じ、ゆっくりと考える。

「わたくしは、いったん国に帰ります。わたくしが戦うべきところは、教育現場ではないと思うので」

「・・・そうか。忌憚のない判断を尊重しよう。イギリス行のチケットの手配も、こちらに任せろ」

「ありがとうございます」

そう言うのと、万に向き合つた。

「そういうわけで、これからもよろしくお願いしますわね」

「そりゃこつちの台詞だろうが、馬鹿」

台詞とは裏腹に優しく微笑みながら、万は自分より低い頭に優しく手を置いた。

学園の理事会は、ことが済んだ翌日の昼頃に情報をまとめて会見を開いた。

そこで、夜半に謎の I S に似た、所謂駆動鎧と呼ばれるものや戦闘機群が学園に襲撃をかけたこと。在学中の代表候補生数名およびロシア国家代表、更識楯無が出撃、思わぬ助力もあり、これを撃退したこと。しかし、この戦いにおいて、二人目の男子 I S 操縦者、黒川万が錯乱、イギリス代表候補生に大けがを負わせたこと。やむを得ず、彼の一命をもってこれを終局したこと。事前の黒川君による技術的援護と、その時の状況を勘案し、黒川君と、彼の命を絶つてしまうこととなった代表候補生は、学園的にはお咎めなしということで落ち着いたことなどを発表した。

やむを得ない形ではあつたと言えど、結果的に「I S の兵器としての利用を禁ずる」という、アラスカ条約の条文を無視せざるを得なかつたこの事件に、世間の耳目は集まった。のちに開かれた国際公聴会において、証言者たる代表候補生及び織斑一夏の発

言から、もしそれが行われなかった場合、間違いなく多くの人命と施設の大きな損害を被っていたということが判明したことで、国際社会もこのIS使用に対して容認した。

また、錯乱したとはいえ、後方から技術的に支援し、しかも自分も前線に出て戦った、二人目の男子操縦者に対して、全世界から追悼の念が寄せられた。

のちに、“IS学園大規模襲撃事件”という名前が与えられたこの事件は、こうして終局を迎えた。

エピソード

それから時は流れて、時代も変わった。

とあるロンドン郊外の家に、男性と女性が訪れていた。男性が備え付けられているベルを鳴らす。中でドアホンが鳴る音と、ぱたぱたという音がした。中の人物はこちらを確認してからドアを開けると、笑顔で迎えた。

「ようこそいらつしやいました、一夏さん、庵さん」

「おう、久しぶりだな、セシリア。元氣そうで何よりだ」

「ええ。そちらもお変わりないようで。立ち話もなんですから、どうぞお入りになって」
そう言いつつ、中へと案内した。彼女につれられる形で中に入った二人は、セシリアの言われるままに広い客間に座っていた。

「子供さん、元氣なのか？」

「ええ。今ではあの人々が結構甲斐甲斐しく子育てをしていますわ」

「万が、か？彼も忙しいだろうに」

「あれやこれやと奔走しながらやってくださっています。しかもしつけなどもしっかりやっていますので、わたくしもよく子供について褒められますの。ささ、お茶にしま

しよう。あの人も、いつも通りならそろそろ帰ってくる頃合いでしょうし」

そう言っていると、ガチャリと戸が開いた音と共に、「ただいまー……？」という、どこか疑問形な声が聞こえてきた。客間のほうに顔を出すと、その本人は得心の言ったような顔をした。

「何だ、来るんならくるって言ってくれればよかったのに」

「そういう立場じゃないんだよ。万も知ってるだろう？」

「ま、そりゃそつか。おたくら二人とも有名人だもんな。壁に耳あり障子に目ありって言うし。それと、ここだから大目に見るけど、俺はアレックスだからな」

「あ、そうだった。つい癖で、な」

「いい加減直せよ。何年経ってると思ってるんだよ。あ、それと、俺は初優勝と、一夏は準優勝おめでと」

「ああ、ありがとう。しかし、世界は広いな。あの機体をもつてしてもなかなか勝てない猛者もいるのだから」

「そりゃそーだろ。機体スペックがすべてだったら、なんで一夏この馬鹿が勝てたのかって話になるし。要は乗り手だ、乗り手」

この台詞からも分かると思うが、一夏と俺は国際的なIS操縦者として名を馳せていた。一夏に関しては、世界初の男性IS操縦者となるため無国籍扱いだが、俺は他を寄

せ付けないほど圧倒的な力で、ここ数年は日本の筆頭代表を譲らない構えとなっていた。日本IS競技連盟においても、彼女の操縦技術を上回る人間はそうそういないと言われているほどで、先ごろ二人で行われた世界大会では、激戦の末庵が一夏を下し、初優勝の栄冠をもぎ取っていた。

そんな世間話をしてしていると、さらにベルが鳴る。とっさに対応をしようとした妻を押しさえて、万がその対応に出た。

覗き窓から来客を確認すると、これまた意外な人物だった。

「シャルとはこれまた珍しい」

「なに？ 私が出来たら迷惑？」

「いや、そういうんじゃないよ。ま、とにかく上がった上がった。こんなところで立ち話もなんだし、旧知の顔もあるしな」

来たのはシャルことシャルロットだった。当初は学生時代の名残でデュノアと呼んでいたが、いつからだったか本人の要望でシャルと呼ぶようになっていた。また、学園時代にはなかなか抜けなかった、ボーイッシュな言葉遣いも、成長するにつれて自然と女性らしいそれに変化していった。

「おー、シャル！ 久しぶり！」

「一夏！ 庵も！ 久しぶり！ 元氣そうで何よりね！」

「そちらも元氣そうだな。会社のほうも、安定して黒字経営のようだし」

「ええ。それについてはみんなのおかげかな」

あれからシャルロットはデュノア社を引き継いだ。何とか兵器開発などにスイツチしつつ、万の武装を基とした量産第三世代型を生み出したことで業績が再び上向きになったデュノア社を引き継ぐ形となったシャルロットは、女性ながらもその卓越した経営手腕で、IS業界では一目置かれる存在となっていた。

「ま、俺も結構役に立ててもらってるしな。いろんなところでデュノアの文字は見かけるし、使いやすくないこともあるけど痒い所に手が届くつもっぱら評判だしな」

「私は操縦者としては二流だからね」

この言葉の通り、操縦者としては大成しなかった。だが、その経験を生かしてデュノアの製品が生み出されていることは間違いない。

談笑していると、ベルが鳴る。セシリアはなんとなくそんな予感はしていたろう、少々大目に紅茶を作っている。再び万が覗き窓で外をのぞくと、これまた珍しい取り合わせがそこにいた。

「おいおい、明日の予報は晴れなのによ」

「む。それはどうということだ」

「それはお姉さんも聞きたいかなー」

「お姉さんって年（か）？」

見事に重なった声にわざとらしく「ぐはあ」とやっている約一名を完全に無視しつつ、万は扉を開いた。

「ま、とにかく、いらっさい、ラウラ、簪」

「ちよつと待って、私は!？」

「あ、あと楯無さん」

なおもうがーとやっている最年長をあつさりとしらいながら、万は三人を客間に案内した。

「お、珍しい取り合わせ」

「だな」

「お前たちもそんなことを言うのか」

「ま、そりや実際珍しいし」

この三者が選んだ道は三者三様だった。

楯無は、国内での操縦者の台頭で、完全に指導者になっていた。だが、学生時代から国家代表を務めていたことから、国際的な指導者として名を馳せている。その影響か、簪に言わせると妹へのスキンシップがどんどんエスカレートしているのだとか。

簪はISの技師となっていた。ISの、ことソフトにおいて彼女の右に出るものはい

ないとされるほどの天才となっていた。その関係上、彼女も様々なところから引つ張りだことなっていた。

ラウラは黒兎隊の隊長をそのまま務めている。だが、黒兎隊はIS部隊ではなく対IS部隊となっていて、彼女も世界的な、ことヨーロッパにおける軍隊の指導者として名を馳せていた。

もう少し世間話をというタイミングでさらにベル。何だ今日は千客万来だと思いつつ、覗き窓で外を見てからドアを開けた。そこにいたのは、凰、箒、深名の三人だった。

「変わんねーなーおたくら」

「むしろあんたが変わりすぎなだけだと思っけどね」

「そうだな。あのころとは大違いだ」

「ま、そりやそーだな」

「元気そうじゃない、アレックス」

「おう、そつちも元気そうで何よりだよ、深名。さて、今日は本当に珍しい日だからさ、上がってけ。てか上がれ」

半ば強引に三人の手を取って客間に連れていくと、他のみんなは一樣に笑った。「いやー、ここまで揃うとは思ってもみなかったー」

「ほんとよねー。もう進んでる道も全然違うつていうのに」
「まったくもつてそうよねー」

そう言つて笑いあう。それを一步引いた位置から見ている。

凰は現地で後継の育成に取り組んでいる。彼女の門下生は堅実ながらも確実に結果を出すということでは知られており、現地では人気指導者なのだとか。

箒もIS操縦者として名を馳せている。彼女の機体の性能上、国籍はこれまた事実上の無国籍扱いなのだが、先のIS世界大会では決勝の前に庵と戦い惜敗していた。だが、その戦いが終わつた瞬間にスタンディングオベーションが起こつたことから、両者の腕前が知れる。

深名はイギリスでIS技師をしている。箒がソフト面での天才ならば、彼女はハード面での天才だった。箒とタッグを組み世に送り出すと世界がすぐにそれと分かるほどに、深名の名前も売れていた。

そして、セシリアは有力資産家として世界を股にかけて活躍していた。その活動範囲はかなり広範に広がるが、彼女が一般人であるアレックス・P・ナガブチ——つまりは万だが——と結婚してからは、イギリスを拠点としてその活動を行っている。今は凧とでも言おうか、仕事はかなり落ち着いたこともあり、こうして家でゆつくりとしているが、一番忙しい時期は移動中に仮眠をとる生活を続けていた。今は二児の母とし

て、仕事に家事にと精を出している。

「これで麦野さんも揃えばなー」

「そりゃないものねだりってやつだろうよ」

「そうなんだけどさー。でもそろえてみたくないか？」

「ほぼ無理だろう、それは」

「・・・だよなー」

麦野は学園都市に戻った。それからどうなったのかは誰にもわからない。だがあの麦野のことだ、しぶとく生きているのだろう。

それから少し談笑していると、万の携帯に着信が入る。画面に表示された件名を見て、内心で顔を思いつきりしかめた。楽しい時間というのは得てしてすぐに過ぎ去るものなのだろう。

「行かれるのですか？」

本当に些細だったであろう表情の変化に気付いたセシリアが確認のように聞いてきた。これはもはやいつものことだ。

「ああ。みんな悪いな、ちと仕事が入っちゃった。ゆっくりしてつてくれな」

それだけ言い残すと、自分の部屋でぱっと準備をする。玄関先に行くと、妻のセシ

リアがそつと後ろから声をかけた。

「あなた。どうかご無事で」

「ああ。わかつてる」

優しく返答して、ひとつ触れるようなキスをする。そのままドアを開けた。

「行ってくる」

「いってらっしゃいませ」

優しく見送る妻を背に、万は車を車庫から出して走らせた。

仕事場に着くと、同僚はもうほとんど揃っていた。

「ごめんなさいね、急に呼び出したりして」

いつの間にか、豊かな金髪の女がするりと傍に寄ってきていた。いつものことだからもう慣れっこだが。

「そんなのはいい。急務ってなんだよ？」

「今から換算して約一時間後。ISを使ったテロが行われるわ。それを処理するのが今

回の仕事」

「場所は？」

「サウサンプトンよ。わかる？」

「てことは船か。海の上っては面倒くさいが仕方ねえか」

「陸路の侵入経路はデメテルが潰すから、あなたは容赦なくやってもらっていいわよ。やりすぎないようにね」

「あーはいはい分かった分かった。後ででいいから、念のため座標データを送ってくれ」
言いつつ、通り抜ける形を外に出て、左手を前に出した。直後に体を鈍色の機体が包む。直後に、その機体は南西に向かって飛んでいった。

あとがきの何か。

はい、というわけで。

まずは感謝を。

ここまで読んでくださった皆様、不定期すぎる更新ながらもついてきてくださった皆様、本当にありがとうございます。

作者の力不足&研究不足などその他もろもろの影響でこんな無茶苦茶な終わり方となってしまうました。そのあたりは本当に申し訳ないです。計画って大事。

正直なところ、この幕引きはこのまま行くと終わらないという作者の危機感から、半ば無理矢理になっても終わらせるといふ思いの結果です。できるだけまるく収めたつもりですが、まあ、こんなことになりました。

最初はですね、ラウラかMとくつつかせる予定でした。作者はクーデレ大好き人間なので。でも、いかんせん二人とも登場時期が遅いというところで、その間で登板したセツシーが結果的に好感度が上がっていてですね・・・はいつまりは作者の迷走した暴走でしたはい。

万君に関しては、もうほんとに振ってきたとしか言いようがないです。朝起きたら頭

の中にキャラ構想が出来上がってた、みたいな。ほんとにそんな感じですよ。

というか、俺の場合書き始めは大抵そんな感じですよ。だから計画性とか皆無なんですけど（苦笑）

最終局面に関しては、もっと盛ってもよかったかなーと思ってます。何より、バトルがダイジェストみたいになってしまったのが個人的にはいただけないかなーと思います。あの手のバトル物の描写って結構難しいんですね。S A O Pとか読んでるとおいさぼつてんじゃねーぞ川原氏って思うときもあつたんですけど、自分がいざ書いてみると、なかなかこれが難しかったです。そこから川原さんすごいなーって思えるようになります。ボス戦以外の描写はしっかりしてますからねあの人。

最後の流れはもうほんとに咄嗟ですよ。でもセツシーならできそうだなーっていうところからああいうのが出ました。ほかのキャラの去就についてもほぼ同様ですよ。

万君の去就についてはですが、結果的に裏社会で亡国企業とかと手を組みながら、主にISを使ったテロとか大規模犯罪とか、そういうのを裏で叩き潰すという感じですよ。学園都市の暗部から抜けようとして、結果的に別の暗部に入るといって、一種の皮肉も込めた去就となっております。

万君の偽名に関してはすぐに分かった方はそれなり以上に年行つた人なんじゃないかなーと個人的には思います。かく言う作者は今年で20の新成人なんですけど。な

らなんで知ってるかって、小学校の頃に親が買って、俺も読んでたからですよ。と
いつてもスコピーオンのあたりからしかわからないですけど。

で、次回作についてなのですが。

きのこさんの返信で、クロスオーバーものを書きたいと言っていました。いったん
そつちは保留とします。多分書きません。

というのも、設定にこれ結構無理あるだろとか、そもそもどうしてそうなったとか、そ
んなところにそんなものあるわけねえだろとか。まあぶっちゃけ二の舞になりそう
だったのです。

ちなみに、書く予定だったのはS A O × G Eでした。キリト君がG E世界に迷い込ん
だら、みたいな。丁度G Eはアニメやってますし、S A OはP S 4で何やらリメイクが
出るみたいですし。

ま、もつと構想練ることができれば書くかもしれません。

で、もうひとつのほうはそれなりに今佳境に向かわせているので、そつちが落ち着い
たらもう一個か二個二次創作を書こうかなーと思ってます。候補としてはS A O、劣等
生、G Eあたり。でもG Eを書くのならG E Rまで待とうかなーというのも考えてま
す。

あと響けで書いてみたいなっていうのも願望としてあります。何を隠そう、主は高校時代、吹部でしたので。原作でマードックの名前が出たときは思わず前傾になったのは今でも覚えてます。高二の頃の夏コン自由曲だったので。

まあ、どちらにせよもう一つを終わらせてからですね。

では、ここまでお付き合いいただき本当にありがとうございます。